

同盟上院議事録～あるいは自由惑星同盟構成国民達の戦争～

兵部省の小役人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

メリトクラシーを騙る専制主義国家であるゴールデンバウム朝銀河帝国に対抗し、人類の生存圏を二分する自由民主主義共和国家の自由惑星同盟。

その生い立ちは、その名の通り独立した国家群による国家間の経済・治安の互助を目的とした条約にあった。

やがて、それは強力な軍閥連合である貴族と皇帝が送り込む侵略軍に対抗する為、国家と国民の主権擁護の為の軍事条約機構となり、戦時下の必要性に応じ、自由主義と民主主義——それについても多様な解釈があるが——により事実上の連邦国家が形成されるに至った。

だがそれは同盟を構成する共和国の主権を否定するものではない。自由惑星同盟の歴史において主義主張に関わらず最高評議会の最大抵抗勢力として上院が立ちはだかった事がその証明である。

上院は下院よりも歴史が古く正式名称はGeneral Assembly of the Alliance Commissioners…同盟弁務官総会である。

彼らは同盟憲章制定の為の加盟共和国利益代表者たちの集まりとして生まれ。その性質上、彼らは【同盟の民意】ではなく【加盟共和国の利益】の代表であった。常に戦時下において増長する中央政府と地方政府間の闘争を行ってきた。辺境を盾にしたバーラト・エリート
の囁く【距離の防壁】論への猛抗議を辺境星系の議員達が行い。国粋主義に対してフェザーン航路星系の亡命者二世が異議を唱え。国境

への無制限の軍事費の出費負担に中枢都市星系が反発した。

上院が常に一致団結するのは構成国の権利への侵害のみであり、それ以外については選挙でどれほど特定の党派が大勝しようとも、意見が一致したことはなかった。

彼らは加盟国民より公選された議員であるのと同時に外交官でもあり、党派以上に地域主義の伝統に対し忠誠を誓っているからだ。

【共和国の外交官】達は長い戦争の合間に訪れた政治の季節に向け、動き始めていた――

※この小説はらいとすたつふるール2015年改訂版に従って作成しています。

即ちその二次的著作物が特定の宗教・思想あるいは政治団体の宣伝もしくはそれらへの批判を目的としたものではない点を強調させていただきます。

※暁く小説投稿サイトく様にも掲載させていただいております。

目次

アスターテ会戦事後処理

「アスターテにおける防衛戦力派遣、及びその事後処理における国防委員会及び最高評議会の指導」に関する質問主意書 及び政

府答弁書

第1話796年3月上院安全保障委員会にて 5

閉会期く金帰火来には遠すぎてく

第2話796年4月アスターテ共和国同盟弁務官連絡船中に

て 13

第3話復興の国くエル・ファシル共和国にてく(上) 22

第4話復興の国くエル・ファシル共和国にてく(下) 31

第5話財界から産まれた国くパランティア共和国にてく 39

第6話帝冠の共和国くアルレスハイム王冠共和国にてく(上)

47

第7話帝冠の共和国くアルレスハイム王冠共和国く(下) 58

第8話アスカリの持ちたる国くヴァンフリート民主共和国く(上)

65

第9話アスカリの持ちたる国くヴァンフリート民主共和国く(中)

75

第10話アスカリの持ちたる国くヴァンフリート民主共和国く

(下)

83

第11話分かれた家くティアマト民国く(上) 92

第12話分かれた家くティアマト民国く(下) 102

第13話船団の国くアスターテ連邦共和国く(上) 107

第14話船団の国くアスターテ連邦共和国く(下) 117

第15話 793年12月号アライアンス・ポリテイカ誌に掲載されたとある記事 125

第16話 794年1月号アライアンス・ポリテイカ誌に掲載されたとある記事 131

【解説】 796年4月末時点 自由惑星同盟政府 立法府主要会派について 141

【著名な戦闘】ヴァンフリート4Ⅱ2防衛戦

【著名な戦闘】ヴァンフリート4Ⅱ2防衛戦(1) 故に元帥は招集した 147

【著名な戦闘】ヴァンフリート4Ⅱ2防衛戦(2) 交戦星域首脳会議 154

【著名な戦闘】ヴァンフリート4Ⅱ2防衛戦(3) 最高評議会VS同盟弁務官団 166

【著名な戦闘】ヴァンフリート4Ⅱ2防衛戦(4) 構成邦軍は集う 180

【著名な戦闘】ヴァンフリート4Ⅱ2防衛戦(5) ヘルマン・フォン・リューネブルクの登場 194

【著名な戦闘】ヴァンフリート4Ⅱ2防衛戦(6) タバル・ヒルの戦い(前) 203

【著名な戦闘】ヴァンフリート4Ⅱ2防衛戦(7) タバル・ヒルの戦い(中) 218

【著名な戦闘】ヴァンフリート4Ⅱ2防衛戦(8) タバル・ヒルの戦い(下) 226

【著名な戦闘】ヴァンフリート4Ⅱ2防衛戦(9) セレンゲティ氷原大機動戦(上) 233

【著名な戦闘】ヴァンフリート4 || 2 防衛戦 (10) ~ セレンゲティ
氷原大機動戦 (下) ~ | 243

【著名な戦闘】ヴァンフリート4 || 2 防衛戦 (11) ~ 基地主戦陣地
攻防 (上) ~ | 256

【著名な戦闘】ヴァンフリート4 || 2 防衛戦 (12) ~ 基地主戦陣地
攻防 (中) ~ | 270

【著名な戦闘】ヴァンフリート4 || 2 防衛戦 (13) ~ 基地主戦陣地
攻防 (下) ~ | 280

【著名な戦闘】ヴァンフリート4 || 2 防衛戦 (14) ~ アスターテ星
域会戦への道 ~ | 289

自由惑星同盟の最も長い3カ月

第17話796年5月の最高評議会安全保障小委員会緊急会合

297

第18話その名に誇りはあれど安らぎはなく | 303

第19話最高評議員たちと茶を飲み交わす | 310

第20話将校たちは踊り始める | 320

第21話元帥閣下たちの政争指導 | 325

第22話ロボス元帥は機動を試みる | 331

第23話シトレ元帥は大攻勢をかける | 338

アスターテ会戦事後処理

「アスターテにおける防衛戦力派遣、及びその事後処理における国防委員会及び最高評議会の指導」
に関する質問主意書 及び政府答弁書

質問第七号

「アスターテにおける艦隊戦闘、及びその事後処理における国防委員会及び最高評議会の指導」

に関する質問主意書

右の質問主意書を自由惑星同盟高等弁務官総会法第X条によって提出する。

宇宙歴七九六年三月十五日

アスターテ共和国同盟弁務官 アレークシン・リヴオフ

同盟弁務官総会議長 ウィリアム・カーティス殿

同盟弁務官総会仮議長 ジョージ・ホインズ殿

政府は宇宙歴七九六年二月一日、「アスターテ共和国に対する主権侵害に対する防衛力派遣」の最高評議会決定（以下「評議会議決」という。）を行った。

自由惑星同盟を取り巻く情勢は一層厳しさを増し、あらゆる事態を想定して、国民の命と平和な暮らしを守るため、切れ目のない安全保障体制を整備する必要があると考えるも

の、立憲民主主義的視点による手続も欠かせない。

このような観点から、以下質問する。

一 政府は本評議会議決に際して「国防委員会が指導力を発揮し、文民統制の下で敵軍の倍の兵力を派兵し、敵兵力の撃滅を図る」しているが、最高司令官は最高評議会議長であり国防委員会は軍事行政機関として最高評議会議長の管轄下にあると同盟憲章に定められている。「国防委員会がリーダーシップを取り兵力の優位を得る」の定義を示されたい。

二 アスターテにおける防衛戦力派遣の結果について、「第四艦隊・

第六艦隊は司令部全滅を含む兵力の半数の損害、第二艦隊を含め三個艦隊の解体及び第十三艦隊の編成を行う」との記述があるが、上述の方針は達成されたのか、特に「敵兵力を撃滅する」の定義について国防委員会が定義したものであるのか、本発表における最高評議会の認識を示されたい。

三 予算運用において立法府は精査を行う必要がある。「国防委員会予算予備費の執行は国防委員長専決事項」と最高評議会が判断したとしても、それが「正当な執行」であるか否かを確認するために国会があり、その確認は立憲主義の要請するところである。ヨブ・トリューニヒト委員長及びシドニー・シトレ本部長、ラザール・ロボス総司令官を招集し国防委員会、統合作戦本部、及び艦隊総司令部が適切なやり取りを行っていたのか公聴会を行う必要があると認めるが政府の見解を示されたい。

四 本来、三個艦隊壊滅という我が国を含めた国境地域の安全保障政策の重要な変更になる意思決定に先立ち、立憲主義的視点に基づき、まず国会でその是非に関わる議論が行われ、決議等で政府に法整備を要請するという手続が取られるべきである。たとえ最高評議会が「合理的な軍事運用の結果」と主張するとしても、来期予算編成にも重要な影響を及ぼす同盟艦隊の再編について、国権の最高機関である国会での議論が政府に優先されるべきであり、それが立憲主義の要請するところである。なぜ政府は国会での議論を先に求めなかったのか、最高評議会の見解を示されたい。

右質問する。

最高評議会質問第七号

「アスターテ会戦、及びその事後処理における国防委員会及び最高評

議会の指導」

に関する答弁書

アスターテ共和国同盟弁務官アレクシン・リヴォフ君提出の「アスターテ会戦及びその事後処理に関する質問」に対する答弁書を提出する。

宇宙歴七九六年四月二日

最高評議会議長 ロイヤル・サンフォード

同盟弁務官総会議長 ウィリアム・カーティス殿

同盟弁務官総会仮議長 ジョージ・ホインズ殿

一 「国防委員会がリーダーシップを取り兵力の優位を得る」の定義については動員、及び戦力編成について統合作戦本部に諮りつつ予備費を機能的に運用し、敵の侵入兵力に対し、優位な戦力を整えることであり、動員兵力及びその運用については統合作戦本部及び艦隊総司令部と協議のうえで最高評議会議長が行ったものである。

二 お尋ねの意図が必ずしも明確ではないが、ここでいう「敵兵力撃滅」の定義については侵略軍による組織的な不法占拠、及び軍事的行動を企図しえぬ損害を与える事である、本防衛戦力の派遣については交戦の結果として敵兵力を撃退し意図をくじいた事で上記定義のとおり「敵兵力の撃滅」は達成できたものであると判断する。

三 公聴会については同盟弁務官総会（以下通例に従い上院と記述する）及び代議院（以下通例に従い下院と記述する）の権限により開催されるものであり最高評議会が関与するものではない。最高評議会としての見解は予算運用については国防委員会の専決事項である予備費の運用であり、なおかつ敵が継続的な軍事行動を行えぬ状況に陥ったことから、戦略的な目的は達成したと判断するものである。

四 お尋ねの趣旨が必ずしも明確ではないが年度内予算の範囲における軍事行政の執行については自由惑星同盟軍の最高司令官たる最高評議会議長に委託されるものである。これについては艦隊再編についても同様であり統合作戦本部及び艦隊総司令部との協議の上、肅々と現状に適した形で執行を行った者であり、来年度予算案の審議

について重要な影響を引き起こすものではないと考える。

本件については上院決議668年第X号及び下院決議668年第X号の国家指揮権法において定められており、現行法における原則に則ったものであると判断する。

第1話796年3月上院安全保障委員会にて

宇宙歴796年3月20日 同盟弁務官総会 安全保障委員会
第34委員会室

同盟標準時間午後一時丁度、同盟弁務官総会、安全保障委員会委員長であるウォルター・アイランズ同盟弁務官（ルンビーニ共和国選出）がマイクのスイッチを入れた。

「え、それではこれより質疑に入ります。政府参考人の出席要求に関する件についてお諮りいたします。安全保障、国防行政等に関する調査のため、本日の委員会に、理事会協議のとおり、最高評議会議長安全保障補佐官パヴェル・カントロヴィチ博士、国防委員会戦略部長のダグラス・ミドルトン君、外十名を政府参考人として出席を求め、その説明を聴取することに御異議ございませんか」
「異議なし」「異議なし」

これからはじまるのは同盟弁務官総会安全保障委員会である。

同盟弁務官総会は、有権者達には正式名称ではなく専ら【上院】と呼ばれている。

だがその名前には相応の理由がある。自由惑星【同盟】の成り立ちは文字通り惑星間の同盟である。【ハイネセン神話】は神話でありナシヨナリズム高揚の為の演出が多分に含まれている。自由惑星同盟の成立後、巨大都市ハイネセンポリスを抱えるバーラト共和国は当時数十万の難民集落であった。そこに農業、工業、嗜好品、文化など近代国家としての下地を整えたのは崩壊した銀河連邦の最辺境（停滞した開拓最前線）のサジタリウス準州から生まれた諸共和国の支援と投資である。

敢えてサジタリウス腕の奥地にバーラト共和国を建国した【バーラトのピュリタン】は停滞した彼らに対し大規模な投資と開拓による産業発展を齎した英傑達であり、同盟憲章の制定を主導したバーラト共和国は同盟政府の首席であった事に疑いはない——というよりもある意味ではバーラト共和国は一大国家として成長するまでは『連邦直轄地域』の特権を振るい、経済成長を続け、首都として続けてい

たのだから同盟政府とバーラト共和国を同一視するのも歴史的過程からすればそう間違いではない。

「御異議ないと認め、さよう決定いたします。あく、本日はアスターテにおける大規模戦闘、失礼、大規模戦闘の結果を踏まえた安全保障体制、および国防行政に関する調査を議題とし、質疑を行います。質疑のある方は順次御発言願います」

……そうした点から言えば「バーラトのピューリタン」達の国父達をそのまま同盟の国父としても間違いはないだろう。だがバーラトから離れ、土地を開拓したもの達の住う共和国とバーラト共和国は別の国家であり、実態はどうであれ政治理念として対等な加盟国であらねばならない。その上に同盟と言う機関があるのだ。

同盟憲章制定委員会が同盟弁務官総会という概念の父であり、同盟弁務官とは憲章制定委員（政府全権代表）という官職名の子となる。

無論、最初の制定から加盟国は大幅に増え、幾度かの憲章改正もあつたが下院が「同盟市民」の様々な利益代表者であれば上院は「同盟加盟国」の利益代表者であることには変わりはない。

——故にここで手を挙げるのはアスターテ連邦共和国利益代表である男だ。

アイランズ委員長は耳をハンカチで拭き、唇を舐めると重々しく名を呼んだ。

「……アレクシン・リヴォフ君」

のそり、と立ち上がった者は巨体であつた。その造作は何もかが太く、厚い。眉も。髭も、目も、唇も、七十余年の人生が刻んだ皺すらも太い。その上、年齢にそぐわぬ体躯は分厚く、太い。

唯一、細いのはわずかに頭にへばりついている髪の毛だけだ。

「【民主主義の縦深】のリヴォフである!!議題となっておりアスターテにおける軍事行動を中心に質疑させていただこう!!」

当然ながらその声は野太く、音量はフライングボールに熱中した大學生が他人の金で食う焼肉消費量のそれである。

隣に座る黒人の議員が苦笑しながら耳を塞いでいる。

「御承知の通り堅固にして強力な帝国軍の兵站拠点であるイゼルロー

ン要塞が専制帝国主義者共に設置されて以来!!悪質で深刻な侵攻攻撃がイゼルローン回廊近郊で相次いでおります!!

インフラの被害のみならず略奪、拉致、婦女への暴行など、広範囲かつ甚大な被害が及んでいるのは御承知のとおり!!」

発言に力が入っているのはこの男がアスターテ連邦政府の代弁者であり、尉官、佐官時代には輸送艦の陣頭指揮を執っていた歴戦の軍人だからである。時には戦地となる地域住民の避難や戦後の避難民の帰還などもこの目で観てきた男だ。

アスターテ共和国はイゼルローン回廊近郊にある。会戦規模の戦闘はめつたに起こらないが帝国軍の「威力偵察」を受ける事はよくある話である。

アスターテの政界においては十数年間、国防畑を耕し国防長官の座を務め、同盟上院議員としては二期目、10年務めているベテランだ。2年後の選挙にも出馬するつもりではないかといわれるほどに豊饒としたマッチョ老人である。

「国民の安全を保障する万全の体制を構築することが喫緊の課題である!!」

艦隊総司令部後方主任参謀を務め少将で退官したのちは故郷、アスターテ共和国の国防長官を務め、同盟弁務官として10年目を迎えている。

「このね!極めて重要性の高い国家安全保障分野に關しまして、責任者となられたのがヨブ・トリューニヒト——あく委員長であります!

大変失礼ながら、委員長には国防委員会の長としてその資質があるのか改めて質す必要がある!

何故なら!アスターテ会戦において「国防委員会が主導し帝国戦力を撃滅する」と広報において説明していたことをあげる!

だがその結果はどうか!アスターテ星系において投入した兵力の56%もが失われております!

つまりは常備艦隊を完全動員した際の12%が失われたのです!」

「甚大な被害だよ!」

エル・ファシル共和国選出議員のサウリユス・ロムスキー同盟弁務

官がヤジを飛ばす。

エル・ファシル共和国医師会会長を務めた名家の出身だが、戦災対応医療ネットワークに参加し、度々戦災地の復興の為に向いており、ネットワーク理事長を務めたこともある。そのため【交戦星域】にも同盟軍部にも顔が広くリヴォフの属する【縦深】の代表世話役を務めている。

だがそんな彼も8年前に彼の弁務官官舎でエル・ファシル本土から逃れた首相たちの手で【亡命政府】を作られたことがある。つまるところ本土を占領されたのだ、全く他人事ではない。

「そしてその中には艦隊司令部が二つ全滅し、多くの経験を積んだ参謀と司令官が職務に殉じ戦死をしたのです！」

これは継戦能力に大きな打撃を与えたことは明白である!!

委員長の御認識はいかがでしょうか。国防委員会の主導で行われたこの結果は全く問題ないとお考えでしょうか。

「ご自身の主導とは全く責務を負わぬことでありましょうか？」

質問を終えるとリヴォフは椅子に腰かける。

「そうだ！そうだ！答えろ！」

隣に腰かけたオリーブ色の肌を軍礼装で覆った議員がヤジを飛ばす。ヴァンフリート民主共和国のデイヴィット・イロンシ中將だ。

彼の国は銀河連邦軍の腐敗から生まれた鉱山と軍需工場と艦隊駐留用隕石加工要塞でできた国である。

ちなみに五百年程前に彼等の祖先であるアスカリ達がルドルフから逃れた銀河連邦軍元帥と取り巻き達を爆殺して「革命」を起こしたのは公然の秘密である。

彼自身は陽気な壮年の男であるが、国防民主主義という奇怪な政体が継続されるほど特殊な事情を抱えた彼の国もまた、自由惑星同盟と銀河帝国の係争地域として数年前に戦役の地となったばかりだ。

この三名はその共通点をもって【民主主義の縦深】と名乗る院内会派の中核メンバーとなっている。

「野次はおやめください——ヨブ・トリユーニヒト君」

上院安全保障委員会委員長であるアイランス議員は頬を引き攣ら

せながらボスである国防委員長を呼ぶ。

「国防委員会の主導、と申しますのは動員、戦力の整備などの分野において、つまり、委員会の所管事項についてですね。より効率よく、迅速に、執行し、優位を確保するといういみでございました。」

常備部隊の平時充足率を15%の増大を行い、演習等についても、予算を増加しました。この成果に特に自信をもって断言した物でありまして」

「そんなことは聞いてないんだよ!!」「そうだ！質問に答えろ!!」

「野次はおやめください！」

「撃滅するって言ったのはお前だろ!!」「全然違うじゃん!!言ったよね撃滅するって!!」「断言したなら責任を取れよ！」

リヴォフの会派以外からも野次が飛び交う。動員された第4艦隊や第6艦隊の動員管区の弁務官達も政府批判に相乗りしているのだ。

「野次はおやめください!!」

アイランズが声を張り上げ、ようやくひと先ず野次が静まり、トリューニヒトが咳払いをする。

「えー、リヴォフ弁務官の質問にある、兵力の運用につきましては、えー、統帥の原則、統帥の原則の通り統合作戦本部の助言に従い、議長と共に大方針を定め、艦隊総司令部に一任すると、その点につきましては指揮系統の明確化について、最高評議会議長、及び国防委員会においても徹底された方針であります。」

無論、今回の戦闘結果を踏まえ、教育体制、再検討を行ったうえで、確りと自由惑星同盟の全ての国民の皆様へ安全、安心に暮らしていただけの安全保障体制を構築することが私の大きな役割の一つである。

その為に私が政治生命をかけて取り組むべき重要な職責であると申し上げます。

ですがそれは、私一人の力で行うものではありません。同盟軍、構成邦軍、そしてそれを支えるすべての国民の皆様、その協力に応え――」

自由惑星同盟議事堂の中継モニターを二人の中年男性が眺めている。

「あの御老人、大したしたものだなトリユーニヒトの奴が原稿の棒読みに徹している」

財務委員長、すなわち同盟の金庫番であるジョアン・レベロと人的資源委員長のホアン・ルイである。

「余計な事を言ったら手ひどい目にあるのはわかっているだろう。……あのお爺ちゃん達を怒らせちゃあたまらんよな。私なら頼まれたって安全保障委員会はごめんだ」

「財務とていい加減なことは言えんがあそこまで白熱するのは税金の話くらいだよ」

レベロが自嘲する通り財務は嫌われ者だ。政治家は金を配るのが仕事だが、財務は支出は絞り、歳入をあげようとする。

「軍事費！即ち無制限の出費！と国家防衛戦争に際して叫ぶのにはかのイゼルローン要塞にも勝る堅固な神経が必要である。」

「人命を取り扱っているんだ、それでも感情が入れ込むのはあそこさ」
「いまいち理解しかねる、と言った顔のレベロにホアン・ルイは嘆息した。

ハイネセンの金融界で活躍し、富裕層と中産層の支持を得る自由党きつての政策通であるが都市から出たらその影響力は及ばない、典型的な都市政党的首魁である。必要な人物ではあるが彼が議長になる日はないだろう。

かくいう自分は労農連帯党、いわゆる左派政党のトップだ。労働者と兵隊はほぼ同じ層である以上、どうしても軍事、というよりも戦場生活にある程度の知見が求められる立場である。そして労働者需要の高い【国境】についても。

連立政党としては保守からすれば同じ左派であるが政策的には――
かりに戦争が有利になればますます相容れない。皮肉な事ではあるが防衛戦争という手に負えない怪物と戦っているからこそ肩を並べている。

そうした意味ではヨブ・トリューニヒトが属する保守政党、国民共和党は中道右派路線であるが部分的には連帯労農党と話せるのが皮肉な話である。

この三政党を主軸に小規模政党を取り込み下院の過半数を勝ち取った『民主共和連盟』による政権。

その恐るべき敵こそがこの上院……『同盟弁務官総会』だ。

恐るべきことに彼らは必要であれば党派を超えて噛み付いてくる。かの戦場の交戦過程に党議拘束という概念は存在しない、彼らは自治政府の代弁者であるからだ。

必要であればトリューニヒトの支持者が反戦市民連合の『人権教育振興基金』案に賛成し、自身の地域に奨学金を振り撒き、反戦市民連合の同盟弁務官がトリューニヒト派が動議した『国産農業品優遇制度』に賛成し自国の経済がホツと一息をつく。そのような場所なのだ。

フリープラネッツ労働総連合の書記局員として長く汗を流し理不尽と無知と反中央の憎悪とやり合ってきたホアン・ルイや地方政界に長く席を置いた灰色の政治家であるサンフォード議長、国防委員会一本槍で委員長になってから少々窶れたヨブ・トリューニヒト委員長閣下、そして文字通り上院長老である国務委員長ならまだしも最高評議会の面子ですら同盟弁務官達の本質を見誤るものは少くない。

とりわけジョアン・レベロはハイネセン金融界の出身だ。良くも悪くも良識的な富裕層の代表であり、卓越した財政評論家である、だからこそ下院で活躍しているのだが――。

いわゆる「バーラト・エリート」の中は恥ずかしげもなく「距離の防壁」をいまだに国父の掲げた理論だと考えている者がいる。

『上院』はそうした『バーラト・エリート』へのカウンターであり、『ハイネセンポリスはハイネセンの後継者ではない』事を知らしめる為に存在する機関である。

「縦深」は同盟軍の失態にあわせて戦災再建予算に上乘せさせるつもりだね。こちらからトリューニヒトに援護射撃をしてやるとするか」「厄介な連中だ！彼らには国家経済というものがわかってない!!……

上乗せできる分を関係委員会と連絡を取って数字を出そう」

君はともかく、ウインザー女史に貸しを作るのもしやくだな、とレベロは苦々しい顔で呟いた。

そんな時でも女史をつけるレベロの事を人間としてホアンは好んでいる。掲げる政策と個人の交友はまた別の話だ。それを割り切れない人間は政治ができない。

足早に立ち去る同輩を見送るとホアン・ルイは苦笑した。

「次の選挙では……地方に強い党人が必要だなあ」

官僚上がり、エリート上がりは確かに必要だ。特に広く低所得層に効果があり、わかりやすい政策を構築ができる人間は左派政党の党首であるホアン・ルイには必須の人材だ。

だが——長く続く戦争でバーラト星系などの中央と、イゼルローン回廊付近の国家群の間で対立が広がりがつつある。

「下院で目立つ若手が欲しいなあ、大衆の共感を呼んでキャラクターの強く、辺境出身で保守層にもウケる従軍経験のある愛国的な左派か。そんな活きのいい奴がいればいいがねえ」

最近の若いもんは、とこぼしかけたホアン・ルイは声を出さないように笑い続けた。自由の国であるからには、自分の年齢を思い出して声をあげて笑う事を気恥ずかしく思う事もまた自由である。

閉会期く金帰火来には遠すぎてく

第2話 796年4月アスターテ共和国同盟弁務官連絡船中にて

さてさて、上院の院内会派、【民主主義の縦深】の名にはそれ相応の意味がある。

イゼルローン要塞が建造されおよそ半世紀、戦闘が起きる地域はほぼ限定されるようになってきた。そうした地域の利益代表者達が集まってできた会派が【民主主義の縦深】である。

【縦深】とは本拠地から最前線までの距離、及びそこに（ある程度）分散して配置される防御戦力を意味する。

つまりは【自由惑星同盟】の国父の一人が唱えた【距離の防壁】に対するカウンターとしての命名である。

彼らが防壁と名付けた地域には人が住まい、戦火に怯えながらも故国の為に暮らしているのであるという冷や水を被せるのが彼らの役目である。

「リヴォフ閣下、まもなくアルビル・コミュニケーション旗艦に到着します」

アスターテ共和国は国民の大半が船団に居住している国家である、当然最初からそうだったわけではない。だからこそその【民主主義の縦深】なのだ。

「おう！事故らねえように気をつけろよ！急ぎじゃねえからな！」
「……………ふう」

リヴォフは元同盟軍人である。最初は素朴に故郷の土地に当然のように住めるようになるだろう、と理想を抱き、将校となった。

そしてその夢は失われた。リヴォフが23歳の時だ。彼は補給艦隊の中尉としてティアマトで『ブルース・アッシュビー司令長官戦死』の報を聞いた。

軍隊生活終盤ではイゼルローン要塞で数多の部下を失った。

退役し『アスターテの船』を護る為に苦闘していた時に後輩であったシトレがレベロとホアン・ルイを連れてやってきたのだ。そして彼

らと握手をしてからもう10年が過ぎた。

今年で齡73歳、自分がかしきたら、と信じた英雄達の最後の一人、ローザスは78歳で死んだ。

自分はどうかだろうか？死ぬ前に何か一つでも残せるのだろうか？

「朝から無駄に声がかいな、朝が早いのは老人の宿痾か？」

「おう！アシリアの嬢ちゃんじゃねえの！」

サンムマラート・アシリア、弁護士であり、ティアマト共和国が上院に派遣する同盟弁務官の一人である。

「嬢ちゃんはよしてくれ」

アシリアは苦笑する。同盟弁務官としては若い方であるが50を越しており、同盟下院議員も経験したベテラン議会政治家だ。

【民主主義の縦深】の国会対策委員長に就いたのもそれゆえである。同盟下院議員時代には女性軍人地位支援運動の先鋒として活躍し、同盟軍ハラスメント防止審議会の座長を務めたことで全国的に知名度が高い女傑だ。

ティアマト共和国、ティアマト星域は帝国軍と同盟軍の文字通り係争地となつて久しい。彼女の国はハイネセンからアスターテまで各地域に『自治区』が散らばっている都合上、下院議員として知名度が高い者が上院へと移ることが多い。

必然的に共和国としての行政は高度に電子化され、広域行政のモデルとして同盟政府からもモデルケースとして支援されている。

「しかしまあ便乗させてもらっているのだから文句も言えない、か」

チャイを持ってきた給仕に目礼し、シリアルバーをかじりながら応対する。

「おう！気にするな！してねえな!!」

「世話役に世話されるのは恥ずかしくない、そうだろうか？」

ふてぶてしく笑うアシリアにリヴオフも違えねえや！と呵々と笑い、シリアルを大皿にぶちまけて掻きこむ。

アシリアは上品にティアマト風のチャイを楽しみながらリヴオフに話しかける。

「リヴオフ世話役、ロムスキー代表にはもう会ったか？」

お互いの議員となる前の敬称をつける時は“非公式”の場であることを示す。逆に政治家としての呼称を使う場合は——そういう事である。

「……ホアン執行委員長と話している。何か聞いたか、国対委員長」
リヴォフの声は深く、悟性を伺わせるものであった。

「いや、となると代表と密談しているという事か」

「執行委員長はエル・ファシルの予備選の応援だと言っていたがそれだけとは思えん。」

直行便なら幾らでも捕まえられるはずだ。アスターテ共和国にようじがあるわけでもあるまい。なら——」

「代表が我々【縦深】の役員連に声をかけた事には意味があるという事だろう」

六十代前半の理知的な風貌の男が割って入ってきた。

「リッツ政調会長」

エドヴァルド・フォン・リッツ、亡命者系が集うアルレスハイム帝冠共和国出身の同盟弁務官だ。アルレスハイム医科大学で公衆衛生学を学び、同盟軍軍医中佐まで勤務した後はアルレスハイム医科大学で労働安全衛生政策を研究し、フリープラネッツ労働組合総連合政策研究センター安全衛生学顧問としてホアン・ルイのブレーション役を担ったこともある政策通である。

軍との伝手も深く【縦深】においても政策の纏め役、政調会長として活躍している。

「政調会長は何か知らないのかね」

「いいや知らん、私は例のルンビーニ船団事故の調査委員会に引つ張り出させることが決まっているからな」

同盟政府の星間サービステーション工事用の資材を運んでいた船団が重大事故を起こしたのである。

400名近くの死傷者を出し、航路の要所に資材である液体ラジウムが流出している。

流通へのダメージは無視できないレベルに達している。

「まあ予想はつかないでもないが、確証ないうえにもう本人たちがで

てくるだろう。

ああエオウィン女史が来たらよんでくれないかね、確認したいことがある」

「おはようございます、すみません。遅れましたー!」

エオウィン・イシリアン、40歳になったばかりの若手同盟弁務官である。1年前の半数改選選挙で当選した新人議員だ。

パランティア最大の企業グループIIDCグループ（星間情報通信開発企業連合）が運営するサジタリウス産業労働研究所に主席研究員として勤務していた才女である。

議員経験は共和国議会1期のみだがパランティア共和国中道右派かつ最大勢力を誇る政党、パランティア穏健党から出馬しており、同盟議会における第一与党である国民共和党の推薦を受けている。

そうした経歴の通り資金集めや経済政策に長けており事務局長の座を先代から引き継いでいる。

「時間通りだよ、気にしなさんな」

「すみません先生!!……例の件の確認急報が届きました、こちらに」
リッツは早いな、とつぶやき送られたデータを見るとピクリ、と眉を跳ね上げた。

「わかった……うむ、やはりそうか」

リッツは直ぐにポーカーフェイスに戻り、コーヒーを啜る。

「おはようみんな」

「おはようございます、代表、執行委員長」

【縦深】代表世話役のサウリウス・ロムスキー医師、70を前にしており、リヴォフに次ぐ高齢の同盟弁務官だ。エル・ファシル医師会理事長、自由惑星同盟戦災対応医療ネットワーク理事を歴任し、医師として戦災復興支援に良く携わってきた。エル・ファシル共和国議会議員を2期務め。保健福祉長官を経験したのちにエル・ファシル共和国同盟弁務官に当選と申し分ない経歴を持つ政治家である。

「おいおい、堅苦しいな。今は皆、同じ居候の身だろう」

労農連帯党中央執行委員長、ホアン・ルイである。連立与党のトップであり政策マン以上に政界の寝技師として大連立『民主共和連盟』

政権の黒幕の一人としてロイヤル・サンフォード総裁、國務委員長で上院の長老、ウィリアム・カーティスと並んで囁かれている。

「だが話があるのは事実なんじゃねえのか！執行委員長殿」

ロムスキー、リヴオフ、リッツは労農連帯党に所属している。

出馬するときは各共和国の政党名であるがそれぞれ同盟下院政党から推薦をもらうのが慣しである。

「まあそれはそうだ」

「そうなりますと、同じ居候の身ではありませんが、委員長」

エオウイン・イシリアンはそういつてからわずかに眉をひそめた。

「私は貴方の党から公認も推薦も受けておりませんがよろしいので？」

また一方でアシリアとイシリアンはそれぞれ国民共和党に党籍を置いている。

サンフォード最高評議会議長が総裁を務め、党の行事ではヨブ・トリューニヒトと肩を並べる事も珍しくない。

ホアンは新人の政治家に対して鷹揚に応じる。

「ロムスキー先生と同じ会派だ。否とはいえぬさ。それに同盟下院でも労農連帯と国民共和党は連立している」

間髪を入れずロムスキーも鷹揚に笑って見せた。

「ハハハツ、まあいいではないか。【縦深】の役員が皆揃っているんだ」「異議なし」「異議なし」

選挙の際にはさんざん叩き合った癖に、という人間はここにはいない。必要不可欠ではあるが党派的な対立が厄介な支持者達の目が届かぬところであればこうした話し合いは不可欠だ。

「私も席を外すつもりはないし、異議はないわよ」

アシリアがニヤリと笑って最後の一票を入れると、エオウインも微笑を浮かべ、義理は果たしたといわんばかりに席に着いた。

「イロンシの奴もいれば良かったんだがな！ヴァンフリートは身内の結束が強いから仕方ねえか！

……そういう話なんだろう？」

イロンシが代表するヴァンフリート民主共和国は良くも悪くも独立性が強い。成り立ちからして銀河連邦軍の軍閥から革命が起きて成り立った国であり、元首は将官の中から国民投票で選出され、『サジタリウス準州知事』と『銀河連邦軍元帥』の二つの称号を兼任し、人民元帥を自称する国だ。本来であれば入植が困難な宙域に押し込められた『アスカリの持ちたる国』である。

小惑星を連結した要塞に住まい、鉱工業と兵役で暮らす人々は同盟の中でも異彩を放っている。

「まあそういう事だね。あくまで国防部内の噂なのだが——シトレ本部長の任期は6月までなのは知っているかね？」

「はい」「そうだったな!!」

最高評議会指名人事の任命には上院の承認が必要である、当然ながら統合作戦本部長もそれに含まれる。

「シトレ本部長とドーソン次長が酒を飲んだらしい」

「ふむ」「ほう」「……なるほど」「……それはそれは」

ドーソンは管理担当次長で部内の人事、管理業務、そして国防委員会情報部と一体運用される統合作戦情報部、統合運用計画、情報システム、議会に提出する戦力整備計画などを管掌している。

序列としては艦隊総司令部総参謀長、地上軍総参謀長に続く第三席であるが議会との窓口であり、軍官僚としては実質的にトップクラスの地位である。

そしてドーソンは憲兵隊司令官と情報部部長を経験した諜報畑のトップである。

「おい！第13艦隊設立案の指名人事はヤン・ウエンリーだったな!?アレの発案者はトリユーニヒトか!!」

「ああそうだが、いや、待てアレの交渉にレベロが同席していた」

「【自由の同志達】からも支持の打診が来いました。シトレ本部長が出した案です」

自由党が裏で動いていたのならばレベロを後ろ盾にしているシトレに違いない、という事だ。

「ホー、ホー、ホー」

アシリアが楽しそうに笑った。リッツはやれやれ、と頭を振る。

「ドーソンは兵站と諜報畑だったな……任期間近に何を企んでいるのかな」

「イゼルローン絡みね、おそらく、ここで戦果を挙げれば3期目の資格を得られる」

「攻略作戦でもするということのかね？だが半個艦隊では火力もたかが知れているだろう？私は素人だができるものかい？」

リヴォフも軍人としての頭脳を久々に回しながら話す。

「イゼルローンの後方基地を制圧するとか、輸送艦隊を叩くとかじゃねえか!？」

「ああなるほど……」シドニー・シトレは3期目を欲している、か。サンフォードが議長となるのは来年の頭までだ、上下院と議長の同時選挙がある」

「これはまたロボス元帥はマンゴーンイカク、かしら」

「なんだマンゴーンイカクって」「知らないの？トツプの席が手に入りそうなのに、手に入らない事よ」

「地球時代のコトワザってやつだな!」

「……なんでマンゴーンなんだ?」「さあ?昔は御馳走だったんじゃない?」

興奮して会話を交わす弁務官たちをホアン・ルイは満足そうに眺めていた。

「…………ふむ」

・
・
・

それから半日ほどが過ぎ【アルビル・コミュニケーション分船団】の中、個室のカフェにイシリアンはリッツを呼び出した。

「ご相談があるので、先生。まずは朝の件についてですが——」

「軍の話はあくまで噂話、ですがアスターテの追求に関する妥協案と

併せてレベロ財務委員長とシトレ元帥の関係を強調しました」

「ああ」

「そしてその後本部長任期の話をし、実績作りへの期待を煽った……不思議でした、【縦深】は国防が活動の主軸ですが今はまだ話してもさほど意味はありません。確かに作戦本部長人事は重要ですが」

「それで？」

「ホアン執行委員長は、【縦深】の動きをコントロールしたかったのでは？」

「……別の話ですがルンビーニの件、私は出発前から例の調査を行うことを先生に話しました。この案件は労働災害としてはホアン・ルイ人的資源委員長も携わるはずですが、そして情報交通委員会の案件ですが事前に調べる伝手は幾らでもある」

リッツは同盟労働組合総連合の政策顧問でホアン・ルイは同盟労働組合総連合の役員から出馬した男である。

二人が旧知の中なのは同盟議会のまともな議員ならば誰でも知っている。

リッツはニヤリ、と笑った。

「なるほど、別の話だね」

「ええ別の話ですが、この事故を起こした会社、入札に不審な点がある事は事実です」

イシリアンは艶やかに微笑した。

「この件は私を正式に調査担当に任命していただければ先生の監督の下でキッチンとお仕事をさせていただきます」

イシリアンは同盟議会においては新顔である。任期もまだ5年ある。それでもなぜ調査担当になりたがるのか。下院への影響力を求めているからだ。

同盟弁務官の任期は6年、だが下院は任期2年、であるからにはイシリアンが次の議席を狙うのであれば……パーランテアを選挙区とした下院議員と関係を築くことには大きな意義がある。それも可能な限り自身が優位に。

そして彼らは実績を求めており、格好の餌を撒く立場が目の前にあ

る。

うまくすれば、下院の国民共和党へも恩を売り、場合によっては自浄作用のアピールにもつながる。

何故ならば最高評議会の席は公選された議長とは別に、評議員たちの大半は下院より選出されるのだから。

リッツは予想以上に踏み込まれた事に内心驚愕しながらもポーカーフェイスを保ち、重々しい口調で返答する。

「……その件についてはまた話をしよう。調査委員会の立ち上げは5月の会期からになる。

それまでには軍の方もルンビーニの方も動きがあるだろう、お互い、地元の情勢も判断せねばならないからね」

半年後に選挙が迫る、5月には政治が動く、同盟政界の耳敏い者達の予想は正しかった。

半分は、の話であるが。

第3話復興の国々エル・ファシル共和国にて々（上）

宇宙歴796年4月も半ばを過ぎたころである。

ホアン・ルイはこつそりとエル・ファシルの陸上車に乗り込み、車載TVカメラで【民主主義の縦深】代表世話役ことロムスキー医師と連絡を取り合っていた。

「マスコミ連中はこれから私が首相のところに行くという事でそちらに向かつております」

同盟弁務官は儀礼的には閣僚と同格の扱いを受けている。実務的に言ってもハイネセンからの観光振興や産業のPRなどソフトな発信を含めて同盟弁務官は政府代表部としての役割と持っている点は間違いなくあった。

「ありがとうロムスキー先生」

「いやいや私は労農を支持しておりますからね。【縦深】にとっても地方を重視している政党が下院にいれば心強い」

「彼らもそう思ってくれば良いのだがね。いつの間にか独立政党を結党されていたのには驚いたよ」

「ちらり、とビルを眺める。ホアン・ルイがこれから訪問するエル・ファシル進歩連盟本部だ。

ロムスキーは苦笑を浮かべてそれに答えた。

アーサー・リンチの敗戦と逃亡による本土陥落と奪還作戦後、エル・ファシル共和国では本土復興超党派大連立政権が組まれていた。

エル・ファシル奪還作戦から4年、エル・ファシル議会総選挙の際に当時国防委員長に就任したばかりのヨブ・トリューニヒトが大規模な軍主導の宇宙港拡張と物資の吐き出しによる施設復旧支援といったテコ入れを図った事で状況は一変した。

露骨や選挙介入に際し、商工会と労働組合をまとめあげて、リベラルな協同改革党と社会民主主義路線のエル・ファシル人民党を左派政党合流に漕ぎつけたのが、連立政権第二党であるエル・ファシル進歩連盟の現総裁だ。

結果としては三度目の保革大連立政権となったがトリューニヒト

の梃入れに対し労農連帯党と自由党を両天秤にかけながら支援を引き出し、「エル・ファシルの政治」を訴えかけたことで議会第二党へと躍進したのである。

だがこれは労農連帯党中央執行委員長としてのホアン・ルイからすればあまり良い気はしないのが本音である。

「進歩連盟の総裁とはあの選挙の時に挨拶をただけだな。ほとんどハイネセンに顔を出さないようだ」

妙に顔が良い若手の政治ジャーナリスト上がりだったのは覚えていた。名前は確かビョークルンドだったか。

「見かけはともかく、食えない政治家ですよ総裁殿は。まあなんだね、見かけに騙されないようにしたほうがよろしいかと」

では私は首相のところに行つてきますぞ、とロムスキーはさつさと通信を切つてしまった。同盟弁務官は中央政党政首に敬意こそ払つても上司ではない、ということである。

・
・
・

「ホアン・ルイ執行委員長ですねえ、はい確かに承つておりますう。――勿論、中は“掃除”しておりますのでお気兼ねなくどうぞお」

出迎えた秘書官は甘つたるい声を出しながら笑っているがその目は鋭くこちらを観察している。

中に入ると若々しく中性的な顔立ちの政治家がにこやかに出迎えた。協同改革党を率いていたベルティ・ビョークルンドである。

「お待ちしております、ホアン委員長閣下。ご無沙汰しておりますし訳ございません」

ホワンもにこやかに握手を交わす。

「いやいや閣下はよしてくれ、内務長官、いやここでは総裁と呼ぶべきかな。君がよく仕事をこなしているのは私も聞いているとも、実にたいしたものだ」

中央から見ればこの若き総裁はトリユーニヒト旋風を逆に利用して成り上がった政局家であるが地元を見て回ると中道のカリスマと

して見られている。

内務長官のポストを第一党が譲るのも異例だ。国家行政機関の管理、地方行財政、そして治安政策（共和国警察の指揮と自治体警察の監督）を担当している内治の要である。

「ここは進歩連盟の本部ですよ、委員長。総裁でお願いします」

秘書が紅茶とジャムを盛り付けた皿を机に置いた。紅茶の香気がふわり、と立ち上る。良い茶葉を使っている。

「そうかい、それで彼女は？」

すました顔をしているが、彼女の身のこなしは陸戦を学んだ精鋭部隊のそれに似ている。

「同盟捜査局に出向していた捜査官を勧誘しました。どうも最近は物騒ですからね」

どうも右派団体が中央から金でも流れているようで極右団体が元気なのですよ、とため息をついた。

「・・・なるほど」

謀略を仕掛ける人間ではないのは確かであろうが耳を広げる事に良心の呵責はないようだ。そして極右派に酷く恨まれていることも自覚している。

紅茶の香りを楽しみながらジャムを少しだけ口に入れる。少し気分が明るくなってきた。どんな偉大な人間だろうと、人間の精神というものは糖分一つで左右されるものである。

「そこまで天下国家に興味があるのであれば、ハイネセンポリスに出るつもりはないかね？」

辞退させていただきますよ、とビョークルンド総裁はジャムにスプーンを突き刺し、口に放り込んだ。

「私の得意分野は基本的にエル・ファシルの地域社会支援や治安行政です。下院の党派に属すると私の強みは消えますし、上院に出張る程に軍務や中央が仕切るインフラなどの話が得意なわけではない。その手の仕事は私以上にコネクションも知識もある人がいらっしやいます。私の役目はこの新党を育てることと予算を引っ張ってくる同盟議員の支援です」

なるほど、とホアンは頷いた。長く友好的中立であった左派政党をまとめ上げた代わりに中央のどの政党にも籍を置くつもりはないということだ。

「最初にはつきりさせておくべきでしょうが、次の総選挙、進歩連盟としては自由党と労農連帯党の双方が候補の統一していただけるのであれば間違いなく支持します。進歩連盟としては連帯労農党と自由党の連立が望ましいですが――。自由党が公共事業の縮小路線に舵を切るのであれば我々が支持を続ける事は難しい。これはリベラル派と呼ばれる側であつても変わりません」

労農連帯派であればなおさらだ、と鋭い視線が飛ぶがホアンは笑つて受け流す。

「分かつているとも、だがある程度の軍縮は民生の維持に必要不可欠だ」

兵士に給与を切り下げるわけではありませんよね、とビョークルンドが小首をかしげるが、ホアンは流石にそれはできんよ、と苦笑する。「ただ譲れない条件として、国立大学と労働保険の国費負担を維持してください。中小企業の後継者不足が続いているのにこれ以上、中央の都市と開拓途上のまま百年もたっている地域を同列に扱うリバラリアンに食い荒らされては困ります」

中央の良識的知識人と同じ側に立っている筈のエル・ファシル人がこやかに毒を吐く姿にホアンは頬を引き攣らせた。ホアンから見れば自由党が悪いわけではない。軍事費の増大が直接的な原因であるのだが――実際に提案して支持を集めているのだから仕方ないのだ。

「努力しよう」

ホアンが愛想よく答える。

「うーん、努力は実らなければ意味がありませんよ?」

“エル・ファシルの進歩主義者”はニコニコと笑いながらジャムを口に放りこんだ。

「ハハハハハハッ」「フフフフフツ」

二人の朗らかな笑い声が総裁執務室に響く。

レベロやサンフォードの筋にも同じことを言つて天秤にかけてる

んだろう、とは言わない。

「約束を果たすのが政治家の務めであるが。その手段が問題だ、政策を実現するには数が常に求められる。・・・君のところから下院議員を出さないかね」

旗幟を鮮明にしろ、ということである。

だがエル・ファシルの第二党の総裁は紅茶をゆっくりと楽しみながら表情を崩さない。

「――選挙が近いとはいえ、急な話ですね。エル・ファシルで貴方の党が注目されるネタはないかと思いますが」

「どうだろうね。例のアスターテの件に続いて今度はルンビーニ事故の報道は知っているだろう？最近は色々と面倒なことが多くてね」

紅茶を飲み干し、ジャムにスプーンで丁寧にとろみながら総裁は答える。

「あの会社の入札が怪しいのは聞いていますが、まさか統合作戦本部長と同時に情報交通委員長之首を挿げ替えて、選挙の争点を作るつもりですか？」

「ノー・コメントだ」

「ふむん、であれば、こちらでもノーコメントです。先が分からないわけですから」

そうかね、とホアンはわざとらしく紅茶を啜った。ジャムが妙に多い気がする。

「それは残念だ。そういうえばウィリアム・オーデッツ君が最近、党役員と話しているらしい」

「御冗談でしょう、彼は政治の素人な上に今いるのは安全保障委員会でしょうか？ 国務畑に移ればいい仕事をするでしょうが、マスコミ出身だからと言って情報交通の仕事はできませんよ」

成程、人の美点を見る人間はいるものだ、と今度はホアンが感心した。

だが見抜いた美点を容赦なく使い倒すのがニコニコ微笑を浮かべているこの政治家のやり口である。

「そうだろうねえ、そういうえば国民共和党内の話だが政調会のアキラ・

エドー君も最近は忙しく走り回っていると噂だよ」

今は下院の情報交通委員長を務めている、情報交通委員会の次長まで務め出馬、議員としては3期目で60代後半と年齢も経験も【妥当】ではあるが……

ふう、と溜息をつき、ビョークルンドはジャムを食べた。茶はもうないはずなのだが――。

「官僚出身ではないですか。確かにやり手でしようがこの時期に据えるには印象が悪すぎますよ」

年若い進歩主義政治家がエリート官僚上がり切り捨てたのを聞いてホアンは内心では加点した。インテリの中には過剰な実務家信仰者がいる。確かに実務家は必要であるが過ぎれば病気になる。

だがジャムをもしゃもしゃと食べていると健康面では激しく減点である、というか少女にすら見える小柄な体のどこに入っているのだろうか。

「なるほど、君の意見は参考になるよ」

ホアンがニコリと笑ったのを見てビョークルンドは眉を潜めた。いつの間にか自分が目の前の百戦錬磨の狸政治家の餌に釣り上げられたことに気が付いたのだ。

「もし仮に、の話だが今のところは経済開発委員会のウインザー副委員長が本命だそうだ」

「ほうほう、なるほど――確かに発信力は高い、副委員長ならいいでしょうが。最高評議会の席に座るのですよ?」

彼女は口の回り方は軽快にすぎますよ、と総裁の言葉はそれなりに的を射ている。

彼女は保守系社会学者であり、マスメディアのご意見番として上がりとして良くも悪くもその舌鋒の軽快さで知名度を勝ち取ってきた。だが政治家としての立ち回りも【軽快】に過ぎる節がある。

愚鈍では話にならないのだが機に臨み変に応ずる事はマスメディアの解説委員としてはともかく、必ずしも政治家として褒められるわけではない。

そして何より問題なのは彼女はバーラト共和国の選挙区出身で直

接中央政界に進出してきた事だ。

国民共和党が得意とする連立策略や地方政界との連携した上院（同盟弁務官総会）の操縦は地方議会出身者の党幹部達のノウハウによるところが大きい。だが近年は話題性と知名度の高く、地方議会の経験がない若手候補が台頭している——それにより与党第一党を維持し続けていてもその弊害は無視できない。

故に最高評議会の一員ではなく他党派首の顔でホアンは返事をした。

「だから人気がある奴が良い、という事なのだろう」

年若き進歩主義者は最後に残してた果肉をゆつくりと持ち上げた。

「……ふむ。そして次の選挙に備える、と？ 次の選挙は年明けの——なるほど？」

ジャムの果肉をゆつくりと噛み締めながら総裁は見る、だが彼は答える気はない。

だがその先の言葉はわかっている——最高評議会議長選挙、である。

「貴方ほど国民共和党を利用する政治家もそうそういないでしょうね！ そうなると話が変わってしまう！」

参りました、と両手を広げて見せる。最高評議会議長交代前に国民共和党最高幹部の一人が都市出身の中央政治家となるのならば——エル・ファシル政府は労農連帯党との関係を重視するしなくなってしまう。

そしてサンフォードの次の総裁は——地方党人はを冷遇するだろう！ なにしろバーラトと地方の利害の対立は深まる一方。

即ち都市部は二派が台頭することになる——即ち、構成国の中でもバーラトから離れた地域、とりわけ交戦域への安全保障の弱体化となる反戦派と『軍の効率化』を求める最強硬派だ。

どちらが台頭しても生贄になるのは地方だ。最強硬派は地方駐留艦隊を減らし会戦やイゼルローン要塞攻略により多くの兵力をつぎ込ませるようになる。更に言えば構成共和国の権限を取り上げ、中央の“国家総力戦”に更に隷従させようとするだろう。

「気が変わったようでも何よりだ」

壮年の同盟政界左派の親方はビョークルンドの突き刺すような視線を意に介さずニコニコと応対する。

「ええええ、変わりますとも！まったく！ご要望は？」

「国民共和党の穏健派とも交戦星域の弁務官らとも仲良くやれる奴が良い。つまり親軍かつ専守防衛派で亡命者を差別せず、同盟政府の枠組みに反対しないがエル・ファシルを愛している人間が良いな」

好き勝手おっしゃりますねえ、と総裁はペンをくるくると回しながら苦笑する。

「政策に……注文は？」

「政策は進歩連盟が原案を書いてくれないかな。勿論、労農党として調整する点もあるが、君達の推薦が欲しいからね。ウチから出馬するにしても進歩連盟の党籍を持つているとよりありがたい」

ホアンの判断は間違っていない。逆に言えば推薦だけして知らぬふりではなく利害関係の利をしっかりと持たせ、同じ船に完全に乗り込ませるといふ事である。

同盟政党といえど構成邦で活動する政党に遠慮しなければならぬ点は多々ある、同盟下院は政党中心であつても党議拘束が緩やかでなければならぬ理由である。

ふむ、とメモを置くと、進歩連盟総裁は指先を合わせて、目を閉じた。

「……エル・ファシル労働組合連合会の組織部長にグレゴリー・カメーネフという方がいます。」

港湾労働組合の執行委員長でエル・ファシル労働組合連合会組織部長。

従軍経験があり勇敢記章を授かっています。現在でも軍艦の受け入れや志願軍属雇用制度などに積極的に参加しており、同盟軍への協力や避難民の受け入れの為に積極的に活動。

動員能力は極めて高く、飲酒などのやレクリエーションを頻繁に開催し、顔が広い。彼が声をかければ数千人は動員できます。

難点として、技術力はあるが管理職の経験はなし、ハイスクール中

退で政界や現在の社会制度の詳細への関心はあまり高くありません」
「君もよく覚えているなあ」

かつてフリープラネッツ労働組合総連合の書記局を務めていただけに、ホアンは素直に驚いた。合流したとはいえリベラル派の彼が左派支持団体をしつかりと把握しているのは驚くべきことだ。

それが労農連帯党のトップに対する牽制を兼ねていることは理解している。だが既に“ただの政局家”と侮る気持ちは失せていた。

「新党結成の時に声をかけたのですが、フラれてしまいましたね」

総裁はくすりと笑い、ホアンに視線を向ける。

「うん、感謝するよ。会わせていただこう」

「よかった！それではこちらに呼びましようか。閣下」

総裁が笑みを浮かべてTVフォンに手を伸ばす。

ホアンは一瞬、違和感を覚えながら首を横に振った。

「よしてくれ、自分で会いに行くとも」

「承知しました、私からも連絡を入れておきますよ」

ホアンは目を細めて総裁を見据える。

「なあ、君。『閣下』がカメーネフ君を呼びつけたら進歩連盟は自由党か国民共和党にすり寄る気じゃなかったらうね」

総裁はさも不思議そうに首を傾げて見せる。だが一瞬だけ、表情に諧謔家のそれが混ざった事をホアンは見逃さなかった。

「フフフフ、まさかまさか、嫌ですね。ハイネセンジョークですかそれ？」

「ハハハハハハツ、エル・ファシルジョークだとも」

『足を鍛えない偉いさんは酔っぱらって転ぶのがオチ』労働組合運動の父、ジョージ・パームの日記にもそう書いてある。

けだし、俚諺は真理である。

第4話復興の国々エル・ファシル共和国にて（下）

進歩連盟本部を出発した車がエル・ファシル労働組合総連合事務所に到着し、ホアンを執行委員長と書記長が彼を出迎えた。

「いや、これはこれは、ホアン先生。お久しぶりです！」

「ああ、久しぶりだね委員長。少し痩せたかね？」

「いやいや、一昨年から会戦が続いて……軍からの発注で景気はそれなりなのですが、若い衆が居なくなりしますのでなあ。年寄りが増えて、ハイスクールの若いのを呼んでも事故が増えちまいますし……動員が続くのはなかなか厳しいですわ」

戦争はないに越したこっちゃありませんが攻めてくるのは向こうさんですからねえ、と委員長が唸る。

中年の分厚い眼鏡をかけた書記長も訴えかける。

「実際のところ、今も大忙しなんですよ。ただ設備の老朽化が酷くて……発注しても補修工事用の資材が来るのが遅れてしまったり、資材があっても軍の輸送やら応急施設の設営に人手を割かれて工期が遅れたり……仕方ないとはいえそろそろ大規模労災が発生してもおかしくないですよ」

「わかった、わかった。今度の人的資源委員会でこの事を取り上げるよ。それで委員長、進歩連盟の総裁殿から連絡が言っていると思うのだが」

「ええ、それなんですけどねホアンさん。私達は確かに自宅の党を支援しております。ですがその、いくなれば労働者の組合なわけですし……」

「そりゃあ労働組合だからなあ」

ホアンがにたりと笑って茶々を入れると執行委員長は顔を赤らめて胸を反らした。

「ウォットソン！その、つまり、応援はしますし、役員から議員が出るといふのは名誉なことです。しかしですな、その、ロムスキー先生みたいに医師会や総裁さんみたいなものと言うと、そうですな、グレッグよりもウチの書記局から——」

委員長がそう話しているといきなり事務所の扉が勢いよく開け放たれ――

「お疲れ様です！お呼びでしよーか！委員長！！」

バカでかい声が響き渡った。

「おいグレッグ！あんまりデカい声出すなどいつてるだろう！」

委員長がそれに劣らぬ大声で返す。

「ブハハハハッ！！すいません旦那！あれ？もしかしてそちらが俺に会いたいってお客さんですかあ!？」

「やーどうも！初めまして！グレゴリー・カーメネフです！ここの組合の組織部長を務めさせてもらっています！」

リヴォフと張り合えるような大声である。彼の場合は退役軍人――というよりも『話を通じない老人』の振りをしている為になどとやっっているきらいがあるが。

だがこの男は完全に地でやっているとわかった。40手前の巨体の持ち主であり鼻が赤く、上着のポケットから草臥れたスキットルが覗いている。人懐っこそうにニコニコとしている。

「おお元気が良い人だねえ……私はホアン・ルイ。労農連帯党委員長のホアン・ルイだ。よろしく頼むよ。」

「ホアン・ルイ？失礼ですが、あの政府の偉い人のホアン・ルイ先生ですか!？」

書記長が慌てて眼鏡がずれるのもかまわずグレゴリーの肩を引っ張り、声を裏返しながらかぶる。

「えっえっ偉いなんてものじゃないですよ！組織部長！この方だつて組織部長が動員を付けてくれたポスカ先生の上司みたいなものですよ！」

ポスカ議員は労農連帯党の下院議員でやり手の弁護士であるが高齢なこともあり、最近では選挙活動に衰えが生じている。だからこそ刷新の為に人材を探しているのだが――

ホアンは興味深そうにカーメネフを眺めている。

「いやいや、偉いといえば偉いのだろうが……どうしたのかね？」

「なんだって!？」

書記長が机に突っ伏すのも構わずカーメネフは腕を振り回す。

「おやつさん！なんでこんなハイネセンのお偉いさんがこんなところにきてるんですか！」

「おいグレッグ！なんてこと言うんだ！」

委員長が目を剥いた。

「そ、そ、そうですよ！我々の声を届けてくれるのはまさにホアン先
せ」

泡を食ってまくし立てようとする書記長に指をズビシ！と突き付けてカーメネフは声を張り上げた。

「書記長！アンタだつてこの人たちが本当に俺達の声を届けてくれて
いると思ってるんですか!?アンタが苦勞しているのは知っているさ
！だけど俺達もアンタも何度も何度も悔しい思いをしてきたじゃないか！アンタがハイネセンに行つたつて向こうの連中は

金を出して雇つてやっているのにまだ金が欲しいのか、だなんて言
われて悔しい思いをしているじゃないか！この間、酒を飲んだら泣き
出したのは本音じゃないのか！」

「委員長だつてそうだ！ハイネセンの都合で決められた金だけ受け
取つて放置されて！エル・ファシル奪還されてから2年、募金に言つ
てももう政治家で来るのは形だけの役員議員とウチの周りの同じ目
に遭つた選挙区の人達だけだつていつてたでしよう！」

反戦運動!?俺達に死ねつていうんですか!?戦争の英雄!?そりやそ
うでしょうよ！でもその英雄はハイネセンに戻つたらこつちの事な
んで忘れちまうんだ！そして来年には別に英雄が放送されている！
俺達の事なんてもうハイネセンの奴らは誰も覚えちゃいない!!死ん
だ人間は無駄死に扱いだ！アスターテの人間もその後ろで暮らして
いる俺達も防壁の外に居るんだ！右だとか左だとか知つたこつちや
ありませんよ！ハイネセンでね！テレビに映るような「偉い人」に
とつては俺たちやヨソモノなんだよ!!」

「グレッグそれは……」 「そ、組織部長、その、なんといいですか」

あまりにも剥き出しの感情。同じエル・ファシル住む人間である二
人は目を伏せてしまった。

しん、と静まり返った会議室に拍手の音が響いた。ホアン・ルイはニコニコと笑みを浮かべながら、

「なるほど、なるほど……なあ皆の衆、今夜、もしよかったら、みんなで夕飯でも食べないかい？」

エル・ファシルの寂れた飲み屋をホアンは貸し切っている。周りにはいるのは組合の仲間だけだ。

開始から30分ほどが経ち、適度に盛り上がっているところ、ホアンはカマーネフと対面の席に呼び出した。

「さて、カマーネフ君。話の続きが聞きたいね、君はハイネセンの『偉い人間』達をどう思っている？」

そう促されるとカマーネフは少し緊張した様子でビールを一リットル飲み干すと口を開いた。

「俺はね、ホアンさん。以前はこう見えても軍にいたんですよ——なんですか笑って下さいよ、持ちネタなのに。まあいいや、ハイスクール時代に両親が死んじまってね、まだちゃんまかった弟を食わせるために入ったんです。勿論ひどい目に遭いましたよ。でも俺のような学のない人間でも弟を養えるだけの給料は貰えました。知ってますか？ 同じ10代ならエル・ファシルで仕事を探すより兵隊の手取りの方が儲かるんですよ。おかげで弟はハイスクールもちゃんと卒業して専門学校で俺よりもいい資格を取ってくれました。」

でもあの第4次イゼルローン攻防戦で負傷しましてね、脇腹を思いつきりやられました。今でも傷跡が残ってるんですよ。それで除隊になったんです」

ジンをストックで飲み干し、グレゴリーは脇腹を撫でた。

「軍隊は嫌いかね？」

ゆっくりと焼酎のお湯割りを楽しみながらホアンが尋ねるとグレゴリーはテキーラのグラスを傾けながら快活に笑った。

「まさか！ 恨んではいませんよ！ 感謝しているくらいです、軍の紹介

を受けてこの港で働きだしたんです。幸い俺は負傷したといっても働くことに支障はないので必死に働きましたよ。おかげで周りにも認められて、組合に誘われて……いつの間にかやらグレッグなら委員長を任せていいんじゃないかねえか？って港湾労働組合のおつちやんたちが言ってくれるようになりました。今の生活があるのは軍のおかげなんですよ！」

「なるほど、軍のおかげ、か」

グレゴリーはウオトカをグラスの霜が溶けぬうちに飲み干し、珍しく落ち着いた口調で言った。

「ホアンさん。俺は軍隊のおかげでここまで来れました。だからこそ、一部のバカが言う民主主義の聖戦だなんて馬鹿じゃないか？なんて思います。おらあね、戦争なんて大嫌いです。それはここで呑んでるダチも、上司も、それこそエル・ファシルのエライ人達だってみんな同じことを思っています。でもね、戦争が嫌いだって言っても帝国の連中は容赦なく攻めてくるんですよ。理不尽な暴力がいつ襲ってくるか分からないから俺達は戦争が大嫌いなんです。聖戦だなんて馬鹿じゃないですか？俺達は生きるために必死に戦ってるんですよ。その時に、俺達を、仲間も家族も、いざという時に守ってくれるのは軍だけなんです！そりゃあここは交戦区域といつても多少は前線から離れたところですよ。だから有事の際にはアスターテやアルレスハイムから仲間が来ます……避難する為に。やりきれませんよ！いいですか！俺達にとってはバーラトよりもアルレスハイムやアスターテの人達が仲間なんです！」

グレゴリーはアクアビットの瓶を振り回しながら叫ぶ。

「そうだそうだ！」「俺達は同じ釜の飯を食ってるんだ！」「客観視だとかご高説たれてるハイネセンの連中とは違うんだよ！」

いつの間にか港湾労働組合の若手組が集まっている。いやはやこれも彼の徳かな、とホアンは苦笑しながら後を促した。

「オタクの先生方がいうようにね、民力回復が必要なのはわかっていきます。でもね！俺達には艦隊が、そして兵隊さん達がいてくれないと普通に暮らすこともできないんですよ！」

グイツとグレッグはウイスキーを呷った。

「リンチ提督はろくでなしだった！ヤン提督はヒーロー！そりやそう
かもしれませんか!?でもだからって『ヤン提督が出世しました、悪い
提督が率いた駐留艦隊は縮小しました』で満足するのは他人事を外か
らやんやんやと言ってる奴だけですよ!!そんな馬鹿達が満足すれ
ば俺達はどうでもいいっていうんですか!?『自由、自主、自立、自尊』
?クソツたれだ!!俺達は助けてもらって生きているさ!でも俺達は
ここに居るんだ!!!ここで汗水たらして生きているんだ!!

人数が少ないから見捨てていい?採算が取れない?知った事かよ
!!少数派だろうと!俺達は!!ここに!!居るんだ!!」

「そうだ!」「よく言ったグレッグ!!」「少数派に乾杯!!」「かんぱーい
!」

ホアンはビールジョッキを掲げてニコリ、と笑った。

「少数派に乾杯!だな」

グレゴリー・カマーネフ氏の前に並んだグラスの数からは目を逸ら
す。

「なあ、お前さん……気に入ったよ。うちから立候補して見ないか?」

「いやいやいやそんな重要なこと簡単に決めちゃダメでしょ!それに
立候補なんて……ハイスクール中退の人間が立候補しちゃダメだろ。」

「同盟憲章にはあらゆる出自・学歴問わず被選挙権が認められてい
る。」

「選挙に出る金なんかありませんよ!」

「党から助成金が出るし、進歩連盟も君の為に資金も人手も出すさ。
それでも足りなければ私も出してやる」

「法律も政策も詳しくくないですよ!法律をつくるのが仕事じゃないで
すか!」

「そんなものは後から学べば良い。『何のために作りたいのか』が大切
なのだよ」

「……なんで俺なんだ?進歩連盟の総裁さんに聞いただろ?俺は一
度、断ってるんですよ」

グレゴリー・カマーネフの目をしっかりと見据えながら、ホアン・

ルイは静かな声で答えた。

「それはそうさ、君はエル・ファシルに訴えたいことはないのだろうか？ いや、あつたとしても君は『あの書記長さんに言えば何とかしてくれる』『連盟の先生に言えばわかってくれる』と信じられたんだ。いや、勘違いしないでくれ、馬鹿にしているんじゃないよ。それは君が今の議会政治を信じられている、とてもよいことさ」

「だがね、グレッグ。君は私に向かってあんな風に感情をぶつけたじゃないか。ならばそれをハイネセンで『エライ連中』にぶつけてみたくはないか？」

「俺、絶対とんでもない馬鹿なことしますよ！何を期待してるのか知りませんが！俺はただ酒を飲んでみんなとワーワー言ってるだけなんです！」

「君の言う『エライ連中』を国民の皆様はみんな雁首揃えてなんて馬鹿な連中がそろってなんて馬鹿な事をやっているんだ！と嘆いているじゃないか！今更君が馬鹿なことをやっただって次の瞬間には別の誰かがもつと阿呆なことをやらしてるさ」

「ちよつ！あつあんたがそれを言っちゃダメでしょ!!」

グレゴリーが目を剥くがホアンはカラカラと笑っている、ひどく痛快な気分になっていた。

「ジョージ・パームを知っているかね？『民主政治とは酒を飲み交わした労働者から夢を聞き出すこと』と彼は言葉を残しているんだ。

君はその政治の在り方を最も理解している人間だ！

ウチの議員はインテリ気取りと活動家根性が抜けない頑固な老人ばかりだ。是非とも若くて気持ちの良い、多くの人の気持ち——それこそニュースを聞き流しながら酒を飲んで今日の疲れを癒しているような、そんな人たちの視点に立てる人が欲しんだよ。グレゴリー・カーメネフ、私を信じて同盟の国民に『エル・ファシルで暮らしている人々はここにいます』と叫んでくれ！」

「……分かりました。立候補の話、受けさせていただきます！これからホアンさんを盃を交わした親父と呼ばせていただきます！みんな！よろしく頼む！」

「いいぞー!」「ええっ!グレッグ君が立候補するっていうのかい?」

「グレッグ!グレッグ!」「下院なんて言わず議長でいけ!」

「サンフォードなんかに負けるな!」「グレッグ!頑張れ!」

「グレッグのにちやんがハイネセンの分からず屋のケツを蹴っ飛ばすって!ガハハハハッ!!ソイツはいいや!!」

「お、親父かあ……まあともかくよろしく頼むよ、グレッグ」

まだ50代なのよ、という繊細な男心は捨て置くのだ。

「はい!親父!これから世話になります!」

こうしてホアン・ルイは珍妙な秘書を雇い入れることになった。後にとんでもない男を招き入れてしまった、と頭を抱えることになるのはもう少し先の事である。

第5話財界から産まれた国々パランティア共和国にて

——さて、エオウイン・イシリアンはパランティア連合国の同盟弁務官である。

彼女の【故国】であるパランティア連合国は文字通り、二つの邦が連合して同盟の構成国として活動している。

アノリアン共和国とケレブランド氏族連合国だ。そして、国家が成立するまでの経緯から伝統的にアノリアン共和国が経済と国政を主導し、ケレブランド氏族連合が国防を主導している。アノリアン共和国は旧銀河連邦時代に（現フェザーン回廊方面は反連邦活動と【海賊】の増加により開発が見送られた）難所であるイゼルローン回廊を通じたサジタリウス準州の経済自立と航路の安定のために大量の支援金により進出した幾つかの企業群が大元である。

行政記録の散逸により見捨てられた彼らは連合し、パランティア星域の支配者となった。

ケレブランド氏族はイゼルローン回廊に跋扈してた革命屋崩れの海賊やルドルフの粛清から逃れた脱走部隊などで形成された軍閥——【警備企業】から成り立った氏族連合である。

彼らの継続的な活動を支援しつつ星間機動が可能な軍事力の庇護を受けたのがアノリアン共和国である。

現在では行政的にはほぼ統一され、連合国首相がアノリアン共和国首相が兼務している。

パランティア連合議会はパランティア穏健党とパランティア協同連邦党の二大政党が主流であり、原則として議院内閣制をとっている。アリアノン共和国議会とケレブランド氏族会議も存在するがほぼ連合議会の下の自治議会と認識されている

元首（連合国執政）は対外的な代表として相応の権限を持っているが基本的に総選挙と同時期に執政選挙をおこない、可能な限り執政と議会の捻じれを避けようと努力している。

——そして、同盟弁務官も公選制であるが所属はそれぞれの構成国家政府の特別職公務員——即ち同盟憲章に基づき構成国憲法に規定され構成国法で制定された選挙に則り選出され、閣僚に準ずる扱いを受けるのである。

ある意味では自由惑星同盟という奇妙な【国家】の在り方を象徴する存在である。

故にこそ——エオウイン・イシリアンはまず首相官邸に招かれたのである。

「……なるほど、ルンビーニの事故は疑獄へと拡大する可能性が高く、軍部は第七次イゼルローン攻略作戦は半個艦隊で茶を濁す形で終息を狙っているという事ですか」

アノリアノン共和国首相兼パランティア連合国統一首相のヴィルヘミナがうめいた。

彼女もパランティア穏健党の議員である。ぱつと見はやや小太りの女性であるが、穏健党の中でも左派寄りの論客として名高い。彼女が無党派層の獲得に成功した事で長期政権を安定化させたと評価されている。

彼女は先代の総裁であるが今は党の役職にはついていない——慣例的に首相と元首である連合国執政に就任したものは党の役職を退くのがこの国の政治的慣習である。

「はい、首相閣下」

「……面倒な事をしてくれたわね。ウチにまで間違いなく波及するぞ」

穏健党は長きにわたりイゼルローン回廊付近の地域【交戦地域】の経済的な中核を担ってきたパランティア星系の中産階級を中核とした中道右派政党だ。ヴィルヘルミナが総裁の座についてたことで急速に対抗野党——パランティア労農党寄りの無党派層をとりこもうとしているが。

自由党と国民共和党系列を両天秤にかけ政財界に根を張った政党

である事には変わりはない。それ故に中央……ハイネセンを常に注視している。

そうした政党であるがゆえに星間インフラを担う情報交通委員長
のポストは重い。

構成国政府に対する影響力という点では星間インフラ全般を担い、
強大な資金と大量の人員を直接的に動かせる情報交通委員会は、構成
国間の調整を担当する国務委員会や地域産業やコミュニティを支援
する地域社会開発委員会に並ぶ力を振るえるのだ。

「ふむ……君達はどう思う」

労働長官が手を挙げた。

「ルンビーニ事故の真相を利用して同盟政府の公共工事安全基準の引
き上げとそれに伴う公定労務単価の引き上げを推進するべきです。

我々はそれに追従する必要はありませんが、ハイネセンの下請けに
入った工事の労働災害発生率が昨年比率で5%以上の上昇が見受け
られます。

また、安全費——特に人件費の高騰が高騰し公定価格からの乖離が
悪化しています。

本来であれば入札不調案件になりうるものを受注し、下請けへの一
方的な負担押し付けが問題になっています。こちらの公正取引委員
会への報告が」

「ふむ……」

「それに人をこちらに連れてくればそれだけ消費も増える。消費が増
えれば金はこちらに流れ込む。基本中の基本ですね。事故が減り、消
費が増える。良い事づくめだ」

通商産業長官が頷いた。

「イゼルローンの件について報告がひとつある、軍の情報部がこちら
の増員を行っているのは間違いない」

防衛長官が手を挙げる。

「む」防衛長官、報告を」

司法長官が頬をつらせるが首相は丁重な口調で答えた。

防衛長官は氏族連合の統領カガンが伝統的に兼務している。そしてこれ

もまた伝統的に副首相の座を兼務している。

「パランティア駐留隊ではなく統合作戦本部直轄の通信所に機材を運び込んでいるのは確認済みだ。わざわざバートから持ち込んでいるのだから相当力を入れておるのは間違いない。我々の眼は誤魔化せんよ」

「ふむ……であるからにはシトレ本部長は捨て筋として打ったわけではないという事ですか……」

そういう事よ、と防衛長官は鼻を鳴らす。

「エオウイン同盟弁務官、貴方には同盟政府内の情報収集を続けてもらいたい。

国防委員会と統合作戦本部、艦隊総司令部内部でも動きについても、頼めますね」

「かしこまりました。首相」

「我々としてはイゼルローン回廊の動静については同盟政府のみならず、独自に気を配っておくべきだと考える、司法長官と協力して情報を収集したい」

要するに同盟情報部を監視しようといっていることを全員が理解し、同時に臆することなく目配せし合った。

「異議なし」「異議なし」

「それとルンビーニの件だが労働長官として提案する。

エオウイン弁務官の同盟弁務官事務所にウチの管轄である三郷労働研究所から調査担当秘書を送ろうと思う。

また、必要な安全対策の研究の為に産業労働研究所に『独自研究』の予算をいただきたい」

「異議なし」「異議なし」「財務省としては産業労働長官の意見に反対である」

「あゝあ!?!」「たかが個別案件が一つ、今までの予算でやれるだろ?」

労働長官の額に青筋が浮かんだところで首相が早口で割り込む。

「この件は後で実務者同士で調整してください、次回の正式な閣議で諮ります」

「それではこれで解散にしよう。御苦労でした、エオウイン弁務官」

エオウインは頬を引き攣らせながら曖昧な笑みを浮かべて一礼をした。

それから30分ほど過ぎ、彼女は宇宙港に向けて車で15分ほど離れた豪華なビルに移動した。そしてそこに彼女を待っているのは生まれ落ちて76年目を迎えようとしている老人である。

「ふん、ヴィルヘルミナめ、閣僚のとりまとめすらできないのか。帰郷早々にすまなかつたな、エオウイン君」

自国の首相に対して堂々と客人の前で悪態をつく老人。この老人こそが連合国執政——即ち元首であるデネートリオ2世だ。

アトリアン共和国が企業連合であった頃から統治機構に食い込んでいた名門である。

——まあそれは言い換えれば元を正せば銀河連邦の大企業連から辺境に左遷させられた苦労人の子孫という事でもあるのだが——それを言えば自由惑星同盟におけるエスタブリッシュメントなどといったも出自が怪しげな連中の集まりであるというのが悲惨である。

謹厳であるがそれ故に高慢な面もあり、若いころから幾度も舌禍を引き起こしてきた。

「いえ、執政閣下」

だがそれはこの老人が無能であることを示さない。

自身は毛並みの良さと教養で『馬鹿な左翼』をやりこめることで保守層の支持を集めていたが、幾つもの要職を経験し穏健党の総裁の座につき、いよいよ連合国執政への出馬を決めたこの老人は、次の総裁に自身の仇敵（と熱心な支持者たち）が決めつけたヴィルヘルミナを指名した。

その結果として穏健党は長期政権に必要な「新鮮味」を手に入れたのである。

「ルンビーニの追及を行い、我々の地域に利潤が出る事業を引き出す、

か

うむ、ヴィルヘルミナ達の方針で問題なからう」

不機嫌そうな視線を受け止め、背筋を伸ばすエオウィンもこの老人に見出されてヴィルヘルミナの派閥から重用されたのだ。

「同盟政府の状況は思わしくくないが、それ故に我らは手札に困らない、か。

ふん、わが身に不幸が続かば総体の不幸を祈るようになる、我々も貧ずれば鈍ずるものよ」

エオウィンはふう、とため息をついた

「ルンビーニ事故は自業自得ですよ」

で、あるな。と老人は溜息をついた。この老人から見るとこの国は衰えていく一方なのだろう。

「ああそうだリヴォフ殿はお元気か」

彼も10年程前は、エオウィンと同じく同盟弁務官としてハイネセンドで活動していた。

その時にリヴォフは同盟弁務官として活動を開始していた——最もアスターテ共和国の国防長官など閣僚を経験した後のことであるが。

「ええとてもお元気です。次も出る気のようにですよ」

お元気というか喧しいというか、とエオウィンはくすりと笑った。

「そうなるかと勝つな」

連合国執政は重々しい口調で呟いた。

「はい、よほど迂闊か不運に見舞われぬ限りは。あの方は広報に使った金額ではなく知名度で勝つ御方ですので」

そうか、と呟き、デネートリオは静かな声でエオウィンに問いかけた。

「エオウィン君。イゼルローン要塞が機能して半世紀、【民主主義の縦深】は左派が強いがそれでもこの軍隊との付き合いが必要不可欠な『交戦地域』に根付きつつある。それは何故かわかるかね？」

「左派であろうと民意を聞き届け親軍路線に切り替えたからですか？」

違う、と老政治家は首を横に振った

「勿論それもあるが主ではない。労農連帯党などの親軍左派路線は兵卒への待遇改善などにも絡んでいる。国防委員会や上層部にとって歓迎するわけではない。」

失地したティアマトの農業保守政党である帰郷連合と穏健党が同盟弁務官を輩出しているか

らだ」

じろり、と若手弁務官に向ける目には深い光が宿っていた。

「……なるほど、勉強になります」

「エオウイン君。政治を差別的な目で観るものからすれば、右派は既得権益とそれに縋る権威主義者、左派は威勢のいいことを言う詐欺師。ならば中道は何に見えるかわかるかね？」

「いえ」

「中道は半端者の風見鶏だ。リヴオフ提督は良い政治家だ。リッツ教授は素晴らしい政策家だ。ホアン委員長はこの時勢には珍しい良き大衆左派政治家だ。」

だが我々とは立ち位置が違う、『誰が票を入れて君をそこへ運んだのか』ゆめ忘れない事だ。いいかね、【縦深】を護る為には君は中流層に立脚した政治家であり続ける事だ。

政治とは妥協の産物であるが、であるからこそ我々は立ち位置を違えてはならぬのだよ」

「……覚えておきます」

「ああ、君が良きパランティアの同盟弁務官としてあり続ける事を祈ろう。」

これからも長く、長くな。さあ行きたまえ」

パランティア政界の老重鎮が自分に何を望んでいるのかを理解したエオウインは背筋を伸ばし、一礼した。

とにもかくにも地域主義の中においても支持層の在り方というのは度し難いものであるが、それもまた民主主義、事には連邦国家においては付き合わなければならぬものだ

「はい、閣下。パランティア国民の為に」

「ああパラソルティア国民の為に」

第6話帝冠の共和国くアルレスハイム王冠共和国にて（上）

さて、いわゆる「民主主義の縦深」に参加している同盟弁務官達の故国は大半が『銀河連邦サジタリウス準州』という開拓途上の植民惑星群を発端とするものが多い。つまりは幾らかの問題を抱えていたとしても『バーラト・エリート』よりも強固な帰属意識を国家へ抱く連中が多いのだ。

だがアルレスハイム帝冠共和国は『異例』ともいえる国家である。同盟構成国の中でも最も新しく国家として承認された国である。

そもそもはこの国は亡命者の收容施設であった。だがそれは亡命者の増大と『同盟化』した二世、三世の土着により自治区へと発展した。

民主主義という概念を根付かせる為に同盟政府の直轄地として自治区ではあったが同盟政府の統制を受けていた。この構図が変わったのは「コルネリアス一世の大遠征」でアルレスハイムが一大激戦区となった事である。

指導者も市民も帝国出身者か、さもなければ帝国にルーツを持つていたこともあり、皇帝がいくらか恩赦を説こうとそれを信じなかった。

それはまあ当然といえば当然である。『真面目』な亡命者は文字通りのテロリストやその支援者であったし、そうでない連中は『宮廷中枢における高度に統制的な問題』や『経済的な国家に対する叛逆』に望むか望まぬかに関わらず携わっていた者を父祖に持つものが大半であったのだから。更に言えば同盟軍情報部に熱心に協力している者も多かった。

然るべき教育を受けた統治層である彼らにとって帝国政府は『理由』があれば極度に分権化された帝国を名君が統治する為に膨大な費用が必要であることはわかりきっていた。

故に彼らは惑星地上と小規模艦隊による連絡線破壊により徹底した抗戦を行い、同盟が幸運——あるいは帝国政府の統治体制が齎した

必然的な結末——によって辛くも親征軍を退けるまで血みどろになつて戦い抜いたのである。

そして——彼らの悲愴な抵抗は政治的意識の急速な発達を齎した。従軍した将兵やその熾烈な総力戦を支えた労働者を中心に労働組合が結成され、傷痍軍人基金や社会保障の近代化、そして参政権を含めた諸権利の拡大を叫ぶようになった。

彼らはこう吼えたのだ『我々は同盟市民である！』とその動きは疲弊した同盟社会に波及し、労働運動の高まりと労農連帯党が国政を担う大政党として膨れ上がるころまで行きつき、最後にはアルレスハイム制憲議会で『自由の旗』が高らかに唱和されることとなった。

「とはいえ、なあ」

エドヴァルド・フォン・リッツはその制憲議会が開かれたアルレスハイム国会議事堂がセナト——上院議場に座している。

この国を代表する同盟弁務官の一人としてそうした感動的な歴史を誇りに思わないわけではない——が政治家としての彼はまた別に冷徹な達観を『玉座』に向けている。

そこに座するのは20代後半から30代手前と言つた若々しい女性である。渋面という単語を辞書で引けば出てくるであろう顔をした老人に対し、口を開く。

「リツカルド・ハンソン首相、此度の両院合同会議召集の理由を尋ねたい」

「うむ……陛下、我らの同胞たる同盟弁務官エドヴァルド・フォン・リッツが帰郷いたしました。」

同盟政府の施政情勢の経過と今後の同盟弁務官としての行動方針について両院議員と国民に対し報告したいとのことです」

問答は首相のつけたマイクに拡大され、静まり返つた議事堂に響き渡る

『陛下』は形式に則り承知した、と頷き、立ち上がった。

「本日、セイム、セナトの両院合同会議に臨み、全国民を代表する名誉ある議員らと一堂に会することは、私の深く喜びとするところであ

る。

諸賢らが国権の最高機関としてその使命を十分に果たし、国民の選出に基づきアルレスハイム全国民の代弁者として送り出した同盟弁務官の報告に対し、名誉をもって論じ、国民の信託に応えることを切に希望する」

元老院議長であり右派政党『黄金の自由』の長老であるホールが朗々とした声を張り上げる。

「アルレスハイム王冠共和国統領コンスルにしてアルレスハイム王冠共和国の象徴たる尊嚴者、共和国市民の第一人者。アウグストゥス プリオンケプスキウイターテイス

神聖不可侵なる銀河帝国の皇帝、天界を統べる秩序と法則の守護者、オリオン腕の全人類国家の主権者、その象徴たるゲルマニア王冠の守護者たるマリアンナ・フォン・ゴールデンバウム陛下万歳」

そう、彼女の姓はゴールデンバウム——である。彼女の父祖はマンフレート二世亡命帝にまで遡る。

彼が暗殺された後、皇太子、マンフレート三世アルブレヒトが「帝国権標」の一つ『ゲルマニア王冠』（と主張する王冠）と側近達を引き連れアルレスハイムに腰を落ち着ける。

彼を『アルレスハイム王冠共和国統領コンスルにしてアルレスハイム王冠共和国の象徴たる尊嚴者、共和国市民の第一人者。アウグストゥス プリオンケプスキウイターテイス 神聖不可侵なる銀河帝国の皇帝、天界を統べる秩序と法則の守護者、オリオン腕の全人類国家の主権者、その象徴たるゲルマニア王冠の守護者』と長々しく権威を持った称号をもって現実政治より切り離れた神輿とする改憲が行われ——現体制が確立したのである。

そしてまた長々しい称号であるが……政治的な詐術が含まれている。専制的な称号が王冠にかかるのか、或いは彼らの元首にかかるのか、敢えて濁しているのだ。

ある意味ではアルレスハイム『王冠共和国』と名乗っている理由も同じである。

「帝冠の守護者たる陛下万歳」

「アルレスハイム王冠共和国万歳」

「陛下と陛下の君臨する土地に栄えあれ、万歳」

「我らの祖の名譽と子孫の未来を守られますよう、万歳」

「全ての市民と共に陛下があらせますよう、万歳」

議員達が唱和する【陛下】を称える声が響くにつれリツカルド・ハンソン首相——左派政党、連帯社会運動の最左翼である男の口に追加の苦虫がほろりこまれてゆく。

両院合同会議の議長を務めるセイム議長のブラッテリは同志ハンソン首相の表情を見て苦笑すると本題に入るべく議事進行に取り掛かる。

「同盟弁務官、エドヴァルド・フォン・リッツ君」

「王冠の守護者陛下、元老院議員、セイム議員の皆様、ゲストと、すべての皆様、このたびは上下両院合同会議に同盟弁務官として初めてお話しする機会を与えられましたことを、光榮に存じます。両院議員のお招きに、感謝申し上げます。申し上げたいことはたくさんあります。ですが、ハイネセンではともかく、この場で「フィリバスター」をする意図は小職にはございません」

会場に好意的な笑い声が響く、リッツもまた連帯社会運動出身であるが彼は公衆衛生学、特に労働安全衛生の第一人者として右派左派問わず一定の人気を得ている。

「さて、この国の情勢に関心を抱く諸国民の皆様は常にこのように問うておられるでしょう。『我々の友人たる諸国とともに運営される同盟政府は我々に何をしてくれるのか?』『こんなに税金を払っているのに!』」

再び会場に笑い声がさざめいた。

「我々にとつて、最も実感できる同盟政府が行うサービスはなんでしょう? 無論、私たちがまず第一に直面する脅威は恐るべき専制国家の侵略に他なりません。そしてそれに勇敢に立ち向かうのは同盟市民から徴募、あるいは志願した将兵であります。」

我々は同盟政府の指揮下戦うその全ての将兵に敬意を抱き、戦没者達に心から哀悼せねばなりません。我々が同盟として結束した人民の力は専制国家の侵略とそれが及ぼす災いを乗り越える力を持っています。人民のために戦う人々よりも偉大で勇敢な者はいません」

「我々と共に軍服を着て、血を流す英雄たちの姿は示しているのは専制国家の侵略に抗する戦いにおいて、自由惑星同盟は全ての市民に堅固で意味のある関与を求めていることです。私たちがこの自由社会を築き上げているサジタリウス腕の同盟諸国と共有しているのは、最も普遍的で神聖不可侵たる人権を守り、そして参政権により諸国民により運営される民主主義に基づく同盟政府のリーダーシップを承認していることでもあります。」

「私たちは、この長き戦争の悲しみと負担に耐えている同盟市民達の絆を、そして黄金の自由を守り続けてきた自由惑星同盟を強く支持します！」

議事堂全体から拍手が響き渡った。リッツはにこやかにそれが落ち着くのを待つ。

「自由社会は国民の意志を表現するための最良の手段であり、民主主義国家とはそれを立法、行政、司法により保障するものです。アルレスハイムの国民達はすべての諸国民が自分たちのあるべき姿を描く権利を尊重しております、そして全ての国はまた同様にアルレスハイム国民が自分たちのあるべき姿を描く権利を尊重しなければなりません。だからこそ、私の仕事は同盟政府を代表することではありません。私の仕事はアルレスハイム国民の皆様を代表し、同盟政府の運営に参画することあります」

再び議事堂全体から拍手が響く。即ち構成国の利益を代表してバークラトがハイネセンへと送り出す、ことこの点については党派を超えて共有されている事だ。

同盟政府を頼りにしながらも同盟政府への集権化を拒むその在り方はバークラト・エリート達の批判的である。批判に屈しない為にも同盟弁務官が居るのだ。

「私たちは、我々の住まう地域に、そして我々よりも前線に近い地域に

降りかかる戦災が少なければ少ないほど、同盟が良くなる事を知っています。私たちは過去に降りかかった悲劇から学ばなければならぬのです。

私たちは、多くの隣人が住う土地にて荒廃し、多くの悲しみを産みだす戦争と略奪を見してきました。

これらの非人道的攻撃に対する唯一の長期的な解決策は、避難民が安全に家に帰り、再建のロードマップを描き、それを着実に進めるよう支援する事です」

議員達の中の半数ほどがぼそぼそと会話を交わしているがリッツはそれを無視し、演説を続ける。

「そう、安全に、安全にです！つまり我々が求めているのは安全な生活であります。インフラが確立され、社会保障がいきわたり、全ての国民に平等に生活水準と安全が保障された社会を求めているのです」

リッツは朗々と声を張り上げ、ハンソン首相はニコリ、と笑った。

「この長い戦いにおいて私たちが暮らす社会が患ってしまった病の治療法は、決して単純な物ではありません。ですが、これを使い越えれば自由惑星同盟は人類世界に一つの偉大な節目をつくりだすことができるでしょう」

徐々にざわめきが強くなる。騒いでいるのは右派の議員達であることはリッツにもわかっていた。

「皆さんもお分かりでしょう！戦災で親を亡くした子がいます。戦災で子を亡くした老人が額に汗を流し働いています！

戦災で住まう土地を失った者が居ます！広大な土地を開発する計画が滞り、来るべき未来が訪れず、わずかな人々が身を寄せて暮らしている星があります！」

「我々はなんのために戦っているのか、少なくとも今現在はこの自由惑星同盟という国家の枠組みの中で、子供たちが愛する家族と共に暮らし、平和に学校に通うために、それこそが自由の旗を掲げる行為であることを私は確信しております。

老いた人が生活の為に働くのではなく、若い人々が働き、新たな技術を学び、使いこなす為に。まばらで孤独を強制される生活ではなく

持続可能な互いに助けあう共同体を作り上げる為に。そして全ての子供が健全な環境で自由な将来を選択する為に！

そう、我々は全ての国民に安全で文化的な生活を保障する為に、我々は戦っているのだと！

私、エドヴァルド・フォン・リッツはそう主張します。であるからこそ、我々は同盟市民が繁栄し成長する為に必要な仕事に迷わず取り掛かり、そして同盟政府が迅速にその職責を果たすようにはたらきかけなければなりません！」

「全国民の安全な生活を保障すること！そして社会の復興！このすべてが達成できれば、すべての構成国にとってより良き時代が訪れましょう。そして全ての国民が生活を改善し、自立した経済を構築する事で我々は専制国家に対する戦いに大いなる優位を勝ち取ることができるのであります。

これが私が皆様と共有すべきビジョンです。これが私が同盟弁務官として達成するべき使命であると確信しております」

「しかし、私たちは一緒にしかそこにたどり着くことができません。私たちは一人の人間であり、一人一人が自由意思に基づき決定権を持っていきます。私たちは皆が同じように血を流し、悲しみ、怒り、そして苦難に耐えています。私たちは皆、同じ普遍的な権利をもっており、それを護る為に戦っています。

そして、だからこそ私たちは皆、同じ偉大な同盟が掲げる自由の旗に敬意を表します」

「アルレスハイム国民の皆様申し上げます。

私たちがこのビジョンを実現する為に、私たちが誰もが輝かしい黄金の自由を勝ち取る為に、私たちは戦わなければなりません。

私たちには連帯が必要です。これらのビジョンを遮る者こそが帝国軍であり、彼らを防ぐために同盟政府との連帯が必要です。服従ではありません、連帯であります。

改めて私はセイム・元老院^{セナト}、両院の議員諸賢とアルレスハイム国民に対し申し上げます。

自分の力を信じ、自分の未来を信じ、自らの意志をもって同盟政府と協力し、専制国家の侵略の手を打ち払いましょう。

大神オーデインは専制国家の貴族と彼らが恐怖により服従させている兵ではなく自由意思に基づく市民達が連帯し、専制に立ち向かう姿を祝福することでしょう」

議事堂に響き渡る拍手にリッツは深々と頭を下げる。——アルレスハイム同盟弁務官はアスターテ後の国防方針について抜本的な方針の見直しを示した事はハイネセンの要路にも伝わるであろうことを確信しながら。

演説が終わり、一通りの儀礼を済ませた第一野党『黄金の自由』は控室に集っている。

「……リッツめやつてくれるものだ」

守旧派、あるいはマンフレ^王ー^党ディスタ^派と呼ばれているフォン・ハイデプラントが怒鳴り散らしている。

「奴は武勇で爵位を得たリッツ^王シミグウイ一門の分家の者だろう！それが専守防衛を支持するだど!？」

幾つもの企業の役員を兼務していた大物である。良くも悪くもアルレスハイム王冠共和国の大物であり『ハイネセンにお出ししてはいけない人』であると自他共に認めている——つまり本人も分かった上でそう振舞っている節がある——人物だ。

「緋色のシユラフタが振るう舌鋒は鋭く敵を切りさかん、か」

セイム院内総務であるフォン・バークは苦笑するだけだ。彼は穏健派でありあまりに揉めている場合に『まあ彼が居るのなら』と周囲を納得させる地位を確立させてきた調整の達人である。

さて、余談であるがエドヴァルド・フォン・リッツ医師の実家リッツ家は亡命貴族をルーツとするれっきとしたシユラフタ——アルレスハイムにおける亡命爵位貴族・下級貴族と名士・地主・大商人階層が合流した階級というより文化グループとしての『上流階級』の一員

である。

一門の宗家リッツ＝シミグウィ伯爵家は帝国軍人貴族の家系でルドルフが大統領であった頃に政治団体と結びついた軍閥に対して快速巡航艦隊を率い、巧みに要塞から部隊を引きはがし包囲殲滅した事で“シミグウィ”の異名を授けられたちよつとした英雄であった。

亡命後もかつてのアルレスハイム自治区の十二人自治委員会の委員を出した最も由緒ある家系である

——といっても所詮は亡命者の国である、当時も今もアルレスハイム貴族は本家の貴族と比べれば慎ましい存在であるのだが——それでもこの国のアイデンティにおいては奇妙な称号である「緋色のシュラフタ」と呼ばれている。

——閑話休題——

「まあしかしながらリッツ教授の言う事を鵜呑みにするのは論外だが、こちらとしても全否定するものではないでしょう。彼が予算を引っ張ってくるのであればそれに越したことはない」

リベラル派のシュトレゼマンが苦笑する。

『黄金の自由』は中道右派政党と標榜しているがその実態は今少し複雑である。

亡命者と言ってもその実態は複雑である。例えば古参貴族であっても戦場で身包みはがされるも同然の目に遭い投降した者もいれば、直轄領のインテリゲチアや、貴族資本を切り盛りし行政や貴族自治領において富を独占していた名士・商人と呼ばれる帝国経済を切り盛りする特権階層（例えば家族経営の小商店などは商人とは呼ばれず市民・町人と呼ばれた）が利権抗争に敗れ、フェザーンの同業と結託して膨大な資産をばら撒きながら逃げ延びることもある。

故にこそ『シュラフタ』という概念はゴールデンバウム朝の厳格な階層社会ともまた異なる、独特の概念として生まれたのである。

形成するものが多様であれば、『保守主義』も同じように多様な意味を持つのが常であった。

「それこそ、あちらこちら苦しいのは皆さんも同じでは？」

インテリ層の出身であるシュトレゼマンがその多様さを見せるべく水面に石を投げた。

議員の大半が頷いてみせる。

「そうそう教育援助を増やしてすな、我が国内の大学教育を充実させましょう、バーラトへの流出は問題でしてな」

「いやいやここは中小企業の運営を中間組織で統合できるように支援してすな、補助金を出して地域産業を……」

「産業もいいが農業の方に補助を出してくれ！ただでさえ人手が不足しているのだ！」

省人設備の拡大投資と技術指導員の確保をせんと安全な地域との値段競争においつけんわ！」

「待て待て、それもいいが文化財の保護に使うべきだ。同盟政府は我々の父祖が持ちだした由緒ある文化財に保護を出す事を嫌がるでなあ

じゃが観光資源にもなるし亡命者文化への理解が広まれば——」

「何をバカなことを、減税して役人を減らして市場原理に任せるべきだろう。ルドルフもハイネセンも自由な競争という点では共通しているだろうが」

「は？なめた口を叩くと分派して『連帯』にうつってやるぞ貴様ア！」

ガヤガヤと賑やかな交渉が始まる。

……本当に多様なのだ。

「話にならん!!リッツの与太話に貴様らまでのるか！」

ハイデプラントが一喝し、控室の議員達が静まり返る。

「我々はどこにいる？【交戦地域】であるぞ！あの忌々しいイゼルローン要塞がなくならぬ限り我らはリッツの甘言を夢見ながら同盟政府の無能共に頭を下げてまわらねばならぬのだ！

それでもミュッケンベルガーに追い回されかねんことを忘れるな！

アスターテの醜態でトリューニヒトがとんでもないアホウな上にシトレもロボスも元帥の器でないことがわかったのだ！

『連帯』共の口車に乗る暇があればいざという時の危機管理体制構築

の為に予算編成を急ぐことだ！」

ああ、まあなどともごもごとする議員達に鼻を鳴らし、やれやれ、と肩をすくめるバークとシュトレーゼマンをジロリ、と睨みつける。

「手厳しい事で」

「ですがまあオーデインの【陛下】の年齢を見ればそのイゼルローン問題解決の機会はそう遠くないかもしれませんが」

バークの言葉は間違いではないが帝国軍人上がりのハイデブラントは楽観的な言葉に対し冷ややかな声で答えた。

「どうだかな……イゼルローン要塞、イゼルローン要塞。あの拠点がある限りは我々は喉元に刃を突き付けられるも同然よ。オーデインのバカ騒ぎとておおいかくすだろうさ！あの要塞が陥落でもせぬ限りは」

はるか遠く、ハイネセンポリスで一人の若い少将がくしやみをしたかどうかは定かではない。

第7話帝冠の共和国くアルレスハイム王冠共和国く (下)

執政官官邸の執政官執務室——マンフリート宮殿と称させている——に同盟弁務官のエドヴァルド・フォン・リッツと首相のリツカルド・ハンソン、そして元首である共和国執政官——あるいは王冠の守護者、マリアンナ・フォン・ゴールデンバウムは身を移した。

「陛下、お疲れさまでした」

お疲れ様は私が言うべきだと思うけど、と大演説を行った同盟弁務官に年若い王冠の守護者は笑って帰す。

「私は無難なことを言うのが仕事なのよ。実際の政治は人民の代表なのに選挙で4割くらいから支持されてないそこのお爺ちゃんが責任を持ってやることだから」

だから政策政略のお話はそこなお爺ちゃんとしてね、私は知らないから、とひらひらと無責任そうに手を振る。

「陛下……」

マリアンヌはいいじゃないのよお、とだらけた格好で豪華な椅子に身を預ける。

「そういうけどリッツ先生だって、逆に私が具体的な政策どうこうに一家言持つ方が問題でしょう?」

それはそうだけど、とリッツは苦笑する。

「はあ……私はそれでいいですけどねえ」

刺すような視線が自分を突き破って目の前の国家の象徴たる尊厳者をチクチクときしているのだが——

「そこのお爺ちゃんが私を睨みつけるのはいつもの事だから気にしないでね」

背後からの視線が更に鋭くなった気がする。

ちらり、と背後に目を向けると策に大盛りの苦虫をほおぼっている老人がいる。

「なんだ若造」「いえ、もういいです」

「はいはいじゃあさつさと終わらせましょうか——リッツ先生の演説はとてもよかったけど。実際のところ同盟政府の羽振りは悪くなるでしょ？」

私はどの道やることは変わらないでしょうけど、民草が飢えに苦しめぬようセイムとセナトで議論してとか、バーラトと粘り強く話し合つてく、とかそういうことを言っておけばいいわけだし」

「むう」

ハンソン首相が不機嫌そうに唸った。

リッツはため息をついた。年若き王冠の守護者の即位の儀礼を取り仕切ったのはハンソンである。

意外なことに彼が公然と批判してたこの“国事行為”の為に熱心にアレコレと動き回っていたのは『黄金の自由』ですら認めることであつた。

だが一方で自由惑星同盟有数の急進派労働運動家——組合主義者やプロレタリア主権を唱える階級闘争主義者との批判に一定の信憑性を持たせる言動については変わっていないのも事実である。

この複雑な側面はアルレスハイムの左翼政党『連帯社会運動』とシユラフタを中心とした『黄金の自由』の対立と無党派層として揺れ動く大衆層といくつかの中小政党で作り上げられたアルレスハイム政界ならではともいえる。

「えー、首相。それで『ピープルズ・キャピタル人民の資本』についてですが」

「実際のところ実現に向けて如何ですか？ 医師の定着や医療費を含めていろいろと問題がありそうですが」

『ピープルズ・キャピタル人民の資本』とはセイムの最左翼であるリツカルド・ハンソンが首相の座を射止めた最大の武器にして彼の政治的キャリアにおける最大の博打である。

社会インフラの再整備であり『国家とは人民が共有する社会資本に他ならない』とバーラトにおける自由主義の否定に近いものを掲げた政策綱領である。その意欲的な内容は貧困層に向けた社会保険補助の強化から労働組合を介した労災ホットラインの強化、更には地域中小企業を介した住宅開発支援制度への公的資金の投入など幅広いも

のだ。

だが問題はその財源と受け皿となる医療機関の強化である。

「人的資源委員会や地方社会開発委員会との制度的な調整は済んだ——亡命者以外の者も受け入れて復興の拠点となるように、という目論みも無論もある、問題は同盟の財務委員会共だ、貴様も同盟弁務官として働いてもらわねばならぬ」

「はい、首相閣下。予算を奪ってくるのが弁務官の仕事ですので」

リッツがニヤリと笑うとハンソンも唇を歪めてみせる。

「ふん、である限りは貴様は俺と違ひまだ『黄金の自由』と殴り合うことではないわけだ」

「いじめちゃだめよー、リッツ先生は立派なインテリゲンチヤなんだから、喧嘩して成り上がった爺様とは違うのよ」

飛んできた野次を歴戦の議会政治家は一睨みで黙らせる。

あら怖い怖い、と口を挟んだ王冠の守護者にして尊厳者はにやにや笑って引き下がった。

「……努力はしますがこれから取り分を維持できるかは難しいですよ、階層対立を煽るのは得策ではありません」

「俺を誰だと思っている、その辺りはうまくやるさ」

「連帯の右派系を上手く使ってるのよこのお爺ちゃん、見かけより狷介よこの爺ちゃん」

財源の少なからぬ部分が中央政府からの交付金を利用しているのであるが——だからこそ同盟弁務官のみならず王冠共和国の政治家たちは政敵である『黄金の自由』ですら同盟政府の動向を注視しているのである。彼らとて金が入ってくる方がありがたいのは変わらない。

問題はその使い道を支持層の利益に誘導する事が仕事である。

『連帯社会運動』の右派は中小企業や自営業者も多い『黄金の自由』との間で落としどころ探る時には彼らが裏で動くのが常だ。

「わかっておりますが、絶対量が少なくなってしまうえばその手段も難しくなりますよ」

だが同盟財政は火の車である。第三次ティアマト会戦による第十

一艦隊の半壊に加え、アスターテ会戦の二個艦隊の喪失。

同盟政府の財政的な危機を重視し、補充を最低限に抑えて再編を行うのであれば、少しずつ浸透する帝国政府の公然とした支援を受けた海賊（貴族たちが雇った私掠艦隊、事実上の傭兵である）をカバーする能力が著しく低下する。

とはいえそのまま現状復帰しようとするれば——「軍事費！即ち無制限の出費！」と叫ぶのが財務委員会の官僚団と政治家の役目である。「敢えて先のスピーチでは触れませんでしたでしたが首都圏と地方の対立は広がっています。」

反戦市民連合は今度はいよいよ議席を伸ばして自由党と張り合うようになるかもしれません。

そうなれば【縦深】と明確に敵対することになる」

都市政党の色が濃い自由党は与党の座を射止めた際に財務委員会の幹部の比率が伝統的に多い。それはその叫びがバーラトを中心とした都市市民達の少なからぬ割合がそれを支持しているからである。

だが一方で彼らは彼らで第五次イゼルローン攻略戦など数多くの武勲で彩られた前線指揮官畑の実戦派、シドニー・シトレを最高評議会指名人事の重要ポスト、統合作戦本部長に推薦をするなど軍を軽視しているわけではない。これ以上の拡大ではなく効率化を主軸にしているのだ。

だがそうなると地方駐留艦隊の削減など経済的な要衝ではない【交戦星域】に直接的な被害が及びかねない改革に手を出すことになる。

「自由党系とは利害が対立しますが調停を前提とした対立です。良くも悪くもサンフォード議長のような国民共和党の地方議会出身の者達がそれを調整するのが伝統でした。だが反戦市民連合は違う」

彼らにとって軍事費の増大は無制限の収奪を受けて顔も知らぬ辺境の連中の手で浪費させられているのと同義である。そして従軍すれば——その地を護る為に親族や友人が殺されるのだ。

負けが込んでくると【交戦地域】では国防委員長でも統合作戦本部長でもなく、財務委員長が公然と憎まれる不可思議な事象はこのような極めて民主的な事情によって発生するのである。

「——被害者意識が肥大化すれば代議を務めるものですら調停ができなくなる。防衛戦争が長引きすぎた、バーラトの一般市民がこちらに来る事も少ない。断絶されてるのだよ、我々は。経済への不安、社会の病根だな」

リッツはため息をついた。であるからと疎外しろと言えないのが苦しいところである。

「ああもちろん彼らも被害者だとも、だからとて我々が滅ぼされていいはずはない。だが彼らが我々を同じ同盟市民と認識できないのも責めきれぬ。全部あの忌々しいイゼルローン要塞のせいだ」

「和睦を示唆しているようだけどねえ」

王冠の守護者陛下は冷やかな物を滲ませた声で謳うように言った。「現実的な見通しとしては不可能。追われた者は知っている。連中にそんな統一された意志など持ちようがない事を。そして奪われた者は感じるの、奴らは何かあれば殺され、犯され、攫われて奴隷とされるのは自分達だと。」

だから——バーラトの市民と私達とエル・ファシルやアスターテやティアマトの人間がみる現実の違い過ぎるのよね。私がアルレスハム王冠共和国民意の最大公約数を穏当に話してもバーラトでどのように受け止められるのかしらね？セウムと同盟議会で同じことを語っても受け止められた方どれほど違うのか」

その声は朗らかだがどこか冷やかな空虚さを感じさせる。

「本当に私達とバーラトは同じ国なのか民草は信じられるのかしらね

——異国の者と見なせばその行く末は——」

「陛下！」

鋭い声でリッツが止めに入った。

「はいはい、ごめんなさいね、いい子にしますよ」

もういいかしらね、と言ってゴールデンバウム女史はさっさと執務室を出ていく。

もとより実権を持つ気はないと振舞っているが、彼女も政治の現実と思うところがあるのだろうか。

「……悔しい事だが間違っておらん、人が死に過ぎた。アルレスハイムが、ヴァンフリートが、アスターテが、エル・ファシルが、落ちれば次はどこだ、そのまた次は——、という意識が辛うじて自由惑星同盟としての連帯を保っている、露悪的な言い草だがそうした理由は間違いなくある」

ハンソン首相はフリープラネッツ労働組合総連合の中央執行委員会に身を置いたこともある。アルレスハイムだけではなくあちらこちらの組合幹部と伝手を持っている。

それだけに同じ労働者といえど見えるものが違うというのは事実として受け止めているのだ。

「首相閣下」

「リッツ、あの忌々しき陛下はな、アレで物が見えているのだ。何も考えとらん振りをして形式通りに物をこなしているだけだ。俺はそれが気に食わん！」

「見えても立場上口にしたくない、ということでしょうね」

それを冗談に紛れ込ませて語る程度には信頼を得ているのだと受け止めている。ハンソンもそれを分かっているから憎まれ口をたたいているのだろうか。

だからだよ、とハンソン首相は唸る。

「民主共和制にもいくら悪い点があるのはわかっている、だがそれでもアレは共和制国家の方が生きやすかろうよ」

そうすればセイムでコテンパンにしてやるわい、と左翼のオジキが鼻を鳴らす。

いや、この国も王冠共和国ですが、というツツコミをする人はいない。

「どうでしょうか、いえそうかもしれません——」

しかし万民にとってはどうか、とリッツは思考を巡らせる。ある意味で同盟のような国にこそ、彼女ののように俗世の利害関係から切り離れた——と多くの人に信じさせ^{国家意識}ナシヨナリズムを象徴する存在は必要なのかもしれない。ああだがもちろん、亡命者でもアルレスハイムで生まれ育ったわけでもない人間が系統は違えどゴールデン

バウムを戴くなどできるとは思っていないが。

リッツは年若い象徴元首の言葉を反芻する。

——かくのごとく戦争が続き社会は分断されつつある、同盟という国家の国民として生き残らねばならぬがそれすらも悲嘆により分断されつつある、ではそれを乗り越えるとして自由惑星同盟とは如何様な国となるのだろうか？我々は何をもって自由惑星同盟という国家を構成しているのだろうか？

第8話アスカリの持ちたる国くヴァンフリート民主共和国く（上）

デイヴィット・イロンシはヴァンフリート国民軍中將にして、人民政府中央執行委員の一人であり——同盟弁務官である。

様々な肩書を連ねているが、要するに政府の閣僚と同列扱いの要人であり軍の実力者でもあるという事以上にヴァンフリート民主共和国の代表としてハイネセンにおいて利益を代表する者の一人であるという事だ。大抵の場合、もう片方——そのような彼がアスターテ会戦後、初の帰国ともなればまずやることは決まっていた——

「皆様、ようこそヴァンフリート民主共和国へ！私は同盟弁務官として、そして一人の国民として皆様を歓迎いたします」

国家式典に参加する同盟軍達の歓待役である。勿論、ハイネセンから来た佐官程度であれば政府広報や外務の中堅どころが相手をするのであるが今回はそうはならない。

「グリーンヒル総参謀長閣下。ウランフ提督閣下、以下将兵各位、この度はご足労いただきありがとうございます」

グリーンヒル総参謀長は宇宙軍大將であり統合作戦本部次長（宇宙軍担当）も兼任しており、同盟軍内で序列3位とみなされている。

ウランフ提督は第10艦隊司令官でありその軍歴の大半を帝国軍との戦争や軍事・政治的重要航路の警備にあたる正規艦隊レギュラー・フリーで培ってきた同盟軍有数の勇士として名高い。

要するに同盟軍中枢の要人達である。

それだけではない、国营星間放送のヴォイス・オブ・フリーダム、高級紙のハイネセン・ポストにアライアンス・タイムズ、プラネッツ・ファイガロにフリープラネッツ労働組合総連合も出資している自由労働日報……多くのマスメディアが詰めかけている。

「この度は同盟軍を代表し、ヴァンフリート国の皆様に同盟の同胞として常の御協力に厚く感謝を申し上げます、そして」

デイヴィット・イロンシもまたヴァンフリート人民軍中將であり、

同盟軍に出向した期間は幾度も前線にでている。エル・ファシル解放戦争においてヴァンフリート突撃工兵連隊長として活躍した事を最後の花道とし、将官になるとヴァンフリート民主共和国においては高級官僚としての道を歩んできた。

だが未だに体型を崩さず弁務官としても政府代表部の警備部隊らとトレーニングをする様をSNSに流す程度には前線指揮官のイメージを誇示している男だ。

「それでは同盟弁務官の職務の一つにお付き合い願いますか」

同盟弁務官は構成国の利益代表であり、同時にハイネセンを中心としたいわゆるバーラト首都圏との文化・経済交流の啓発等も行っている。

「御存知でしょうが、我が国は自由惑星同盟国の中でも最も歴史のある古い国の一つです。銀河連邦が健在であり、後の僭主ルドルフが軍内で専横を働いていたころ、心ある銀河連邦軍戦略輸送軍司令官であるポツケー・ナイナーニエン提督が幾つかの企業を味方につけて開拓拠点であるサジタリウス準州に作り上げた小惑星を利用した鉱工業プラントの群です。

そして僭主ルドルフが独裁体制を築き、国内の反対派への粛清を始め、元帥に上ったナイナーニエン提督もその地位が危ぶまれておりました。追い詰められた彼は軍本部に欺瞞情報を撒き、ヴァンフリートへ逃れ、銀河連邦臨時政府を設立し、反攻の機をうかがっていましたが、一部幕僚の造反により旗艦ごと謀殺され非業の死を遂げました。

元帥の遺志を継ぐ為にこの複数の基地の中で暮らしてきた我々の祖先達は同志達の中で最も階級が高いルーヴェルチュール大尉と共に革命を起こしました。

大尉はナイナーニエン元帥閣下の下で勤務した最高位の指揮官として元帥杖と銀河連邦臨時政府主席の座を継承、そしてこの国はヴァンフリート民主共和国として再生したのです！」

「なるほど？」「そういう事」になっているという事だ、ウランフ君」
ウランフとグリーンヒルは苦笑いをするが若手の間では妙に感心

しているような者達も居る。

一方でこの地域の出身者やヴァンフリート民主共和国に関わった事のある者達は両將軍達と同じように笑いかみ殺していた。彼らも、そしてヴァンフリート国民の大半も知っている、

ナイナーニエンは銀河連邦軍末期の悪癖を混ぜて凝固されたような輩であったこと、そしてヴァンフリート国民の先祖は貧しい貧困層の中でも遺伝的に強靱な体を持った黒人達で編成された「アスカリ」であることも。

——そして搾取に耐えかねた彼らがルドルフの追及から逃れた軍閥將校団を抹殺してヴァンフリート民主共和国を作り上げたことも。「ヴァンフリート民主共和国を見た事のない方々には驚きでしょうが、我々は小惑星を利用し幾つかの居住用拠点を中心とした土地で生活を営んでおります。

皆様には首都ステーションである『ネルソン・マンデラ』へご招待いたしましょう——」

ブリッジから見えたのがヴァンフリート国の中枢である。直径100 km程の巨大な小惑星を中枢に幾つかの小惑星を連結させたものだ。

第10艦隊旗艦たる盤古と直卒艦隊約1,000隻を迎え入れるには十分な大きさであった。

「【マンデラ】は政治的な中枢であるのと同時に工廠としての機能も持っている。

とはいえ、基本的には防衛艦隊（同盟軍の払い下げ艦であり大部分は星系間航行機能をオミットされている）の整備と解体にしか使われないが。

そして専ら解体に使われるのだ——同盟軍と帝国の戦闘が起きた後は一大事業の始まりであるその名も——

「——戦場清掃、か」

ウランフ中將は暗い目で解体に使われているドックを眺めている。到着した彼らの目的はアスターテ会戦の事後処理に関する儀礼に参加する事だ。

その儀礼の一環がこのドックの視察である。実際は若手將校達の引率のようなものである。

グリーンヒル大將は事務方たちを連れて式典の打ち合わせをしているし、残りの將校は兵やマスコミが余計な事をしないように見張るのに手いっぱいだ。

わざわざ軍の第三席が訪れたのはヴァンフリート民主共和国はその成り立ち上、銀河連邦臨時政府としての立場を主張しているからだ——とりわけ同盟政府との対立が深まっているときは——それでもおおよそ正規艦隊司令官たる中將がいけば十分、であるのだが。

この星域に第六次イゼルローン攻略に向けた補給基地を作ったのがまずかった、そのせいでヴァンフリートは戦場となり、更に第六次イゼルローン攻略戦は失敗、そしてそこから続くアスターテ会戦まで旗色がやや悪い決着が相次ぎ、軍とヴァンフリート政府の信頼関係構築を重視したトリューニヒト委員長とシトレ、ロボス両元帥の合意により、本来は艦隊司令官が赴くこの行事にグリーンヒル大將が送り込まれたのである——国防委員を送り込めばよいのでは、という話もあったがそれはこの国の特色上、双方に臨まぬ面倒を呼び起こす可能性がある、という暗黙の了解があるのだ。

—— 閑話休題 ——

作業員もそれを監督する技術將校達も皆、オリーブ色の肌をしている。彼らは同盟軍と契約を結び戦場の安全が確保されるとやってくる人民防衛軍の掃宙部隊だ——そして少なからぬものは普段は予備役として無重力地域での資源採掘を行っている。

ヴァンフリート民主共和国の主要収入は鉱工業と同盟政府からの委託業務だ。

その中でも特大の利権が——戦場清掃である。宇宙空間における戦場は危険極まりないだけでなく酷く迷惑なものだ。当然である、数万隻単位で会戦を行う戦術要点域クリティカル・ポイントともなれば航路の要衝に他なら

ない。

そこに機雷やら妨害衛星やらやら誘爆した破片やら——軍事とは人類の悪意のぶつけ合いである以上、ばら撒かれる物はそれに準ずるものであるのは当然のことだ。

であれば迷惑を尻拭いするものが居なければならぬのである。とりわけ本土であるとされる地域で戦う防衛戦争であればなおさらに。

「お嫌いですか、提督」

いわゆる【交戦星域】に所属する諸国家は少なからず国防委員会との委託業務に依存した経済になっている。それを批判するハイネセン主義者は多いが一方で純粹に物流、消費、そして内需の少なからぬ面を駐留部隊や正規艦隊の移動、演習、そして有事の補給が担っているのも事実である。

しかしその中でも積極的に参加をし公然とそれを伝統的な軍部の優越に利用しているのはヴァンフリート民主共和国だけである。

それ故に軍部や上流階級の中でも彼らに対する嫌悪をあらわにするものは少なくない。

「必要なのは理解している」

「二期は随分と嫌われたものですが、我が国のしている事は単なるハイエナの真似事ではありません。機雷や電波妨害に不発弾、不安定な動力炉の処置など危険があるが故に我々が専門としてやっているのです」

船団国家であるアスターテや軍閥連合を抱えていたパーランティア連合国は当然のことながら、その他の構成国でも最低限の航空戦力は保持している。

しかしながらその中でもヴァンフリートは鉱工業とその輸出入くらしいかまともな収入源はなく、そしてそれに釣り合わない宙間戦力を保持していた。

であるならば彼らを働かせるのが国家の権威を示すにもちようど良い、と誰かが思いついたのがきっかけとなり【航路警備】はヴァンフリートにおける伝統的な収益事業となった。そしてこれに【小惑星

鉱業】のノウハウを組み合わせる事で一大事業となったのが——戦場清掃である。

うまくすればまだ使える部品を売り捌いたり軍の物資の一部を横流ししたり、帝国軍の船であればさらに軍への買い取りなど儲けが見込める。

だがけて気楽なものではない。それだけであれば競合する者はさらにいるだろうが——そうはならぬからこそ、この国は続いてきたのだ。

スクラップの裏で休憩している作業員達が囁き交わしている。

「相も変わらず多いな、そろそろ搬入ペースが落ちてもいい頃なのによ」

「酷い戦いだったらしい、コイツがピーピーなると気が滅入るよ……」

探知機を振りながら相方らしい男が溜息をつく。

「俺も十年この仕事をやってるがこんなに酷いのはめったにねえよ」

「ああ、現場の整備部隊も酷かったぜ、機雷で何十隻か沈んだそうだ」

戦場清掃は戦争に準ずる危険がある、

「第三段の清掃部隊でだろ？クソ、信じられねえ！」

鬱々と話している二人の声に気付いた若い大佐が顔をしかめる、
がスピーカーを通しては言った報告はこの2人がただの死を看取る人間でない事を暴きたてる。

『お宝を搬入するぞ！手すきの連中は来い！来い！』

歓声をあげた男達はコーヒーを投げ捨てエアロックから搬入された無事な貨物ブロックへ歓声をあげて駆け寄る。

似たような男どもを将校達が駆けよって統制しようとしているが
焼け石に水だ。

だが無理もない、そうした品は数割はヴァンフリートのものになり、その幾らかは報奨金として彼らの手元に回るのが慣習だ。

革命の残滓であり、危険を冒す者達への報酬ではあるが——同盟軍人たちにとっては自分達の亡骸を漁っているようなものだ。

「まるで略奪だ」

と同盟軍の年若い大佐が小声で吐き捨てる。先程まで好意的だった

た若手将校達は居心地が悪そうにしていた。

ウランフは咳払いをし、イロンシは元気が良いのは良い事ですな、とにたりと笑う。

「機雷の処理などは軍でも行っているから現場の苦労はわかる、感謝もしているとも

彼らも生活があるのはみな分かっている」

ええまあ、と若者達がぼそぼそと追従するがその大佐は鼻を鳴らすだけだ。

「だがそれと感情は別、とええそれはそうでしょう」

イロンシは肩をすくめておどけて見せた。天性の気楽さ、という意味ではこの男も前線指揮官としての素質を発揮していたのは疑いはない。

貨物ブロックに集る作業員達の歓声は呻き声へと変化した。中から出てきたのは——凍てついた死体らしきものであった。作業員達の端末から警告音が鳴り響く音がドックに響き渡った。

男達は頭を振ると凍った肉塊を漁り、手帳のような端末を拾い上げると機械でスキヤニングし、コンテナに放り込んだ。

スキヤニングされたデータが届けば国防委員会の統計から行方不明者が一人減り、戦死者が一人増えるのだ。

視察を終えるとせわしなくグリーンヒル大将の統率よろしきを経て同盟軍は新たな任務にとりかかった彼らの最大の任務——同胞達の遅い帰還を迎えることである。つまりは戦没者達の葬儀である。と言っても亡骸があるわけではない。

彼らが持ち帰るのはコンテナに詰め込まれた軍隊手帳——より正確に言うのなら運よく発信機の機能が生き残った軍隊手帳の残骸達である。

マンデラの第一宇宙港、ムベキの大広場にヴァンフリート人民防衛軍の儀仗兵と同盟軍が並ぶ、同盟軍と並ぶとヴァンフリートの違いは

より顕著だ。

同盟軍は良くも悪くも【見栄え】を重視し人種を混ぜて編成をすることが多い。

一方でヴァンフリート人民防衛軍は誰も彼もが浅黒い肌をしており、まるでそれが軍礼装の一部であるかのような奇妙な統一感を醸し出している。

同盟軍の若者達、特に都市出身者にとっては【異国】を感じさせるのに十分である。

『自由の旗、自由の民』が奏でられる。

「総員！勇士達へええええええ！！捧げエエエエエツ！銃！！」

ヴァンフリート人民防衛軍は一糸乱れぬ動きで戦没者への畏敬の念を示す。

「モハメド・カイレ人民元帥閣下の御言葉！」

国家元首にして最高指導者^{ディクタトル}モハメド・カイレ人民元帥がゆっくりとした足取りで演台へと昇る。

彼——というよりも人民元帥という呼称が問題なのだ、彼は国家元首であり銀河連邦元帥を自称している、そこに触れるとなると——文民、ましてや公選制政治家では立場の上下が酷く面倒なのだ。

「我らが指導者！カイレ人民元帥万歳！！」

「人民の庇護者よ！我らの人民元帥^{ビーフルズマーシャル}万歳！」

兵士と女性達の歓声に答え、元帥は手を挙げる。大量に身に着けている勲章が煌めいた。ヴァンフリート国政府によるものから周辺諸国の物、そして自由惑星同盟から授与された物、と様々だ。

「我が敬愛すべきヴァンフリート民主国の諸君。ここに眠るのは偉大な戦士たちである。我々は彼らに哀悼の意を示し、それと同時に深い敬意を払い、彼らを送り届けなければならない。我々は同志であり勇敢な戦士である。彼らはこの長い戦争の中で共に生まれ、そして彼らは故国と我々同胞を護る為に死んだ。

同盟は多様な人々が暮らす国々により作られた巨大な家である。同じ信念をもった国々が一丸となり、末永く続いていけるかが試される戦いが長きにわたり続いている。

我々はこの戦争のすさまじい戦場となりうる地域に今もなお住まい。二年前にはアスターテの友人たちの助けを経てこの地を襲った戦災に耐え抜いたことは記憶に新しいだろう。

ここに眠る彼らは我々とその後背に住まう人々が生き延びるため命をかけ、そしてこの広大な星の海の中でとこしえの眠りについたのだ！故に我々は彼らを敬意をもって故郷に送り届けなければならぬ。それは我が国と人民の誰にとつても適切で、彼らとその遺族に対する礼儀にかなった行いであることに異議がある者はいないと確信する」

「しかし、我々はこの戦いをで命を落とした勇士たちと同等にと称えられることはないだろう！生者であれ死者であれ、ここで戦った勇敢な人々こそがその悲しみと勇気を示したのであり、我々が勇気を示し、自ら武器を取らぬ限り、それを語り継ぎ、誇りを持って送り出す事のみを為すからだ。冷笑的な専制主義者は、彼らの死とそれを我々が語り継ぐことを誰も記録にも記憶にもとどめず、踏みにじられるのみだと嘲笑するだろう。しかし彼らの行動を我々が忘れることは決してない！彼らの示した献身を無為にすることは決してない！！

生者としての我々の使命は、ここに眠る勇士達が前進させた未完の仕事に捧げることである。我々は彼らを悼むのと同時に悲しみに負けず、残された大きな使命に自らを捧げる事を誓おう。我々は誉れ高き死者が最大限の熱意を捧げた大義を実現する為により一層の熱意を向けなければならない。諸君！このモハメド・カイレと共に彼らへ誓おうではないか！！我々はこの地に住まい、そしてこれからも人民の意志により侵略に対して断固として武器を取り戦い続けるのだ！！彼らの死を無駄にしないと固く決心せよ！

我々の誇りは誰にも奪えない！専制主義者の暴威に対して我々は団結して戦うのだ！！

自由惑星同盟万歳！ヴァンプリート民主国万歳！ヴァンプリート人民よ！勇士たちの魂へ敬礼！」

同盟軍側からも拍手が鳴り響き、人民元帥は笑みを浮かべた。

第二の国歌ともされる革命兵士への葬送曲『同志よ我らの腕の中

で』が奏でられ兵士たちが行進を始める。

艦隊儀仗兵がコンテナを整然と囲み行進するヴァンフリート儀仗兵達と死した勇士の形見に捧げ銃する。第十艦隊司令官のウランフ中将を筆頭とする将校団も敬礼をし、コンテナを引き渡しの確認——武官筆頭と儀礼的なやり取りを行う。

グリーンヒルはそれを少しばかり羨ましそうに見ていた。彼はまだ明日、このセレモニーにも劣らぬ重要な任務があるのだ。

「グリーンヒル総参謀長閣下、確かに勇士達を引き渡しました」

モハメド・カイレ人民元帥が厳粛で重厚な声を発すればドワイト・グリーンヒル大将もそれに劣らぬ静かで柔らかな口調で返答する。

「はい、人民元帥閣下。確かに送り届けさせていただきます、自由惑星同盟軍を代表し、人民元帥閣下とヴァンフリート国民の皆様には厚く御礼申し上げます」

「是非その言葉を明日、お聞かせ願いたいですな」

「ええ明日はぜひとも」

グリーンヒルとカイレの視線がぶつかる。双方ともに狡知の光が煌めいていた。

明日、ヴァンフリートの両院合同集会でグリーンヒルは同盟軍大將としてスピーチを行うのだ。

軍、国防委員会の使節団代表、統合作戦本部次長筆頭にして艦隊総参謀長——彼が【交戦星域】に向けて発する言葉だ。

同盟全土に網を張るマスメディアが詰めかけている理由はまさに明日、スピーチで同盟軍首脳たるこの男が何を話すかにあるのだ。

第9話アスカリの持ちたる国々ヴァンフリート民主共和国（中）

グリーンヒル大将達を見送り、公的な役目を終えたデイビット・イロンシはそのまま人民元帥の執務室へと呼び出された。

「革命万歳！人民元帥閣下、お呼びでしょうか」

モハメド・カイレ人民元帥は二期七年目、対帝国タカ派の雄として知られている。

ヴァンフリート星域が戦場となった際にアスターテやエル・ファシルと結んだ避難協定を活用し指導力を発揮した事で実務政治屋としても名声を高めている。

このまま何事もなければ同盟政府の頭職リストに載るか人民元老院の終身議員の座を得るかのどちらかだろう

「そこに座れ、意見を聞きたい」

「意見、ですか」

「次の中央委員会の編成をどうするかだ」

イロンシは物言いたげに唇を舐めるが言葉を飲み込む。

人民政府中央委員会とは要するに閣僚である。イロンシも無任所中央委員として任命されている——同盟弁務官に選出された者はそう扱われるのだ。

「下院の選挙は翌年初であったと思いますが」

「だからこそだ、と最高指導者は肩をすくめた。

「選挙の結果も加味したうえでハイネセンとの付き合いの舵を取るの
は俺だ。」国防民主主義もハイネセンの貴族共が思うよりは面倒だ」

モハメド・カイレは人民元帥の座につくまで相応の苦勞をしてきた。同盟軍においては彼は隕石加工や機雷敷設などを任務とする工
作艦の艦長、戦闘工作艦隊の司令官を務め、ヴァンフリートにおいては掃
宙公社の役員、そして工業プラント【オバサンジヨ】の自治評議

会専務評議員兼書記長を務め、将校及び相当技官から選出される人民元老院オバサンジヨ選出議員を経て政府中央委員会の商工担当常務委員として入閣し、そして6年に一度の中将達が争う——この国の大将は人民防衛軍参謀総長ただ一人であり、選任されれば人民元帥選挙への被選挙権を失う——人民元帥選挙に勝利したのだ

つまるところ彼はヴァンフリート将校としては珍しい、議員経験の薄い技術官僚であった。歴代の人民元帥として少々珍しいのは「同盟弁務官」や同盟下院議員を経験していない事である。

彼にとってハイネセンは最大に取引相手であり、経済的に見れば保護者であり、そして従属せざるを得ない宗主国であり——複雑な感情を抱いている。

いやまあそれは向こうから見ても同じなのだが、とイロンシは内心、苦笑する。

「ハイネセンの連中は『元帥閣下』は労兵評議会も好きにできると思っている」

人民元帥ピーブルズスマーシャル、最高指導者ディクタートル、その独特の響きは『ルドルフ以上にルドルフらしい』などと云われることもあるが、実は6年一期という任期が定められている。

とはいえもちろん、だからと言って一般的な民主共和制の元首であるというわけではない。

アルレスハイムの政治学者のエプレボリ教授は『我らが同盟において我が国を立憲君主制であるとされるのならばヴァンフリートは唯一の選挙君主制国家であろうぞ』と冗談を飛ばしたこともある。

その冗句は彼の見識より出でた者であるのは間違いない。

人民元帥が強力な権限を持っているのは事実である、当然の事として国軍の指揮権、そして両院の議会を解散する権限、法案・予算・条約批准の是非の議決に対する拒否権（ただし、議会が3分の2以上の多数で再可決をすれば覆される）

予算の増額調製と執行権、人民政府中央委員会とそれを構成する中央官庁への人事権に最高裁判事の指名権。

そして何より強力なのが人民元帥専決処分権である。議会を招集

する時間的余裕がないと認められる場合など、独自の判断で人民元帥令を制定し事実上の立法、予算の調整、執行、行政機関の設置、戒嚴令の発動などを行うことができる。——太平の世においては政権の正統性を維持する為の象徴であり、対外的な代表として遇されていたが、ダゴン以降は徐々に革命当初の緊急事態における指導者として権威と権限が再集約され、とりわけこの半世紀——イゼルローン要塞という橋頭堡を帝国軍に作られて以来は最高指導者として独裁官の役割を名実ともに掌握している。

そしてそのような権限を持つ地位に対し被選挙権を持つのは原則としてヴァンフリート人民防衛軍中將の位に就いているものだけであるのだ。

——閑話休題——

「ヴァンフリートの【国防民主主義】は面倒な仕組みです、とりわけ理解を得るには」

【国防民主主義】はヴァンフリート革命後の非常事態を收拾する為に唱えられた理論である。ようするに民主共和制といえど非常時には独裁官に権限を集約させているじゃないか、という事だ。

そして【国防民主主義】体制を支え、他国から見ると難解にさせる組織が【労兵評議会】である。

上院にあたる【人民元老院】は地方自治機関から選出された将校相當官、公社管理職などによって構成されており、原則として人民元帥の諮問機関としての色が濃い、下院はその名の通り「労働者と兵士の議会」として高度な独立した権限を持っているのである。

これは革命の美風といえば聞こえがいいが悪く言えば【将校と兵士は別の世界を築く】という軍事的な風習を維持したまま革命の大義と軍の在り方を両立させるための妥協といえる。つまりは上院は地方行政の代表であり、下院は労働者と兵士の代表（国家行政経験者は立候補できない）という奇妙な風習があるのだ。

「だがまあそれはいい、今更だ、革命防衛連合とどこを組ませるかだ」
革命防衛連合はこれまで幾度か名前を変えている（最初の創設時は革命労兵党であった）が建国から5世紀もの間、その多くの期間を（ダ

ゴン会戦までの大平の200年においては分裂し、野党となることもあったが）与党として過ごしてきた。

包括政党として党内の派閥を調整し連立を組む政党を変える事で人民元帥ごとの姿勢に迎合し続けてきた。軍のアスカリと労働者達によって創立された政治運動組織が母体であり、ナイナーニエン一派排除と臨時政府組織の主導をしている。

彼らの政治的役目は大衆と人民元帥の間を取り持つことである。選挙前に「立候補者名簿すり合わせ」が行われるようになっており、労兵評議会において第一与党として人民元帥を輔弼しながら要望を伝える権力機関となっている。

「鉱工連盟ではいかんのですか」

カイレと最も懇意であるのが宙間鉱工連盟だ。古参政党でありナイナーニエン排除の際に同調したヴァンフリート鉱工業や宇宙空間資源開発業を運営してきた非黒人系技術者達が中心となって設立された中産階級政党だ。（数百年を経てとつくに混血化しているのだが）

その為、カイレの出自と経験から革命防衛連合と共に宙間鉱工連盟から厚い支持を得ている。

「無難ではあるがハイネセンとの距離を強調したい」

人民元帥は平和な内においても国家元首として存在し続けた。その理由は多岐にわたるが銀河連邦臨時政府の継承が対外的に意味があったこと。更に産業、教育、社会体制において軍の存在があまりに大きかったこと。そしてヴァンフリート民主共和国はその建国経緯、立地条件、産業構造からして軍隊は不可欠であり、軍隊を包括する外交が常に問題として付き纏う為に強力な統率者が必要であったことだ。

「アレらは今期で随分美味しい思いをしたからどうであれ議席は伸びる。今は放っておいても良からう。過度にバート・エリートに媚びても碌なことにならないが情勢次第で外交方針を考えねばならぬ。だから貴様の意見が欲しい」

ヴァンフリートにおいて常に付き纏うのが「食糧」の問題である。死を偽装して逃亡しヴァンフリートに逃げ込んだ自派閥の部隊数千隻を糾合し臨時政府を立ち上げたナイナーニエン元帥は食糧自給率が著しく低いヴァンフリートからの脱出を願い、まず最初に農業に特化したティアマト地域を制圧しようとした。

これに怒り狂ったのがパランティア企業理事会とエルファシル自治評議会である。航路の要衝であるアスターテにパランティア企業連合はエルファシル自治評議会と連名で「通商航行の自由を確保する為の警察行為」を宣言。ケレブランド連合を中心とした艦隊を派遣。

交易封鎖による物資の窮乏と工作部隊の支援を得たアスカリの蜂起によりナイナーニエン一派は壊滅したのである。

つまりと彼らは食料の調達と外交に失敗し、滅びたのだ。

勿論、現在は状況が違うが経済は少なからずは国防委員会との委託に依存し、更に文字通り経世済民において「交戦星域」間で相互に依存しあっているのが実情だ。

人民元帥という立場に権限が集約される理由はこうした対外的な対応に指導力が求められたからという一面もある。

であるが故にヴァンフリート人民防衛軍は（他の構成国軍でもそうだが）とくに将校が同盟軍に出向することへ力を入れている。鉱工業の輸出に星間警備、他国とのコネクションはこの国の経済を回す財産として特に価値が高いのだ。

「であれば革命プロレタリア総同盟か、市民共和党か——ヴァンフリート主権擁護連合になりますね」

労農連帯党系列の最左派にして最タカ派を行く革命プロレタリア総同盟。

同盟政府のロビー団体ともいわれる自由主義政党的市民共和党か、あるいは銀河連邦臨時政府の立場を利用し同盟懐疑派を名乗る対同盟自主路線のヴァンフリート主権擁護連合か。

同盟政府と対峙する為に左派大衆主義へ傾斜するか、同盟政府に好意的に接し利益誘導を図るか、あるいは独自路線を打ち出し政府への攻勢を強めるか。

利益を引き出すと単純にいつでも方法はそれぞれだ。独裁者であるかのように言われながらもヴァンフリート国民と同盟国民という漠然とした概念の機微を読み取ろうと必死になっている。

「貴様はどう思う」

人民元帥は重々しい口調で同盟弁務官たる中將を問い質す。

「……そう、ですな」

ルンビーニ事件の追及、軍の動向、そして今日わざわざ出向いた同盟軍大将。

イロンシは改めて“我らが最高指導者”を観察する。彼は無感情な瞳で自分の姿を眺めている。

モハメド・カイレの任期は後5年だ。彼は既に在任7年目、2期12年務めあげれば代替わりをするのが慣例だ。そして自分の任期も後5年。この一致が彼が自分を呼び出したことに関係があるのだろうか？ 畜生、きつとこれは余計な雑念だ。

——さてどうこたえるべきか。

「私はまだ答えを出すのは早いかと思います」

早口にならぬよう、遅くもならぬよう、意識して発音する。

「それは何故だね」

「まず、明日ですがこちらにマスメディアを呼び寄せたのはまず間違はなく国防委員会、トリユーニヒト委員長、あるいはシトレ本部長です。

その根拠は7月に統合作戦本部長の任期が切れ議長指名人事の承認が必要であること、もう一つはそうである以上、そろそろイゼルローン攻略作戦か安全保障政策について大きな発表があるはずです」

「うむ」

「そしてもう一つ、ルンビーニの重大事故について裏で疑獄に至る可能性がでています」

「ほう」

人民元帥は眉をあげた。興味を示したのであれば、とイロンシは頭に叩き込んだ情報を吟味しながらアウトプットする。

「同盟軍も当然それはつかんでいる筈です、救命活動に動いております」

したので。遠からず、委員長は辞任し、委員会の政務委員も宙間交通の担当が入れ替わるでしょう」

「そうか、そうか、そうか」

モハメド・カイレの目に一瞬熱が宿った。情報交通委員会は星間航路開発を一手に担っている。【交戦星域】でなくとも注目するのは当たり前であるし、戦場清掃や航路保安を収入源としているヴァンプリートであればなおさらだ。

「ホアン・ルイはいまエルファシルにいます、彼がこちらで動いているという事は何か労農連帯党も掴んでいるのでしよう」

イロンシは同盟弁務官としても定められている情報をつなぎ合わせてロジックを紡ぐ。合格点を得られなければどうなるのか、という恐怖を押し殺しながら。

「年明けの同盟下院選挙、既に水面下で動いています。我々も明日の大將閣下が何を仕掛けてくるのかを探るべきです。そしてそれが誰なのかを。シトレの裏にレベロが居るのか、あるいは別の何者か。もしくはヨブ・トリユーニヒトか、さらにその裏にサンフオードかカーティスがいるのか」

イロンシは、内心では汗が流れぬよう顔色が変わらぬように祈っていた。軍の部隊を率いて兵士らの命を預かるのとは違う、何が正しいのかもわからない政治の舵切りを今、自分は献策している。

最高指導者の視線はイロンシの皮膚を透かし、その中を覗こうとしているかのようだ。

最高指導者はよろしい、と頷いた。

「ああいいだろう、参考にしよう、下がれ」

イロンシが敬礼をし、執務室を出ようとすると彼は既にほかの幹部を呼び出す為か通信機に手をかけていた。

部屋を出ると溜息を吐いた、いつの間にか息が詰まっていたようだ。

——なるほどモハメド・カイレ閣下は紛れもなくこの国の最高指導者である。本来なら人の居住など考えられない何もかも不安定な星系に暮らし、敵の侵攻に備え、遠く遙かなバーラトに神経を張り巡ら

せるこの非現実的な国の——自分は後継者として名乗りをあげるべきなのだろうか。

第10話アスカリの持ちたる国くヴァンフリート民主共和国く（下）

「ああ、そうだ。すまないが出征には立ち会えないよ、だがヤン提督とお前の手助けになるかもしれない、まあそういう意味もある」

「——いやいや、流石にそのようなことはないさ。これは政府と軍首脳部が決めたことだ。」

ロボス閣下もトリューニヒト委員長も同盟が滅べばよいだなんて思っているわけではないさ」

「上手くいかないと思っているからこそその親切だつて？」

ハハハハハ、作戦の前にそれだけ言えるならお前も立派な同盟軍人さ。それなら彼らの鼻を明かしてやれ。ああお休みフレデリカ」

「——さて」

娘との通信を切ると、グリーンヒルは宿泊しているホテルの窓から外を見る。

小惑星をくりぬいて作られた『マンデラ』に夜はない——わけではない（マンデラ標準日時に合わせて照明が調整されている）がその喧騒はやむことはない。

解体が行われている区画から離れていようと今度は軍將校達が昼夜交代で動き回っている。

エル・ファシルで妻と出会ったのが切欠だった。ハイネセンで勉学に励み、中央官庁と正規艦隊レギュラス・フリートとを往復していた自分が【交戦星域】の住民と顔を合わせるようになった。

性格の合わないロボスと組む事もそれが原因であった。彼は幼少の頃に両親に連れられ亡命した母が住まうアルレスハイム王冠共和国で生まれ、両親の仕事の都合でハイネセンに転居している。

出会った経緯から【里帰り組】とあだ名されたことで妙な結束ができてしまった気がするな、と苦笑する。そして——地方駐留艦隊を経験した者達や構成国軍と意見を交換するようになったグリーンヒルは独自の人脈を築き上げた。

中には士官学校卒業成績で主流から弾かれていても“使える”人材も居た。

大将となり、艦隊司令長官となったロボスはグリーンヒルを総参謀長に指名した。ハイネセン育ちの穏健派でありながら地方出身者と縁が強く【交戦星域】との交渉に強いグリーンヒルが統合作戦本部の宇宙軍担当次長となる事をシトレも歓迎した。

グリーンヒルは二人の上官に望まれた通りの仕事を成し遂げた、【ロボスの演習計画】は構成軍、警備艦隊と正規艦隊との合同演習や任務支援を年間を通して行うことで密接な情報共有と連携により通商破壊部隊——正式に言うのであれば貴族が雇った【傭兵】や非主流派平民将校の【私掠部隊】——の駆逐に成功したからである。

望んだ昇進は叶った。だがその理由は皮肉なことに本人が望む艦隊決戦ではなく組織運営者として評価されたことであつた。彼の昇進は珍しく【民主主義の縦深】労農連帯党右派と自由党系会派に国民共和党の地方党人派という対立の多い3会派の合同推薦によるものであつたのだ。

【交戦星域】！ 自由惑星同盟軍の兵にとつては身近な存在であり、将校達にとりある者にとつては粘り強い交戦対象でありある者にとつては轡を並べる戦友でもあり、そして何より庇護対象である。

自由連邦主義者にとつては『社会正義』と『不平等』の板挟みであり逃れえぬ呪縛である。社会民主主義者にとつては救済の対象であり、同時にお荷物である。

「問題はイゼルローンなのだ」

そして、ハイネセンを中心とした首都圏では【見ず知らずの星】に死体を放り出された者達の遺族が悲しみに打ちひしがれ和平を求めている。だが、平和主義といえは聞こえは良いが講和の目途は立っていない。当たり前だ、そもそも我々を国と認めては帝国の名分が成り立たない。それに対し実質的には【交戦星域】の者は土地を捨てればいいのではないかと言っている者達がハイネセンには増えている。そしてそれを公然と『善政』であるかのように言う者も。

「棄民ではないか、それは——」

アスターテの者が何故船団に乗りながらアスターテの周囲を巡航しているのか。ヴァンフリートのアスカリ達は土地ですらない、小惑星コロニーに暮らしている。アルレスハイムはゴルデンバウム朝に制圧されたら殺戮の対象になる者はいくらでもいる。エル・ファシルとてほんの7、8年前に本土を失陥したばかりだ。それでも――

「彼らはここで暮らしているのだ」

【交戦星域】の者達は経済的にも国防としてもバーラトに依存しなければならず、『バーラト・エリート』に複雑極まる感情を抱いている。そこにそうした反戦運動がバーラトで主流派を占めた場合は――

「シリウス政府は搾取に耐えかね、最後には首都であった地球を虐殺した。そしてスラムを潰す為に農奴を作ったのはルドルフだ。そしてそれを支持したのは荒廃した辺境から流れてきた流民が作るスラムと犯罪に耐えかねた都市部の市民達だった。――我々はどうなのだ」

同盟は民主主義国家だ。だが数の暴力で少数派を切り捨てるとしたらどうなるのだ――妻が眠る土地を――同郷の者を兵卒たちが無理矢理引き剥がし、永遠の別れを告げさせるのか――？

「いかん、いかな」

意味のない仮定だ。なによりも自分も娘達が行う作戦が失敗すると端から決め込んでいるようではないか！

グリーンヒルは大人しく酒でも飲んで寝ようとルームサービスのリストを手取るが――

「……アラックにマルメカヤにバナナ・ビール」

地酒面してるけどここで育てるの相当大変なんじゃないか？と新たなこの国の謎を見つけてしまったグリーンヒルであった。

「……タピオカミルクティーもあるのか、まさかキャツサバをここで育てているのか？」

・
・
・
ヴァンフリート議会はそう大きくはない。少なくとも同盟議会と

比べると華やかさと壮大きさに欠けている。そしてその代わりに簡素と無骨という形容が相応しいだろう。

そして同盟議会と異なるのは議員達が一様に浅黒い顔をしている事だ。シドニー・シトレ元帥をはじめとして同盟政府内の高官にも肌の色が濃いものはけして少なくないが——やはり異国情緒、という点ではグリーンヒルにとっては自分が異質な“余所者”であることを強く意識させる。

だがそれでも——グリーンヒルは訴えかけなければいけないのだ。自分は余所者ではなく、彼らも“余所者”ではないのだと。たとえばそう信じない者がどれほど居ようとも。

民主主義において正義である多数派を無視しようとも、だ。

グリーンヒルは深呼吸をすると演台から降り注ぐ目線に微笑を浮かべ、一礼を返す。

「モハメド・カイレ人民元帥閣下、人民元老院議長閣下、労兵評議会議長閣下、ヴァンフリート議会の皆さん、そして傍聴に御足労いただいた皆様、この宇宙歴796年の4月26日に両院議員諸賢が小職の為にここで皆様にお話をさせていただく機会を設けてくださったことに感謝いたします」

メディアのカメラに視線を向けるが意識しないように努める。

「まず最初にこの度のアスターテの戦い、そしてこの157年間続く専制主義者の暴威に晒され星の海の中に眠る無数の人々に向けて祈りを捧げさせていただきたい。

彼らはサジタリウス準州と同盟の国父ハイネセン達が共有する価値観、即ち市民の自由と開拓精神から発展した自由惑星同盟という国家の在り方を尊び、そして故国で育まれた自由市民の精神に従い、勇気を示し銃後の暮らしを守ってくれたことを遺族の方々にお伝えします。彼らの強靱な精神が銃後の人々を守ったのです。そして彼らは勇敢に務めを果たし、帰郷の途に着くのです。どうか皆様もお祈りください、彼らの信仰に叶った安らぎがあらんことを」

目を閉じたグリーンヒルの胸が大きく動く。

「さて、皆様。一つ、大きな戦いが終わりました。ですが未だ銀河中の市民は恐怖に震え、民主主義は守勢に立ち、民主共和制という人類が勝ち取った偉大な文明は危機に瀕しています。我々はこの150年の間、数多くの耐え難き苦しみと勝利の歓喜を味わい、侵略を防ぐ為に多くの市民が犠牲となりました。」

もはや我々は、専制主義者の奴隷に後戻りすることはできな
い事を知り尽くしております。

疲れ果て悲しみに耐えきれず、平和を求める者も一人として帝国の農奴になりたいと思っている者はいないでしょう。我々は平和を求める為に今はただ戦い続けることのみが必要とされているのです。

皆さん、人間は有史以来、常に平和を探し求めてきました。国家間の紛争を防止する、あるいは解決する国際的手続きを創り出す為に、様々な方法がこの長い歴史を通して試みられてきました。個々の市民に関する限り、我々はその答えを知っております。そう、友愛、調和、そして忍耐と対話により、我々はこれを黄金律とし、友好の輪を築き上げるものです。

しかし国家間の争いでは一度も永遠の平和が達成されることはありませんでした。地球統一政府、シリウス政府、銀河連邦、これらは全て平和と平等を求め、そして破綻し、戦争と虐殺を引き起こしてきました。

ですがそれでも、いいえ、だからこそ我々には民主共和制と議会主義が必要なのです。

我々がこれを放棄し、絶対的な指導者に頼ろうとする時にこそ、破滅的な暴虐が再び私たちに到来することになるでしょう。

先達が失敗したのは統一政府において利害の対立の解決を専制と暴力によって解決しようとしたからであります。そう！オーデューンに巢食う専制主義者達のごとく！」

張りのある声は彼がただ物静かな参謀ではなく、第五次イゼルローン作戦で兵を叱咤しかの要塞に肉薄した艦隊司令官の一人であることを多くの者達に思い出させた。

「我々の専制主義帝国に対する優位は軍事のみならずそれを支える社

会的優位でありましょう。我々の優位は国家を構成する一人一人の市民の精神に由来するものであり、それは私たちの比類なき過去2千年にも遡る科学、芸術、文学、そして物質的で文化的発展を支えてきた自由精神の前進にあります。

自由惑星同盟を構成する諸国民は出自の違いを乗り越えた新たな自由な国、分け隔てなく互いに尊重し合いながら共存する共同体の集合体として自由惑星同盟を発展させてきました。私たちの父祖による圧政からの独立、そしてそれを死守し続けてきた歴史もまた分け隔てなくこの国に暮らす全ての人々に受け継がれているのです。

だからこそ、我々は共有する価値観により団結した人々により社会的な優越を勝ち得ている事に疑念を持ちません。

私たちが、この銀河に住まう人類を救う際に用いる国家の総力とは物質的な実力のみならず私たちが受け継いできた独立の歴史、専制主義から抜け出した記憶、民主と共和を尊ぶ精神をも武器とすることで勝利するのです」

「自由惑星同盟という国家が銀河帝国に優越する要素の一つとして、慈愛深い国民、同胞愛を抱いていることは疑いの余地がありません。

しかし我々は、専制主義が引き起こす侵略行為に対してその慈愛深い心を向ける事はないのです。

国内問題についての我が国の政策が、われわれの国内にいる多様な人々の権利と尊厳に対する適切な敬意と民主共和制という社会正義に対する信仰に基づいているのと全く同じように、我が国の安全保障政策は、大小を問わずすべての国の権利と尊厳に対する適切な敬意とそれを脅かす敵へ屈しないという強固な精神に基づいております」

そうだ！そうだ！とヴァンフリートの議員達が喝采をあげる。モハメド・カイレも満足そうに頷いている事だろう。

ここまでは良いのだ。自由惑星同盟軍と「交戦星域」の利害の一致を確認しているのだから。

「そして我々のその強固な精神は絶対的な正義——即ち普遍的な人権と自由の擁護を一人一人の兵士が市民として理解しているからであります。そうであらば、最後には勝利が齎させるのは必然となるので

す！」

「そうだ！と見るからに下士官上がりの議員がこぶしを突き上げて
いる。」

まるで巡航艦隊を指揮して突撃する時のようだ、とグリーンヒル
まで若い頃を思い起させた。まあいい、この演説の内容だ、やるのなら
とことん青臭い頃を思い起こしてやろう、と調子に乗る、という50
を越した高級軍人には些か必要な戦度胸を奮い立てる。

「自由惑星同盟の歴史が始まった時から、我々は絶えず変化を押し進
めてきました。それは専制主義が残した傷跡と戦う永続的な平和革
命に他なりません。それは、着実に進むゴールデンバウムという腐
敗した木を切り倒す為の革命であり、その為に我々は武器を作り出す
かのごとく、労働と知恵で暴君から奪われたものを少しづつ作り上
げ、社会の傷を癒してきました。」

そこには我々の国父達が逃れてきた強制収容所も、逃走を阻む衛兵
も必要ありませんでした。我々が追求する社会は、自由の旗の下で自
由の民たちが、友好的な文明的社会を力を合わせる築き上げる姿その
ものであります。それこそが今、この時に我々が戦う理由なのです」
青臭い、ニヒリストが腹を抱えて笑いそうなことである。だがこれ
もまた【交戦星域】にとっては笑い事ではないのだ。

「我々は人類の普遍的な自由と権利を搾取するルドルフの残骸から同
盟市民と帝国の虐げられた人々のもとに取り戻し、真の自由と対話に
より築かれた文明をこの銀河に産み落とす為に戦っているのです。」

我々が希求する世界は、皇帝を僭称したルドルフとその走狗たちが
虐殺と恐怖によって作り上げたオリオンに根差した専制主義が生み
出す病巣のまさに対極にあります。

かの如き圧政に対して、我々は偉大な概念で対抗するのです。優れた
理念により作られた社会は、人類支配の企てにも恐れを抱こうとも対
峙することができるのです」

息が詰まった。いよいよだ、いよいよこのほらを吹くときが来たの
だ。“キングフィッシュ・ヨブ”が責任を逃れたのか、“シトレ校長
先生”が賭けの負の面を押し付けたのか、“ラザールの親父”が見栄

を張っていつちよ噛みしようとしたのか。

いやどれでもいい。エルファシルの魔術師の前座であろうとこのステージに昇ると頷いたのは自分なのだ。

今のこの時だけは——自分の物語だ。

「そして——」

声がかすれた。咳払いをする

「失礼、そして——私は、自由惑星同盟の歴史で前例のない時期に際し、このヴァンフリート議会という場を拝借し、皆様に自由惑星同盟軍についてお話しする機会をいただけたことに感謝いたします。

【前例のない時期】 という言葉を使うのは、自由惑星同盟の安全保障における重大な脅威について【根本的な解決】がいよいよ訪れる時が来たからであります」

議事堂のざわめきの質が変わった。ああそうだろう、端末を叩いていたメディア席の記者が弾かれたように顔をあげたのが視界の端に映った。

だが今、自分の眼に映るべきなのは違う、アスターテに送り出した兵だ。自分が率いてイゼルローンの砲座にミサイルを叩きませ、無人艦の為に死んだ若者達だ。

「自由惑星同盟は、その運命を数百億もの自由な男女の自由意志に託してきました。そして意志にも基づき多くの男女が軍服を着、死地に赴き国土と自由を守ってきました。

彼らが守り、そして我らが守る自由。その意味は明白であります。あらゆる場所で全ての市民の人権が至上であることを意味するのです。

我々はごく当たり前の人権を全ての国民が維持するために、侵略者を打ち倒す為に、我らは軍を築き長く血を流してきました。

われわれの強みは、われわれの目的の一致——即ち自由の勝利という至上の価値観を共有しているからであります」

本当にそうなのかはどうでも良い、美辞麗句だろうとお題目を信じなくとも信じているかのように振舞うからこそ。人間は平等に生きることが出来るのだ。ああまったく政治というものは！

「そして自由の勝利した銀河を見ることが出来るのは遠い彼方のことではないでしょう。我々はこの半世紀の間脅かされてきた安全保障上の問題を解決し、一つの節目、この銀河において自由が勝利する偉大な足掛かりとなる偉業を成し遂げるでしょう。」

我々はアスターテにおける戦いで傷つきましたが、それを乗り越える大いなる作戦は既に実現の準備に入っております。

この796年にこそ、我々は専制主義の侵攻手段を破壊する大攻勢をおこなうでしょう！」

だから——今自分が話している事もこの瞬間は真実となるのだ。同盟全土に中継され、何名かを介してフェザーンにも届くだろう。そしておそらく、イゼルローンにも。

「そう！攻勢ではありません！大攻勢であります！そして我々は先人達が挑んだ戦いは！おける犠牲は！けて無駄ではなかったこと証明し、皆様にご覧いただける事と確信しているのであります！」

そしてその時にこそ同盟軍は皆様と共に大きな一つの節目を迎える事と確信しております！」

ありがとうございます、ありがとうございました、ありがとうございます」

ざわめきながらも万雷の拍手が響き渡る。

そして宇宙軍大将ドワイト・グリーンヒルは深々と一礼をした。

マスメディアには常の丁重な紳士としての顔でノー・コメントを貫き通し、D・グリーンヒル大将は盤古に乗り込んだ。

『4月27日、第13艦隊は半個艦隊規模の総力を引き連れて結成後初の大規模演習の為にハイネセンを出立した。』

この一文にマスメディアの記者達は『偶然ながら』とつける事はしなかった。

D・グリーンヒル大将の演説は彼らを含めた大規模な第七次イゼルローン攻略作戦が行われる予告だろう、と多くの者が受け止め、誰もそれを滑稽な飛びつきだとは考えもしなかった。

少なくとも2週間ほどは。

第11話分かれた家々ティアマト民国（上）

さて、このたび、舞台となるティアマト民国に現在国土は存在しない……という誤りである。

正式には『同盟政府による無期限の避難指示』が敷かれたままである、だがそれが百余年もの間間断なく続くとなれば現実政治も建前ではなく実態に追従するのは当然のことである。

ティアマト民国の成り立ちは同盟構成邦の中でも最も古い部類である。銀河連邦末期の混乱とルドルフの粛清の余波で失われた植民地【サジタリウス準州】を構成する農林水産、すなわち一次産業に特化した惑星であり、二次・三次産業の中核都市を目指す企業連合が取り仕切るパランティア、宅地開発と開発の運輸・行政拠点となるはずだったエル・ファシルと関係が深かった。

銀河連邦本土たるオリオン腕から当時発見された唯一の航路、難所であるイゼルローン回廊の向こうにある【サジタリウス準州】の開発を任された企業家達は意気軒昂たるエリート揃い——だったわけではない。

肥大化し統治が行き届かなくなった銀河連邦において新たな土地は福音ではない。財界における新規開発地への派遣とは、熾烈な権力闘争に敗れ、事実上の流刑に処遇であった。

辺境の治安悪化により寸断された流通と事実上放逐されたに等しい待遇からか、彼らは【独立経済圏】の構築にひどく熱心であった。海賊（大半は銀河連邦軍や地方自治体治安軍の軍閥崩れや企業の私兵達）と取引を行い、産業の多角化を目指していた。

ティアマトもそのニーズに伴い一次産業のみならずバイオ産業の一部を引き受けるまでに成長した。

やがてルドルフ政権の大粛軍と地方海賊の大掃討作戦による混乱で脱走兵や海賊が雪崩れ込む頃にティアマトは、【サジタリウス経済圏】の要地にまで成長していた。

だがルドルフの狂乱と時期を同じくして発生した【ナイナーニエン危機とヴァンフリート革命】による孤立したサジタリウス腕における

初の大規模軍事衝突の危機とその後の相互不信による停滞期を迎えることになった。

それを打ち破ったのは「偉大な詐欺師」グエン・キム・ホア率いる【ピューリタン達】であった。彼らはサジタリウス準州の要人たちに【居住地開拓支援】を求めながらも、勢力均衡の打破を目論む彼らの複雑な政治的駆け引きを掻い潜り、サジタリウス腕最奥のバーラトに入植し、意図的に【広大な未開拓地】を作り出した。

グエン達は帝国の脅威を見据えつつ井戸の中で不毛な駆け引きを続ける蛙達に【広大な需要】を作り出したのだ。それにより引き起こされた狂乱的サジタリウス腕の開発を支えたのは間違いなくティアマト民国の強固な一次産業が生み出す食糧生産力の賜物であった。

ダゴン星域開戦以降の亡命勸奨工作の成功による【狂乱の20年間】で同盟の国力はさらに飛躍し、人口の増大と工業化はティアマトの一次産業をさらに豊かにした。

だがそれを打ち砕いたのがコルネリアス1世の『大親征』であった。緒戦の水際防衛において同盟軍の大敗を見た彼らは帝国軍の収奪を危惧し、ある者はバーラトなどの奥地へ、ある者は難所に要塞群を連ねたヴァンフリートへと身を寄せることになった。

帝国軍はサジタリウス腕最奥の首都バーラトまで迫る勢いで優勢であった。コルネリアス1世は優秀な作戦家であったのは疑いの余地はない。だが後背でおこる熾烈なゲリラ戦は後方連絡線を脅かし、陸上戦力やら補助艦艇やら無尽蔵の浪費を予備選力を担う門閥貴族に強いていた。

有力な学説として「コルネリアス1世は元帥号を多くの側近に授与し、登用することで既存の皇族、広大な門地をもつ門閥を中央官界から一掃することでルドルフ時代の中央集権を成し遂げようとしたのではないか？」と分析されている。

仮にそれが真実であれば、こうした消耗戦すらもカイザーの目論見の通りだったのかもしれない。だが貴族達の忍耐は新興の【元帥杖を持った腰巾着】の指揮において戦果（私掠）の見込めぬ軍事出費を強要されることに耐えられなかった。ましてやこれが彼らの弱体化を

目論んだ策であると囁かれるようになれば——彼らは政治的、そして軍事的実行力をサジタリウスではなくオーデインに向けて捻出したことで、大親征は銀河帝国においては、カイザーの権限が大幅に削られる形で終結した。

——閑話休題——

一方、自由惑星同盟においては経済・人口の両面でバーラト一極化が進んだことと、戦時体制の構築による【同盟政府】の強化により130年近く続いている自由惑星同盟の国体が成立することになった。

だがバーラトが笑えば泣くものも当然居る。とりわけ現在の【交戦星域】は悲惨であった。アルレスハイムは事実上の寡頭制であったところに熾烈な国家総動員戦争で高まったプロレタリアの政治意識に社会体制が追いつかず、革命騒ぎが起こり、時の同盟國務委員長（同盟弁務官総会議長）が介入する事態となった。

そして、アスターテとティアマトも甚大な被害を受けた。彼らは以後も交戦地域となることが確実となり、アスターテは国家の喪失を恐れ、植民船団への定住化を進め。

ティアマトは基幹産業であった食糧生産のため、アスターテ、ドーリア、エラゴン、バーラト——各構成国の農業開発区域に『自治領』として仮住まいをして避難民の受入と永住化が進められた。

例えばサムマラート・アシリアはティアマト民国選出の同盟弁務官であるが産まれはアスターテ連邦共和国と言った方が同盟市民の大半には通じるだろう。

彼女はティアマト民国自治領にして“重力制御植物工場農法”の一大拠点、『ニムルド・コミュニケーション』で生まれ育った。

彼女は今もニムルド・コミュニケーション旗艦の同盟弁務官事務所で行っている。別の船団コミュニケーション旗艦に座すアスターテの同盟弁務官リヴオフを睨みつけながら。

「じゃあなに？イロンシ達も何も知らなかったってこと？」

リヴオフは俺を睨みつけてもなあ、とぼりぼりとこめかみを搔きながら答える。

『ああヴァンフリート側でもあれは予想外だったようだ。イロンシも

対応に追われている』

ヴァンフリートまで混乱しているのは昨日の『ヴァンフリート演説』が理由である。

軍首脳部の彼が明確にイゼルローン攻略を断言したのは異常である。

「……何を考えているのかしら？」

『わからん、ドワイトの野郎が独断でやったわけはねえが』

リヴオフすら頭を抱えているのは異常事態だ。

「……【バーラト・エリート】の陰謀、か」

バルプ本みたいで笑えるわね、と肩をすくめる。「キングフィッシュ・ヨブ」、【シトレ校長先生】【ラザール親父】——誰をとつても曲者ぞろいだ。

さてな、とリヴオフは剽けて肩をすくめる。

『だが目的は割れている。選挙だ、であるならお前さん達【ティアマト人】の選挙には支障があるまいよ』

「それはいいんだけどね……」

来年の頭、つまり同盟総選挙　それでも彼らの中には4年に一度の自治領協議会（立法院）総選挙の際にティアマト本土へ赴き投票を行うものが投票者の中で数割を占めている。

アリシアはそうした人々を中心に支持基盤を持つ右派国民党政党『ティアマト帰郷連合』の幹部である。

「バーラトの連中が何を企んでいるのか探らないと後手に回ればトリューニヒトにまたしてやられるかもしれないわよ？」

トリューニヒトは派手な空中戦が持ち味だ。出世が早かったのも地方政党の寄り合いであった国民共和党に官僚や著名人を引き入れた【中央派】派閥を作り上げた一人だからである。そのため、土着層が多い上院の基盤は弱いが下院を左右する【同盟の空気】のコントロールについては一級品だ——とはいえ肝心の本人は有力候補をぶつけられて『得票率4X%』の大接戦で当選を続けている。

『ハインセンに戻ったらロムスキー先生とリッツ教授とも相談せねばならんな。イロンシも探りを入れているが……』

本人の危機感が強いだけに国防委員会として派手な功績が欲しいのは間違いない。個人選挙の弱さを笑うのは二流だ、150億の民意を見極める屈指の政局屋が常に選挙前に窮鼠となるのはどれほど恐ろしい事なのか、とくに交戦星域の利益代表達は考えなければならぬ。

「本気でトリユーニヒトとシトレが手筈を整えているのなら本丸は難しいだろうけどね」

うむ、と【提督】の顔つきに戻った老人を見てアリシアは顔を綻ばせた。

『であろうと俺を出し抜こうとするなら年季の違いを教えてやるさ』
「らしくなってきたじゃない、そちらは提督さんに任せます」

彼女にとつて今は同僚であるが若い頃はまさしく故国から排出されたエースであった——と言うのは半分本当で半分嘘だ。実際は女性労働問題に取り組む若手弁護士アリシアと艦隊兵站の顔役であったリヴォフ提督はギャンギャンと契約に向けた舌戦を繰り広げていたのが本当の姿である。議会上つてからは“現場を知らない理屈倒れの小娘”と“どうしようもない保守を気取った時代遅れのタコ親爺”が右派と左派にいるのだからなんともはや、である。

「お前さんも頭が切れるんだから何かしら考えてくれよ、ではまた後日」

ミーティングを終えたアリシアを出迎えるのは情報収集担当弁務官補佐の班が収録し、メモを飛び交わす姿であった。

『昨日のグリーンヒル大将のヴァンフリート議会演説に対し、ヨブ・トリユーニヒト国防委員長は『個別の案件についてコメントは差し控えさせていただく。だが、我々は常にサンフォード議長と意見を交換し、シトレ本部長と共に必要な改革を進めている』と発言いたしました。シトレ本部長は『ノー・コメント』と——』

『エル・ファシル共和国のルイーゼ・ペイリン首相は記者会見においてグリーンヒル総参謀長の『ヴァンフリート演説』に対し、『専制主義者の侵略は同盟市民存亡の危機であり、その橋頭堡たるイゼルローン要

塞を陥落させることは何よりも同盟政府が優先するべきものである。我々はそれに協力を惜しむべきではない」と記者の質問に対し返答を――」

『アルレスハイム王冠共和国のハンソン首相は『ヴァンフリート演説』について首相声明を発表しイゼルローン攻略に対する着実な措置を求めながらも、その意義は全同盟市民の民生保護にある事を忘れないで欲しいと――』

『オリベイヤ学長、ヴァンフリート演説はどのような意図があつてあの場で行われたのでしょうか?』

「はい、ヴァンフリートをはじめとする【交戦星域】はこれまで常に軍と協力関係を結んできました。先のヴァンフリート会戦においてもセレブレツゼ中將の4Ⅱ2基地が奇襲を受けた際に人民防衛軍をはじめとした構成邦軍の活躍は記憶に新しく。この地を選んだメツセージとして――」

「どうかわかった?」

情報収集担当の政策秘書（税務官僚上がり）に尋ねる。

「ペイリン首相がいつもの調子、ハンソン首相は警戒、オリベイヤ学長はヴァンフリートを持ち上げていますよ」

ペイリン首相はエル・ファシル共和党を率いる保守派の女性論客だ。オリベイヤ学長は官僚や法曹界、政治家を数多く輩出してきた同盟自治大学の学長であり、最高評議会事務局参与を長く勤めている行政法学者である。

「オリベイヤ学長が……そう」

各構成共和国や同盟の公法の運用を知悉しており伝統的に立場の弱い同盟政府官僚団の権威を確立してきた男だ。

「軍首脳部だけではなくオリベイヤ教授までもが動いているのは政権の意向なのは間違いない、問題はその政権のどれほどか」

政策秘書も同意し、首をかしげる。

「変です、少なくとも議会といいますが、軍と評議会の外に出るタイミングは作戦決行の1月程度前ですよ」

そのタイミングであれば「事情通」の連中は何か行動がある事を

掴んでいる。アリシアの周囲であればリヴォフやイロンシはその筆頭だ。

「……イロンシはともかくリヴォフ老は私達に教えてくれるはずよね」

イロンシは同じ会派に属しているし気のいい男ではあるが【現役軍人】としてヴァンフリートに利がある機密情報となれば仲間内にすら喋らない。とはいえそれを責めるつもりはアリシアにはさらさらない。

下院議員は党派の理論に従うが、同盟弁務官——上院議員は良くも悪くも会派に属しても党議拘束はなく、国益に反するとなれば造反するのが当然のこととみなされる——があまりにもそれでは票読みもできず調整が難しいので会派単位でまとめるのが原則であるが。

その代わりに国家から支援を受け多くのスタッフを抱え調査や政策立案に行動する。便宜上——というよりも同盟憲章と共に構成国の法制において【構成共和国の特別職公務員】として位置づけられている。

イロンシも同様だ。地上軍出身であるがヴァンフリート将校はヴァンフリート民主共和国の行政を支配するエリート中のエリートである（たとえそう見えなくとも！）

彼らが同盟軍に出向し血を流すのはそうしたコネクションを欲するからにほかならない。

彼が築き上げた太いコネクションは地上軍から各構成国軍まで伸びている。それに帝国軍の置き土産に悩まされる【交戦星域】にとつてヴァンフリートは一種の社会インフラだ。相互に深く経済的にも対帝国政策としても依存している。イロンシが意図的に距離をとつていようと会派の仲間を蹴落とそうとするほど愚かでもない。【縦深】にとつてもイロンシは必要な人材であるし、イロンシにとつても【縦深】は上院で存在感を発するためにも、地域代表として交流を深めるためにも必要不可欠なものだ。

であるならば【交戦星域】に不利益をもたらすのであれば遠回しに警告のサインを送ってくるだろう。

リヴォフ老は艦隊兵站を4半世紀近く耕し、アスターテ政府の国防部門に20年近く籍を置き、国防委員会と宇宙軍にこれまた太いパイプを持っている。そしてきわめて単純に考えればイロンシよりも先に我らが世話役のリヴォフ老が察知するのが自然である、そして彼より先に察知できるのは——立案の当事者の一人だ。

「何か知っているとしたらホアン・ルイ——？シトレ本部長の再任に向けた動きを私たちに出してきたのって——」

——シトレ本部長とドーソン次長が酒を飲んだらしい。

そうだ、これはホアン・ルイの発言だ。彼はこのあとは一切発言せずリヴォフやリッツの推理にも何一つ発言していない。

——ドーソンとシトレが手を組んだ。つまりは情報部、憲兵そして統合作戦本部内局で何か動きがあった。軍政に関わることか、あるいは何かしらの機密に関わることだ。

そして普段は艦隊司令官が出向くヴァンフリートの【戦没者セレモニー】、これは搜索の打ち切りを意味するものでハイネセンでの【儀礼】が終わった以上、わざわざ軍の第三席が出向いてあのような演説をぶつ理由が単なる『景気づけ』なわけが無い、ホアン・ルイもその不自然さを感じ、探りを入れたはずだ。

「まさか私達はあのオッサンに一杯食わされた？」

アリシアの背を冷たい汗が流れた。

その警戒下であれだけ用心深いのに構成政府と支持者を回る我々に情報を漏らした理由は何だ？

グリーンヒル大将の演説の中身までホアン・ルイが知っていたかどうかはわからないが、厄介な面子が動いていることを察知していたからこそあの飄々としたベテラン政治家は何食わぬ顔で我々に向かって情報を流していた！

「……なぜかしら？」

ヴァンフリート演説を聞かせる為——否、どうであれ私達は【交戦星域】で軍中央が動くのなら耳を澄ませている。それをあのタヌキが知らないわけがない。

ちがう、だからこそだ。ご丁寧にルンビーニの件まで漏らしてきた

のはシトレの件に全力を注がない状況を確定する為であり、次の情報交通委員の面子への牽制、ひいては労農と【縦深】に利益を引き込むための手土産だろう。

労農からすれば我々は上院で協力関係を築ける貴重な会派だ。だからこそ、ここで我々が余計なことをしないよう、目先のルンビーニ事故調査と統合作戦本部長人事で進むべき餌を投げて我々の利益になりつつも現時点で深入りをできない状況を作ることと想定するべきか？

安全保障委員会において第七次イゼルローン攻略作戦における交渉が始まる前に上院の政局を固め、我々の選択肢を限定する——いや待て。

「第六次イゼルローン攻略戦は演習に偽装した奇襲だった」

議会においても予備費を用いた奇襲攻撃であり第五次とは打って変わり事後の知らせとなった。つまり二個艦隊の再建を予定した補正予算の予備費を利用し行えると仮定する。

なおかつ『大規模な攻略作戦を行う』と公共電波に流した理由は何か、ヤン・ウエンリーの第13艦隊の初演習に合わせたから？副官にフレデリカ・グリーンヒル中尉を引き込んだ上で父親が同じ日にヴァンフリートで大演説をぶった。

同盟軍の目的と実力と手段を全て想定しフェザーンへのリーク……違う——デコイの可能性……そうか！

アリシアは唸った。これだ、という確信を自身の直感がささやいている。

「来年の下院と最高評議会議長選からイゼルローンへの出兵を予想されていることを利用し、帝国と同盟政界に『情報戦』を仕掛けるつもりか！」

結論が出ない、断定できない、だが問題はそこにあると強気に明言する。それこそがこの騒ぎを企てた連中の目的であると仮定する。そして探ろうとする連中がその先に進めぬよう、防諜と情報管理のプロであるドーソンが情報を管制しているのだとすれば——

軍の機密作戦であれば議会への情報開示のタイミングすら問題に

なる。特にイゼルローン攻略作戦は同盟政界と軍部にとって頭の痛い問題である。【縦深】だけでなく国境付近の政治家達にとっては文字通り『目と鼻の先』の出来事なのだから当然政府は軍の動向に神経を尖らせ、議員達は国防委員会や制服軍人たちとコネクションを繋ごうとする。『政治家と付き合えば偉くなれる』という悪しき事のように吹聴する愚者がいるが議員達からすれば『政治家の意義と理解できぬ愚物が軍権を握る事こそが人材の払底なのだ』と主張すべきであろうし、それも一面の真実である。とりわけ防衛戦争であれば尚の事だ。

しかしながら制服軍人、特に機密を扱う者達にとってはその『コネクション』が腐敗と漏洩の元になる、というのも『軍人と政治家の付き合い』という民主国家の命題における別側面の真実である——。

「参ったわね」

とはいえここまで言い張るのであれば相応の勝算はあるのだろう。トリューニヒトとシトレのコンビとロボスがうまくやって見せることを祈るしかないか——アリシアは重いため息をついた。

「先生、そろそろ時間です」

別の秘書が機材の準備はできました、と促す。

「気が重いわね」

とはいえまだ推測だ、バーラトに戻り実際に調べて確信を得てから話すべきだろう。

今は——“故国”と相對する時間である

第12話分かれた家〜ティアマト民国〜（下）

ティアマト政府参事会——その実態は自治領を代表する政府参事——閣僚の合議体である。ティアマト民国の実態が自治領の連合体であるのならば必然として中央政府機構はあらゆる点において分権化せねばならない。

その象徴がこの政府参事会制度だ。

何しろ本土はイゼルローンから哨戒に出る帝国正規艦隊と貴族軍の私掠艦隊が跋扈し無人となった。そして自治領は文字通り星の彼方に点在しているのだから——だからこそ開催されるその半数はこのような形となる。

専用の端末をいじり、生体認証とパスワードを打ち込む。

「お待たせしました」

立体テレビジョンの向こうに見慣れた顔が映る。

「いいえ、時間通りですよ」「久しぶりだな、アリシア弁務官」

参事達がテレビジョンに浮き上がる。10数名いる彼らの過半数は中道右派政党連合、ティアマト帰郷連合の幹部だ。

左派の自治共同連盟は分離主義——というよりも分権派と自治領から各構成共和国への吸収合併派までの幅広い寄り合い所帯である。

1世紀以上もこの状態では致し方あるまいか、という諦観は少なからぬものが抱いているが交戦星域からバーラト首都圏までの歪なグラデーシヨンの“地域格差”よる対立はティアマト民国の散らばった自治領にも存在する。

「アリシア弁務官、アスターテの事後処理は落ち着きましたか？」

マンズホルト事務総長、ティアマト民国政府の官僚上がりの政府参事が尋ねる。

「こちらは落ち着きましたわ、報告は後程、フローニンゲンの方はいかがでしょうか？」

テルヌーゼンの屋内に設置されたフローニンゲン自治領はバーラト首都圏の台所を支えている近郊農業の一大拠点であり、ティアマトの行政を支える情報インフラの拠点でもある。

ティアマト政府の行政サービスは高度な情報化が進んでおり、情報交通委員会が改革のテストモデルとして支援していることから他の構成共和国からも注目されている——当の本人たちからすればそんなことはいいから本土を奪還してくれ、というのが本音であるが。

なるほど、と頷きマンスホルト事務総長——行政首班相当が神経質そうに時間を確かめる。

「皆様、定刻になりましたティアマト民国参事会を始めたいと思いますが——」

ちらり、と時計を眺めて舌打ちをした。

「まだ議長が——」

「やあやあ！諸君、すまないな、待たせた!!」

がつしりとした固太りの男が立体テレビジョンに出現し汗をぬぐう。

ヒューイ・タロット、全国選挙で勝利したティアマト帰郷連合盟主にしてティアマト民国の元首である。

「えー、始めましょう、タロット議長もいらつしやいましたので」

快活に笑う姿は気のいい地元企業の親爺さんといったところであるし、792年の選挙まではその印象は間違いではなかった。

この男は恐ろしいほど馬力がありタフな『ビジネスマン』である。農地持ちの実家を飛び出したかと思えばバーラトで怪しげな退役軍人たちをかき集めた興行をはじめ、そうかと思えばエル・ファシル共和国のアプス自治領へ渡り、食品加工業を立ち上げ、パフォーマンスがてら閉鎖的なヴァンフリートへ乗り込み、売り込みをかけるという根っからの派手好きなビジネスショーの達人である。

皮肉なことであるがティアマト民国という知名度を若い世代に知らしめたのはこの男の騒ネームバリューがしさによるところが大きい。

そして圧倒的な知名度と若者受け、そして『ティアマト・ブランド』の復活という手土産を旗印にティアマト主要産業、一次産業と食品工業界の圧倒的支持をもって、政治的な経験は一切持たないこの男は、3年前にティアマト民国参事会議長——すなわち国家元首となってしまうた。そして翌年の任期満了後も2期目は堅いだろうといわれ

ている。

「異議なし」「異議なし」

参事達に続き、自身もまた異議なし、と唱和しながらもアリシアはため息をついた。

彼自身の知名度をティアマト民国の政治家たちも利用してきた。名だけならまだしも、いつの間にか『ナシヨナリスムティアマト』意識の象徴として『実』が伴ったことはティアマト政界でも危機感を覚えているものは多い、その一人がアリシアである。

「いいだろう！それでは素晴らしいことに我らの新作、『キシヤルの麦』を利用した糧食はすでにアスターテへの納入が決まった！更に文化交流事業において観光資源としてアスターテからも指定を受けられる!!」

おお！と参事会の財務担当と産業開発担当が歓声を上げる。

「また一つビツクゲデツカイ取引が決まったぞ!!ティアマト・ブランドは銀河一だ！」

派手好きで突飛なことを言つて目立つ。遠慮も呵責もなしにビジネスでねじ伏せる。

理想化された開拓と飛躍の時代の合言葉、グッド・オールド・リバティ・ドリーム【古き良き自由の夢】の体現者、とすら受け止められた。

(直接的には) 軍も関わらず、ましてや帝国からフェザーン経由で入ってくる廉価な商品相手に“質で勝つ”ということすらも同盟市民たちの琴線に触れたのだ。

ティアマトの全土の選挙に勝つということは全国的な知名度を持つということに等しい——アリシアは軍の女性将兵の為の改革運動に携わり、女性弁護士として知名度を上げていた。

敵を打ち倒し、笑い、喝采を受ける。ああそれはよいことだ——政治でなければ。

政治とは敵を打ち倒すものではない。そうではない、【打ち倒した後】こそが政治の本領である。だからこそ終わりはないのだ、闘争は義務と人は言う、なれば闘争は政治の一過程に過ぎず、政治とは人の営みそのものである。

自慢げに成果と儲けを何に使わせるかをまくしたてるタロットを事務総長が遮る。

「……議長、議長」「なんだね」

打って変わって冷やかな目で事務総長を見る。彼はハト派として民生優先を唱えている、アリシア達にとっても政敵であるが——自治領の連合であるのならば無碍にもできない。彼も同じく帰郷連合に理解を示すことも少くないし、民生優先には他自治領のことも含まれている。

「君はティアマトのブランドと呼称するのがそんなに嫌なのかな？」

それならばこのティアマト民国参事会も気に食わないだろうな、それならば君の精神的苦痛をおもんばかり——」

頬を吊り上げ、声色が徐々に挑発的になってゆく。ティアマト帰郷連合の面子すら穏健派が露骨に顔をゆがめる程に攻撃的で排他的なモノが顔を出しつつある、

アリシアをはじめとする政治家達はそれだからこそ、彼は4年の任期をまもなく終えるというのに「議長」と呼ぶことにいまだに違和感を覚えるのだ。ティアマト民国は自治領の連合であり政府参事会は党派を問わず自治領の合議により運営されるべし。それは実態に沿った不文律である。

二大政党議員は「ティアマト民国」の重みの軽重で異論があらうとも自治領の重さを軽視することはない、この男を除いては——。

アリシアが咳払いをした、さすがにこれが続いているとティアマト帰郷連合全体の問題になりかねない。

アリシアは「ティアマト民国」の代表として上院に席を連ねている以上、ティアマト民国としての枠を重視するがそれと自治領の代表を「排除」しようとすることは話が違う。

「議長、よろしいでしょうか。事務総長は私の報告に時間がかかると申し上げたいのだと思いますが——」

タロットはにこやかな顔に戻り、アリシアに鷹揚に謝罪した。

「ああ、そうだった！すまない、すまない！それでは諸君らにアリシア同盟弁務官から——」

アリシアはため息をついた、これで大衆と財界からの人気が絶大だから性質が悪い。さて来年の最高評議会議長選挙、下院選挙にあわせて行われる我々の元首選、この男はどうせ二期目を狙うだろう、その頃までに落ち着けばよいのだが――

第13話船団の国々アスターテ連邦共和国（上）

通信の向こうにいるアリシアが姿を消す。

リヴオフはうん、と背を伸ばした。アリシアとは同じ星系であるが距離は離れている。

別の大型植民艦、アスターテ連邦共和国首都、あるいは総旗艦とも呼ばれる。ビュブロス・コミュニケーション旗艦『ビュブロス』の弁務官事務所。所にリヴオフはいた。

「……この案件はドーソンが実務を仕切っているのならば調べるよりも直接あたるほうが良い、考えることは彼女に任せておくか」

アリシアのことは若いころから知っている古なじみだ。彼女はやりの女性弁護士として鳴らしており、女性兵士の増加に伴い悪化したハラスメント問題に取り組んだことでティアマトの保守的な（すなわち反帝国で親軍的）女性票を固めて同盟弁務官にまで政治キャリアを積み上げた女傑である。

彼女は頭が切れる、何かしら策を考え付くだろう。

「ルンビーニはリッツ教授とエオウイン女史の専門分野となると——ふむう」

国家中枢に戻るまでは特にやれることはないな、と結論を出した。どの道、ホアンがこちらに情報を漏らしたのは選挙区への戻りの時を狙って行ったのだ。あれこれ考えても大してできることはないと思切っている。

あとは若いもんに任せるか、とリヴオフはにたりと笑った。

「弁務官として仕事をするか!!」

「おい！この後の予定に——」

「夜にアスターテ運輸・郵政労働組合の打ち上げを入れてます」

アスターテ事務所を取り仕切る公設秘書がにこりと笑って会釈した。彼はアスターテ最大の包括政党『接舷せよ、アスターテ』の生え抜きである。

ふむう、と鼻を擦る。

「俺はまだ何も言つてねえけどなあ」

「支持者回りは必要です、特に今は」

戦場になったばかりである、バーラトの事情を知るものが顔を出して安心させる、のは当たり前であるし、“リヴオフ”であればそうするべきだと自分でイメージを作ってきたではないか。

「そりやそうだな」

——陰謀、暗躍、工作、どうにもかまけすぎている。年を食つてもバーラトに長居すると影響されるらしい、リヴオフは頬を搔いた。

「助かった、悪い」

「アスターテ事務所を守る私の役目です」

すました顔であるが自慢げに鼻を引くつかせている。

気が利くし頭が回るが腹芸ができない、もうちよい修行させてから出馬だなあ、とりヴオフは評価を下しつつ、助かるよ、と笑いかけた。

・

・

アスターテは「交戦星域」ではあるがバーラトやらエル・ファシルやらテイアマトやらパランティアやら、あちらこちらからの入植で生まれた国である。

アルレスハイムに次ぐ新たな国の一つであり、元々はイゼルローン回廊周辺の各星域へつながる航路の要衝に位置する。

——ではなぜ開拓されなかったのか、といえば最初はテラフォーミングの費用を渋られたからであり、その後——即ち中央と関係を断絶した時点ではどこの勢力が開拓しようとひどく困る位置であったから、としか言いようがない。

“アスターテ会戦”は宇宙歴796年が初であるが、パランティアの企業傭兵やヴァンフリートの軍閥、果てはテイアマトのヨーマン宇宙騎兵にエル・ファシル・キャラバン警備隊の小競り合いや“事故”はアーレ・ハイネセンが訪れる前までは幾万とあったことである——そして現在では意図的に好き好まぬ限りは学ばれない歴史である。

グエンがバーラトに植民し、『広大な空白地』を作り出したことでようやくこの地に平穏が生まれ、植民と開拓が勧められたのだ。

そしてその立地からして元々、造船と流通業がメインであり——本土を失い、造船業が衰退しつつある今でも運輸は変わらず彼らの中心産業である。アスターテ運輸・郵政労働組合はアスターテ最大の政治団体でもありリヴォフの最大の後ろ盾でもあるのだ。

「よおー皆さん景気はどうだい」

リヴォフは70の半ばが近づきつつある老人である。迎える彼らも似たような60代から70代が大半である。——組合の役員であることさし引いても老人が多い。

「人手が足りないですね、仕事には困らんですよ」

「軍需物資の中継はいくらでもやりますからね、今回の戦災で手ひどい目に遭いやしたが」

巡航航路がズタボロになり運輸産業国家としては大打撃である。

「……外に出るやつもいますし、同盟軍に入隊したやつもいますんでな」

アスターテは——【交戦星域】全体の必要性に応じた結果であるが構成国軍としては金のかかる宇宙軍を重視している。

「船乗りが多いところは重用されるからなあ」

下士官になれば尉官よりも待遇はよくなる。現場の職人が不足しているのは軍も娑婆でも変わらないのが自由惑星同盟の社会的問題である。

「ウチはまあみんな船乗りですからなあ」

運航できるわけじゃねえだろ！などとゲラゲラ笑いながら酒を酌み交わす。

「親父の代から乗り込んだと聞きますがねえ」

へえお前の親父っていうといつだい、と聞く。

「30年前ですよ。イゼルローン要塞ができたせいでウチは本土の宇宙港でしたが居住人数が縮小され続けてきた……」

「今だと確か五千人ちよいくらいしかアスターテ本土には残っていないはずだな」

イゼルローン要塞のせい、というのは正しい。あれのせいで千隻単位であれば哨戒網や無人衛星などの観測をかくぐる可能性は0ではない、どこか常に警戒対象となるまでに跳ね上がった。強固な侵攻拠点があり1万隻以上の艦隊が常備兵力として駐留している、というだけでアスターテやティアマトには「喉元に装甲擲弾兵が戦斧を突きつけている」ようなものだ。

「宇宙港公社に勤めてたのかい？」

宇宙港公社はあるものは皮肉を込めて「国体」などと呼ぶが要するに船の整備や代替わり、輸出入や人の出入り手配を行うアスターテ連邦政府国防省外郭組織から生まれた公社である。

なぜ国防部門から生まれたのかといえば——元をただせば避難体制構築の一環として拡大されたものであったからだ。

「今ではこのコミュニンの一員できあ、俺だつて生まれた時は地が足がついてたけど浮足立って育ったもんさね」

アスターテは船団国家として知られている。元々は造船とイゼルローン回廊への流通（もちろん軍需である）の拠点であった。1000万トンの積載量を誇る大型植民艦を旗艦とした輸送艦群は見る分には壮観である（実際に観光資源としても利用されている）

だが長く暮らすにはあらゆる努力がはらわれていようと当然相応に不便であった。船団国家が生まれた契機も好き好んでそれを選んだというよりも複数の避難区域の運営や救援の都合、そして政治的象徴としての役割から政府機関を植民艦に移したのがきっかけであった。

いくなれば連邦の象徴としての船団であり、実際には平時には植民艦から降りて持ち回りで動き回り、有事には植民艦に難民を詰め込んで避難するための船団であった。

それが急速に実態に噛み合うようになってきたのは——イゼルローン要塞である。

「今じゃ人口の6割が巡航船団に乗り込んでいる、いやはやこれでは本当に“船団の国”だな」

4割はあれやこれやと寄港地の宇宙港と各星系政府から“貸与”

された土地に暮らしている。(何しろ土地は少なからず政府でも余っており、それはそれで幾らか問題になっている)

イゼルローン要塞が完成してから“時代は悪くなった”。それを現実として思い知らされているのが「交戦星域」であり、その象徴がアスターテとティアマトである。

ゴツン、とジヨツキを下ろした男が酒を注ぎながら唸る。

「……船団の国、は誇りある名前だったんだ、本当は」

「あの『諸元帥の大侵略』の時に避難船団を組んで動き回ったのが我々だった。ウチの曾祖父様もどでかい植民船のエンジンを整備して回ってたそうだ」

コルネリアス一世の大親征、カイザーの先帝のもたらした経済的安寧から噴出した内政的問題から行われたそれは自由惑星同盟の社会体制をも連鎖的に変革した。

抜本的变化をもたらしたのは「自由惑星同盟政府」の強化と「交戦星域」のみならず戦災を受けた地域の反帝国色の強化である。

「へえ！どでかいってなあこのコミュニケーション旗艦みてえな船か！」

「そうよ、アルレスハイムやらティアマトやらパランティアやらの連中を救うためによ、同盟軍の作戦で救援してたのさ」

自分の生まれる前の栄光の時を夢見るかのようにため息をつく——実際は再現ドラマは何かと節目の際に放映されているという野暮はさておき——ため息の後に残るのは苦い現実だ。

「俺たちの最初の船団は——そうだった、船団の国は他の連中を助けるための船団だった」

「それが今じゃなあ——」

『星の海の遊牧民の異文化』に触れましょう！」

甲高い声で一人がおどけた“ハイソ”な声を上げる。

「政府の弱腰による『船舶難民』シッブスビープルに何を言うか！」

ドンと机を叩き一人がわざとらしくマッチョな素振りてふん、と腕を組む。

……はあ、と重苦しいため息が響いた。

「先生」「ああ……」

「ウチに『観光』にくる連中は大抵、政治をやつちよりますよ。政治は大事です、わかりますよ、わかりますよ、でも——」

もぐもぐ、ときまり悪そうに口を動かす。

「俺たちは——同盟の人間だけど、アスターテの人間ですぜ。〔後方〕の都合を多数決で押しつけられるようじゃ……」

我々が船で暮らしているのは要塞建設のために帝国軍の前進配備が始まり、要塞が完成し追いやられたとしても——「もう間もなく本土に戻ると信じているからだ。」というのも完全なお題目ではない。政治があらゆる階級の人々の営みから生み出す感情と利害に依拠するのあれば「お題目」にも相応の裏付けはあるものだ。

むろん不自然を通すには生臭い事情もある、この宙域に主権を保つだけで流通経路だけで他の「交戦星域」諸邦を結ぶ権益があること——係争地であった理由は今でも残っている。

そして軍からすれば帝国軍を無理にここで食い止めるよりは引き込みたいが、かといつて長期滞在されると困る、といった扱いに困る要地であった（前述の通り、民間経済からしてもここを占拠されるのは困るという点で一致している）

かくして同盟政府の支援とアスターテ連邦政府の意図は一致し、船団の国が生まれたのだ。その事情を知るものであれば後方の都合で生まれた国だろう、と言いたくなる気持ちもリヴォフは——欠片も納得はしていないが——理解している。

だがそれはリヴォフが同盟軍の軍兵站の専門家として恵まれた扱いを受け、高度の教育を受けた出自があるからであるとも理解している。彼はすでに議会政治家へと転身したのだから。

「とてもよくわかる、だからこそ公定単価の値下げには反対してきたし、ロボス元帥を前線統括に、と推してきたのだがな……」
ふう、とため息をつく。

「議員の名前を出したやつがいたら話してくれ、俺からも言ってやる」
ペルーズは何をやつとるんだ、と古参下院議員について尋ねると、リヴォフさんよりもよく来てくれますよう、ほつとかれると寂しい

じやないですかあ、と出来上がった役員（男）がしなを作り、周囲がゲラゲラと笑う。

「なんだよ、俺が来ると邪険にするのは照れだったんじやのかよ！」
などと言いながらやんわりと押しやる。リヴオフの飲み物は炭酸水だけだ。

「まあ許してくれや、俺たちは議会と役所周りで精いっぱいよ」

それはそうだろう、哨戒部隊や情報観測網があるにしてもここは【交戦星域】なのだから、というのは皆わかっている、自分たちだってほんの数か月前に船団ごとアスターテからエル・ファシルまで避難したばかりである。

距離があると特に下院議員の地元回りと同様に同盟弁務官はハイネセンポリスを駆け回り、同選挙区の下院議員や政府とのやり取りが主軸になる。

この辺りは二院制と任期の違い——下院の任期はわずか2年であり地元回りの比重が同盟弁務官よりも必然的に高くなるのだ——が役割分担を明確にしている利点であろう。

「そうやってると足を掬われますぜ！最近は特に妙になってきやがった」

「ああ反戦政党が議席獲得つてなあ聞いたよ」

ほんの数議席とはいえ——前代未聞である。リヴオフが興味を示すと一人がきまり悪そうに頭を搔く。

「……平和への箱舟とかいう連中も、話してみると悪い奴らじやねえんですよ。都会のほうから越してきた人らが中心みたいですからまあ、そういう目的なのでしょうけど」

「平和への箱舟、ああそういう名前だったか」

反戦市民連合の下部組織である。議会において国政政党とは異なる名を名乗るものも多い——というよりも成り立ちからして国民共和党やら自由党やら労農連帯党やら国政に参加するために生まれたのではなく、地域自治の為に結成された政治勢力が合流する事が多い。

つまりは——

「地元の仲間連で知っている者もいるんだらうね」

「ああそれはもう……航路の再清掃に出た連中に差し入れをしながらあれこれ話をしてましたもんで」

「ヴァンフリートの連中とも話とりましたなあ、将校さんたちが目え光らせてましたわ」

「ほう、それはそれは」

いやまあそれはそうだろう。単純な浸透も面倒な話であるし、相手がうっかり故郷の否定などをしてつかみ合いになっても面倒だ。何であれ迷惑千万には変わらない。

「伸びそうかね？」

「難しいでしょうなあ。人は集まったりしますがみんなわかっとなりますよ——ここら辺に出る海賊はみんな“人狩り貴族”だって」

反戦といえるほど立派な軍隊じゃねえよ、帝国つてなあよ、そう吐き捨てるのは運輸船の船員の老人だ。

「ああ——そうだらうなあ」

実際のところそれは統計があるわけではない。だが同盟軍の情報部が調べる限り、正規軍の通商破壊作戦には門閥貴族の小貴族や零細貴族が参加することが多い傾向にあるのは事実のようだ、そして彼らには“私掠”の権利が認められている。

だから帝国が小規模でうろつかせている軍艦を彼らは非常に恐れる。ヤン・ウエンリーが英雄となった時もエル・ファシルの人間は慌てて逃げ出そうとした理由はそこにある。

彼らがやろうとしていることは占領ではなく略奪と人狩りなのだ、

【交戦星域】の人間はそう信じている。

「バーラトの人間は戦争は年に二回ほどある大会戦で終わりだと思っ
ているんでしような、だからヨーイドンで始まり、終わると思っ
て『も
う足抜けだ』、『いやいや次に始まったら勝てるようにやろう』と思っ
て話してるんだ」

あいつらにはわからないんだ、俺たちは帝国にとっては奪うもので
戦うものじゃないのに、と唸る。

「……そうか」

リヴオフは答ええない、どう答えようと意味がない、政治とは人の営みであり、そこに理屈ではない共感が求められることは多々ある。それを理屈にすり合わせるのが代議をし天下国家を論ずる役割の一つだ。

「どうなんですかい、先生」

「ん、まあそういう偏見はある。俺たちのことをよく知らない連中はどこにでもいる、とりわけ首都圏ではそうだ。俺たちだってバーラトの連中のことをよく知らんだろう。

だがなあ——」

リヴオフはにたりと笑った。

「勉強をよく頑張った連中でな、心得を違えた奴はバーラトの人々を学んだことでアスターテを語れると勘違いをするんだ。そういうやつは上院で恥をかくのが決まりだよ」

声を上げて満足そうに笑うアスターテの老いた作業員達を眺めつつ、リヴオフは口の中でつぶやいた。

「でもなあ、俺たちもバーラトのことはわかってるようであんなにわかってないのよ」

テレビで映るのはプロパガンダや商業的な発展や悲惨な事故や事件ばかりだ。共感性の高い内容として流される“日常”を演じるものもけして本物ではない。

反戦運動が高まるのは単純な感情論であろうと議会に出てきた者たちは耳障りが良いだけであろうと相応の理を語るからこそ、そこにいる。

ああなんともしや。人が人を理解するということとは他人のことについて如何に無知であるかを知ることなのだろう。

あれやこれやと酒が回ってきたところに事務所にいるはずの秘書が慌てた様子で店に駆け込み、組合書記と「御公務であります」と声を張り上げリヴオフを引っ張り出した。

「おいおい。御公務ってなんだよ、俺は聞いてねえぞ」

ぶつくさといいなながら酒を飲んでいないのは褒めるべきところである。褒めてくれるどころか秘書はいいから早くしてください、というだけであるが。

「事務所にいないと聞いてどこにいるのやらと思つたら……何をしているのですか、貴方は」

騒動に駆け付けたのは大物であるグーヴィヌ元老院議員だ。閣僚評議会の内務担当長官でもある。

「何って俺は議員だぜ！有権者の御用を聞いて回るのが仕事じゃねえの！！」

胸を張る老議員にグーヴィヌは苦笑交じりに返答する。

「なるほど、それも道理ですが貴方は政府の代表者でもある以上はこちらを優先させていただきましょう」

リヴォフがあいつか、と呟くとグーヴィヌはええその通り、と肩をすくめる。

「昨日の件なら引き続き秘匿されていた案件の一環だ。今はまだ触れるにも探るにも難しい、しばし待てと伝えたはずだぜ、状況が動くのはどの道、5月に入ってからだ。今のところは俺が動いても新しいものは出ねえよ」

「いえ、そちらではありません……ああ関係しているといえはしますが、弁務官としての貴殿に要請したいことがあるということでしょう」

「総裁がお呼びです、急用だそうで」

国家の中枢、総旗艦の中をエレカは進む。行く先は船団総裁府、そこに待つのは船団国家、アスターテ連邦共和国が元首 プレジデント、大船団 オフ・グランフリップ 総裁 総 ギルエ・グラスである。

第14話船団の国くアスターテ連邦共和国く（下）

アスターテ連邦共和国：：船団の国、戦災の象徴、あるいは船乗りと運び屋の国。

特筆すべきはやはり人口の過半数が植民艦に乗り込み、本土に残されたのは宇宙港を維持するための一人にも届かぬ市街地のみ、そして他星系の宇宙港に宇宙港運営公社。

その積み上げられた歴史が指し示す事実を、徹底した自由主義者はこう評価するだろう「ヴァンフリートとティアマトの忌子」、と。

アスターテ連邦共和国は非常事態に際し、強固な指導権限を必要とした。

即ち略奪者、強姦魔、専制者：：帝国軍の暴虐から国民の身命を保護するために国民の身命を守るために国民の自由を侵す父権的国家。

それを形つくり、設計主義的に人員を宇宙港公社の職員として雇用し、本土から近隣構成邦の宇宙港を中心とする「外地」を作り上げた歴代の指導者達、彼らは連邦大統領ではなくいつしか宇宙港と船団を所有する国有企業、宇宙港公社総裁を兼任したことでこう呼ばれるようになった。

「プレジデント・オブ・グランフリート 我らが船団 総 裁：：か」

アスターテ連邦共和国の議会は無力ではないが包括的政党連合として『接舷せよ、アスターテ』がこの30年間、安定して政権を維持している。

労農連帯党と国民共和党系の政党が【本土帰還】の一点をもって統合した政党である。

彼らは常に帝国に侵略に強硬であり、イゼルローン要塞の無力化を求め、アスターテ本土への帰還を、そして友邦ティアマト民国の帰還を唱えてきた。

その最強硬派と見做されるのがグラス総裁———自由惑星同盟宇宙軍で高速艦艇の専門家として勇猛を振るった名実ともに大船団総裁と呼称されている男である。

若き頃は分艦隊司令官として果敢に血を流した彼は今は絢爛たる

武勲を抱き、大船団の運営に力を尽くしている。

「遅くに申し訳ない、リヴォフ老」

グラスは入室したリヴォフに目礼する。閣僚評議会議長（首相）のハト自由主義派の首魁、フレシネもいる。軍の先達であるリヴォフと意見を戦わせる事はあろうと敬意を払うのが彼である。

「総裁閣下のお呼びだからな、それで何の用件だね」

リヴォフは一礼する。リヴォフはアスターテ政界の中では左派の長老という立場だ。彼も中央から見れば十分なタカ派である——というよりも内政的な意見の違いはあれど中央との闘いではグラスを含め一丸となって闘争しているのが現実である。

「フェザンだ」

「フェザン？」

フェザンは自由惑星同盟において愛憎にまみれた地域分断の火種であり、同盟経済の柱の一つである——ティアマト共和国の本土失陥後、フェザンは食糧輸入の要として“フェザン産の加工食品”として農奴制国家の銀河帝国から食料を輸入している——そしてこの半世紀、特にイゼルローン要塞建設後の“失われた30年”の世代を埋めるかの如く運輸業を侵食している。

グースヴィヌが机の上からレジユメの束をリヴォフに差し出した。「こちらを、運輸企業全体で減収が続いています、叩き合いも同然で経済全体が低調になりつつある」

リヴォフは眉をひそめた。フェザン、運輸とくると悪い話しか思い浮かばない。

「それでフェザンか。だがこの地域に融資はともかく、現場に出張りたがる輩がいるか？」

幾らなんでも、というのがリヴォフの心境である。アスターテが流通のかなめとして本土を失陥した後も経済的権益を死守できたのはパランティアを筆頭とする【交戦星域】諸国の企業との付き合いのみならずフェザン商人が危険を恐れて寄り付かないからである。

「……同感だ、だからこそ性質が悪い」

フレシネがぼそり、と呟く。

「おいおいおい、まさかオーデインの統帥本部がらみじゃないだろうな」

フェザーンは魔都だ。両国が高等弁務官を置いて事実上の窓口となるのであれば当然、情報部門も動き回っている。帝国も同盟も金融企業を嚙ませ、双方の経済事情を探り、隙あらば経済的混乱を引き起こそうとしている。更に政治・経済的陰謀の果ての帝国・同盟文民（当然犯罪者も）の亡命や、麻薬も取り扱う複数の犯罪シンジケートも動いている。更に当然ながら同盟を帝国を悩ませる為に双方の情報機関がそれを支援し——最早、自治領主を含め誰にも把握できていないのではないだろうか？地球教徒ですら陰謀論の対象になっているし、少なからず間違っではない——世論操作の為に双方の情報機関が入り込んで拡大したのだから。

「そうだ、小売り用の衣服や食料品やら嗜好品、果ては資源開発に口を突っ込み始めた。工業資源まで、そう、重水素に、高純度レアメタル、そして宇宙空間施工用液体金属まで」

「……おい、それはあちらの情報部門がかかっているか？」

兵站屋としてイゼルローン要塞の分析に携わった時の記憶が蘇る。

「リヴォフ老、私は巡航艦乗り上がりだ。フェザーンを取り巻く魑魅魍魎に関わりたいたいと思わん。だがそれが国家の存亡にかかわるのであれば否やもない」

「この問題は、非常に微妙な問題だ」

フレシネはため息をつく。

「企業自体はフェザーンの資本であるが幾つかの企業を経由している、戦略物資は正統な認可を受けてあちらこちらに運ばれている——その全容は我々にも把握できていない」

グーヴィヌたちに手落ちがあるわけではないぞ、と首相の言葉にグーヴィヌは肩をすくめる。

「ええ中央への調査は難しいです、バーラト系の企業連が関わってくると同盟諸政府の管轄になりますので。そういった諸々の問題が絡

みますと私の一存では何とも」

デルメル平和共和国のオリュンポス・カンパニー、ムサングダム憲政共和国のダレイオス開発グループ……なるほど、トリヴオフは内心頭を抱える。

どれもこれも構成邦のみならず、エネルギーやら地方社会開発やら同盟政府の行政にまで食い込んでいる。

情報部門のみならず民政官僚に利権を抱える同じ交戦星域やその近隣の構成邦の懐に手を突っ込むのは――

「面倒だな、これは」

無理難題だ、とフリシエが片眉を上げていった。

「その為にリヴオフさんに来ていただいたのです、この時間にね」

解決を言明するわけではない、とグラス総裁は肩をすくめる。

「無理をして孤立する必要もないが同盟政府に遠慮する必要はない、私はアスターテ連邦の代表だ。私の指導の下で行われるあらゆる行為が齎す利得はアスターテ市民に還元されるべきである。アスターテ市民とは同盟市民である以上、これは同盟政府への忠誠でもある」
リヴオフは苦笑する。

「相変わらずだなお前さんは」

グラス総裁の政治スタンスを一言で表すのであれば
ナシヨナリススト 国民国家主義者――である。

であれば反バーラトかというわけではそうではない。ある意味では彼は同盟軍人としての軍事的合理性を「交戦星域」の複雑な感情論と合一させているからこそ、大船団総裁の座を得ているのである。

「首都圏だろうがフェザーン航路だろうが、【交戦星域】だろうが、我々は平等だ、その事実を現実適合されるのが貴方の役目だ」

リヴオフは戯けて両の掌を向ける。

「おいおいおい、勘弁してくれ！老骨にむちうつてるんだぜ！これでも不足かよ」

「不足だとも、戦場であろうと娑婆であろうと部下の数が増えれば増えるほど、常に上役の仕事は不足するものだ」

つまり私も不足しているとも、とグラスはニヤリと笑った。

「つまり我々は就任してからこれまでに至り何から何まで問題しかないということだ。そして新しい問題が出てきた——例のヴァンプリート演説はどうみる」

リヴォフは内心舌打ちをする、これに今かわるべきではない、と兵站屋と国防畑の政治家の経験が告げているのだ。

「先日伝えた通り、情報部門が関わってるのは間違いない、であれば予断は禁物、今は静観だ」

「相手の罠に嵌らない限り予断は有効だ、見当をつけて調べなくては どうにもならんだろう」

そうかい、とリヴォフは自身の元首をじろり、と見る。

「総裁はどう見立ててるのかおしえてもらいてえなあ」

グラス総裁はそうさなあ、と怯むことなく体をゆする、

「まずこれだけは私が断言できるのは、グリーンヒル”総参謀長”が演説していることそのものが囹だ」

「ほう」

「内実は老の言う通りだろう、シトレが主導し、ドーソンが実務を仕切っているのであればロボスは前線から排除されているはずだ。続合作戦本部長の椅子を得るには何かしらの成果が必要だがシトレはまだ再任して次の議長選で下院議員の座を狙いたいはずだ。であれば——サンフオードとトリユーニヒトと分かち合うつもりだろう。」

であれば地上軍と情報部門辺りが手柄を欲しがるはずだ。そして正規艦隊レギュラーフリックのシトレ派だな」

グーヴィヌはふむん、と顎をさすりながら尋ねる。

「……つまり何が狙いです？」

「俺が知るか。そもそもこれも予断としての仮説で何一つ確証はない」

参考のひとつでしかない、とタカ派国家元首はばつさり切り捨てた。

「意図の推測は補強でしかなく、それ自体が断定の根拠になることはない。断言するのはハイネセンポリスで動き回った後のリヴォフ老の仕事だ。」

だがわれわれが懸念する点はいくつかある、まず一つはロボスはアルレスハイム出身でグリーンヒルはエル・ファシルと縁がある。彼らが排除されるのは断固として阻止せねばならない。

もう一つは——シトレは自由党派でトリユーニヒトが国民共和党の軍官派であることだ」

グラス総裁の目に強い光が閃いた。

「連中が強くなりすぎるのは「アスターテ」にとって不利益だ」

「バーラト・エリート」ばかりがそのまま中枢に居座り多数派を取り仕切る——【交戦星域】の人間にとり、それは時に死活問題である。はいはい、トリヴオフは肩を落とす。

「それじゃあ俺の仕事はフェザン企業の動きと戦略物資の密貿易の調査。」

そして第七次イゼルローン攻略戦について、か」

グラス総裁は鼻で笑った。

「特命の話だ。他は当然貴様の支持者からも陳情が上がっているだろうし、それに次の会期で全ての議題からアスターテに利益を齎す様に努力するのも忘れるな」

「けっ!!また人使いが荒いぜ!!」

ああそうだ、とフリシエがリヴオフに目を向けた。

「それと……3期目はどうするつもりだ。急進人民党も自由連盟も気にしているぞ」

自由連盟は半ばヘゲモニーになりつつあるアスターテ連邦最大野党である。要するに同盟議会政党である自由党の構成政党なのだがアスターテ宇宙港公社の外地を中心に活動する国民共和党支持層の穏健派なども吸収しアスターテ政界の穏健派として存在感を示している。

急進人民党は労農連帯党左派系の星津であり船団コミュニケーションのうちいくつかを岩盤基盤として『接舷せよ、アスターテ』と総裁の強固な権限に反対している——同盟弁務官としてリヴオフを選出する過程では彼の基盤の一つでもあるが。

「それでも勝とうと思えば貴方は勝てる。フレッシュ首相も同意見だ」

フレシネは無言で首肯した。

3選は——健康上の問題がでなければけして無理ではないだろう。だが彼はイゼルローン要塞が完成した時には既に40過ぎ、2年後の3期目を終えた時には——80を超えている。

本来なら潮時——だろうな、トリヴオフは苦笑した。

「総裁閣下が出てくれるならいいんだけどな」

グラスは片頬をゆがめて返答する。

「莫迦をいうな、それなら貴方に総裁職を任せるぞ」

先達を相手によくも、などと思わせない竹を割った仲に稚気をまぶした独特の語り口が彼の魅力である。

そいつあごめんだな。トリヴオフも笑う。

総裁として強権を振るうように見せかけて議会や閣僚評議会とひたすら調整をこなすのはまっぴらごめんだ。国防長官を数期務めた時点でもう内政に関わる気はないのだ。

「後任を見繕ってくれるならありがてえけどなあ」

ごめんだよ、とグラス総裁は苦笑した。

「貴方を選んだ者達にこたえるのは、一番接してきた貴方だろう、老。貴方が貴方の支持者たちが何を求めているのかを考えて選び、整えることだ」

リヴオフは参ったな、と頭を掻いた。グラス総裁はタカ派の愛国的軍人政治家であるが、民主主義者でもあったのだ。

「……そういえば、だ。平和の箱舟が議席をとったそうだがそれからどうなんだい」

グーヴィヌは話をそらしたな、と面白そうに微笑しながら答える。「数は多くありません、だがこちらでも現地民で首都圏と比べると見る影もないですが、相応の組織を作ることができたのは意外です。どこからか資金が流れているということでしょうが現地での支持層の動向は——フリシエさんの方が説明しやすいか」

本来はその手の支持層を吸収するはずであるハト派の重鎮であるフリシエ首相がうなずいた。

「最近では学生を中心に若い層に少しずつ浸透している。急進人民党の

議員団が連携できないか探りをいれているようだ。規模は小さいし議会に出ている連中はそれなりに現実を見てパフオーマンズ落としどころをわきまえているが——」

はあ、とため息とつく。フリシエは頭を振った。

「ハト派よりも急進的で小気味いいのだろうが、組織が膨れるにつれて振り回され始めているようだ。小気味よさに酔う支持者など厄介でしかない……帝国と和解、か」

「イゼルローン要塞がある限りはそれは降伏である。イゼルローン要塞が破壊され、よほど帝国が弱体化すればあるは——であるがなあ」
リヴオフは苦笑する。

「恨みつらみを共同体が忘れることは消してない」

グラス総裁は切りすてた。

「恨みつらみがたまるのであれば相容れぬ敵がいたほうが良い」

「“同盟市民の権利は普遍的である、それを信仰する同盟市民が保護する限りは”か？」

「そうだ、であるからこそ“同盟市民”であることを維持し続けなければならぬ」

リヴオフはそうかい、と肩をすくめた。

この時は、今はまだ雑談程度であった。この夜の会話でグラス総裁が懸念していたことも、フリシエ首相たちの不安もリヴオフはまだ身近に迫るものだと認識していなかった——

第15話 793年12月号アライアンス・ポリテイカ誌に掲載されたとある記事

ディアレクテイケー第XX回

793年総選挙を語る（交戦星域編）

自由惑星同盟は最高評議会議長選、同盟上下院同時選挙の結果に揺れている。

新たな最高評議会議長ロイヤル・サンフォード氏を支えるのは主要同盟政党として知られる三党の大連立となった。地方と都心部の断絶や急進派の伸張など同盟民意の分断が指摘されている。

今回は793年総選挙を地方から読み解くをテーマとした連載の初回として、長らく同盟政府の顧問を務めてきたオリベイラ教授とアルレスハイム王冠共和国から構成邦の政治を研究してきたエプレボリ教授の二名とともに「交戦星域」からみた今回の選挙を二回に分けて読み解く。

・対談者

バールト自治大学法学部教授

エンリケ・マルチノ・ボルジエス・デ・アランテス・エ・オリベイラ氏

（専門分野：行政法・同盟諸邦比較行政論・銀河連邦法制史）

（公立法科大学院協会会長、自由惑星同盟諸邦首相会議最高顧問、国務委員会構成邦間係争調停委員会委員長を歴任、現在は最高評議会議長事務総局参与、法秩序委員会『リステイメント』編纂審議会会長を数期に渡り務めている）

（著作：『銀河連邦末期の治安行政と海賊ストリート』『ハイネセン主義と民主主義とは何か』『公法論、構成邦の権利と同盟法』『同盟公務員必読！』構成邦間の行政形態の違い』『多様な民主共和制と自治の本懐』など）

アルレスハイム国立ヴァルシャワ大学法学部教授

エーリツヒルヴァアルデマー・フォン・エプレボリ氏

(専門分野：政治史、比較政治論)

(アルレスハイム王冠共和国セナト議員を一期務め、現在はゲルマニア王冠史編纂委員会顧問、アルレスハイム革命史調査編纂委員会顧問、ゲルマニア王冠守護者の最も高潔なる枢密院枢密顧問官を務める)

(著作：『党人文化の変遷―同盟政党と構成邦政党―』『アルレスハイム革命の省察と現代的ハイネセン主義への変化』『ロストコロニーと入植地域の政治文化比較』など)

対立は民主主義の脅威なのか

——自由惑星同盟総選挙を終えて、サンフォード議長は異例の三政党大連立による困難な政権運営が予想されます。

地方分権派のみならず、急進的な強硬派と和平派の躍進が著しく、自由惑星同盟の地域対立が深刻化しているように見えます。

お二人は今回の選挙結果をどのように捉えていらっしゃいますか。

エプレボリ氏

まず前提として自由惑星同盟に限らずあらゆる社会において分断や政治的対立は人類に社会という概念が生まれて以来、ずっと存在しており、歴史上、人類が一つに統合したことはない、ともいえますの。

そもそも対立自体が悪いというわけでもなく、自由惑星同盟には建国の制憲議会から入植競争、コーネリアス1世の大侵攻からの復興の時期など、地方間のみならず様々な対立が生まれ、それをバネに、新たな均衡が模索されてきた歴史がありますわい。対立自体は活力をもたらすものである、ととらえるべきじゃのう。

オリベイラ氏

エプレボリ氏のご指摘の通り、同盟政治において、首都圏と地方の間には、自立を主体とする『個人主義的ハイネセン主義』か、万民の自由権を政治が保障し、自立のための共同体の互助を主体とするべきだというジョージ・パームが再興した労働組合運動を中心とした『共同体的ハイネセン主義』……といった「伝統的な」対立の構図がありました。

他方で、構成邦内の自治政界でも多様な意見があり、地域間で多様

な文化、社会制度が生まれています。その為、一般に言われる『都市対地方』の対立構図のみで見るともまた難しい。下院の議席の変動や得票率を統計で見ると『パルムのハイネセン主義』は組合活動や医療、社会保障の発展に伴い都市部にも受け入れられていることがわかります。

このように、同盟政党内部で多様な構成邦を呑み込み、党内で合意や妥協が成立することも珍しいことではなく、さまざまな場面で地域対立の単純化が否定されてきたのも事実です。ところがイゼルローン回廊を押し上げられた760年代に入ると、構成邦の情勢が著しく変容してしまい、構成邦間の格差が広がりつつあり、国政政党内部における調整能力が衰えた結果が現れたといえるだろう。

エプレボリ氏

あー：オリベいら殿の発言もごもつとであるが、この点においてはとくに『コルネリアス1世の大侵攻』が大きな転換点となっていることも指摘させていただきたい。

わが故郷のアルレスハイムも注目されておりますが、ティアマト民国やアスターテ連邦共和国などの政治文化や意識改革、また同盟政府の存在感の高まりなどはこの軍事的危機から始まったのであるといえましようぞ。一種、現在の国体を作ったのはこの点……

オリベいら氏

エプレボリ氏のおっしゃりたいことはわかりますが、同盟議会からみた影響という点では聊か話がさかのぼりすぎているようにも思う。

エプレボリ氏

オリベいら殿のご指摘痛み入るが、この点においてはとくに構成邦の政治的变化に注目するべき点であると存じますわい。

同盟政府と構成邦の関係

——今回のテーマは【交戦星域】からみた同盟政界です。【大侵攻】を契機とした変化とはどのようなものでしょうか？

エプレボリ氏

構成邦における政体の変化が大きくなったのはこの時期でしてな。

純粋な必要性からだが【交戦星域】で行政への権力の集中が一気に進んだ点は注目に値する。一般的に軍事独裁のイメージが強いヴァンフリート民主共和国においても同盟全体の経済成長が進んでいた時期は多党制は1世紀近くかけて根付いておりました。

また同盟政府への集権的改革が一举に進んだことで、その反動として分権的連邦主義が広がったのもこの時期ですな。

オリベイラ氏

あの大侵攻で最も長く占領を受け、抵抗運動に従事したことで今では国内でも使われている【交戦星域】という概念が生まれたという点は注目すべきだ。

そして【大侵攻】から始まった変化が急速に進んだのがこの半世紀、特に30年前からだ。

イゼルローン要塞は明確に【交戦星域】の社会構造を急速に変えた。ティアマトやアスターテのように土地を失ったものだけではない。エルファシルやアルレスハイム、ヴァンフリートなど同盟政府、軍と連携した広域的な避難、復興など広汎的な互助体制の確立が進んでいる。

エブレボリ氏

【交戦星域】の構成邦で政体の変化が大きくなったのはこの時期です。行政への権力の集中が一気に進んだ点は注目に値するの。

例えば一般的に軍事独裁のイメージが強いヴァンフリート民主共和国においても同盟全体の経済成長が進んでいた時期は多党制は1世紀近くかけて根付いておった。じゃが今は再び人民元帥が行政を掌握し議会はその輔弼を行う形態へと回帰しておる。アスターテも船団に避難民を受け入れたことで船団・宇宙港を管理する公社の総裁と連邦元首の一体化が行われ元首への権限集約が集約されたの。

また同盟政府への集権的改革が一举に進んだことで、その反動として分権的連邦主義が広がったのもこの時期ですな。

——つまりイゼルローン要塞が建設されたことに【交戦星域】と同盟政府の関係性も大いに変わったということでしょうか？

エブレボリ氏

帝国という明確な脅威によりヴァンフリートを除くほぼすべての構成邦が本土を占拠されたこと、そしてそれに強力な統制を受けながら抵抗をつづけたこと、この二点により、よくも悪くも同盟政府と対等であるという意識と同時に軍事政策、復興政策など同盟政府の意向に左右されやすい状況になった……これが現在の同盟政府と交戦地域の関係を形作ったといえるの。

オリベイラ氏

この時期に共同体的ハイネセン主義が【交戦星域】を含めた戦災復興地域を席卷した。そのため、共同体的ハイネセン主義は親軍路線とも親和性が高い。これは地域的な必要と専制主義への断固たる抵抗という思考は個人主義的ハイネセン主義と同根であるからだ。

エブレボリ氏

同盟政府とのつながりが強くなったことで逆説的に同盟政府との距離が生まれたといえるの。同盟政府の介入が必要になればなるほどバーラト首都圏と【交戦星域】の格差は広まってゆく。その代わりに中央へ人を送り込むことに強い関心を抱くようになる……

この奇妙な関係が1世紀ほど緩やかに続き、そしてイゼルローン要塞の中で30年ほどで急速に固定化した。その結果が今出てきた、というところじやの。

——固定化が続いた結果ということはあるのでしょうか

オリベイラ氏

第五次イゼルローン要塞攻略戦は大規模な動員を行い、“ついに攻略を行う”と喧伝されてから選挙が行われた。

つまり【交戦星域】にとつてはイゼルローンがなくなるという希望とその失墜が選挙の間に起きたことになる。もちろん、要塞に損害を与えるなどの戦果は多かったが実際にそこで暮らしている人々からすると政治的な関心が高まるのと同時に構成邦としての国家意識を揺さぶられたといえるだろう。四半世紀以上の閉塞に目が向いた結果だ。

エブレボリ氏

特にティアマトはそれが顕著であるといえる。ティアマト民国の連邦参事会議長となったタロット氏は叩き上げの商人じゃ。

彼の支持層の一つは、ティアマト民国の各自治領はどこも一次産業——農林水産業に従事する層であるがの。サジタリウス腕各地に散らばった彼らは良くも悪くも同盟全体の一次産業や無党派層の民意を反映する物とされてきた——つまり、自由惑星同盟全土で共通しているのは「現状維持を行う党人政治家」に対する不満が高まっていることじやろう。

アスターテ連邦では最強硬派のグラス氏が、エル・ファシル共和国では同盟懐疑主義政党が両翼で支持を伸ばし、それでも同盟軍との連携強化を推進するタカ派のペイリン首相が再選された。

オリベイラ氏

一方でバーラト首都圏でも変容してきた。この選挙で見えてきた地方と首都圏の世論の動向を中心にサンフォード政権の顔ぶれと動向についてもなかなか興味深い。

——次号では今後のサンフォード政権の方針の予想と【交戦星域】世論の動向を両教授から伺いたいと思います。

第16話 794年1月号アライアンス・ポリティ
カ誌に掲載されたとある記事

ディアレクテイケー第XX回

793年総選挙を語る（交戦星域編）（下）

長らく同盟政府の顧問を務めてきたオリベイラ教授とアルレスハイム王冠共和国から構成邦の政治を研究してきたエプレボリ教授の二名とともに【交戦星域】からみた今回の選挙を二回に分けて読み解く。今回は後編としてサンフォード政権の抱く【交戦星域】への方針について語る。

・対談者

バーラト自治大学法学部教授

エンリケ・マルチノ・ボルジエス・デ・アランテス・エ・オリベイラ氏

（ハインセン国立中央自治大学 S. J. D（公法学）銀河連邦末期の行政制度研究、および自由惑星同盟・同盟諸邦の公法研究の専門家。同盟政府において構成邦間の行政・法的問題の調停や同盟政府と構成邦の法解釈に長年携わっている）

アルレスハイム国立ヴァルシャワ大学法学部教授

エーリツヒルヴァルデマー・フォン・エプレボリ氏

アルレスハイム国立ヴァルシャワ大学 Dr. rer. pol（政治学）専門はアルレスハイム政治史、同盟政党論。現在はアルレスハイム王冠史、アルレスハイム革命史の編纂を行っている。）

バーラト首都圏と【交戦星域】の対立

——前号に引き続き今度はサンフォード政権についてより具体的にお話を伺いたいと思います。まずは今回の総選挙で見えた傾向についてお話を伺いたいと思います

オリベイラ氏

まずは議席比率を見てみるとしよう。

与党の国民共和党が25%、労農連帯党が20.5%、自由党が18.2%と連立により6割を超えた議席を保有している。一方で分権派の主権自治連合が15.0%、反戦市民連合が8.1%そして急進硬派の人民防衛運動が7.1%となる。

エブレボリ氏

一方で同盟弁務官達は3分の1のみの改選とはいえ新興政党の影響が強い弁務官はほとんどいない。反戦市民連合も人民防衛運動も構成邦単位では野党であるところがほとんどということじゃの。

——これまで泡沫野党であった主権自治連合に国民共和党を離党した議員や構成邦出身の議員が集まり大いに議席を伸ばした事を契機に3党連立への結びつきました。

オリベイラ氏

前回の中間選挙の時のことだ。惨敗した国民共和党のダガン全国組織委員長が、今後の党のあり方を模索したレポートを作成した。本誌でも批評が掲載されたのだが覚えているだろうか？

中身を簡単に説明すれば、支持基盤の拡大のための徹底した地域の意向の調査と対策になる。いわゆる同盟ナシヨナリズム保守系だけではなくさまざまな分権派の主権者連合穏健派にもウイングを広げ切り崩すことで足腰を強くしよう、といった内容だった。

そこで想定されたのは、例えばイリゴーイエン氏やチエルノフ氏のように、自治政府と交渉し、増加する反中央色を強める有権者にアピールできる穏健派などでしょう。

しかし現実には厳しく、今回の選挙ではそれでも事前の世論調査の時点で急進派の伸張は著しく中道系三党の大連立を模索することになった。

連立を組んだことで与党議席は60%を超えているが注目すべき点はこの主要三政党がいずれも実際に議席数を減らした結果でこなくなったということだ。

カーティス弁務官が各構成邦政府の意向をまとめ上げ、上院で安

定した多数派を形成したことで中道派をまとめ上げることになった。国務委員長のカーティス氏が上院のかじ取りを担うことになるだろうが、大胆な改革は良くも悪くもできないだろう。

エプレボリ氏

総体として厳しいかじ取りを強いられるというのは同感ですの。また、注目すべき点として国民共和党内部で構成邦政党出身のいわゆる『地方党人系』の勢力が弱まっている点も注目すべきじゃろう。国防委員長として指名されているヨブ・トリューニヒト氏、経済開発委員会の副委員長となったコーネリア・ウインザー氏など知名度の高い者が構成邦の政治キャリアを積まず、直接選挙に出たものが幹部の地位を多く占めるようになってきた。彼らは中央政界でのみ活躍していることから『中央派』と呼ばれておる。

彼らは同盟世論の風向きに敏感じゃ、そして知名度の高い中央出身の財界やマスメディア出身のエリートが多い。

上院との意思疎通の面などでサンフォード議長をはじめとするベテラン調整政治家の後継者が不足しつつあると感じますの。

【交戦星域】のみならず各地域で同盟主義の【バーラト・エリート】と構成邦に暮らす人々の乖離を強く感じるようになってる。

——【バーラト・エリート】という単語はエプレボリ教授の著作で党人との対立項として用いられてきました。分権派や急進派の伸張は同盟政府への反感ということでしょうか

エプレボリ氏

そうですねの……急進派の伸張に対し、これまでの主要三政党に対し、四大政党の一角と呼ばれてしかるべき規模まで主権自治連合が躍進したことは、国民共和党のいわゆる【保守本流】の調整能力の欠如が問題じゃ。

構成邦政党単位で公然と同盟主要政党への挑戦がなされた形になるの。

じゃが第四極となりつつある主権自治連合は現実的な分権政策を推進する方向に転進しつつあるこちらはそこまで深刻な問題ではあるまい。

良くも悪くも現実的な対帝国戦争を見据えたうえで愛郷的な大衆主義が台頭しつつある。同盟政府への集権化に辟易しているというのが現実じやろうて。

愛郷主義リージョナリズムと国民国家主義ナショナルリズムの乖離に耐えられなくなった——というよりも同盟政府を国民国家とみなせなくなった、というべきじやろう。

「バーラト・エリート」という言葉は抑々、儂自身が考案したものでなくフィールドワークで土着政党や政治運動、自治体職員、政策を企画するシンクタンク、政治の現場の中すら流布していた言葉じや。

同盟政府の役割を否定できずとも負担がかかる現場ではインテリ層にまでそうした現場からイニシアチブが奪われたという感覚に倦んでおる。

オリベイラ氏

(咳払い) 気持ちはわかるが「バーラト・エリート」という呼称は品のないレッテル貼りなのではないだろうか、とも感じる。特に損耗が激しい宇宙軍の徴兵は教育の関係からバーラトに集中しているのも事実だ。

反戦市民連合の選挙運動を取材した映像を見たことがある。ハイネセン2区のマツテオツテイ議員の支持者集会で、帝国兵に子供を殺されたお母さんが登壇し、我が子の遺体の損傷具合も含めて語った後、トユラーテイ議員は隣のハイネセン第三区の候補であるヨブ・トリューニヒト国防委員長をこき下ろして、「トリューニヒトは、彼を支持する人々の悲嘆よりも同盟への愛国心という美名を優先させて、第五次イゼルローン攻略戦のための補正予算を提出した。その結果はどうだ、ここに来るはずだった市民何万もの市民の命が無為に失われた。われわれの生命を守るのは国防委員会という店名を掲げたカニバリスト共ではない!」と演説していました。……そして彼は当選した。実際、トリューニヒト委員長へのバッシングは激しいもの

があり、彼自身は当落選上で戦うことになった。

これはあくまでも一例であり強硬右派においても労農連帯党や自由党の議員が激しく攻撃を受けるなど似たような事例はいくらでもある。

——今回の選挙において暴力沙汰やトラブルが頻発した印象がありました。

オリベイラ氏

全体としてはそうした暴力的事件の事例は劇的に増えたということはない。だが増加傾向にあるのはまだ統計の推移を確認してないがおそらく事実だろう。バーラトにおいても同盟全地域へ配慮する意見は排除され、どれほど我田引水でも強硬な意見を叫んだ方が特定層の支持を熱烈受けて選挙に勝てるという傾向が強まっているように感じる。バーラトが悪であるというような品のないデマゴーグが出ているのと同じように、バーラトにおいても遠く離れた星域への出兵と戦死という負担は無視できない傾向に合る

バーラトにおける急進派の伸張はいわゆる「政治的エリート」からの乖離である、という点を強く指摘したい。

そうした意味では奇妙な言い方だが今回連立を組んだ国民共和党、自由党、労農連帯党は保守的な立ち位置に追いやられているのかもしれない。

しかしながら専制主義者の侵攻に対応せざるを得ないのは逃れられない現実だ。粘り強く国民への理解を求められないだろう。

——急進的な国粹派と反戦派は相互に対立していますが議席を伸ばしました

エプレボリ氏

左様、

じゃが同盟国家主義側からも、【自由惑星同盟】社会の基本的な価値観に対する挑戦が始まりつつある。

例えば、反戦市民連合急進派のトップであるシャルル・ダイドー氏のように、「平和のための社会設計主義」を掲げ、同盟主導の【交戦星域】からケンタウルス腕航路開拓への再入植——つまりさらなる距離の防壁を作ろうということじゃの——や上院の一票の格差解消など、かつてであれば「反同盟的」としてまったく無視されるような主張が少なからぬ人々から支持されておる。これはほんの十年前には考えられなかったことじゃ。

反戦と同盟懐疑主義が同一文脈ある最大の理由は自由主義と分権的連邦主義を論拠とするのが伝統じゃった。

同盟政府による戦時統制への反対が多数派である反戦主義者が軍縮の代償に同盟政府による社会保障の拡充や【交戦星域】への弾圧に非常に大きい変化じゃ。

そうした意味では強硬右派の人民防衛運動よりも興味深いと感じるの。

オリベイラ氏

既存の構成邦分権主義と同盟集権主義、個人主義的ハイネセン主義と共同体的ハイネンセン主義だけではない。少数勢力同士であった反戦急進派と対帝国急進強硬派の対立はまったく別の軸として同盟世論に浮上しつつある。また、非常に深刻なのが市民生活を支える労働者の不足と労働単価の高騰だ。地域産業に対し労働力の不足は大きな負担になっている。帝国軍の侵攻による国民生活への負荷を人的資源、財政支援、そして流通の安定の確保と各方面から如何にコントロールするかがこれからの政権に問われるだろう。

サンフォード政権と交戦星域の距離

——政権の課題として戦争と民政のバランスが課題に挙げられました。前線に近い交戦星域から見たサンフォード政権はどのように見えるでしょうか

エプレボリ氏

非常に難しいところですよ：三党の連立で調整を行うだけではなく上院での多数派工作も必要になる。上院では今も国民共和党系

や労農連帯党系政党出身の弁務官が多いのじやが。彼らはそれが利益をもたらすから協力しておるのに過ぎん。それは「民主主義の縦深」も同じじやて。だからこそ彼らと政府の交渉が重要になるじやろう。同盟世論と各構成邦世論の違いは明確じや。

オリベイラ氏

サンフォード氏はシロン農産共和連合出身で地域社会委員副委員長、最高評議会書記、国務委員長など上院との連携が必要なキャリアを数多く積んでいる。

カーティス氏を始めとした地域政界出身を中心とした人事が目立つ、上院への配慮を最大限に行うつもりだろう。弁務官と構成邦世論次第ではあるが原則としてサンフォード政権は同盟全土を包括的に保護しなくてはならない。それは良くも悪くも三党連立という状態が導く結果だ。

エプレボリ氏

現在国防委員長の最有力候補とされているトリユーニヒト氏は下院安全保障委員会の議事運営理事の経験もあり、政策通としても中央派と地方党人派の橋渡役としても良い人材じやろう。

じやがそれとは別に議長を含め、三党連立、および各地域の弁務官への真摯な対応が現在の時勢から建て直すために必要じやろうて
……

サンフォード政権の展望

——中長期的にみて、急進派の伸張は政権運営にどのような影響を与えるでしょう

オリベイラ氏

おっと、これは難しい質問が飛んできたな（笑い声）

実際のところ、帝国の情勢にもよってくるだろう。イゼルローン要塞の無力化が行われれば、経済復興と社会の断裂阻止に視線が向く可

能性もある。そこはまた民意に諮ることになるだろう。

だが現状が続くという過程で考えれば急進派であっても続けざるを得ないだろう。現実として構成邦と同盟政府の権限は複雑に入り組んでいる、同盟政府の権限が強まっているのは事実だが権限の問題は常に稟議と妥協が必要になる。

エブレボリ氏

急進派の台頭の主要な要因は戦略の主導権を握れていないことじゃ。そうした点ではイゼルローン要塞の無力化が重要であるということは同意するのじゃが、そこからどのように向かうか、民主主義は多数派が正義であるがゆえに、少数派との対話も必要になる。社会的な断裂は大きな方針転換が求められたときに思わぬ形で顕在化するものじゃ。

ふむ、現状が続くと仮定するのであれば同盟政府自体よりも構成邦政府に目を配るべきじゃろうな。急進派がもしどこかの構成邦政府の与党となればそれを足掛かりに上院への影響力も跳ね上がる、同盟政府への発言権は飛躍的に高まるじゃろう。

逆に言えばよほどのことがない限り、現政権においてはそこまで影響力はないじゃろうな。

——なるほど。それでは最後に自由惑星同盟社会の状況を分析する上で、どのような点に注目すればよいですか。

エブレボリ氏

オリベイラ殿が先ほど仰っていた通り、サンフォード政権は主として【交戦星域】への帝国軍侵入の阻止とイゼルローン要塞の無力化を軍の統帥者として行うのと同時に同盟全域の戦争継続、および国民生活安定のための対症療法が求められるのじゃ。

あえて安全保障面の指摘をすれば、同盟社会をいま揺り動かしている諸々の力学は、同盟の安全保障政策に対して総じて積極的な方向に作用すると僕は考えておる。

左派の労農連帯党の場合は、もともと軍事予算の削減ではなく。兵士の待遇改善を含めた総括的な軍による地域の安定を重視する傾向

があるからの。

一方で現在の反戦派はバーラト首都圏を中心とした運動であり全体とてみると上院を見てもわかる通り“同盟政界”においてはまだ根付いているはいえぬ。

とはいえ、個人主義的ハイネセン主義は一人一人の経済的自由や市民的自由を重視するの。自由党はもともと個人主義が主流派じゃ。軍事力増強についても、政府権力の拡大につながると反対しておる。おそらくその三党間の均衡を如何にとるかをサンフオード議長の手腕が問われることになるじやろう。

今後は構成邦に対してもさらなる負担分担を求めてくる可能性もあるじやろうが、それも同盟軍首脳部の方針次第じゃ。

ひとまずは軍の新首脳部と国防委員会の人事を確定させることで、中長期的な内政・社会面の政権の方針が定まることになるじやろう。

オリベイラ氏

私は地域間の断裂に焦点を当てて話そう。特に分権派の言説によく表れるような、「バーラト・エリート」によって自分たちの決定が損なわれているという議論が自由惑星同盟構成邦の多くに受け入れられる土壌があるということに注目しなければならない。

仮にイゼルローン要塞が政権一年目に奪取できても、すぐそれが改善するとは考えにくいのは私も実感している。これは現政権の政策のみならず政権の意思決定過程にも強く影響するのではないだろうか。

そしてもう一つ指摘したいのは、同盟と構成邦の権限問題だ。自由惑星同盟は長らく各構成邦の財政格差を調整する機関であったが、長年の戦争、特にイゼルローン要塞が完成してから同盟政府が危機管理の面から介入する法制度が進みつつある。

これは思想の面だけでなく、現実の危機管理問題としてそうならざるを得ない。今後は同盟政府側の権限が強くなるということを前提とした上で、『同盟政府が構成邦の安全を保障する』という言葉の解釈、構成邦の自治と主権の根幹に関わる問題が急進派の伸張により新

たな政治問題として浮上する可能性は大いにある。

急進派の主張を同盟世論と主要政党がこれからどう受け止めるのか、これも注目するべきだろう。

——ありがとうございました。

【解説】 796年4月末時点 自由惑星同盟政府 立
法府主要会派について

『同盟代議院』

下院の任期は2年で、選挙のたびに全員が改選される。解散はない。下院選挙は2回に1回は最高評議会議長選挙と同時である。議長選挙の無い年の選挙は中間選挙と呼ばれる。

下院の権限として最高評議会議員及び行政委員の指名案作成権がある。ただし、指名案について上院が否決することもある。また、議会の最も重要な立法権については上院と同等の権限である。

人数が非常に多く、兼務を禁止された常任委員会のみでも平均的な共和国の本会議に準ずる人数が集まる。そのため旧西暦時代以上の委員会中心主義をとっており、重要な政治問題については専門の特別委員会が設置される。

各院内会派政策部会での事前協議が若手政治家の活躍の場として注目の対象になる。

最高評議員（行政府）、及び同盟裁判所判事（司法）を含む同盟政府公務員に対する弾劾裁判では、下院の単純過半数の賛成に基づく訴追を受けて上院が裁判し、上院2／3多数の賛成により弾劾対象者を免職できる。

【国民共和党】（NRP）

ロイヤル・サンフォードが総裁を務める第一党

中道右派の国民政党を標榜しているが、良い意味でも悪い意味でも多様な包括政党である。

成り立ちは古く、伝統的に各共和国独自の政党から同盟議会への進出の受け皿となっている。

その為、「小上院」や「利権の分配所」と言われるように派閥争いが著しく、総裁の権限が強いが総務会や幹事など党役員の意向が反映さ

れやすく、腰が重い面もある。

近年はタレント議員や著名な軍人、官僚上がりなどが構成邦議会を経験せずに直接国民共和党から出馬する若手が増えているため、党内の派閥抗争の激化のみならず、各方面から非難されながらも継承されてきた地方党人のノウハウが失われつつある。

・地方党人派（保守本流）
ロイヤル・サンフォードが率いる派閥。上述のように多様な構成国の状況により意思決定が遅く、結果として利益分配の為の派閥となっているが、総務会や政調会において巧みに地方と同盟政府の間で調整を行ってきた。保守政党としての国民共和党の本流であるが、防衛戦争と戦火による地域間格差拡大により、対応しきれていないのが実情である。

中央派（保守傍流）
トリユーニヒトをホープとする派閥。退役軍人と官僚、財界、メディアタレント出身が主体となった派閥。選挙と政局に弱く、地方党人派と連帯して勢力を保っていたが、政局に強いトリユーニヒトと発信力が高いウインザーが主導権を争っている。

【自由党】（LP）
ジョアン・レベロが党首を務めている。

都市政党であり、金融や財界、そして知識人達の政党。

国防費の増大からスタグフレーションを恐れており、均衡財政論を唱えている。

イゼルローン要塞の攻略を強く求めている者や、小同盟主義として地方政府を独立させて改革を行う反戦自由主義者などがいるが、概ね（都市部から見た）現実主義路線を採用している。

都市政党ではあるが故に党の統制という点では最も優れており都市部出身の同盟弁務官を含め常に一定の強固な勢力を維持している。

・正統派
個人主義的ハイネセン主義を掲げる自由主義団体、小さな政府を志向する。

・民権派
共同体的ハイネセン主義との和解を目指し、機会の平等のための修正主義を志向する。反組合のホワイトカラー労働者などからも支持を集めている。

【労農連帯党】（LASP）

ホアン・ルイが中央執行委員長を務めている、地方を主体とした中道左派政党。

フリープラネッツ労働組合総連合と自由農民組合連合会が巨大な支持基盤。

地方とつながりが強い為、親軍路線だが「良い軍は豊かな国民から生まれる」と「民力あってこそその軍」と唱え兵卒の待遇改善運動や地方への財政出動を唱えている。

一方で「総連合」ともども民需産業と軍需産業や地域間の対立に振り回されている点では国民共和党本流と似た悩みを抱えている。

組合派Ⅱ労働者主権を唱える修正主義的派閥。幅広く支持を集めているが従事する労働者の数から大企業の問題などが中心となりがちで地方では弱い。

中道派Ⅱ公共系の労連や退役軍人左派等が中心幅広く漸進的な改革を進めていることから無党派層から徐々に支持が伸びている。

地方派Ⅱ地域産業の中小企業や左派団体から支持を集めている党派、構成邦独自色が強い労農系政党の基盤が多い。

【主権者自治連合】(SAU)

旧国民共和党系や同盟政党に加盟してない政党らが連合して生まれた地方分権派政党。

同盟政府から構成邦政府への権限・財源の移譲を求めている。

永年野党ではあるが、地方議会たたき上げのベテラン政治家達が党组织を支えており、法案の修正などで巧みに立ち回っている。

イゼルローン要塞建設後から強まる同盟政府の権限や増税などにより、主要政党への不満から支持が高まり、現在は第四極とまで言われるようになった。

【反戦市民連合】(ACU)

バーラト共和国を中心とした反戦派政党。

弱小政党であるが反徴兵制などを訴えており、近年徐々に支持を伸ばしている。

【人民防衛運動】（PMDA）

亡命者受け入れの厳格化、反ブルジョア、反平和主義、反個人主義的ハイネセン主義等を掲げる国粹主義政党。

イゼルローン要塞の早期攻略のための軍拡、国民皆兵、同盟政府への権限集約などを掲げる。

【無所属】

自由惑星同盟とは強大な国家なれどその内実はいうなれば千差万別の構成共和国によって成り立っている。主要党派に属さぬ彼らを結束なき有象無象と笑う事は簡単であるが、同盟にはフェザーンやオーデインのインテリゲチアの哲学では思いもよらぬ『理由』が根付いている。その『理由』が、今もなおその地に住まう人々により支持されているのであれば、軽率に笑う者は痛い目を見るだろう……

【同盟弁務官総会】

自由惑星同盟の上院、自由惑星同盟構成共和国の代表者たちによって構成された議会。

それぞれの「共和国」から同盟弁務官が3名ずつ選出されており、党議拘束は原則的に存在しない。任期は6年で2年ごとに3分の1が改選される。

最高評議会議長指名人事については下院に発議権があり、議長と下院に「助言と同意」を与える権限は上院が保持している。弾劾裁判においては下院による訴追に対して上院による裁判と役割が分担される。予算案および関連法案については下院に発議権がある。予算案を含むすべての法案が成立するためには上下両院での承認が必要であり原則として対等である。

【民主主義の縦深】

通称【縦深】は同盟弁務官総会（上院）独自の院内会派であり、イ

ゼルローン回廊に近い【交戦星域】の構成国選出同盟弁務官達による会派。

強固な地域主義の権化であり、上院院内会派としては異例の団結力を持っている。

彼らの出身は『銀河連邦サジタリウス準州』が発端となったロストコロニーが多いのが特徴である。

またほぼすべての国がコルネリアス1世の大親征以来、最前線として多くの血を流してきた。彼らの前で『距離の防壁』を口にしたものは勇気がある人間というよりもサイコパス的な感性の持ち主と周囲からみなされるだろう。

会派としては異例なことに3分の1——つまりほぼ全ての構成邦が一人の弁務官を安全保障委員会に送り込んでおり、安全保障体制の構築、復興支援を求めている。

彼らは——前線として同盟政府の支援を必要としている事もあり——ほぼ全員が大きな政府によりコミュニテイとして人々の自立と自尊を支援する共同体的ハイネンセン主義を基幹とした政治思想を抱いた労農連帯党と保守的な国民共和党系の弁務官で構成されており基本的に親軍路線である。

【自治政策改革倶楽部】

バラト共和国を中心とした首都圏と【交戦星域】の中間に存在する構成邦を中心とした最大会派

サンフォードの現状維持路線を支持しているが【縦深】と連携する事も多い。

数が多いが故に会派としての方針をまとめきれず自主投票となることも多く。一方で構成邦政府とのやり取りを通じた横のつながりも強い、緩やか故に複雑怪奇な会派。

良くも悪くも【同盟上院】の象徴ともいえる特徴を持つ。

【自由の同志達】

【バラト首都圏】を中心とした構成邦を中心に構成された院内会派
各共和国の自立と同盟政府の減税、過剰な権限集約への反対を掲げている。

事実上、自由党の別動隊

【通商政策研究会】

フェザーン航路沿いの都市国家群を中心とした会派
同盟政府からの分権化による構成邦への負担軽減を求めている。

【上院無所属】

同盟弁務官の中でもそれぞれ国家の便益を代表するのであれば会派に属する必要もない。

同盟弁務官たちの少なからぬ割合は常に会派とは距離を置き、個別の議案について、投票までの間の時間と弁務官同士の関係性を利用して自身と国家の利益の為に動き周り、周囲を牽制している。

彼らを見れば同盟弁務官は議員であるのと同時に諸共和国の外交官としての面を持っているのだと納得するだろう。

【著名な戦闘】ヴァンフリート4Ⅱ2防衛戦

【著名な戦闘】ヴァンフリート4Ⅱ2防衛戦（1）→故に元帥は招集した→

——アスターテ会戦より2年ほど前、宇宙歴794年2月初頭のことであった。

帝国軍艦隊司令部は紛糾していた。

……：：：：ゴールデンバウム朝、艦隊総司令部。 “艦隊総司令部” と呼ばれているがその実態は複雑怪奇な帝国軍の官僚と権勢政治家が作り上げた軍組織をそのまま縮小したかの如く複雑で入り組んだ権限と影響力を行使され、行使する機関である。

だがその役割を（艦隊司令長官や参謀達の愚痴と悲哀と建前を切つて捨て）端的に語れば遠征軍の指揮統括と “それに付随するその他諸々” である。

「グリーンメルスハウゼン子爵が所領の軍を率いて我々の一翼を担う

かの老人は由緒正しき生まれであり我らがカイザーの若き頃から公私を支えて来た忠臣であるが——あー……すでにご高齢であり、常在戦場となる前線での働きに対する熱意は衰えておらぬが、体力が追い付かぬだろう」

色々、の一つが建前としては帝国軍予備部隊である貴族私領軍の戦力評価である。私領で養われ、練兵に励む兵であるが、貴族が自身の私財で書類の通りの兵力を賄えるかというとは必ずしもそうとは限らない。

無論、それでも彼らは練兵せねばならない、帝国政府の官僚貴族達は虎視眈々と派閥争いから脱落する輩を狙っている。それでも自治権を保持するための “実力” を担保するために赤字を垂れ流すのは耐えきれないのも事実だ。

その矛盾を解決する制度として『私掠権』が存在する。これは海賊や軍閥が跋扈した時期の銀河連邦末期時代からの慣習である。（ヴァンフリートの戦場清掃の作業員が得る “ボーナス” もその慣習の名

残りである)

海賊の跋扈に対しこれを広く認めたことで地方軍や企業警備部隊の独立性が高まり軍閥化が手を付けられなくなったという致命的な欠陥を無視すれば——前線に立てば利益を得られる制度はルドルフ台頭の契機であり実力主義の気風と合致していた——というよりも本人の成功体験の一つである——がゆえに銀河帝国としても立身出世の登竜門となり、やがて門地貴族制度へと習合された。

古き良き、と評する時は道徳は建前を守り、建前が道徳を守ると語られ、旧弊的で悪しき、と評する時は不徳を建前が覆い隠し、建前を腐敗を覆うものとして既得権益者が守る、と語られる。端的に言えば双方ともに真実であるが同盟市民——特に「交戦星域」の人間からすれば「人狩り」あるいは「海賊」として恐れられているのがこの制度である。

だがしかし——

「そもそも将校すら充足されず、60年近く一度も実戦はおろか訓練もまともにしていない有り様ではないか」

若手参謀の一人がうめき声をあげるのも致し方ない。

大貴族はともかく弱小貴族にとってはマトモな艦隊すら持っていないことすら多い。グリンメルスハウゼン子爵はそれなりの門地をもち、郎党を含めれば艦隊の数は巨大であるが、その巨大な艦隊はちよつとした骨董品を慌てて再整備したようなありさまである。

「そこを批判するのは筋ではないだろう」

貴族当主でもある古参参謀の一人は苦笑する。

熱心なのは強大な閥に属する「熱心な」貴族か回廊近くに所領を持ちそれを食い扶持の一つにする「野卑な」貴族、そして軍功を金で買う連中が雇用する「傭兵」くらいだ。この参謀も爵位もちであるが正規軍の役職から離れた私兵隊を私財と投じて鍛えたいかといえば否である。

「わざわざ出征を求めなければ批判されるまいよ」

と小声で吐き捨てる若手参謀の足をシュターデンが蹴つ飛ばすのをミュッケンベルガー元帥は見て見ぬふりをした。

年を食い貴族社会の一員としての分別を軍事的合理性の上に乗
りした者たちは年若い幕僚の“軍事的合理性に満ちた”眩きに諧謔
を見出し、くすぐったさを感じつつ、重々しい権威を張り付けた顔を
崩さず聞こえぬふりをして言葉を継ぐ。

「カイザーも最後に軍功の一つでも与えてやってくれ、とのことだ。
相応の場を整えるのも御役目よ。説明を」

シユターデンはミュッケンベルガーが先ほどの“注意”を見て見
ぬふりをしたことに気づいていないかのようにいつもの講義をする
かのような口調で作戦の説明を開始した。

「我々が戦場として選定しているのはヴァンフリート星系と叛徒ども
が呼称する星系です」

「理由は何か」

「この星系の特徴は航宙管制が困難であること、小惑星帯などで大規
模艦隊運用が妨げられることです。ですがこの地を押さえることに
は非常に大きな意義があります」

「逆に言えばこの星域の敵艦隊を掃討して足掛かりとなる拠点を築け
ば維持はそれほど難しくないこと。」

そしてこの宙域の叛徒どもが逃げ込む拠点の一つであることです」
よろしい、と艦隊の最高責任者は首肯する。

「拠点を築けば我々は叛徒攻略の大きな足掛かりを得ることになる。
その役目をグリーンメルスハウゼン子爵に担ってもらおうではないか」
威風をまとった元帥の発言も空々しく響く。

——実際は面倒な老人を隔離するためのものだ。負けぬように戦
うしかあるまい。

そうした空気が満ちた総司令部は出征の決定に際し、意気は低く及
び腰であった。

それから半月後、幕僚陣による宮中政治と閥閥均衡、そして能力評
価を複合した複雑極まりない評価基準による人事パズルの結果を片
手に、ミュッケンベルガー元帥は一部予備軍を含めた銀河帝国宇宙軍
にオーデインへ招集をかけた

オーディンでの会議からひと月ほどが過ぎた宇宙歴794年3月初頭、ヴァンフリート民主共和国首都要塞コロニー「マンデラ」が人民元帥府では国家安全保障会議が開かれていた。

人民元帥以下、ほぼ全員が軍服をまとい、危機感に満ちた顔つきである。

「帝国軍の次期出兵の目標がヴァンフリートへの侵攻という話をフェザーンの同盟情報部より通報があった」

参謀総局総長のンジンガ・キルアンジ大将が重々しく口を開く。

国軍としての席次は2位、同盟全体を見回しても珍しい女性の将官であるがその声と顔つきは戦塵で痛めつけられたことがある事実を誇示している。

「馬鹿な」「連中はあの【大侵攻】以来、ここに手を出すことは諦めたはずだ」

ざわつく人民政府中央委員達の中で運輸担当委員がぼそり、とつぶやく

「・・・4112の後方拠点が漏れたのでは？アレは我々の経済に多大な恩恵を齎したが、我々の公的な流通以上に流通が増えたことは外からでも観測できる」

ヴァンフリートは豊かではない、さらに言えば食糧や医療品などの輸入と金属資源加工品のほか、実態としてのやり取りはもの寂しいものである。

「帝国に機密が露見した可能性は否定できません。であれば事態は我々の手に負える物ではない。アスターテと同盟軍に避難支援要請を出しましょう」

「そう簡単に本国を捨てるつもりか!!」

「国防担当委員として申し上げますが、同盟軍との連携があったとしても現在の要塞と保有する宇宙軍のみでは帝国正規艦隊相手に万一があつた場合は——」

「要塞を放棄した場合に乗っ取られる危険性を——」「人民の居住区であるぞ！これを捨てた場合はわが政府の統治能力は——」「政府の存亡は要塞プラントではなく人民と現有兵力を——」

「経済担当として発言するが採掘艦と工業プラントを放棄するのは——」

「しかしですな、国防担当の発言も間違いではない、内務国家憲兵隊を予備軍として動員したとて要塞へ陸戦隊の強襲を受けた場合——」

あわただしく意見を交わす政府中央委員達を見て、人民元帥は唇を引き結ぶ。

「中央委員諸賢は忘れていようだが——」

キルアンジ参謀総長が口を開いた。

「我々が判断するのは『勝つか負けるか』ではない。戦うか国ごと退くかの話であるよ。アンタらが仮にも背広の代わりに軍服をまとう軍人としてそこに座っているのならば覚えておくが良い。そして戦うならばあらゆる手段を取りここを保持するしかないのだ。それが防衛戦争というものさね」

先程までの喧騒が消え去る。

「人民元帥として結論を述べる」

重々しい声が静寂を打ち破った、モハメド・カイレが口を開いたのだ。国家の中枢に連なる者たち、全ての視線が最高統帥者に注がれる。

「我々には同盟市民の、そしてヴァンフリート人民の財産と身心の安全を保障する義務がある。そしてその為にはイゼルローン要塞は無力化されねばならない。」

であれば、帝国軍の侵入は断固として打ち払わねばならぬのは必然である、だが我々は戦力が不足している、そして時間はない。ならば——同盟としての中央への働きかけのみならず、戦力を動員する」

「我らが指導者、それは一体——」

「構成諸邦へ軍派遣の要請を出す」

「……それは復興ではなく帝国軍との交戦を踏まえた行動ということでしょうか」

呻き声が響く、同盟軍と異なり構成邦軍が越境することは異例である。もちろん【交戦星域】では決して珍しいことではない。ヴァンフリート人民防衛軍にとっては【年に2度の繁忙期】があるくらいだ。

だがそれは【防衛任務】ではなく【人道支援】、国防ではなく航路の再整備や本土に被害が及んだ際の復興支援が主軸である。当然である構成邦軍は同盟軍よりも財政、人的資源において弱体であり地上軍は精兵であろうと宇宙軍も船団国家であるアスターテ連邦や小惑星掘削艦や工作缶を保有するヴァンフリート民主共和国、軽空母艦隊擁するパランティア連合国など一部の例外を除けば事故救難や警察行為を目的としたものであって【戦争】に耐えうるものではない。（これらの国は成り立ちや国家形態から自然とそうなっている）

彼らの神髄は地上軍にある。帝国軍は地上軍ありきでその輸送の為に宇宙軍が生まれたが同盟軍は構成邦間をつなぐための宇宙軍を集約し、それを同盟政府の権力の源泉とした。

逆説的に言えば本来は地上軍は構成邦が担うのものなのだ——この100年を超える戦争で同盟地上軍にも莫大な資金と予算が投じられているのだが、それでも構成邦軍、特に地上軍は同盟軍の予備役として戦地において支援にあたることも多い。

「そうだ、邦間調整担当委員、イロンシ中将」

「はい、閣下」

交戦星域間の支援活動や避難民の移動などを担当しているイロンシ中将が立ち上がった。

「仔細は任せる、また、ヴァンフリート人民元帥の名の下に【交戦星域】首脳会議の臨時招集を要請する。」

貴官と関係部署には周辺国への増援要請に際する会談の準備を命ずる。貴様が主導して根回しを進めろ」

敬礼を返す若手委員にうなずき、安全保障会議に参加した高官達に厳しい視線を向ける。

「ヴァンフリート民主共和国全土において人民元帥の名の下に予備軍の招集、およびヴァンフリート民主共和国全土、全人民に対し戒厳令を布告する。これはすべての人民と人民の資産を守るためのもので

あり、真正に可及的速やかに執り行われるべし」

——最高指揮官の令を受けて並ぶヴァンフリート政府高官達が立ち上がり、そろそろと最高司令部を後にする。

人民元帥の結論は金科玉条、決断が下れば如何なる議論も不要、それこそが喉元の刃を見据え続けたヴァンフリート民主共和国の戦時における統治機構であるからだ。

【著名な戦闘】ヴァンフリート4Ⅱ2防衛戦（2）〈交戦星域首脳会議〉

人民元帥が【交戦星域】全土へ首脳会議の特例会の招集を要請してから5日後のことである。アスターテ連邦共和国元首であるグルエ・グラスはパランティア連合国首都、ムンドブルグの高級ホテルにいた。

予定時刻の1時間ほど前、彼がいたのは会議を行う部屋の一階下にあるバンケットホールである、そこでは構成邦首脳たちが飲み物を片手に歓談している。

正式な会談が行われる場には今、事務局員達が右往左往して手筈を整えているはずだ。

一見、和やかなようであるがこの場で話が進展することもあれば何かの重大情報が転がり出たりもする。ならば正式な会談を行えばよいのではないかといわれそうであるがそのような場ではできない話をするからこそ毎度設けられる場なのだ。

昨年いきなりティアマト民国議長の座に殴りこんだ素人政治家タロットが此度の騒動の発端にして被害者であるカイレ人民元帥と歓談している。

「ありがたい話だ。とはいえ戦後の被害復旧も考慮に入れて——」

「ああもちろんだ。必要なのは発信であって君の国への支援自体は人道に則り——」

「ふふふ、君のビジネスマンとしての履歴書の次は政治家としての履歴書の第一筆に記されるとは——」

「ふむ」

実際は別室で実務者同士の詰めがあるのだろうがヴァンフリートへの食糧支援はティアマト民国にとって珍しいことではない。ヴァンフリート革命を引き起こした原因は食糧輸入地域であったヴァンフリート工場プラントにナイナーニエン元帥と私兵隊が雪崩れ込み、食糧輸入先であるティアマト星域の農業特区を支配しようとしたか

らである。ハイネセンが忘れ去られた回廊を再発見するはるか以前、ルドルフによりオリオン腕で大粛清が行われている最中の頃であった。

「久しぶりだなハンソン首相、そちらの“陛下”は壮健でいらっしやるか」

グラスがからかうように言うとしろりと視線を向けるのは上質なスーツをまとってもどこか金気のおいがする老人——アルレスハイム左派の長老にして首相、リツカルド・ハンソンである。

「陛下はやめてください大船団総裁閣下。ブレジデ・オブ・グランフリット我が国の統領は元氣にコンスルやっております」

元氣すぎるほどに、かね。とグラスが言う。とハンソンはわずかに口元をほころばせる。

「そうか、政務についてからはお会いしてないが、彼女は話していて楽しい。落ち着いたら一度そちらに伺いたいものだ」

ええ是非とも、とハンソン首相が返す。

「ところで……デルメルのマルティノス卿は——来ていないか」

反戦主義のデルメル平和共和国の指導者はマルティノスと呼ばれる亡命者系の“矢玉を知る”老人である。成り立ちからして「コルネリアス大侵攻」における帝国系を中心とした“内応者狩り”の被害者であり、更に地下資源をめぐる帝国との戦争において本土を幾度も戦場とされたことから、同盟中央との関わり、更には本土防衛の為に徹底抗戦を唱えている【交戦星域】主流派への感情は芳しくない、特に亡命者系の宗主を自負するアルレスハイム王冠共和国とは折り合いは良くない。

反戦主義と反中央、親フェザーンを組み合わせた価値観、そして閉鎖的な資源輸出国。帝国軍との関わりすら築いている——。

その立地と歴史から独自路線の構成邦が多い【交戦星域】においても歴史的経緯からして独特の国である。

「“体調不良”だ、まあ面子というものもあるでしょうな。パランティアで行われる以上は尚更に」

グラスは重い溜息でハンソンの返答に対する感情を示す。

グラスは軍人上がりの国民主義者^{ナショナリスト}であり、〃自国を守る為に他国の軍隊を入れるなど論外ではないか〃と考えているがデルメルの歴史を鑑みるにイゼルローン要塞という存在の影響力の強大さ故に〃国土を捨てた〃自国と比べるに如何なものか、とも自分の意識にある批判意識が囁くのであった。

「失礼します、他の方にも挨拶を」

「ああ、またあとで」

グラスの視線の先にいるのは 3人の男女である。

「ですが豊かになろうとする際に国防の本義を見失うことはあつてはなりません」

「ええまさしくその通り、故にこそ我々は祈り、伝えることが——」

「こんばんは、お二人とも。お久しぶりです」

「お久しぶりです、グラス総裁」

栗色の髪を波うたせた壮年の女性が口を開く。エル・ファシル首相のルイーゼ・ペイリンだ。

地元マスメディアのジャーナリスト上がりでありメディア露出の高さと庶民派政治家としての人気から〃フライングボール・ママ〃と親しみを呼ばれるほど人気が高い。保守タカ派の政治家であるが地方党人派の先代首相のスキャンダル追及で人気を得た為、トリユーニヒトやウインザーの所属する中央派に近いと評判である。

「こんばんは、総裁閣下。貴方にも世界の平穏がありますよう」

地球統一政府が樹立する頃にはほぼ壊滅していた啓典教墨家会衆派とやらを信仰している奇妙な国、大夏天民国の元首、フー・ジャオレン天民総統である。

大夏天民国——銀河連邦辺境部に生き残つた宗教共同体による農民反乱から生まれた国である。元首である総統という誤解を招きかねないが、天民総統はグラスが務めているアスターテ連邦総裁も同じ〃President〃であり三権（大夏天民国ではこれに監察と人務を加えて五権に分割されていであるが）の上に君臨する元首という点では制約も権限も似たようなものである。

「この度はペイリン殿が議長でしたね」

「ええ、午前中の実務者間協議の報告を受けておりました、彼が同盟軍代表者になります」

ペイリンの傍に控えていた同盟軍人が手を差し出す。40代前半の少将であるが浅黒い肌に顎鬚をのびした姿は堂々としており実際の年齢よりも重厚さを醸し出している。

「貴官は——」

「オブザーバーの統合作戦本部統合運用部計画課長のオスマンと申します」

「この緊急時にハイネセンポリスからわざわざ、ご苦勞ですな」

オブザーバーというが同盟軍の実務者として送り込まれたということか——グラスは素早く脳内でバーラトの意向を打算する。

「いえいえ、構成邦の皆様のご協力があっての同盟軍であります」

今回の首脳会議の目的はヴァンフリートの要請に対する最終的回答のみならず同盟政府へ向けた圧力としての役割もある。ペイリン首相が議長役を務めるのはトリューニヒト国防委員長との親交があることも理由の一つである。

「我々としても同盟軍との連携が必要です。ヴァンフリートの同胞を救うのみならず、ですから」

ヴァンフリート4||2基地——第6次イゼルローン攻略戦における奇襲の要となる基地。

現在は公表されていないがシドニー・シトレの第五次イゼルローン攻略戦においてイゼルローン要塞の一部を損傷させ、昨年にはロボス演習計画による【交戦星域】における大規模演習による示威活動と海賊（帝国軍私掠艦隊）掃討作戦により、会戦規模の兵力の侵入を封じ込め、非有人宙域における戦闘が続いている中でアルレスハイム星域会戦から2年ぶりに有人宙域が戦場になったことで首脳会議の開催も当然のことである、と受け止められている。

「イゼルローン要塞の攻略は重要です」

フー天民総統がオスマン少将の言葉を引き継いだ。

「つまりですな、我々は帝国への恭順の為に非攻を唱えているのでは

ないのです。敵を防ぎ、国民を豊かにすることこそが戦争に勝つための第一義、豊かなればこそ軍も強大になるのです」

オスマン少将は必要以上に実直な態度を示した。

「……非攻を唱えていた貴国やいまだ復興途上のエル・ファシルも義勇軍の派遣に乗り気だとは」

大夏天民国はイゼルローン要塞が生まれる前、「コルネリアスの大侵攻」以後から勃興した復讐主義極右運動に対し代々“非攻”を唱え過剰な軍国主義に反対をしてきた。一方で防衛戦においては血を流し、軍への協力を惜しまない。憂国騎士団等の極右団体からは嫌悪され反同盟カルト宗教国家と呼ばれることすらある。

グラスも偏見を抱いていたが実際に交流すると風変わりではあるが宗教国家の指導者である彼らは理性的な打算により巧みに宗教道徳と現実政治家の顔を使い分けている——だから嫌われるのだというのも正論であるが。

「シドニー・シトレ元帥は2年前、要塞に傷を残しましたが、であれば次に賭ける価値は十二分にあると私は考えます。ええその通り、この度は異例続きのようですが、これも上帝が我々に与えた試練です、明確な意図をもち、無辜の民を略奪し、征服しようとする拠点とする要塞があるのであれば——その侵攻を食い止めねばなりません、阿?!」

祈りの言葉を唱える天民総統へ領きかけ、グラスはペイリンに尋ねる。

「そちらもまだ苦しいでしょう。それに構成邦軍を動かすのを民意が認めるとも思えなかった」

ぼかしているが連立相手のエル・ファシル進歩連盟のことを指しているのは間違いない。

「ビョークランドは嫌な顔をしていましたが奴が嫌な顔をするのは通るとわかっていいるからよ。蛇口の栓を締められず、水を浴び続けている愚行に終止符を打たねばならないのは進歩連盟も理解しているわ」

大規模な装甲に守られた侵攻拠点、エル・ファシルですらも陥落するそこにある危機、同盟政府に解決を求め、必要であれば強力に後押しをする。悲願というものはそういうものなのだ。

ペイリン首相は“進歩的知識人達”から蛇蝎のごとく嫌悪される保守タカ派だが議会を主導する右派の指導者にふさわしくその政局眼は鋭い。極右極左の同盟懷疑主義政党が躍進する中でリベラル派の進歩連盟を結成した進歩連盟総裁ビョークルンドと手を組み、中央政府の連立三政党へのパイプを強化したやり手政局家である。

ビョークルンドは自由、労農、双方の左派を糾合したがペイリンは親同盟保守層を固めることに成功した。だがそれはこの二人の能力が優れていること以上に——エル・ファシルの中央に対する不信任が高まっている圧力を受けた必然ということでもある。

「原案は既にまとまっており、サンフォード議長とS N Sの国家安全保障小委員会支持をとれる形で編成を行いたいところですよ」

オスマン少将 は軍中枢の軍令畑を耕してきた軍官僚らしく顎鬚を撫でながら若手政治家よりも政治家らしい口調で構成邦首脳陣に鋭い観察の視線を飛ばす。

「今回は予備軍として構成邦軍の動員を行う事は同盟政府の為ににもなる、自由党さえ黙らせれば吞ませることは容易いでしょう」

そうですね、と頷く構成邦首脳の2人にオスマンは髭の下で苦笑する。情報通信、金融、メディアなどを中心に「交戦星域」経済を牛耳る大企業が集うパラソティアを除く「交戦星域」の大半は“自由党嫌い”が根付いている——より正確に言うると個人主義的ハイネセン主義嫌い、である。いわゆる自由党系でも社会全体のみならず構成邦間でも貧富の格差が広がる中でより進歩主義的プログレッシブな修正ハイネセン主義が広がっている。

「ヴァンフリートは——難しい邦だ。だが今は運命の悪戯と幾つもの都合と自由惑星同盟としての合理性と人民らの不断の努力により数百万の人々が暮らしている。そして今、あの忌々しいイゼルローンを今度こそ叩き潰すための鍵だ。あのモハメド・カイレが我々を招き入れる決断をしたのであれば、尚更に」

モハメド・カイレの交戦星域における評価は良く言えば“食えない千軍万馬の指導者”、悪く言えば“バーラトと交戦星域を渡り歩く狡猾な自国優先主義者”といった見解が主流である。戦場清掃という

インフラを一手に担うヴァンフリートの特権を巧みに使い動いている。

その人民元帥がヴァンフリートに構成邦軍を招き入れヴァンフリートの為に血を流させる。

——その意味は大きい、今はわからずとも、きつと。

グラスの内面にある自身でも意識していないなにかがそう決めつけていた。

「ヴァンフリートは独特なところですよ」

佐官時代に数度前線の参謀を経験したオスマンは苦味のこもった顔で言った。【交戦星域】から離れた人々、特に宇宙軍の兵役を経験した人々にとつてヴァンフリート人は好悪が入り混じった存在である。彼らは危険を顧みず、戦場となった場所を清掃し、戦死した同胞の死体を探し、そして彼らの血税の残骸のみならず時には戦死者の私物を【ボーナス】として売り払うのだ。

オスマンが士官学校で交友を持った友人のうち、十数名が戦死し、そのなかの数名は幸運にもヴァンフリート人の手でハイネセン・ポリスに“一部”が戻ってきた。

「そうであらうな」

オスマンの感じる苦味はグラスも覚えがある。ヴァンフリートの【役得】を寛容に許す気分にはなれない——割り切れない人間を批判することも難しい。ヴァンフリート人と握手を交わすことが多くなってからも遺族の嫌悪は理解できる——貧困地域に生まれたヴァンフリート人が無意識の差別意識に対する怒りも理解できる——そしてその双方の側にアスターテ人は立たない、後ろめたさを感じないかといえば嘘になる。

場の空気を一切読まない胴間声が同盟宇宙軍将校団の鬱屈とした空気を消し飛ばした。

「ヤアお三方!! いいニュースだ! 私も既に元帥と話をし、素晴らしい取引をした! ヴァンフリートの市民達は素晴らしい食事と勇壮なティアマトの青年達を迎えることになるだろう! 卑劣な侵略者には悪夢の日となり、我々にとつては偉大なる日になるだろう!!」

“ビッグデイナー” ヒューイ・タロットである。ショービジネスマンにして食品加工業者、“古き良きティアマト人”にしてティアマト帰郷主義者の大神輿としてティアマト政府参事会の議長席に飛び込んだお騒がせ政治家だ。

「レーシヨンの納入ですか？タロット議長」

オスマンはニヤリと笑いながら話しかける。

「ただのレーシヨンではない！君たちの兵が普段の糧食に文句をつけるようになったら申し訳ないな！」

H A H A H A H A H A H A!!と笑うタロットをちらりと見てから、ペイリン首相は笑顔を引き攣らせる。

「それ初耳なのですが、決議文への加筆が必要です、オスマン課長、人民元帥閣下と少々打ち合わせを……」

「ああ分かった、もちろんだ——おつと引つ張りすぎだつて、痛い、痛——」

残された男二人、天民総統と大船団総裁は苦笑を交わす。

「大変だな」「ですが実績が増えるのであれば良いことです、中央へ訴えるためにも——」

グラスはちらりと、とフー天民総統を見る。大夏天民国は独立独歩の国だ。ドーリア星域に近く、エル・ファシルよりも後方であるが復興への派遣には熱心である。だが一方でイゼルローン攻略には腰を引けている——損害による防衛体制の劣化を指摘しているのだから結果からすると間違つてはいないのだが——

「この度の騒動、貴国はいかがなさるおつもりで」

「正墨旗軍から旅を送ります」

グラスは息を呑んだ。

「最精鋭ですか」

正墨旗軍、防衛戦のスペシャリストであり、第五次イゼルローン攻略作戦の前哨戦である拠点設営においても先陣をきった経験がある。

「左様、この戦は名分が立ちます」

【交戦星域】はヴァンフリートやアスターテを筆頭に構成邦軍に力を入れている。

「我々は互いに国民に対する義務を負っています、ですがそれだからこそ隣人愛が必要なのです。兼愛交利、平等な愛こそが共同体を円滑に機能させ、皆に繁栄をもたらすのです」

「なるほど、倫理における古典は宗教であれば、確たる信心なき者にも含蓄を与える」

ニヤリ、と笑うグラスにフーは寛大な笑みを返した。

「であればこそ、我々の信仰は地球時代から変わらず続いておるのです」

啓典教墨家会衆派、その長い歴史に思いを馳せるように目を細めた。……原初の啓典の誕生からさかのぼれば5000年近くの伝統ある宗教なのだ。大夏天民国の主張を信じれば。

フーとの歓談を終え、今度はグラスが向かった先では老人と初老の男が部屋の隅で会話を交わしている。

「いえいえ、それはまだ早いですよ、ウチの“ダレイオス・プロジェクト”はまだ企画書が出来上がったばかりです——デネートリオ閣下はお耳が早い」

「いやいや、フェザン企業が出資をもちかけたと聞いておるが、タギーザーデ大統領閣下」

「ええもちろん、パランティアからの投資ももちろん歓迎しております、フェザンの投資は原資の充足に必要でしてな」

「うむ、であれば後ほどまたお話をさせていただきますよう」

先程とは打って変わり何やら景気の良い密談のようだ、とグラスは苦笑する。邦が変われば話の内容がころりと変わるのは自由惑星同盟らしいものである。

「タギーザーデ大統領閣下、デネートリオ連合執政閣下お久しぶりです」

「これはこれは、アスターテの！お元気そうで何よりですな!!」

何々と大笑するはタギーザーデ大統領、ムダンダム憲政共和国の大

統領である。

ムダンダム憲政共和国は伝統的な慣習法、それを取りまとめた憲法を頂点とする法体系で運営されており、構成邦の“神聖なる主権”の象徴であり同盟政府官僚とサジタリウス腕で法学を志す学生達から心の底から憎まれてる(?)国である。資源輸出国でありテイアマト民国の共同でバイオ技術にも手を出している技術と伝統の両立に熱心な国である。

「グラス総裁殿、お久しぶりですな」

皺を深く刻まれたいかにも老貴族といった風貌の男が会釈を向ける。連合国執政^{コンスル}デネートリオ2世である。銀河帝国ではなくその前身の銀河連邦財界大物(と主張している)の血を引いている。実際は銀河連邦中央の権力争いに敗れ左遷された身であろうが少なくともパランティア連合国が企業連合だった頃から上層部を担う一族であったのは事実である。

「お二人が話しているということは私も交ざった方が良いお話でしょうかな」

「いえいえ、デネートリオ閣下にもご説明していたところですが、まだ計画段階でしてな、目鼻がつけば運輸の方でご相談に与ることもあるかと」

「フェザーンが持ってきた話のようだ、であればさぞかし儲かるであろうよ」

デネートリオが顎をぐいと突き出しながら話すとタギーザーデは苦笑する。

「いやいや……」

デネートリオを始めとするパランティア財界人はプライドが高い。バーラトの大企業に規模は負けていても風下に立つことは嫌う。フェザーンは輪をかけて嫌いである――縁が薄い。何しろフェザーン人は名目上は帝国人でもある。彼らが【交戦星域】に居るのは不自然極まりないし、彼らが何かを目にすればそれだけで帝国軍相手の儲け話になりかねない。

それを分かったうえで出入りするのであればそれは帝国軍情報部

か貴族の私掠艦隊のついでに雇ったスパイか——同盟軍情報部を通じたバーラト大企業の嫌がらせである可能性もある。

まあ理屈をつけていてもオリベいら教授などは酒の席でバツサリと「交戦星域の人間は戦火の安全地帯にいる奴はみんな嫌いなんだよ、特にそれで儲けている連中はね」とバツサリと切り捨てているのだが。

デネートリトは鼻を鳴らし、話題を変える。

「まあこの商談はおいておこう。現場が動き出せばそちらにも話を持っていくかもしれぬがな。それよりも帝国軍だ！どこから漏れたのか、どの程度当たりをつけたのか調べねばならん。こちらの人選も考えねばならぬか」

人選、という言葉にグラスは引つ掛かりを覚えた。

「パランティアも派兵を？」「ケレブラントから単座戦闘隊を送るつもりだが……他も考えている」

タギーザーデはほう、と頷いた。

「帝国軍がどこで情報を得たかというのは私が思うに——」

とそこで定刻10分前を知らせるチャイムが鳴った。

「それでは【交戦星域】首脳会議危機管理対策委員会の臨時会合を始めます。

この度の臨時会合は、自由惑星同盟国内、特にヴァンフリートを目標と予想されている銀河帝国の軍事侵攻に際し、この非常事態に対応するため、人々が日々広域的に移動している【交戦星域】諸邦間での一層の危機管理体制の連携強化を図るべく、本日ここに緊急会議の開催を呼びかけさせていただきました。本日は現時点までに判明している最新の情報を踏まえながら、情報交換・意見交換を行った上で交戦星域首脳会議として統一的な方針と同盟市民へのメッセージを取りまとめたいと考えております」

ペイリン首相はジャーナリスト出身らしく流暢な口調で読み上

げた。

「それではこの度の臨時会合の主宰者であるヴァンフリート民主共和国元首、モハメド・カイレ閣下よりご発言を」

彼が出席する際には首班が座長となり、元首号には触れない。これもまた政治なのだ。

「出席者各位、および事務局員一同には緊急の招集にお集まりいただきありがたく思う。

率直に述べるがヴァンフリートへの援軍が必要だ。帝国軍にヴァンフリートを明け渡すわけにはいかない。どうか我が国のみならず自由惑星同盟全体の為にも各位それぞれ苦しい中であろうが、どうか御援助をいただきたい」

拍手が響く中、カイレは一礼して着席する。

「ありがとうございます、カイレ閣下。それではこの度の首脳会議に先立ち、実務者会議関係の報告書を——」

そして【交戦星域】首脳会議がいよいよ始まった。ハイネセンポリスにいる人間の尻を蹴るためにはるか数多の星の向こうにあるパランティアで——これもまた政治力学の方程式である。

【著名な戦闘】ヴァンフリート4Ⅱ2防衛戦（3）〜最高評議会VS同盟弁務官団〜

【民主主義の縦深】の役員たちが集まっている事を確認すると代表世話役のサウリュス・ロムスキーが口を開いた。

「やあ諸君、首脳会議は無事に終わったね、次は僕たちの番だ」

温和な笑みを浮かべたこの老人は【交戦星域】医療界の利益代表にして復興行政の専門家として構成邦を超えた知名度を誇る押しも押されぬ名士である。

世話役のリヴォフが力強くうなずいた。宇宙軍の艦隊兵站の現場を取り仕切ってきた強面の“輸送屋”である。

「ああ、ありがてえ！【交戦星域】首脳会議の決議が出たなら俺たちも団結して動ける、これならサンフォードの重いケツを蹴っ飛ばすのにちようどいいぜー！」

「本国が良い仕事をしたのであれば我々もよい仕事をするべきだろうな」

ハルラス弁務官はゆったりと頷く。高齢であり次の選挙では退任することを表明している。財界上がりであり交戦星域の産業復興の為に長く奔走してきた“古き良き”パランティアの政治家であり、その経済通の駆け引きから国会対策委員長を長く務めている。

「いいか、これからの予定を確認するぜ、とリヴォフは役員たちに視線を向ける。

「ヴァンフリートの弁務官陣はもう三人とも議長官邸に向かう、俺とロムスキー代表とアリシア幹事で議長公邸に攻め込むつもりだ。アンドンム政調会長には——」

白髪頭の老人がにこりと笑った。

「ああ彼らには私が話すよ、私の“弁務官”としての最後の仕事になるだろう」

ヴァンフリートのアンドンム弁務官は老練な軍官僚上がりの弁務官である。すでに二十年の曲がり角まであと一歩といったところである、

年齢はリヴオフとさして変わらぬ70を越した老人である。大過なく4期もの任期を全うし、ハルラスと同じくヴァンフリートの最先任同盟弁務官としての評判を守り抜いたまま政治家として表舞台から退ける果報者になるはずであった。

だがそこに想定外の大事な下りてきたのである。

「祖国の大事だ、ここに私がいたことを誇りに思うよ。まさか総会以外で”3人が揃う”事態が起きるとは」

同じ邦の弁務官は会期中でない限りは基本的によほどのことがない限り顔を合わせない。不仲ではなく同盟の政治問題、利害関係は複雑怪奇かつ広大な人類社会のあちこちに噴出しており同盟弁務官は（出馬を決定するまでの過程において各種支持団体や構成邦政府の意向も強く受けるが）個人の得手不得手を問わず各分野の委員会に分散することが多い、逆に言えば3名全員がそろうということは——たいそうな大事なのである。

「国防委員会事務局の要路には事前流しておいた、向こうでも情勢は固めている筈だ、うまくやってきてくれ」

アンドム引退後の次期政調会長の座が内定している政策通、リッツ事務局長が頷く。

「弁務官各会派の動きは私が探る、本当はアリシア君にも来てもらいたい」

ロムスキーはすまんね、と片手をあげた。

「トリューニヒトとやりあうなら共和党員のアリシア君がいたほうがいいのでね」

アリシアは頭を下げた。下院議員の経験もあり政調会次席兼国防部長として【縦深】と官界との窓口になっている。

「サンフォード議長初の戦争指導です、リヴオフ世話役のおっしゃる通り”ケツを蹴つ飛ばして差し上げる”べきです」

アリシアの言い草に役員たちはにやりと笑った。

現地政府が動いたのであればそれを忠実に執行させるのが弁務官の役割である、彼らはヴァンフリートのみならず第六次イゼルローン作戦への障害を断固として粉碎しなければならないのだ。

そして最高評議会議長官邸”オパール・ビル”にリヴオフ達【民主主義の縦深】役員団は“招かれ”ている。

「構成邦軍を同盟地上軍予備役軍として動員せよ、か」

サンフォードは同盟弁務官達が差し出した【首脳会議】の要望書に目を通し頷いた。

ロイヤル・サンフォード、自由惑星同盟有数の商品作物の産地であるシロン共和国を地盤とする政治家だ。

その長い政治キャリアのけして短くない期間地方政界に費やした男である。

現在、最高の顕職、同盟最高評議会議長に就任した割に同盟政界において顕職を務めてきたと素人目に見ることは難しいだろう。

国民共和党の政務調査会農政部長から始まり議員団総会副幹事長、國務委員会副委員長、政務調査会長、そして念願の地域社会開発委員長として最高評議会の席を勝ち取った次は党全国委員会副議長兼全国組織部委員長となった。

要するに党の裏方を長く務めてきたということである。“政策通”というよりも政界通”、“政務ではなく党務の男”などと評され、最高評議会議長になるよりも党全国委員長にでもなつてシロンの弁務官か下院議長あたりに遇された後は余生を過ごすのだろうと周囲は考えていた。リヴオフも当選の知らせに際し気の毒な奴だ、と内心呟いていた。

外見がそうした評判を強めているのではないか、ともリヴオフは思っていた。

サンフォードは国家元首というよりも、定年前の十数年を辺境への単身赴任に送り出された中間管理職止まりの勤め人といったような覇気のない男であった。

「羨ましいことだ、【交戦星域】の首脳部はネットワークが軽い。いや、そうせざるを得ないからそうなったのかな。諸君らはどう思うかね」

だが彼は田舎役場の出張所長ではなく自由惑星同盟の最高評議会議長である。部下は錚々たる面子となるのは自然なことである。

「【交戦星域】には伝統がある、闘争と生存で築き上げられた、ね」

とのんびりとした声で答えるのはウイリアム・カーティス国務委員長、構成邦間の調停・調整から同盟政府全体の行政管理や選挙の執行、対フェザーンを通じて帝国との裏交渉までこなす巨大な官庁を牛耳る男である。同時に副議長（副元首）の座を担い、同盟弁務官総会議長を兼務する。同盟弁務官の首席、同盟政界最古参の古狸だ。

「国防委員会としても【交戦星域】の手際の良さには驚くことも学ぶべきことも多いですな——厳しい指摘も数多くいただきますがゆえ」

国防行政を司る政権の花形、国民共和党の新風と注目され、称賛も批判もサンフォードの数十倍浴びせられているヨブ・トリユーニヒト国防委員長。

「——イゼルローン要塞の奪取は同盟の悲願であります、現状の問題を解決するに構成邦が尽力をするのであれば」適切な形で「協力せねばなりません」

自由党党首にして財政金融を握るジョアン・レベロ財務委員長、「【交戦星域】の天敵にして同盟民生物価の守護天使である。

「はい、そして本日はあくまで首脳会議の声明と弁務官方の提案に対する調整会議です。

国家安全保障小委員会^sにおいて承認が必要であることはお忘れなく」そして三党連立政権の調整を行う苦労人にして最高評議会評議会事務総局を司る「政権の番頭」サダノリ・マクドノー最高評議会書記。

「昨年の“ロボス演習計画”が11月に終了してから再び私掠艦隊が増大しています。

つまり——イゼルローン要塞は機能を取り戻したとみるのが妥当かと」

サンフォードの側近として保守派のトリユーニヒトトリベラル派のシトレの仲介を行い、議長安全保障補佐官パヴェル・カントロヴィチ。最高評議会議員の一部で構成される国家安全保障小委員会^sの運

営を担当する統計学者であり対帝国OSINTの重鎮でもある。

「軍の現場を知るものはみな、【交戦星域】の住民たちを頼りにしてお
ります、庇護の対象ではありませんが同時に頼れる友人でもある。まさ
に民衆共和制の在り方でしよう」

にこやかに語るのはただ一人軍服を纏っている黒人の男、シド
ニー・シトレ統合作戦本部長だ。最高評議会議長の保持する国軍統帥
権の権能を輔弼する中枢の面々である。

「我々は——」

ヴァンフリート民主共和国同盟弁務官、アンドムは最高評議会の
面々を相手にしてもゆつたりとした口調を崩さない。

「我々は世辞も論争も求めていない、求めているのは祖国の安全に対
する保障だ。その場しのぎではなく今後とも同盟領への侵攻を打破
しうる保障だ。ヴァンフリート人民の元帥たるモハメド・カイレとそ
の政府の代議者として、私は真正なる保証を求める」

「アスターテの弁務官として俺も同意する」

「ティアマト民国の弁務官として同様に、我々にとつても悲願の時は
近いのです」

本土を失ったアスターテのリヴオフとティアマトのアリシアも同
調した。

「エル・ファシルは——」

サウリユス・ロムスキー弁務官は温和な笑みを浮かべたままだ。

「——二度と侵されてはならない、そして帝国軍の侵攻に対し、我々は
運命共同体である、それだけは断言する」

サンフォードはぎこちなく——本人は重々しく、のつもりかもしれ
ないがリヴオフ達にはそう見えた——頷いた。

「トリューニヒト国防委員長、君はどう思う」

「国防委員会としては首脳会議の要請を重く受け止めつつ構成邦軍の
動員には反対します、手間はかかりますがより堅実な手段として同盟
地上軍部隊の動員を追加予算で行うべきです」

「追加予算があればできるのかね？」

レベロが疑わし気に尋ねるとトリューニヒトは片頬を吊り上げな

がら弁舌をふるう。

「軍は予算の範囲でしか動けません。しかし、予算をいただければ我々の仕事は確実にこなします。委員会部局と地上軍総司令部に概算と計画を作らせました」

シトレは一瞬、誤って唐辛子を噛んでしまったかのような顔をするがトリューニヒトは反応せず、洗練された手つきで端末を操作し、データがそれぞれの端末に表示された。

「……データ通りにいけば問題ねえな」

リヴオフは顎を撫でる。

「だが本当は慣熟訓練の期間はもう少し必要だろう、寒冷地だぜ？兵器の使い方すら異なる」

「寒冷地訓練は元より積んでおります、現地でも訓練を行いながら防衛準備を整えれば問題ないと参謀たちは判断しています」

そうかい、リヴオフは頷き、背凭れに身を預けた。

「リヴオフ弁務官のおっしゃる通りです。今から動員を始めるよりも、統合作戦本部としては、構成邦軍の動員の提案に賛成します。戦闘部隊の司令部を4||2基地に迅速に配属させ、同盟軍の生え抜きが構成邦軍と現地駐留軍の合同で訓練と組織再編を進めます」

シトレは如才なく口をはさむ。

だが財務委員長のレベロは冷ややかな反応を返す。

「財務委員会としては反対です、必要なら現有戦力のみで対応できるのでは？わざわざ定員外の兵隊を動員し、訓練まで行う必要は感じられませんな。必要であれば派遣兵力から陸戦隊を下ろせば良い」

「宇宙軍の陸戦隊は重火力の運用経験は少ない、更に極地に近い寒冷地という特殊な環境における防衛戦に使うだと？筋が違うだろう、リヴオフ弁務官の指摘は軍隊を動かす疎かにしてはならない基本のキだよ」

トリューニヒトはレベロの意見をわざとらしく鼻で笑った。

「必要なのは“同盟政府の”地上軍だ。構成邦軍の献身には常々敬意を抱いているが周辺国の軍を掻き集めても運用の混乱は必須だ、自身の基盤の面子にこだわって正当な運用を損ない、構成邦軍の血を流さ

せるのは筋が違うのではないかな」

シトレはトリユーニヒトにもレベロにも反論せず目を瞑り沈黙している。

「トリユーニヒト国防委員長、言葉が過ぎるのではないかと」

カントロヴィチ安全保障補佐官が神経質そうに瞼をさすりながらいった。

「レベロ財務委員長に申し上げたいが同盟の予算はどうだか知らぬが我々の身命と財産はすべてイゼルローンにより——」

アンドム率いるヴァンフリート弁務官達がレベロに挑みかかる。レベロは丁重であるが反論の手は緩めない。堂々巡りの議論が始まった。

「いつもの”か、面倒だな。リヴオフ、トリユーニヒトの案をどう思う」

ロムスキーはリヴオフにささやきかける。安全保障委員会においても活動しているが彼の専門は医療支援や救援物資の備蓄、調達等の方面で前線の運用については素人である。

「俺は乗りたくねえがヴァンフリート次第だ。それに俺は運び屋であつて陸戦屋じゃねえからな……だがアイツのブレーションは陸戦と兵站屋が多い」

トリユーニヒトは宇宙軍エリートよりも自身も予備役将校として従軍した兵站畑、そして非主流派の地上軍、そして軍政背広組を重用している。

「統合作戦本部の統合性はあの御二人方のご機嫌次第ってことかね？」

ロムスキーの声に苦いものが混じる。

トリユーニヒトはタカ派勢力の華型議員として大衆人気が高いが、それに反して宇宙軍主流派からは人気が低い。個別の取り込みによつて派閥を作ろうとしているがけして上手くいっていない。

まあそれも当然かもしれない、トリユーニヒトは地方駐留艦隊に優先して予算を回すことで国防予算により”子分”の面倒を見ようとしているが、バーラトや首都圏出身が多い宇宙軍将校団主流派にとつ

ては好ましいものではない（出身地をさておいても出世の機会が少な
い上に面倒極まりない構成邦議会との折衝まで行わねばならない駐
留艦隊などいい迷惑であった）

「シトレと妥協した副案は流石にあると思うがよ……」

リヴォフの視線の先にはアンドム達とやりあうレベロを冷ややかに眺めている国防委員長の姿があった。

トリユーニヒトの冷笑はレベロに向けているように見えるが実際はレベロの強い推薦を受けて統合作戦本部長の任に就いたシドニー・シトレにも同程度の強さで向いている。

念願の国防委員長の座を射止めた途端に“相方”の人事案が自身の推薦はおろかサンフォードですらない、自由党案が採用された事で国防委員長の宇宙軍嫌いが加速したのではないか、とすら噂されている。

「シトレがレベロと組んで頑張った可能性があるならまずいわね？」

アリシアがため息をついた。アリシアもトリユーニヒトに“面倒”を見てもらったことがあるのは事実だ。

リヴォフは思考を巡らせる、そして今必要な大目標はイゼルローンを潰すこと、そしてその為に必要なのは第六次イゼルローン作戦の中
枢を担う4||2基地を守ること。

「同盟政府の常備陸軍を動かせるのは悪くねえと思うぜ、トリユーニヒトも全部通す気はねえ、こちらへの恩売りと派閥の面子を立てる為だ、呑めるところを呑ませつつブレイン達の面子がたてばトリユーニヒトは折れる筈だ」

トリユーニヒトの軍への影響力を鑑みれば構成邦軍の動員とは地上軍“予備役軍”の動員であり、常備軍を支える地上軍将校団にとっては面白くない。とはいえ構成邦の意向を蔑ろにした場合、恨みを買うのは自分であることも理解している。

であるからこそ常備軍の動員をタイムスケジュールに無理を入れてでも行おうとしているのである。

しかしヴァンフリート側はそれを手放しで喜べない、なにしろ戦場になるのは4||2基地ではなく“ヴァンフリート民主共和国”であ

り彼らは自動車や鉄道と航空機ではなく宇宙艦隊で襲来するのだ。問題はそこである、整理すればそれだけだ。

ロムスキーは頷くとヴァンフリートの弁務官のリーダーであるアンドンムと小声で相談を始めた。

「国防委員長の意見も道理ではありますが特に【交戦星域】の構成邦軍は構成邦間の交流も多く、予備軍としての運用を想定した演習も年に一度行うのみならず、実際に同盟軍の統帥下で動く経験も多々あります、問題ないかと。

それよりも緊急の動員と遠征従軍数の増大により艦隊の到着が遅れる危険性を想定するべきです。常備兵力とはいえ遠征を企図していない部隊へ物資を手配し【交戦星域】に送り込むのは危険です」

シトレは卒なくヴァンフリートの弁務官達に視線を送る。

「ヴァンフリートの『本土』防衛を疎かにしては本末転倒。

『自身の基盤の面子にこだわって正当な運用を損なうのは筋が違う』のです」

トリューニヒトは鼻を鳴らし『相方』軍令のトップの宇宙軍優先を説く言葉を聞き流した。

「……だからといって4||2が陥落しても大問題だ」

「その通りです、であるからこそ同盟軍の兵站機構に頼らず各構成邦より部隊の派遣を行い、効率的な輸送が必要です。主力は既存の計画の通り艦隊に集中すれば確実に本土を守ることが可能です」

リヴォフはさてどうしたものか、と思考を巡らせる。シトレは艦隊司令長官として歴代でも優れたものの一人であるが——統合作戦本部長としては『艦隊屋』と書かれた幟を振りまわし過ぎている。

裏に【地上で血を流すのは交戦星域の仕事だ】という【宇宙軍の常識論】が無意識にしろ受け継がれているのであれば【民主主義の縦深】としては『結果は同じであつても受け入れ難い』と言わざるをえない。「いずれにせよ、だ」

レベロは背筋を伸ばしてよく通る声で発言する。

「同盟地上軍の予備役として同盟政府が全額持つのであれば効率的な予算運用をするべきだ。義勇軍として動くのであれば提案した政府

の自己責任において予算を運用すべきだ、予算の融通は議会の賛同が必要だろう」

議会を通さぬのであれば当座は義勇軍として同盟軍に参戦するべきだ、とレベロが言う。

「自己責任だ?!国防は本来その地域の自己責任であり同盟政府は、助けてやってるんだ」。と言っているわけか?」

ヴァンフリーストの弁務官が声を荒げる。

「そのような意図ではない!!無尽蔵に同盟政府が地方の動員を鵜呑みにしては財政計画と国防戦略が破綻する!!我々の統帥に置くのであれば同盟政府の合議により同盟議会と政府の責任による予算とその執行に服すべきだと言っている!!」

「レベロ君の方が道理だな」

サンフォードは苦情を浮かべ、あまりに加熱している論争の仲介に入った。

「道理というものは幾つもあります、【交戦星域首脳会議】の提言を軽視するのも道理の一つであり、レベロ財務委員長の意見はそこから外れています」

トリユーニヒトの言葉にもサンフォードはそうだなあ、と覇気のない返しである。

「シトレ本部長、遅滞なく送れる常備地上軍レギュラー・アーミーはどの程度だね」

シトレは眉を跳ね上げ答えた。

「さほど多くはありません、基地副司令官と警備責任者を兼務する野戦司令官の選任と参謀の増員は既に進めております、これは当然ながら問題ありません。実働戦力は1個師団規模を分散して運ぶことになるでしょう。前線に配置する部隊の動員は既存の動員計画に則りすでに動いております、追加の地上軍動員は必要な予算を追認していただいたとしても実務的に保証し辛いのが正直なところですな」

トリユーニヒトは眉をひそめる。

「宇宙軍陸戦隊と地上軍は動かし方が違います」

「ええその通りです、宇宙軍陸戦隊と異なり地上軍は大規模部隊を大

型輸送艦により輸送され、接舷戦闘などを前提としていない」

シトレ本部長は頷く。

「であるからこそ、です。ヴァンフリートへの行動は目立ちますし、宙域内で動き回ることに向いていない。これはうまくないです」

リヴォフも、まあそれも道理と言えば道理か、と考えた。

大規模艦隊戦の最中に貼り付けたまま動かせない部隊を抱えたくないというのは艦隊総司令部の理屈ではあるがヴァンフリート側も理解するだろう……本土、即ちコロニー戦は最悪の選択肢でありその最中に細々とした機動ができない部隊を騒々しく運び込む場合……帝国がどのような刺激を受けるのか、というのを言外に臭わせているのだ。

サンフォードはアンドム達ヴァンフリート弁務官団の様子を探るように観察する。

「現段階の4Ⅱ2基地の兵力は」

「ヴァンフリートの地上部隊の一部と合流して2万ほど、ですがこの部隊が本土に引き揚げるのであれば予備兵として後方勤務を動員せねばならず、大いに不足しております。敵がヴァンフリート4Ⅱ2基地の攻略を企図している場合は——」

シトレは手元の電算機を叩く。

「最低限、4万の兵を、更に言えば重火力装備が必要です」

トリューニヒトは無表情で尋ねる。

「その程度で大丈夫なのかね、数で劣ればいずれ陥落するのでは」

いえ、と深みのある声でシトレが答えた。

「こちらは補給基地を防衛する以上、重火力を支える物資はいくらでも自弁できます。敵側は遠征部隊となる以上、そうはいきません、この時点で十数万の兵力を一定期間維持しなければなりません。4Ⅱ2周辺区域だけでも半個艦隊は最低限割かねばなりません」

シトレの口調は先ほどまでと異なり泰然とした悟性を感じさせるものである。艦隊司令長官時代のそれであった。

「ヴァンフリート宙域は大軍の運用に向かぬ場です、比較的少数の艦隊を分割して運用する事に向きます、ヴァンフリート民主共和国の支

援がある以上、こちらが優位です。恒星間機動戦力——敵の艦隊を撃退するまで持ちこたえればよいのです」

「であれば構成邦軍の動員は必要ないのではないかね」

レベロが口をはさむとトリューニヒトは一瞬、不愉快そうな表情を浮かべた。

「戦力が過小になると早期に陥落する可能性が極めて高いです。その場合、あるいは守りきれたとしてもより多くの増援を送った場合よりも膨大な犠牲者が出ます」

シトレは自身の政治的後ろ盾に対しそっけなく全否定した。

「議長、国防委員長として レギュラー・アミー 常備地上軍の追加動員を進言します。大軍になればなるほど統制は難しくなるもの、であれば既存の整備された部隊の行動の許可を。帝国軍が地上軍をヴァンフリート4Ⅱ2に送り込む数が増えれば増えるほど不利になることは統合作戦本部も認める事実です」

シトレは淡々とサンフォードへ視線を向けて語る。

「議長、本部長として此度の【交戦星域首脳会議】の提案を受け入れるべきであると進言します」

「財務委員長としてはいずれにしても規模の縮小を求めます」

「議長、よろしいですか」

マクドナー最高評議会書記がサンフォードに何事かを囁くとサンフォードは頷き、自身よりもさらに年上の政治家者へ視線を向けた。

「さて、それでは国務委員長、貴方の意見はどうだね。同盟弁務官からの意見であるが」

「濃かね」

カーティス国務委員長——同盟弁務官総会の議長を兼務する老人が声を発すると弁務官らは口を閉じた。

カーティスは弁務官達の長老でありその任期は継続してすでに四半世紀を超えている。

「そうさな——まずは第一にヴァンフリート4Ⅱ2への増援は既定路

線とするべきだ」

「第二にその内容であるが可及的速やかな増援の配置が必要である。常備地上軍からは重火力部隊を中心とした部隊と指揮幕僚団の派遣に限定し、1日でも早く送り込む。4||2の基地指揮系統を再編する」

「第三にこの段階をもって首脳会議の提言を受け入れ同盟地上軍予備軍として構成邦から動員をかける。4||2基地への派兵部隊は基地司令部の指揮下に入り、部隊輸送の指揮はセレブレツゼ基地司令官と防衛部が指揮を執る。これは帝国軍による察知の危険性を減らすためである、総合的な調整は専門家に任せるべきだ」

縦深の面々に視線を送り、カーティスはウインクをした。

「叩き台としてはこんなところだろう、如何かな？我らが議長」

「なるほど、なるほど、どうだね？トリューニヒト国防委員長」

トリューニヒトは深く息を吸うと静かな微笑を浮かべて答えた。

「ご下命とあらば、その場合は重火力部隊を優先して送ります、指揮官および幕僚の選任は地上軍総司令部と統合作戦本部と共同で進めております」

「シトレ本部長はどうだ」レギュラー・アミー「ご指示とあらば、常備地上軍の能力は疑いませぬ、適度な増援であればセレブレツゼ中将与ヴァンフリートにとって必ずや力になると信じます」

シトレは自信に満ちた顔で受け答えをする。

「財務委員長としましては過剰な出費に反対しますが、議長が必要であると判断するのであれば——」

能う限りは、とレベロは肩をすくめて見せた。

ああなるほど、トリヴォフは内心舌打ちをした。ここまで「台本の通りか！

「なるほど、それではヴァンフリートと縦深の諸賢はこれで納得していただけるかね」

サンフォードの微笑に普段の押しの弱さはなかった。

アンドムから目配せを受けたロムスキーはにこりと笑って答えた。

「喜ばしいことだ、同盟軍の不足を構成邦軍が補う」のは同盟の連

帯を示すにはいい機会となるでしょう。 // 構成邦軍が同盟全体の為に血を流す // ことになるのだから」

サンフォードは返事をせず、立ち上がり手を差し伸べた、ロムスキートアンドムも立ち上がり、サンフォードと握手を交わす。にこやかに、友好的にだが互いの緊迫した空気は隠しきれていなかった。

こうして【民主主義の縦深】はひとまず大仕事の役目を終え、4時間後に正式に最高評議会議長ロイヤル・サンフォードの署名により予備軍の動員が決定された。

【著名な戦闘】ヴァンフリート4Ⅱ2防衛戦（4）く構成邦軍は集うく

——”ヴァンフリート星域”、辺境の中の辺境、本来は人の住まうこと能わぬ”無価値”な星系。それゆえに軍事的逆説から二度にわたり軍事的事情からここに大拠点が築き上げられることになった。一度目は軍閥時代から離脱せしめ自身の帝国として掌中に収めんとする独裁者に対し、旧時代を象徴する腐敗軍人の切り札として。

そして二度目は独裁者の末裔が築き上げた侵攻拠点を打ち倒すための奇襲の為の補給拠点として——。

国防委員長から”気合を入れられた”地上軍幕僚総監部は首脳会議の終了とほぼ同時に早々に防衛司令官の選任を開始し、数日でその人選を弾き出していた。

その人事案はヨブ・トリユーニヒト委員長も政敵であるシドニー・シトレ本部長も”まったく妥当である”と評価され可及的速やかにその辞令が発せられた。

それ故にアルレスハイム出身の”転進保証人”ハインリヒ・フォーン・フォルベック少将はサンフォード議長の承認から3日後にはヴァンフリート4Ⅱ2基地に到着したのである。

「長旅お疲れ様です、お待ちしております、フォルベック閣下」

「君が先行していたかバドウ少佐、キルメツシャー降下作戦以来か」

直接お会いしたのはそうなります、と少佐が頷く。

「此度はお声掛けありがとうございます」

「この手の面倒な戦は貴様が必要だ、次席作戦参謀。」

それとセレブレツゼ閣下と早くお会いする必要がある」

バドウ少佐はにやりと笑った。

「ええ我等の大家閣下も同意見です。新任の副司令官兼防衛部隊司令官をお待ちです」

「構成邦軍はどうしている」

「すでに中核部隊と指揮官が集まっています、兵力は遠からずそろそろでしょう」

音頭を取るモハメド・カイレの下に集ったのは盟友アスターテ連邦共和国の海兵軍、アルレスハイム「赤いヴァルシャワ」の部隊、ガラテイエと並ぶ陸戦火消屋の構成邦精鋭地上軍、大夏天民国「正墨旗軍」のみならず、“ハイネセン以前”は仮想敵国であったパランティア連合国の切り札、軽空母隊の戦力を担う“ケレブランド氏族連合航宙騎兵”、ティアマト民国の“義勇農兵”、そして独立独歩を貫くムサンダム憲政共和国が山岳騎兵隊の姿すら見られる。

曰く“善良なる同盟市民を自負するならば壊滅を願ってやまず”、と【交戦星域】の住民達の九割が【イゼルローン要塞】に向ける憎悪の顕現とも言えた。

とはいえ今回は苦しかろう、と思われる中で無理に無理を重ねた結果を押し付けられたのがアレクシス・ニユースロット・ビョークランド中佐であった。

「ああまったく、皆が良く集ったものだ、一つの敵を前に【交戦星域】の民意が団結した有様、帝国の最大の輸出商品は憎悪ですなあ」

ティアマト民国軍のアルフメド・グラスゴー大佐はコーヒーをすすりながら肩をすくめる。

小会議室に集っていた交戦星域諸邦の派遣部隊指揮官達は思い思いの姿勢で寛いでいる。

「その貿易品を危機管理の為にうまく扱うことです。我々に必要なのは彼らから輸入した敵意を飾り付け【大親征】で引き起こされたパラダイムシフトを認識し、舵を保つことですよ」

アスターテ海兵隊のガストール・クレベール中佐、社会学者としての側面も持つ異色の英才である。

「大親征がそう転機になるような事か？俺たちの景気が悪くなっただ

けだろう」

アルレスハイムのヨギヘス大佐が茶々を入れる。野戦で育った軍人であり兵からの信望も厚い。

「我々の団結自体、コルネリアス一世、かの大敵による【大親征】以前にはありえざる光景であると、そういう意味で言ったのですよ」

クレベールはベレー帽を振り回しながら言った。

「過去、銀河連邦政府の崩壊からこつち、閉塞した状況下で我々は各々の基幹産業、生活文化の独立性における平等に移行し、相互に争うことすら多々ありました。自由惑星同盟は『同盟』の範疇で『生え抜きの加盟国』を生み出しジリジリと権限を拡大させてきましたが、それを飛躍させたのは間違いなく大親征です。かのカイザーと元帥二個小隊の軍靴は我々の住まう星々という果実の殻を磨り潰す播粉木となり——サジタリウス腕という播鉢の中でこねくり回され『自由惑星同盟という国家』の下で団結したのです」

「その結果、バーラトが肥大化したわけでもある」

「ロヒアリム」のエオメル大佐は肩をすくめる、彼の率いる『ケレブランド航空騎兵』は（大気圏仕様に改装された）防空用スパルタニアンを駆る構成邦派遣部隊唯一の航空戦力である。地上軍ではなく高価な精鋭宇宙軍を派遣するのはパランティアが往時より衰退しようとして【交戦星域】の盟主であろうと示した威信であった。

「そして我々は衰えた、か」

パランティアにおいては最悪の事件がこれであった。

「……なにかございますか？」 サジタリウス準州」からの歴史を抱く伝統のエル・ファシル軍人殿」

エオメル大佐が視線を向ける先に居るのはエル・ファシルのニュー・スロット中佐だった。

パランティア連合国がケレブランド氏族連合は銀河連邦軍——ルドルフが討伐しようとした地方軍閥（海賊）と少なからぬ関わりを持ったものも含む——脱走部隊を祖とする。もつと直裁的だったのであればアリアノン企業連合がその資本と『私生活にまで及ぶ兵站

“で絡めとつた者達である。

サジタリウス準州時代からの最古参——いわゆる“旧連邦”といえぱパランティア、エル・ファシル、ティアマト民国、そしてヴァンフリートであるがパランティアも厳密に言えばアリアノン共和国がそれでありケレブラントは“ルドルフからの離反者”——すなわち辺境軍閥鎮圧や苛烈な軍部肅清に危機感を覚えた国家——大夏天民国やムサンダム憲政共和国と同じ時期である。

であるが革命を経験したヴァンフリートと同じく銀河連邦軍を起源とし、ヴァンフリート以上に“我こそは銀河連邦軍の後継者”という気位も高い。

そうしたこともあり、“伝統”にやかましいのは“旧連邦”よりも“離反者”の方が多い。

アレクシス・ニユースロット||ビョークルンド中佐は鼻を鳴らして返答した。

「生憎だが史学や思想は専門外でね、要するにバーラト星系周辺への一極化が進み、我々は政治的にも軍事的にも同盟政府への注力が必要になった、ということだろう？」

「いや、もちろん自由惑星同盟の成り立ちにさしたる神話もない。アーレ・ハイネセンの船団は偉大な契機であり“グエンの開拓時代”を一種の政治的金字塔とするのは疑いの余地もないが、それとは別に戦争による“受難”を神話とすることも自然だとは思うがね」

ニユースロット中佐は肩をすくめる。

「いずれにせよ、我々は共有すべきものを持っておくべきだ。多様性とはその前提の上にあるべきものだよ。それが個人に基づくものであれ共同体に基づくものであれ民主共和制、ハイネセン主義の同盟憲章は必要だ」

「そう、ハイネセン、ハイネセン主義！ 実に素晴らしき同盟市民の同盟市民たるを示す言葉！ 『自由、自主、自律、自尊』！

この世で最も急進的、暴力の扇動の為に使われた言葉を厳選したかのように！」

クレベールは楽しそうに弁舌を振るう。

「万人に対する個人の自由の承認はこの世で最も対立を扇動する結論であり価値観の共有の父権的強制を粉碎した時点で恒久的競争と敗者の存在を前提とします。故に、故にこそ！真の意味でこの自由という価値観を共有し平等になった我々は自由という価値観を共有するために、不自由を許容するという矛盾を呑み込み共同体を再形成し、そしてかつて不自由で抑圧的な組織であると糾弾した軍隊を組織し専制者に立ち向かう！何故なら”自由意志によって民主的な大義の共有により行われる市民権の為の戦”であるから！これが正義でなければ何だと言うのですか！戦争万歳!!」

将校達の反応は様々であった、皮肉気に笑みを浮かべて音をたてないように拍手の真似をする者、意図的に興味の色を示さないようにするもの、そして――

「過程はどうであれ――」

ぼふう、とムサンダム憲政共和国のユースフ・ターイー大佐はオリオン腕はおろかさジタリウス腕でも廃れた水煙管の煙を吐き出した。髯を蓄えた50代前半のベテランである。

「結論については皆が同じだろう、彼らには”苦い教訓”を学ばせねばならない。土地を追い出され、権利を剥奪され、更には百年後も続くであろう屈辱になど、我々はもう耐えられぬのだ。この点については誰もが共有している筈だ。つまり一つ前進だな、クレベール君」さやうでございますか、とクレベールは微笑して腰掛ける。

成程、いつの間にもやらまとめ役がこの場に生まれている。クレベールは食わせ者のようだな、とニュースロットは思案した。

「なるほど、待たせたと思つたが諸君らの間に共有点を見つけられたのであれば問題あるまいよ」

部屋に集つた士官達が敬礼を捧げる。

基地司令官のシンクレア・セレブレツゼ中將、基地副司令官兼基地駐屯軍司令官のハインリヒ・フォン・フォルベック少將、基地防空管制司令からスパルタニアン等の航空戦力の管理を押し付けられたヘンリー・ウェンライト准將(ほんの少し前まで大佐であった)。そして

その指揮下にいる、自由惑星同盟地上軍——地上軍予備役として動員された構成邦軍と区別し常備陸軍レギュラーズ・アーミーと呼ばれる者達である。

そして彼らに同行するのが基地建設当時から支援の為に駐留し続けているヴァンフリート人民防衛軍エドヴァルト・マシエル准将、派遣構成邦軍の最上位たる大夏天民国“正墨旗軍”第二旅を率いるチェン・ツーチョン准将。

この基地に揃った（基地司令官を除けば）戦闘部門の将官達だ。

「さて、それでは司令官閣下の訓示から始めます」

笑みを浮かべた少佐——おそらく参謀だろう——が司会役を務める。

「あー……」

シンクレア・セレブレッツェ、同盟軍——宇宙軍、地上軍を問わず兵站システムの権威である。

「諸君、この基地は本来は来るべき作戦に備えて設置された基地である。諸君らには方が一に備えて備えていただきたい。

イゼルローンの陥落は同盟一丸となつてあたるべき悲願である、この基地の備えはその悲願に向かう一歩である、以上だ」

そしてそのスピーチは——彼が優れた“前線官僚”であることを過不足なく示す的確かつ無味乾燥なスピーチであった。

宇宙軍陸戦隊の最精鋭部隊、独立遠征戦闘団“薔薇騎士連隊”はこの指揮官集合にオットー・フランク・フォン・ヴァーンシャッフエ連隊長と副連隊長であるワルター・フォン・シエーンコップが参加していた。

しかしながらその席次は必ずしも高くない、先代の連隊長が側近を連れて離反してはや2年、未だに他部隊から懐疑の目が向けられるのは当然であった。

ヴァーンシャッフエは皮肉も言わずに同格の連隊長たちの最下位の席に座る。

シエーンコップは周囲に皮肉な笑みを浮かべ何か言つてやろうかと思つたがヴァーンシャツフェは部下を睨み威圧的に咳払いをした。

部下には鷹揚であり戦闘経験豊富で人望もあつたが、リユーネブルクの出奔後は態度を豹変させ、部下には威圧的で厳格になり、上官に媚びへつらうようになった。シエーンコップからすれば面白い上司ではないのだ。

黒人の将官がセレブレツゼに向き直り敬礼を捧げる。

「改めまして、セレブレツゼ司令官閣下！ フォルベック副司令官閣下！ エドアルト・マシエル准将、およびヴァンフリート人民防衛軍第四師団「スンジャタ」！ 貴官の麾下に入ることをごまこと喜ばしくあります！」

彼らはこの基地においては先達である、というよりも基地の建設に従事し、擬装工作も行つているからこの基地の父親といつていい。

「ヴァンフリート人民防衛軍、突撃工兵が名物でしたな」

シエーンコップから見ても彼らは勤勉で規律正しい熟練した工兵である。

「同盟軍の戦闘工兵部隊にもヴァンフリート出身が多い粗雑に扱うなよ、敬意を払え

……下らぬ雑言で彼らの不興を買うような真似をするな、わかつているな？」

「ここは人民元帥陛下」の土地ですからな」

シエーンコップの揶揄するような言葉に不安そうに——苛立ちではなく——を浮かべるヴァーンシャツフェにシエーンコップは眉をひそめた。

「チャン・ツーチョン、大夏天民国「正墨旗」軍第二旅「不拔を預かつております。此度は麾下に入ることを大変光栄に思います」

大兵肥満といった様子のE系列の初老の男が敬礼が敬礼した。

「正墨旗？」

「啓典教に習合された墨家という軍技術者集団の流れを汲む軍だ。防

衛戦においては右に出るものはいないそうだが、ガラテイエと並んで防衛戦では予備役動員で前線に出ることは多い」

「啓典教?」「地球時代から最も古い宗教だそうだ」

詳しくは知らん、とヴァーンシャツフエは嫌な顔をした。

「少なくとも腕は確かだ、それでいいだろう」

まあそうか、とシエーンコップは首肯した。

「ティアマト民国より義勇農騎兵戦闘団ウルク・ハイ!アルフメド・グラスゴー大佐であります、しばしの間、ご厄介となります!」

一転して快活そうな日に焼けた男が敬礼をささげた。

「ヨーマン!まるで同盟開拓劇ですなあ。」

ブラネッツ・ウエスタ

「今でも現役だ。もちろん装甲トラクター乗りだけではないぞ。銀河連邦時代からの伝統があるのは事実だが」

地上戦もゼツフル粒子下ばかりではない。むしろ白兵戦——どうしようもない消耗戦を避けるためにも装甲戦力や重火力部隊が必要だ。

もし戦闘が起きた場合、装甲兵力を中心としたなんでも屋……コマンド・チーム戦闘団が重要な役割と担うだろう、ということはシエーンコップも理解している。

「報告申し上げます!アルレスハイム共和国よりオットー・ヨギヘス大佐!ヴァルシャワ労兵レーテ結成記念独立混成連隊ポスポリテ・ルシエニテともども麾下に着任いたしました!!」

40前半の大佐が声を張り上げる。どこか下士官めいた振舞いであるがシエーンコップからみると少々わざとらしくも見える。

「ほおう、女帝陛下の王冠共和国の方々ですか。連隊長殿にとっては懐かしいでしょうな?」

ヴァーンシャツフエ個人は出生こそ帝国であるが自分の記憶はアルレスハイムからであった。

「彼らは革命の伝統——労兵レーテの精神を受け継いでいる左派勢力が主流の部隊だ、そうした揶揄はやめておくことだ。それと俺はマンフレート主義者ではない」

そして彼個人はルドルフ主義でもマンフレート主義者でも革命共和主義者でもない——強いていえば国民共和党支持の同盟主義支持者、つまりは保守的なノンポリであった。

「改めまして司令官閣下、及びこの基地で肩を並べる戦友達にご挨拶申し上げます。」

ムサンダム憲政共和国より山岳騎兵第14連隊“ハミデイイエ”が連隊長ユースフ・ターイー、この戦が終わるまで諸君の幸運と平穩を祈らせていただこう」

「ムサンダムか、これはまた」

「山岳騎兵、初耳ですな」

「ゲリラ戦闘が得意だ、あの閣下ならお得意だろう」

視線の先に居るのはフォルベック少将だ。

「なるほど」

“転進保証人”の異名を持つ彼のことはシェーンコップも知っている。

「エオメル・ロヒアリム大佐であります、パランティア連合国ケレブランド氏族連合より第三航宙騎兵隊！皆様に空の安心を提供できるよう尽力させていただきます」

どこかアルレスハイムの貴族めいた振舞いの男であった。スパルタニアン乗りだと一目でわかる小柄で機敏な姿と優雅さが不思議と両立している。

「ああ、避難船の護衛をやっている連中ですか」

“海賊”——私掠隊とやりあうこともある」

「ガストール・クレールベル少佐です、アスターテ海兵軍より独立コマンド大隊“ヴォルティジュール”を預かっております」

「海兵？」「彼らの主力はコロニー船の防衛だ」

「それでは今回は予備でしょうかな」

「大規模コロニー艦における接舷戦闘……ゼツフル粒子下での戦闘研究を熱心に行っている、情勢次第では——今回は何も無いことを祈るがね」

同感ですな、とシェーンコップも頷いた。毒を吐くことはあつて

も。

「エル・ファシルより独立捜索装甲第十一大隊“剣牙虎”、大隊長を拝命しておりますアレクシス・ニユースロットⅡビョークルンド中佐です。何卒よろしくお願い申し上げます」

「エル・ファシルまで派兵するとは——」

「本土を陥落してまだ10年もたつておらんでしょように」

「それだけに、ということもある。【交戦星域】は特殊な結びつきを各構成邦が持っている、貴様の常識で下らん政治風刺モドキはやらんとだな——ビョークルンド？」

「どうしました」

「……失礼、ニユースロット中佐」

セレブレツゼ中將が咳払いをした。

「はい、閣下」

「君の御親戚にああ……」

ニユースロットⅡビョークルンド中佐は微笑を浮かべた。

「ベルティ・ビョークルンド内務長官は私の義理の親であります。」

ですがこの派兵には関係ありません、ブラスターにも戦斧にも向けられた先の貴賤を気に掛けることがないことは内務長官もよく知っております」

セレブレツゼはわかった、と手を振り、座った。

「失礼した、中佐。もちろんそれでなにがということ——」

きまりが悪そうな司令官を遮るように副司令官、フォルベック少將が立ち上がる。

「その通りだ、便宜を図ることはない。なにしろ」

フォルベック副司令官はニヤリと笑って皆を見まわした。

「ティアマトのタロット議長閣下から本基地に大量の食糧が寄付されている。幸運な将兵諸君は少なくとも餓死と不味い飯が原因で死ぬことはない事だけは確認しよう」

ワイワイと声を上げる将校達——信念以上に食事は士気をもたらすと知りぬいている者達である——を見てフォルベックのみならず

セレブレツゼも少しだけ微笑し、口元をハンカチでぬぐった。

フォルベックが手を挙げるとそれがぴたりとやんだ。

「そして——矢玉が尽きて、ということも。だが成すべきことはいくらでもある。」

各員にはそれぞれ準備作業を割り振っておく、万全の態勢を整えてもらおう」

指揮官集合を終えた基地司令部の面々は司令官室に戻る。

「——愚かしい話だ」

セレブレツゼは数名の幕僚と副司令官だけになると吐き捨てた。

「はっ」

「愚かしい話だと言っている！同盟軍がここに目をつけたのはここが主戦場ではないからだ！

情報が漏れて敵の侵攻を受けたのであれば！

もはやこの不便極まりない土地に会戦規模の戦力を養える基地を築いた意味はもはやない！早々に撤退すれば良いのだ!!

ロボスとシトレは何を考えている！」

さてどうかな、とバドウ少佐は思考を巡らせる。

強力な陸戦戦力と亡命者というネットワークを築き、パランティアとも近いアルレスハイムと並び、ヴァンフリートは星域内における情報通信すら阻害する電磁波やらの宇宙嵐と艦隊としての行動も困難な小惑星群——イゼルローン回廊から最も近い星域として並ぶティアマト・アルレスハイム・ヴァンフリートの三つの星系で比べると安定して豊かな土地を持っているティアマトから交通の要衝、アスターテを通り交戦星域を荒らすのが【私掠艦隊】や正規軍の主要行軍ルートだ。

セレブレツゼの“常識的”分析は的外れではない。

だがそれはヴァンフリートは帝国にとっては忌々しい僻地、喉に刺さる小骨である事を示す。コルネリアスの【大親征】では彼の“元帥

団”の一人、後方の維持を統括していた一人の元帥が貴族反乱とそれによる征服事業の失敗を知り、保身のために仕掛けた最終攻勢であえなく戦死した星域である。

つまるところ、ここは“主戦場ではない”のではない。“優先度が低い主戦場”なのだ。

「軍事において絶対はありません」

フォルベック少将は肩をすくめる。

「アルレスハイムが2年前に侵攻を受けたようにヴァンフリートは【交戦星域】の避難拠点として活動していることを連中は知っています、ここを突く意義は0ではない」

「そうした話をしていていいのではない!!」

セレブレツゼは苛立ちを露に手を振る。

「いいかね、半年後に計画されている攻略作戦の肝はわかっているか？」

戦略単位の奇襲!!すなわち既存の宇宙軍輸送網の改革だ!!この基地はそのために艦隊総司令部と統合作戦本部!そして国防委員会の肝煎りで作られたのだぞ!!」

フォルベックが口を挟もうとするのを手を振って遮った。

「ここで会戦が起きれば露見するに決まっている!!もはや放棄するに他がなからう!!このデータを奪われるだけでどれだけの損害があるか上はわかっているのか!？」

こんな騒ぎを起こすのならやるべきことがあるだろう!とセレブレツゼは呻いた。

こんな男が上官か!とバドウ少佐の感情が蠢くが参謀として培った理性はいやまて、と制止する。

いやどうだろう、この男はその計画の準備を一手に担ってきた男ではないか、それをなんの未練もなくリスクと天秤にかけられる事こそこの兵站屋として中将まで上った男の特筆するべき才能なのかも知れない。

フォルベックは閣下のおっしやるごもつともです、と頷くとバドウ少佐に視線を向けた。

「バドウ少佐」

「はっ」

「総司令部と連絡を取る準備をしたい。少し話そう」

セレブレツゼに一礼し、司令室を出る。

「どう思つかね、司令官閣下のことを」

廊下を歩きながらフォルベックは試すようにバドウ少佐を見る。

「莫迦ではありません、いえ、むしろ切れ者ではあるのでしょうか。ですが——」

「はつきり言え」

「“兵を扱う”者ではありません。正論は正論でしょう。しかし——」

「しかし？」

「ああいえ、“奇襲を目的とした基地が露見するのであれば兵を集めるよりも放棄すべし”は正論、少なくとも検討するべき正論であったと思います。軍事戦略として私は考えもしませんでした、それは私の落ち度です。検討するべきでした」

フォルベックはにやりと笑い、三十をいまだ迎えていない少佐を見る。

「検討して貴様はどうする」

「却下しました。少なくとも政治的に致命的な影響が出ます」

自由惑星同盟はバーラトの都合だけで動くわけではない。人口が集中していようと——いや、それだからこそ地方における政治活動はまさしく一所懸命のそれであり同盟上院——弁務官達は様々な形で政府から利益を引き出そうとする。

特に交戦星域では国の存亡を賭ける——ということが冗談では済まないものである。

首都圏、中間星域のタカ派のみならず交戦星域のほぼ全ての勢力から——それこそ反戦派からすらも——支持を失うことになる。イゼルローン要塞とはそういう存在なのだ。

「その通りだ、であるからには如何に？次席作戦参謀として方針を述べろ」

「一度動き出した作戦は——」

バドウ少佐は記憶を探るように——目を伏せる。

「そうですね、まるで不相応な恋路のようなもので一度勢いがつけば止めることはできません。ましてや民意が後押しするのであれば、我々はそれに運ばれるしかないでしょう、たとえそれが——」

ちらり、と外を見る。雪と氷の世界、本来であればこの星——星系に命をはぐくむ余地はない。それでもここは“国”であり、我々はそこにアスカリのみならず兵を集めている。

「この氷と雪の地に赤い染みをつくることになろうと」

【著名な戦闘】ヴァンフリート4Ⅱ2防衛戦（5）くへルマン・フォン・リユーネブルクの登場

ヴァンフリート4Ⅱ2からさほど（宇宙艦乗りの感覚では）遠くないデブリ帯にそれは潜んでいた。

擬装を施された特務通報艦であるが、その塗装は微妙に自由惑星同盟軍のそれと異なっている。

……銀河連邦崩壊後からパランティアの暗部を守るパランティア国家安全保障会議直属の“伝統ある”H U O R N（秘密調査本局、航路警備・国境侵犯部門）である。

普段は交戦星域を跋扈する“フェザーン・キャラバン”や“サイオキシン・シンジゲート”、“帝国政府財務省辺境経済調査局”と（時には武力も伴う）暗闘を繰り返しているが有事の際にはパランティア防衛の為に同盟軍と連携して情報収集に当たっている。

「戻りました統括、状況を説明させていただきます」

往復だけで丸2日ですよ、と勧められた休憩用座席に腰掛ける。

「お疲れ様です」

ヴァンフリートとタケミナカタは仕方ないですよ、と統括と呼ばれた男は肩をすくめた。一見するとただの勤め人に見えるがむろん、そうではない。H U O R Nの情報収集艦10隻を率い、ヴァンフリート4Ⅱ2の監視網を担うちよつとした立場の人間だ。

同盟軍に名乗る符牒はファンゴルン……無論偽名である。

「まず同盟軍はヴァンフリート民主共和国“本土”——即ちヴァンフリート小惑星要塞群に3個艦隊、31,000隻の内、主力部隊を展開。

この他にヴァンフリート宇宙軍が“掘削艦”を中心とした1000隻程が小惑星帯に展開しております」

「また、現在帝国軍は偵察結果を統合分析する限りおよそ32,000隻、主力部隊は威力偵察隊を用い此主戦戦への誘因に成功しております」

「同盟軍の構想は？」

連絡官が端末を操作し、立体航路図にデータが表示された。

「伝統的な内線作戦を企図しております…理由としては第一に補給拠点として『ヴァンフリート本土』——要塞群を利用できること。

第二としてそれ故に敵戦力を誘引する目標が集中することです。

敵の意図が兵站拠点であれば4||2から目を逸らすブラフにもなります」

なるほど手堅いですねえ、とファンゴルンは野菜ジュースパックを取り出し、連絡官にも渡す。

「他プランはありますか？」

はい、と連絡官が端末をいじると新たなデータが反映された。

「補足プランとして独立部隊による敵補給部隊への襲撃、及び敵兵力の牽制案が採用されており、ビュコック提督の第5艦隊主力がこの任務に当たっております、現状では我々の窓口はビュコック提督となるでしょう。まあ当たりを引いたということではないでしょうかね——」

ふむん、とファンゴルンは顎をさする。それとほぼ同時に

「敵艦……いえ！敵艦隊を確認」

観測手が悲鳴をあげる。

「数は？」

「光学映像のみですが今分析にかけております。

い……一万二千隻!？」

「あたりを引いたのはあちら、か……?」

分析官の一人がほっ、と汗を拭う。

「いや、当たりを引いたのは事実のようです、連中。全艦降下隊形をとっております」

こちらには気づいていない、とブリッジに安堵の溜息が響いた。
「……ふむん」

気づいていないのか、何某かの罫か、それともまったく異なる目的があるのか——

ファンゴルンはジュゴツと野菜ジュースを吸い上げると指示を出

す。

「連中が作業している間にシャトルを飛ばすとしましよるか中継観測点の分遣隊にビュコック提督との連絡線を確保するように、時間はかかるでしょうが」

・
・
・
グリーンメルスハウゼン子爵の統率よろしき(?)をえた艦隊はヴァンフリート4||2に降下した。その目的はただ兵站拠点を作ることに、それだけだ。

何もこのような会戦において兵站拠点が必要なのか?というところではない。

総司令部が題目としてグリーンメルスハウゼンへ伝えた意図は“叛徒の拠点を制圧し、事後余勢をもって席卷する為の遠大な準備”である。

多少なりともまつとうな教育を受けている——少なくとも総司令部と正規軍の高級将校らは誰も信じていないが。

ミュツケンベルガー元帥らにすればこの難攻不落の僻地でそれなりの経験を積んで帰りたい、といったところであり、であるからには正規軍とグリーンメルスハウゼンにまとわりつく貴族達、正規軍と半端に権威のある貴族という傍流の組み合わせを早々に面倒から遠ざけてそれなりの“リスクがなく、なおかつ後に続かない”功績を与えて穏便におかえり願いたい、というところであった。

「まあそれはよからうよ」

そう嘯くのはチャールズ・フォン・フランダン伯爵大佐、30手前の時点で予備役大佐となつた青年である。

彼の家はイゼルローン要塞建造による貴族領の利権であつた補給基地を常備軍の管轄とした事に対する反乱鎮圧に“自腹で”参戦した事で“節制帝”オトフリート5世から加増と部隊に皇帝の添え名である“節制帝”を冠する榮譽を受けた名門である。(裏では吝嗇帝と呼ばれていたことは公然の秘密であるがそれはまた別の話)

父の薫陶を受けた彼も何度かイゼルローン防衛圏の前衛基地で活躍し、若くして武勲と「前進伯」の異名を得た猛将である。

だからこそ父が亡くなったのと同時に「死なれたら困る」と予備役に編入されたのだが、当のフランダン伯爵大佐は自身率いる父の代から引き継いだ伯爵領装甲重火力旅団「節制帝の胡桃割」を率いてグリーンメルスハウゼン子爵の艦隊へ参加し、現在は選抜した快足部隊を選抜し、偵察にあたっていた。

「妙です、何かがいるような気がしますが、熱源探知にもなかなか引っかけられません」

古参の偵察中隊長が珍しく苛立たしげに主君に報告する。

旅団幕僚もその報告に眉を顰めた。

「無人探査機を上げますか？」

その場合は自身の存在を高々と吠えるのと変わらない。一応は惑星表面を走査してから着陸したのだが……念入りな偽装を施された基地であれば自分達は既に叛徒の腹の中で馬鹿騒ぎを始めることになる。

「いや、その必要はないようだ」

雪と氷の丘に一人の男が姿を表した。

明らかに遺伝子改良を受けた長毛の駱駝に跨っている。

「侵略者諸君!!自由惑星同盟がユースフ・ターイー大佐の使者として御挨拶を申し上げます!この地は我らの盟友ヴァンフリート人民の住まう国である、直ちに僭主の下へ帰還されよ!」

その声は若々しい、中隊長は面白そうに大尉ですな、若造です。と囁きかけた。

「これより先には栄誉は無い。在るのは絶え間無い殺戮による無明の未来。」

自由の旗の下に100の諸邦より集いし兵の授ける死が貴公らの名誉に取って代わるであろう。大人しく騒々しい古船の群れごとき引き上げよ、さもなければ我らに投降するが良い」

帝国軍に向けサーベルを抜き放ち、向けた。

「重ねて申し上げる。ユースフ・ターイーの言伝は、諸君らの親しき者

らの元へ帰郷する最後の機会である！」

中隊長がにやりと笑い、伯爵に視線を向けると伯爵はやれやれ、と言うように肩をすくめ、頷いた。

戦車は氷原を踏み締め、駱駝の騎手と対となる丘陵へと登る。

戦車から飛び降りた中隊長が声を張り上げる。

「我が主、”前進伯” フランダン伯爵閣下の名代として我が皇帝陛下の宸襟を乱す叛徒に言い渡す！」

叛徒の中にも我らの礼儀を知るものがあるのであれば応えよう！

遍く人類の住まう星々はすべて皇帝の地であり、貴殿らはその威光を知らぬ化外の民であるにすぎない！

今すぐ皇帝陛下の威に服し同じ天を仰ぐのであれば相応の遇をもつて偉大なる皇帝陛下に服する榮譽を与えようではないか」

戦車を指揮する帝国将校と駱駝に跨る同盟軍将校が睨みあった。

“叛徒”の大尉が天に向け、ブラスターを放つ。背後から偽装をつけた駱駝騎兵が背中にくくりつけたハンドキャノンに向けた。

「撃てエー！」

こうして帝国軍と同盟軍は偵察部隊同士の遭遇戦が始まった。

火力において“節制帝の胡桃割”……フランダン伯の率いる部隊が優勢を得ており、“叛徒”は即座に後退を開始した。

戦死者は片手で数える程の“やる気のない”小競り合いがヴァンフリート4112における人類史上初の戦闘となった。

・
・
・
ヘルマン・フォン・リユーネブルクは艦隊司令部でその報告を嫌々行っていた。

「それでひとまずは追い払った、と……で？」

「艦を上げて支援をいただければ」

手っ取り早く済ませよう、という意見に怒りを示したのは艦隊参謀長である。

「半端な数を上げてみろ！敵艦隊が押し寄せてくるぞ！」

現状で艦を上げるのは発見の危険がある。通信封鎖を事前に行なっているが、艦を上げればここに我々がいると大音声で叫ぶような物だ」

正論であった。本来到着するはずであった補給便も護衛隊も——即ち補給基地の増設やら集積地としての機能を作り上げるはずのあれこれが届かず、この星で過ごす平穏であってほしい日々の4日目にして彼らは手持無沙汰となっていた。

つまり彼らは既に主力から孤立しているのである。

それも連絡線の遮断を目的とした部隊なのか、こちらに気づいていいのか、それもわからない。何もかもが不明であった。

さらに付け加えれば同数以下であってもこちらが戦えるかは甚だ怪しい。

基本的な艦隊機動ですら脱落しかねない旧式艦の部隊すら交ざっているのがグリーンメルスハウゼン艦隊であった。

「であれば、陸戦を行うことになりましょう。想定される敵戦力は少なくとも一個師団、場合によっては軍規模が駐留していると見るのが妥当でしょう」

淡々と説明をしながら、リユーンブルクはこのままでは泥沼に足を踏み入れるのではないかと危惧していた。

そも、このような「老貴族の老後の為」の参戦に非主流派貴族達が便乗した後備艦隊の艦隊陸兵監など押し付けられたのだからさもありなんであるが。

「こちらの戦力は……」

参謀長は苛立しそうにそれを遮った。

「艦隊陸戦隊は10万の戦力を動員し、更に艦隊のワルキューレ隊の支援を受けられる、何も心配ないだろう」

参謀長が視線を向けるが単座艇監は肩をすくめるだけで返事をしない。

それもそうだ、彼の部隊は宇宙空間でスパルタニアンと殴り合うのが仕事であり大気圏内で「地上軍航空隊」の仕事をやらされるのは御免であろう。

そして単座艇監はまつとうな貴族軍人であり、リユーネブルクは――同盟軍から離反した逆亡命者である。彼は爪弾きにされたからこそここに放り込まれた男だ。

「はい、参謀長閣下、懸念材料は専門将校の数が足りないことのみです。」

本式の地上戦の訓練を受けているのは小官の装甲擲弾兵師団の他は“前進伯”フランダン大佐の装甲重火力旅団と“接舷男爵”エルビング大佐の強襲連隊のみです。この3万の戦力以外――7万は予備陸戦隊として各艦から抽出した部隊であります。彼らは艦隊兵としての訓練に追加された予備陸戦訓練のみを受けており……」

リユーネブルクは咳払いをした。

「……無論、彼らは訓練の不足をカイザーと司令官閣下への忠誠で補っております。主攻正面を我々が担い、なおかつ重火力隊の潤沢な支援の下であれば司令官閣下の武威を示すでしょう」

単座艇監と一部の幕僚が笑いをこらえるかのようにせき込んだ。要するに“問題外である”といっているのだから致し方あるまいが。まあ宇宙軍の兵士として多少なりとも教育を受けた人間が“農奴上がり”と同じ地上軍兵卒の真似事をするのであれば士気も下がるのは帝国将校として多少なりとも兵士の士気について関心を持つ人間なら一般的常識だろうが。

「ですがとにかく、指揮系統の点から小官の下に佐官が横並びになる状況は避けたく思います」

参謀長は面倒な事を、と言いたげにリユーネブルクを睨む。

「戦闘序列を再編する必要があるといたいたいのか」

10万の指揮に加えて航空隊の面倒まで押し付ける気だったのは明白であった。

冗談ではない。リユーネブルクの背筋に冷たいものが走った。この部隊、よもや面倒な連中をすり潰すための部隊なのでは無いか、とすら疑念が渦巻き始め、それを押し殺す。

「はっ主将は小官、副将はフランダン伯爵閣下でよろしいとして」

「ならば、その次は“接舷男爵”ではないか？」

傾いた家を仮装巡航艦と戦斧で立て直した『接舷男爵』ロタール・フォン・エルビン男爵大佐。

古き良きゴールデンバウム貴族の象徴として毀誉褒貶著しいオフレッサー装甲擲弾兵総監の次世代と目されていた男。

あるいは軍務省と財務省が奨励し、統帥本部と帝国宇宙軍艦隊総司令部の頭痛の種である『貴族私掠艦』の浪漫を再興した男。

「はい、閣下。しかしながら男爵であります。しかも主家は断絶しておりブラウンシュヴァイク公家ともカストロプ公家ともリッツェンハイム侯とも縁を持たぬ御家、同じ大佐とはいえ単純な先任順で序列を組むのは——難しいかと、帝国軍ではありませんが各所領から参陣した『予備役軍』も交ざっている事でありまして……」

帝国宇宙軍の都市部富裕層・知識人層が多い平民将校からは嫌われ、辺境など不採算な土地で貧苦にあえぐ帝国貴族非主流派からは厚い支持を受けている、面倒な男であることもそれに拍車をかける。

参謀長は面倒そうに額を搔く。

「そうか、そうか。後で問題になるぞ、この手の話は」

「はい、貴族の序列……宮中席次は帝国秩序の根本、皇帝陛下の侍従武官を務めたグリーンメルスハウゼン子爵閣下の命で発令する編成とならば——」

俺に言葉の裏に責任を押し付けても無駄だ、と仄めかすと、愚鈍そうに見えた参謀長の瞳に狡知の光が瞬いた、軍人はともかく政治屋としてはこの参謀長は無能ではないらしい。

「……いや、それでは適任がいるではないか」

「閣下の御深慮を教授願えれば」

一礼をしながらリユーネブルクは眼前の中年男について思慮を巡らせる。

あるいは軍人としての能力と政治屋の見地が入り混じっているからこそ、この部隊の行動方針を退嬰的なものに行っているのかもしれない。

「いるではないか、皇帝陛下の御厚意を受けた者が、それも准将で貴様の後任であり、なによりも爵位も帝国騎士だ。何も問題はなからう」

リユーネブルクは内心舌打ちをした。

誰のことかはわかる、悪目立ちしているあの孺子だ。

「自分はより高貴な方であれば喜んで司令官の座をお譲りいたしますが」

畜生、何のために苦勞して子飼いの師団を確保したと思っただい！子飼いの部隊さえ確保すればむしろこのクソツタレの素人陸戦隊と統制の利かない諸侯軍の混ぜ物など誰かに押し付けてしまえばどれほど楽か！という言葉をイゼルローン要塞より厚い化粧で上品に覆った言葉である。

「そうはいかん、卿は我が艦隊の陸戦監ではないか！卿の上に傘を被せるのは望ましくない。副将に当てるのは卿と同じ准将であるが、貴殿よりも後任であり、年下であり、陸戦部隊の指揮官でもない、そして皇帝陛下の覚えもめでたい。これで卿から見ても何か問題が起きうるかね？」

これで問題が起きれば貴様の責任だ、と参謀長は言っているのだ。リユーネブルクは頬を歪め、深々一礼した。ここで艦隊司令部から不興を買うわけにはいかない。

頭を上げた時には参謀長らは既に背を向けていた。

こうしてヴァンフリート基地攻略戦は本格的に始動した。

【著名な戦闘】ヴァンフリート4Ⅱ2防衛戦（6）くた
バル・ヒルの戦い（前）く

さて、艦隊参謀部とリユーネブルクが何故これほどに頭を抱えたのかという点、結論から言えば「グリーンメルスハウゼン艦隊だから」という事に帰結する。

正規艦隊だけであれば同盟軍より多少の問題はあろうと保安担当やらを動員すれば相応の臨時陸戦隊を組織できる。

だが諸侯軍は——特に弱小貴族は——そもそも「陸軍を輸送する為の艦隊」がほとんどである。

貴族軍は地上指揮官（一定規模を下回った場合は例え200名程度であろうと連隊所有者と称される）と私領宇宙軍司令官は同じ領主であり、臨時陸戦隊であろうと彼らは自ら【私有財産】の指揮を執りたがる。

これを責めるのも酷である、有力門閥に連なるならともかく、左様でなくば集権化を悲願とするリヒテンラーデら中央官僚は代償を常に求めるのだから——貴族は帝国の潜在的な脅威として中央政府からは敵視されている。

「待て！どうして我々がバーデニー男爵の指揮下なのか？」

「なんだと！我が祖父は統帥本部次長も務めた名門であるぞ！ピラーズドルフ子爵家などオトフリート四世陛下の女衛の真似事をした騎士上がりではないか！」

「誰が女衛だ！取り消せ!!」

「取り消して欲しいのなら決闘でも挑むべきだな！卿の配下になぞそれこそ取り消させてくれる！」

「ええい落ち着け！ピラーズドルフ子爵！バーデニー男爵！」

「ラサン男爵の指揮下に我々をだど!?リユーネブルク！私はサジタリウスを席卷した、かのぞ「親征帝の15元帥」が一人ゴルツ男爵であるぞ！卿の中で「親征帝の15元帥男爵」の序列はどうなっておるのか!?!」

「黙れ！新参者が！なあにが『15元帥』だ！我々の目上のような顔をしおつて！我が父祖は大帝陛下のお若き頃から輔弼し、国家革新連盟のラサン管区指導者を務めたのだぞ！」

「ラサン？アウターリムではないか！よくもまあ鄙びた地域の爵位で家格を誇ろうなどと——」

そして「階級の不均衡」はこうして生まれる。

そして何よりも性質が悪いのは辺境や下級貴族の大半は大佐止まりで退役することが多い事である。理由は単純であり将官の席を得るには相応の“武勲か財源”が必要だからだ。

一個小隊を超える下級貴族の大佐とそれにうんざりした正規軍将校団がリユーネブルクとラインハルトの下で10万の軍勢を切り盛りし戦う事になる。

「ええい各々方、静まらぬか！リユーネブルク卿！」

我々に説明されよ！」

幸いと言えるのは「真つ当な退役将校」であるフランダン伯爵大佐が家格、武勲とも一段上にあつたことである。否、幸いではなく必然であつた。この男はその為に艦隊参謀長が声をかけたのだから——つまりはリユーネブルク陸戦監にその手の能力を欠片も期待できないという冷徹な見切りがあつた。

「リユーネブルク卿！そもそも——これは艦隊の配置をそのまま転記したにすぎぬように見えるが？」

指揮官が大佐であつても貴族領軍は数十隻の駆逐艦などの小型艦艇からなる戦隊が多い。

これまた単純な話で金がなくとも独自財源による防衛が求められているからである。

ではフランダン伯のような将官クラスの退役将校を呼べばいいではないか、というところもまた異なる。

正規軍将校を“提督”とすることでグリーンメルスハウゼン艦隊の総司令部からの統制を保持する、という名目とリヒテンラーデ国務尚書も総司令部も准将以上の所領軍を率いて参戦する大貴族——これ

は爵位を問わずフレーゲル男爵のようにブラウンシュヴァイク公爵家領の工業力を構成する連中も指す——の参戦を厭ったこともある。

当然だ、正常な判断力を欠いている（と判断されている）グリーンメルスハウゼン子爵より格が高い貴族が参加すれば——予想せぬ面倒が起きる可能性は極めて高い、それなら“無難”な参謀団を送り込んで『輔弼』させてしまおう。ということだ。

「その通りであります、本命はこちらに」

その尻ぬぐいが俺だ、とリューネブルクは内心舌打ちをしながらあわてて作り上げた戦闘計画を表示させた。

「単座艇による偵察の結果ですが、この星はひどく荒れており、山脈と丘陵、断崖が多数存在します。

我々と衛星を挟み裏側の極地に叛徒は基地を設置しており、地形を利用した隠蔽を施しております」

ヴァンフリートは本来人が住まう土地ではない。宇宙歴においても大自然に挑み、苦戦するのは人の宿業である、荒れ狂う恒星風による粒子線の暴力は軍事用の通信インフラすらも破壊する。300もの異常な数の小惑星帯は航路を妨げる。

【真つ当な人の歴史】を辿ればこのような星系に植民をする阿呆はいない。だが腐敗と軍閥の跋扈で猖獗を極めた銀河連邦軍の中に“だがそれがいい”と言つてのけた男がいた。

なおかつ腐敗した連邦全土を俯瞰し、政界を跋扈する中でも特に強大な魍魎となる一種の才能があったことが『歴史を狂わせた』のは間違いない。

「また、およそ敵本拠地より900km地点は本拠地たる極地を取り巻くようにクレバスと山脈により構成されており、大軍の行軍に適する二か所に敵は陣地を築城しており、大軍を突入させるのであればここを突破せねばなりません。

そして200km地点に主線陣地が設置されております」
リューネブルクは内心、舌打ちをした。

——“インペリアリスト”ゴードンの拙攻が百余年過ぎてまた崇るとは

人の手が入らぬとはいえこの小衛星が荒廃しているのはコルネリアス帝の親征が遠因である。

——ヴァンフリート民主共和国は同盟最古の構成邦の一つである。

——ヴァンフリート民主共和国は同盟交戦星域の最後の避難所である。

——であれば同盟全土が制圧の危機にあった【コルネリアスの大親征】において元帥杖が一本ヴァンフリート星系で折れる事となったのも自然なことである。

後方鎮定を任せられたはいいが他の元帥杖を持ち、前線で景気よく暴れまわる同輩達にあれこれと手勢を引き抜かれたゴードン元帥。彼にどの程度の割合で敗戦の咎を負わせるべきかは判断が分かれるところだ。

だがいずれにせよティアマトやらアスターテやらから集まった敗残兵と避難民たちによる義勇軍、そして敗走後ラウーフ中將（最終攻勢時には元帥へ昇進）の下に再集結した同盟軍正規艦隊は修繕と再編を済ませており、機を逸した——大親征失敗が決定した後の処断を恐れたが故の——最終攻勢はゴードン元帥の戦死で幕を閉じた。

そして破壊された戦艦は軍籍をヴァンフリートの小惑星帯デブリへと移し、惑星・衛星は多数の爆撃痕を残した。

ヴァンフリート建国史上唯一の本土決戦の痕跡は今でも残っており——4112基地は戦鬪で荒廃した衛星、その過去のデータを十二分に活用したヴァンフリート工兵の協力の下で造られているのだ。

「軍を二つに分け、分進合撃の形態を取ります。グリーンメルスハウゼン艦隊臨時陸戦軍司令官は小官のまま小官が直卒する軍を集成第一軍と、ミューゼル副司令官が指揮を執る軍を集成第二軍と呼称」
「それぞれの軍において皆様の所領軍についてですが——運用を統括する副司令官を集成軍司令官と別に置きたいと思えます。

第一軍はエルビング男爵閣下、第二軍はフランダン伯爵閣下に諸侯

軍の運用統括をお願いいたします」

諸侯——といつてもリヒテンラーデにもカストロプやブラウンシュヴァイク、リッテンハイムら有力派閥にも相手にされない非主流派であるが——は挙げられた名にざわめく。

フランダン伯爵はよい、だがエルビング男爵! 接舷男爵だど!?

“古き良き”帝国貴族と呼ぶ者もいる。或いは悍ましい貴族崩れの海賊と呼ぶ者もいる。つまるところ“実力派”であり皇帝や貴族閥閥に頼らず『戦斧と揚陸艦一隻』からアツシユビーに当主であった父を消し飛ばされ、傾いた家産を立て直した男だ。

そう、つまりは——

「叛徒相手の略奪で富を築いた男が副将か、いよいよユーンブルクに相応しかろうよ」

バーデニーズ子爵が鼻を鳴らす。

「あん?」

背後から社交界で聞くことはない類の返事が返ってくる。

「エツ?」

「やつドーム、ドーム、エルビングです、バーデニーズ子爵閣下」

のっそりと叫ぶ子爵の背後に立つのは偉丈夫の初老の男。

由緒正しき男爵家当主でありルドルフ大帝時代より軍将校として代々皇帝に仕えてきた、男爵家としての家格は高い、だが——

「ヒツ!?!ひ、控えろ!」

その手は細かな傷がついた分厚い自身の皮でおおわれている。社交界で過ごす貴族のそれではない、その太い指が、黒衣の軍服を纏った柔らかな子爵の肩に食い込む。

「まあまあおかけになって下さいや。子爵閣下、ビームってなあ光つてましよう? ありや粒子の流れなんですわ、子爵閣下はこうしてクツキリと皆様に見えていらつしやる、そうですね?」

「アツ……」

「見えてるってことはね、粒子が反射してるんですわ、つまりビームが当たり、死ぬんですよ、わかりますか?」

ミシリ、と嫌な音を周囲の人間は幻聴した。もちろん本当に聞こえ

たわけではない。だがこの男がにこやかに年下の子爵の肩に乗せた手の動きがそれを“聴かせた”のだ。

「わっわかつわかつ……」

子爵は自由の身になった後も立ち上がりもせず、ただ背もたれに身を預けながら息を荒げている。ただ肩を揉まれただけなのに、まるで首を絞められていたかのようなうだ。

沈黙が会議室に満ちる。先程まで罵り合っていた貴族達の視線を受け止めエルビング男爵はにたりと笑う。

「それじゃあお願いしますわ、陸戦監殿」

こうして帝国軍は当座の編成をようやく決定し、行動を開始した。

タバル・ヒル、氷の山脈を縫うような坂である……この地に築かれた前衛陣地を守るのは大夏天民国とアスターテの連合部隊、約5、800の兵達だ。

「航空隊より報告、敵兵力は予定通りの侵攻速度を保っております、あと30分ほどで交戦圏内です！」

基地オペレーターターの報告にアスターテ連邦軍のクレール中佐はやれやれ、と肩をすくめる。船団国家アスターテ連邦共和国の海兵コマンド大隊を率いる俊英である。

『5万の兵力、実に9倍とききましたか。これはやり甲斐がありますなあ、かの名高き“正墨旗”がおられるのであれば楽ができると思つたのですが』

どっしりと構えつつも苦笑するのはアブラハム啓典教が墨家会衆派を奉ずる大夏天民国において正墨旗軍第二旅“不拔”を率いるチエン・ツーチョン准将。

「名高き、はやめてくれ。ガラテイエや常備軍のお歴々として我々より血を流しているのだ」

クレーベルは肩をすくめるにとどめる。

伝統的に信仰心の厚い大夏天民国は兼愛交利と非攻を唱えているが、本土防衛の為に派遣される“バーラトの妹”ガラテイエの義勇軍や避難船の警護に当たる“交戦星域の盟主”パランテイア連合国宇宙軍と並び同盟常備軍と轡を並べる事も多い。

まあともかく、だ。とチエン准将はディスプレイに表示されたマップに視線を向けた。

「築城についてはこれ以上は望めん、ヴァンフリートはさすがに良い仕事してくれた。後は我々次第だな」

これほどまでに念を入れた築城計画を持っているのは文字通りヴァンフリート将兵の執念によるものであった。

イゼルローン要塞攻略作戦という単語は自由惑星同盟国民の大半にとってそれだけ絶対的な牽引力を持つ言葉なのだ。とりわけ交戦星域に住まう者達にとつては――

「敵影を確認！敵影を確認しました!!」

『()丁寧地上戦を挑んでくる以上は我々のなすべきことは明白です、わからせてやりましょう』

クレーベルが不敵な笑みを浮かべる。

「軍旗を掲げよ!!銅鑼を鳴らせ!!!」

・
・
・

ヘルマン・フォン・リューネブルクはまったくもって想像を超えた事態に陥っていた。

「敵の軍旗を確認!!!同盟地上軍旗に……」正墨旗“!!”

「正墨旗!?”

仮設ではあるが気密された司令部は外と異なり顔を晒すことができる。とはいえ状況次第では真空でも活動できる装甲服を身につけたままであるが。

「なんだと!?あの“狂信者共”か!?”

帝国軍常備地上軍が経験する「実戦」はほぼ侵攻作戦であるむろん、回廊内部の係争星における戦闘もあるがほぼ実態は叛徒（自由惑星同盟のみならず）の居住星への侵攻が最大の花形であり“役得”でもある……ルドルフによる“実力主義貴族による封建制”の導入は“不採算地域”の切り捨てを私掠により誤魔化す為という学説もある。

そして交戦星域はその伝統による最大の被害者であり、氏素性も怪しげな諸邦は自由惑星同盟の中においても地域主義による政治・軍事的結末を求められてきた。

大夏天民国の非攻は専守防衛に特化した派兵へと移り代わり、侵略者に対する宗教的情熱へと変化していった。

「これは面倒なことになるぞ……」

同盟軍として軍歴を積んできた リューネブルクは彼らの面倒さを知悉している。

「だが数は多くて1万、いや、さらに少ない、押し切れるだろうさ」

「陣地突破に必要なのは数ではない……質と士気だ。重火力隊を全面に展開しろ、エルビング男爵、諸侯軍を前衛に出せ!一番槍の榮譽を競わせてやれ」

控えていた参謀がエルビングに視線を向けつつリューネブルクに具申した。

「それと、あの側道に重火力陣地を」

峠の開けた場所に重火力陣地を築城すれば主攻正面を射程に入れる事ができる。

だがリューネブルクは眉を顰めて彼の指す地点を睨む。

「なにも備えがされていない“ように見える”だけだ。都合が良すぎる状況は疑うべきだ」

参謀はその指摘には怯まなかった。彼も逆亡命者であった。

「はい、閣下。ですがやるしかありません!」

ここで虎の子の装甲擲弾兵師団を消耗させては基地主力の陣地で……！」

参謀の言は焦燥の気はあれど冷徹な思考に裏打ちされていた。つまりは、「基地を陥落させれば非主流派貴族の使いつぶしはどうともなる、罨であれば奴らを投入して暴くべし」と言いたいのだ。

正論ではあるが――

「男爵」

エルビング男爵はしれつと珈琲にウイスキーを垂らしながら答える。

「深入りはしたくないですなあ、一個連隊規模を派遣しておきましようかね」

「どうです？とエルビングが目を向けるとリユーネブルクも首肯する。

どうであれ彼ら“は”真つ当な軍人であった。

・
・
・

問題は派遣された部隊である。

「我が領自慢の重火力隊の出番ぞ、ゴルツの奴め、せいぜい暇を持て余すがよからう」

ラサン男爵はもしもの為に、と詰んでいた一世代前の重火力砲を装備した800名の連隊（公称）を直々に指揮しており、

「ラサン軍の重火力陣地の“監督”だと？監督とはなんだ、馬鹿にしおって!!」

ゴルツ男爵はゴルツ元帥記念雷撃艦隊から抽出した1200名の擲弾兵連隊（公称）を指揮していた。

この二つの連隊（公称）の指揮官はまったくもって仲がよろしくない。ゴールデンバウム朝の矛盾した考えの衝突に他ならない。

即ち、歴史と伝統の権化であるルドルフ大帝以来の男爵と名君、コルネリアス親征帝に取り立てられ将官の座、男爵位、更に元帥杖（※

60数本の)までも手にいれた男爵家。

実力主義と伝統、二つの権威は常に衝突する——この二人は双方とも辺境の貴族であるのだがそれ故に継る力は強いのだ——

そしてその姿は高精度光学望遠鏡により捉えられ、偵察班は擬装が施された洞穴へと帰還した。

「罨じゃあないんですかね、これ」

クレーベル中佐は敵陣の偵察報告を受けて苦笑いをした。

伸びきった隊列、ダラダラと進む前衛と間が詰まった中衛、そのくせ後衛は中衛を支援するには間が空いている。

「罨があるとわかって罨を張る、読みあいを仕掛けていると?」

第二旅の増強部隊である独立歩兵大隊”武徳”大隊長は鋭く尋ねる。

彼は臨時で側道であるキルジ・パスの防衛隊としてクレーベル中佐の指揮下に入っている。

「様子を見ていけそうでしたら」

クレーベル中佐はにこり、と笑った。

「アスターテ海兵コマンドの精華をお見せしましょう」

銃撃、砲撃、隘路を進む帝国兵はそれをよけることもできず、悲鳴を上げて後退する。

“武徳”大隊は総計600名程度であるが大隊重火力を保有している。とはいえけして楽な戦ではない筈だ。

頭数だけなら向こうがやや優位である。

「急増陣地でよくもまあ……」

クレーベル中佐は感心したが、“武徳”の将兵の努力の身で持ちこたえているのではない事も理解している。

「畏の可能性は低い、か？」

帝国軍の動きは軍事的常識から逸脱しており、であれば政治的事情であろうか、とクレーベルはいつでもよい考えを弄んでいる。

正解であった。

ラサン重火力隊はさつさと援護しろ、とゴルツ男爵が怒り狂えば、貴様らの兵が弱いからこうなっているのだ、我が隊の役目は主力の援護であり対処するのは護衛の役目だ、我が隊に損害が出たら貴様の責任だぞ、とラサン男爵が怒鳴り返す。

「互いに連携すればいいじゃないか」と素直に思った方もおられない。

だが忘れないでもらいたいが「貴族領軍は貴族の私有財産」なのだ。

そして彼らは「カイザーの老友の出陣」という「出征こそが武勲」という甘い餌に釣られた「門閥からも官閥からも弾かれた非主流派貴族」である。

軍の価値は門閥貴族とすら違う、具体的に言うと『補充する金がなくなれば難癖をつけられて領土を削られかねない』のだ。海賊と傭兵の区別は門閥貴族や官吏が司法にばら撒いた餌の数でその都度変わるものである。

貴族とは思えない？ 門閥に入れない不採算領地を押し付けられた貴族などこんなものである。

そして航空部隊も対空砲をそろえた旅団主力の張り付く陣地と自軍の航空隊のおかげでこちらにはさほどの数は回ってきていない。

—— 一個艦隊の部隊ならもつと数を割くのでは？

クレーベルは訝しむが少なくとも今の優勢に乗るしか方法がないのも事実だ。

かくして帝国軍は「下がるに下がれない」ゴルツ男爵の前衛隊、中衛で怒鳴り散らすラサン男爵の重火力連隊（大隊）、そして後衛のゴルツ男爵の本隊、と分断されてしまった。されて、と言っても同盟軍は常道の防衛戦を仕掛けているだけなのだが。

むしろ貴族の「御当主」を矢玉の飛び交う現実に晒したくない側

近達の判断も常識的と言えるかもしれない。

そしてそれを見逃さないのがアスターテ海兵コマンドである。

「よしよし、それでは我が隊は、敵中衛と後衛を粉碎する！」

“ヴォルティジュール”第一中隊長は意気軒昂である。無理もない、彼らはコロニー艦住民の最後の壁であり、その訓練にはあらゆる努力を払っているが実戦経験は多くはない。だが彼らはいま構成邦外交の一つの成果として表舞台に立っている。

「中隊諸君、各小隊長の射撃に続け、我々は第二中隊の支援を受けつつ突撃し、敵本部を強襲する、つまり俺たちは貴族のケツに穴を増やしてやるわけだ」

中隊の兵達が笑いかみ殺す、成すべきことは自分たちの復讐でもある、本土を失い、私掠におびえ、避難民たちを後方へ運ぶ船団国家の住民たちの復讐だ。

「今回はゼツフル粒子散布弾は使用しない、原則として各員の測定器に反応しない限り——即ち敵部隊が白兵戦に対応する場合以外は突入後も射撃を許可する」

中隊長は兵隊へ手で示す。

「諸君！アスターテ海兵隊の伝統をイゼルローンの強盗共に教育して差し上げよう！」

彼らが隠れて見下ろすのは隘路で立往生している重火力大隊、碌に警戒もせず幾度も伝令を送っているのが見える。

「Tirer!!」

90の光条が不運な将兵に突き刺さる。一度、二度、三度。

後方でも悲鳴が上がる。第二中隊も攻撃を開始したのだと知った。

いいぞいいぞ。例えこの後くたばるのであれ、俺達は間抜けとして死ぬわけではなくなった、畜生、こうなったら攻撃あるのみだ。

中隊長は装甲服に内蔵された通信機へうなる。

「Membrés de l'entreprise, v. rifiez la bannette！」

中隊長に兵隊は負けじと返す。

「P・r・t 撃 準 備 完 了！」

小銃の先にきらめくのは——炭素クリスタルの銃剣である。アスターテ海兵の伝統こそは銃剣突撃、彼らは接舷戦闘においてゼツフル粒子を使わず、あるいは使われようとも必要とあらば専門の白兵戦部隊と肩を並べて突撃をする。コロニー船が接舷を受けた場合、彼らが退いた時は即ちコロニー船が減ぶときである。

中隊長は立ち上がり、片手を振り上げた。

「Lancez l'attaque ! Vive la Astarte !」

腕を、振り下ろす。

「Vive la Astarte !!」

「Vive la Astarte !!」

「Vive la Astarte !!」

蛮声は通信波となり、敵の受信装置に介入した。貴族のピクニックはその瞬間、野蠻な戦地へと叩き落とされた。装甲服の性能に物を言わせ、崖を飛び降り、強襲する海兵コマンド部隊。

悲鳴を上げる兵、兵を怒鳴りつける下士官、棒立ちで激を飛ばそうとして射殺される若手将校——素人臭い、というより素人なのだ。本質的に“船乗り”更に言えば海賊退治やセレモニーで住民に貴族の権威を示す為の艦にのる将兵である。

そして貴族領において宇宙船の操作を許されたものはその時点で農奴よりも知識や教養があると見做された——つまり地上軍の兵士を下にみていたのだ。

その差別は貴族たちにとつても都合がよく当然のように利用する。封建国家にとつて差別ほど便利なものはない。

「いつ嫌だ!!こんなところで死にたくない!!!」

兵が将校を突き飛ばし、逃げようとするが下士官が即座に射殺する。

本来であればゼツフル粒子の散布がなされた時点で士気を喪失する可能性すらあったかもしれない。

クレールは敵を高く評価しすぎていた——そもそも敵の行動意図を誤解していたのだから致し方ないが。

「じよ、冗談ではない！こんなところで叛徒に殺されてたまるものかよ！」

同じように音を上げたのはゴルツ男爵であった。だが彼はまだ理性的だった。

すでに前衛を救うことは叶わないと判断していたからこそであった。

「私の艦隊が！艦隊がこんなところで壊されてなるものか！部隊を集結させろ！退くぞ！撤退だあ！！」

幕僚たちは少なくとも自分たちを救う判断をした。御領主様の下命を軍事的合理性に則った指揮へと。翻訳し実行させる。

「ゴルツ男爵の雷撃戦隊臨時陸戦大隊、後退しています！」

「なんてこった！前衛を見捨てたのか！」

悲鳴を上げる側近達を尻目にラサン男爵はわめき散らしている。

「奴ら我々を見捨ておったか！！おのれえ！なにがかつては元帥を出した家だ！！我が一族は恐れ多くも大帝よりラサン男爵の位をいただいた身じゃ！すなわち儂の家は大帝陛下以来の重臣であつてかのような親征帝に取り入った成り上りの風下に立つ身分ではない！！その我が家門にかような狼藉を働くとは言語道断！この事直ちにグリーンメルスハウゼン子爵閣下に掛け合せて直ちに皇帝陛下に奏上していただく故、心しておれ！！」

「男爵閣下！！ご指示を！！」

男爵は幕僚たちに向かって口を開こうとし、快適な装甲服内の筈なのに干からびた唇を舐めた。

「退く、退くぞ……そうだ、撤退だ、今すぐ！！」

「ゴルツ男爵の手勢は既に撤退しつつあります！閣下！後方突破の為に装備を捨てる御きよ——」

侍従でもあつた中尉は最期の言葉を言い終えることなく、倒れ伏し

た。

ラサン男爵は何故侍従が倒れたのかを理解する前に思考がそれを行ふ臓腑ごと霧散した——指揮系統はこの瞬間に崩壊した——本人にとって二度とゴルツ男爵のことを罵ることはできない事の方が重要なものかもしれないが。

ゼツフル粒子を伴わないアスターテ海兵コマンドの銃剣突撃は見事に成功、組織の質と事前準備の優位を活かした戦闘であった。

【著名な戦闘】ヴァンフリート4Ⅱ2防衛戦（7）くたバル・ヒルの戦い（中）く

「ラサン男爵は戦死、ゴルツ男爵の部隊は半壊——手ひどくやられたな、エルビング男爵」

リユーネブルクの脳は既に複数の課題を処理すべく動き出していた。

——ヴァンフリートはわかる。大夏天民国もわかる。ガラテイエであつても不運は嘆けど納得しよう。だが同盟政府からすれば避難誘導の要、そして所有国であるアスターテ政府からすれば本土防衛の最終戦力であるアスターテ海兵隊が派遣されているとはどういうことか？

——つまり、我々は何を攻めているのだ？ヴァンフリートの資源採掘施設ではおそらくない、同盟軍の施設か、あるいは“交戦星域”の難民用施設？いや、それよりも価値がある何かか。であれば本陣にはどれほどの兵力が張り付いているのか？

——兵理は正しい、筈だ。だが軍の在り方があまりにも、あまりにも自分の戦ってきた同盟軍と異なる。どうすればいい？指揮統制の為にどのような手を打つべきだ？

畜生、イゼルローン要塞との最前線で戦えば戦うほど同盟は沈む船だと確信できた。俺の判断は正しかったはずだ、だというのに俺はここで何をしている？

俺が率いているこの軍隊は何だ？

俺は今どこで何をしているのだ？

「まずは事後処理ですなあ」

諸侯軍の統括を担当するエルビング男爵は面倒そうにいった。

「まずゴルツ男爵は背命に相当する可能性があるかと伝えますわ、そしてグリーンメルスハウゼン艦隊の人事部に調査を要請した、と噂を流しておきます」

ブラフですがね、とエルビング男爵がいうがリユーネブルクは難色

を示す。

「背命？調査？貴族領軍をここで怯えさせてどうする、揉め事を抱えて使いつぶせるほど従順か？」

「揉めませんよ、今、この時に他の諸侯を救うためなんざに誰が動きますかい。今はこちらが首根っこ押さえとるんですよ。あの二人は所帯の小さい“連隊”をもって騒いだ時点でこうなることは決まっていたんですわ」

弱った野良犬を殴って躡るんですけど、と男爵は楽しそうに語るがリユーネブルクの返答はそっけないものであった。

「エルビング“大佐”向こうの仕掛けが割れた以上、後は一挙に小細工させずに突破する。側道の方面に装備が整った“大型連隊”を張り付けたい、部隊の選定を。大佐の部隊にも所定の計画通りに動いてもらおう」

「ああそれですが計画に変更点があります」

どうするつもりだ、とリユーネブルクが視線を向けるとエルビングはやれやれ、といったげに首を振った。

「ゴルツを忘れんでください。奴は不問にすると禍根を残します、ヤツの残存部隊を先頭に立てて勇敢に戦死してもらいましょーや——ああ督戦用に専用の銃兵隊を作っておいてくださいや、小規模中隊程度で十分でしょうが」

リユーネブルクの顔色を見たのか、エルビング男爵が喉を鳴らして笑う。

「いやあしかし、驚きましたわ。准将閣下は戦友を撃つ覚悟でこちらに来たというのに味方を殺す覚悟もないとは!!いやはや叛徒は相変わらず身内に甘いようで」

リユーネブルクは何も言わずに背を向ける。静かに目を閉じ、“接舷男爵”の笑い声を意識から追い出そうとする。だが外の吹雪の音は気密された指揮壕の中では聞こえず男爵の笑い声は彼の耳にまとわりつくだけであった。

男爵一人を討ち取ったキチジ・ヒル——側道は鉄火場の真つ最中である。

「よーし、まだ、まだ、まだ……」

「よし防音用意！伏せエー！」

「……」

空気が波打ち、兵士たちは伏せている地面に押し付けられた。

「圧縮空気を封じ込めた『アンチゼツフル・バブル』を爆破し、ゼツフル粒子を一時的に吹き飛ばしたのだ。原始的であるがそれ故に間違いはない。コロニー艦隊国家アスターテ連邦の海兵隊は接舷戦闘に特化している、つまりはゼツフル粒子対策に特化した研究を行なっているのだ。」

「急げえ！撃ち方用意イ！」

「……ッ！」

ふらふらと立ち上がった兵達が圧縮空気式迫撃砲を引き起こし、放つ。

着弾地点から弧を描くように爆発が起きる。濃度が薄かろうとゼツフル粒子への引火は馬鹿にならない。だがそれを予想していたのだろうか、敵は既に退きはじめていた。

ならば楽をできるかといえはそんなことはない、重火力により陣地を叩かれつつ敵が肉薄を試みる、それだけで将兵は万全を期していうと死傷者が発生するし、なにより疲弊する、火器管制を担当する将校の負担は何をいわんやである。

「ご無事ですか」

クレーベルの補佐をしている大夏軍独立大隊“武徳”の大隊長が駆け寄ってきた。

「なんのなんの、ウチの兵達はまだまだまだへばりませんよ」

「しかし、消耗はします。小手先で凌げるのは限界ですな」

「なあに小手先の手段ならまだいくらでもありますとも！ですがどうも、精彩に欠けるどころかモノクロな指揮ぶりじゃありません？」

とクレーベル中佐と言いながら飴を噛み潰している。

「休憩なさるなら予定を早めてタンクベッドに入っていたいただい
も」

友軍の大隊長の言葉にクレールは違いますよう、と手を振る。

「いやいやいや、私じゃなくて向こうです、向こう！いい加減な攪乱砲
撃、やる気のない突撃、ちよつと押せばすぐ退く——」

生真面目な大夏軍人はふむん、と思考を巡らせる。

「典型的な波状攻撃では？それに敵が正規軍ではなく諸侯軍というの
なら士気が低いのも織り込むべきかと」

「士気が低いから」ではなく統制された後退ですよ、追撃をする気
になれませんね、それに——」

クレールが眉を顰める。

「なんにしてもあからさまにいい加減な割に頻度は高い砲撃、これか
ら殴るからよろしくね、と我々に伝えているのよう……どうもよく
ないなあ。我らが准将閣下には予定より早いですが後退の打診を」

「はっ。本文は？」

「敵戦力、本陣への大規模な行動の可能性あり、注意されたし、こちら
は別命なくば後退の許可を求む、です」

星間戦争においても要衝に防御陣地を築城し、敵はそれを攻めあぐ
ねる。様々な理由はあるがまず第一にいえるのは宇宙艦隊を相手に
した防衛システムの発展により飛躍的な発展を遂げた“対空砲”で
ある——伝統的に対空砲と呼ばれているがその実は大気圏突入を仕
掛けてくる対地ミサイルすらも迎撃する凶悪な兵器である。大気圏
離脱を前提とした迎撃兵器はそれ故に“角度”の問題があるので例
えば地球時代で言えば“地球を半周する弾道ミサイル”のようなこ
とはできないが目標地点の周囲に複数個所に設置されれば安易な空
輸に頼ることは難しくなる。

つまり——対空システムを構築する各装置は陣地の要であり重
要防御地点なのだ。

当然ながら奇襲を警戒し、高度に要塞化された堡塁に慢心せず巡回する兵は当然いる——筈だった。

「……」

装甲服越しに“奇麗に”喉を裂かれた者達が転がっている。そして……帝国軍は十余名の帝国兵はそろり、と周囲を警戒し——断崖絶壁の下に向かって一人が合図する。

ウインチで巻き上げられた兵士達が次々と登ってくる。十名が二十、二十が四十——瞬く間に増えてゆく。

「エルビング男爵領連隊 “ヨムスの人間を獲る漁師” が一番乗りだ!!」

頭数は二百程しかいない。選抜したのであろう。だが彼らを率いているのは——

「いよおおおし！男爵様が直々にお前らに訓示してやる!!」

いいな！テメエらの仕事は対空システムをぶっ叩いたら尻に帆を掛けて逃げ出すことだ！ハンドキャノンはブチかましたら最悪投棄してもいい！斧とブラスタは捨てるなよ!!」

エルビング男爵自身である、このような作戦の陣頭に立つのは蛮勇ではなく経験によるものだ——だから主流派から嫌われるのであるが。

「戦斧は短く持て！キンタマついてるな！突撃!!」

・
・
・

まったくの奇襲であった、ことこの点においては大夏軍の手落ちではなくエルビング男爵の選抜部隊の練度と戦術眼に負うものである。ミサイル発射装置が破壊されていく。

「いいぞ!!ゼッフル発生装置をばらまけ!!」

だが大夏軍は奇襲からに対する対応の速さで矜持を守って見せた。

「ウオオ!?!」

巨大な矢が応急土嚢を突き破る。矢尻が装甲服を削ったのを見て兵は呻いた。

「マインゴッド！アイツら連弩を持ち出してきやがった！」

連弩、この宇宙歴の時代に冗談のような装備だがゼツフル粒子対策としては合理的でもある——まことに冗談のような兵器だが。

「畜生！真面目に戦争しやがって！閣下ア！こっからどうしますかい！」

エルビングはそつと聴音センサーを確認する、“派手な戦闘音”はどんどん膨れ上がっている。十分役目は果たした、彼はそう判断した。

「兵隊共の相手はすんじゃねえぞ！あの厄介な対空砲台を破壊したんだ！さっさと撤退だ！へっ！奪う物もねえ戦で大事なお前ら潰しちゃよ……皆に顔向けできねえぜ！」

「さっすが男爵閣下！聞いたなテメエら！目的は達した、退くぞ！」

「おつとそうはいかん、こちらも面子があるので即退散とはいかせぬよ」

「おつとおー！」

放たれた短剣が護衛をかくぐり真つすぐ標的へ向かう、だがエルビング男爵は慌てずそれを斧でそらした。

「畜生！武装牧師隊かよ!!」

聖輪武装牧師隊——大夏天民国において牧師、すなわち“羊飼”とは羊、すなわち信者を守る在り方であると伝えられている。大夏天民国は銀河連邦の辺境地域に跋扈する軍閥に対する農民反乱から始まった、その指導者となったチョウ・クアンは“啓典の教え”を奉じていた。彼は聖人ダルマが天使に稽古をつけられ授けられた聖輪シヨウリン・アーツ武術の達人であり、軍閥の将校を素手で“打ち、とつた”と伝えられている。大祖である彼を見習い、牧師は必ず聖輪シヨウリン・アーツ武術を学ぶことが教義の一環となっている。

「タダでは帰さんぞ！貴様らの首を置いて行けい！」

白一色の星に映える、鮮やかな朱色の房飾りをつけた花槍を装備した精鋭部隊だ。頭数は同数、更には先ほどから連弩に機械弓を装備した支援兵も集まってきた。

「ハッ！ゾロゾロとご丁寧なこった！」

にやりと笑いながらエルビングは内心、舌打ちをした。

シンプルな話である、エルビングは既に一刻も早く逃げ出すつもりであった。彼にとつてはこの戦も“クソ浪費の舞踏会”と変わらぬい“営業に必要な出費”である。

だが——これほどに頭数が揃うとなると撤退にもコスト——戦死者が出る。エルビングは自分の育て上げた“儲けるための財産”をこのような形で失いたくはない。

「テメエらの相手はこのヨハン軍曹だ!! テメエらのようなクソ野郎には勿体ねえぜ？」

中年の下士官に続いて十数人の男たちが前にでる。ヨハンの分隊だ。

「テメエらはいつもそうだ！俺達が必死に家族のために稼いでる時に寄ってたかつて邪魔をする！」

「何千隻もある病院船のたかが一隻を鹵獲して中身ごと売り飛ばしただけの俺達を殺す為に千隻も軍艦を動員するイカレ共！たかが五隻の私掠船をいじめて悦に入る下衆共が!!」

「ここで俺が片付けてやらあ！」

「……ヨハン！最期の仕事を頼めるな！」

「男爵う！俺達ア高いですよ！俺たちの家族、全員さんと豪華な飯を食えるくらいの手当、たのんますよ!!」

「ああ！テメエらの仇も取ってやる！テメエらの家族も食わせてやる！

だから——ここで死んでくれ！」

エルビング男爵は心から復讐を誓いつつ、頷くと撤退の指揮を開始する。

「敵は“オフレッサー隊”と思え！近づけるなよ！引火も気にするなぶっ放せ!!」

背後の戦闘音はもはや気にすることはない、彼は“接舷男爵”、船を襲い、私掠で財を成した傑物なのだ。死したと判断した部下のことはもはや気にすることはない。

【著名な戦闘】ヴァンフリート4Ⅱ2防衛戦（8）くたバル・ヒルの戦い（下）く

なぜこんなことになってしまったのだろうか——ゴルツ男爵はフラフラと“突撃”を行いながら考えていた。

自分は選ばれた生まれの筈であった。コルネリアス“親征帝”により実力で選ばれた貴族の末裔だ。それなのに——

「い……嫌だ！もう嫌だああ!!」

目をかけていた農奴管理を任せていた家宰の三男坊が悲鳴を上げて逃げ出し——後方からわざとらしく派手な音を立てて重レーザが“ゴルツ男爵領軍”の背後を薙いだ。

「進め、進め——いいから、進めえ！」

引退間近の元侍従が遠征の“引退箔付”に出征するからと馳せ参じただけなのに——ゴルツ男爵は崩れかけた兵達を 咥しながらぐるぐると考え続け——胸に焼けるような痛みが走った。

「……え？」

短く構え、油断なく構えていた戦斧が何故か思い通りに動かない、何故だ、と視線を向けると何かがぶら下がっている、見慣れている筈だ、それは——自身の利き腕であった。

右手を見る、薄い大気を埋めるかのように血が勢いよく噴き出していた、悲鳴を上げようとする、声の代わりにゴボリ、と塩辛い何かの口の中からこぼれ出る——彼の胸はブラスターで焼かれていた。

ゴルツ男爵領陸戦隊は緒戦の混乱による失態を恥じ、皇帝陛下への忠誠を新たに先鋒を志願し——叛徒の強固な防衛を突破するべく勇壮に玉砕した。

「敵侵入！歩哨にあたっていた分隊は壊滅状態です！クソツ！断崖を

登ってきやがった!!」

エルヴィング隊の侵入から数分後、本部ではオペレーターがようやく裏返った声を上げている。

「遂に侵入が始まったか。敵は特殊部隊だ! あわてず武装牧師隊を回せ!」

ここでつぶせば大戦果だ!」

幕僚長がオペレーターの動揺を跳ね返す。

「正面より報告が——」

「閣下。前衛陣地、〃二之関〃より後退を開始します!!」三之関〃を抜かれたら本営です!」

「旅団長閣下」

基地司令部からの派遣参謀が囁く。彼は大夏天民国軍ではなく同盟常備地上軍の将校である。彼の役目はフォルベック少将以下防衛司令部の計画と前線の現実をすり合わせることだ。

「クレーベル中佐達の後退の目途について報告が来たら我々も退いてよいかと」

“転進保証人”の傘下は大変だ、とチエン准将は呻く。

フォルベックの得意戦術は複層陣地による多層防衛、転進を繰り返す最後の最後に叩き潰す、というものだ。

畢竟、楽をできる戦というものはないがとりわけ前衛を担うのであればこの手の作戦は神経を使うものである。

「クレーベル中佐に撤退の許可を、我々もここを捨てるぞ」

チエンはニヤリと不敵な笑みを浮かべた。

「——連中を押し返して、悠々とな。各隊——」二之関〃防衛隊に伝達!」三之関〃も放棄する! 速やかに本陣に兵力を結集させよ! 本営を前進させ護衛中隊も出す、白兵戦を覚悟せよ!」

派遣参謀と大夏天民国軍の参謀が目を見つめた。

「危険です、閣下!」

「基地主力に合流するためにも戦力の温存が必要です!」

だからこそだ、と手を振る。

「敵の目的は兵力の分散だ、防衛兵力が延びきれば設備が整っていよ

うと浸透される。

であればまとめて相手をし、一步も通さぬと覚悟を決めることだな
！」

「西方の防空砲台大破ア！対空防衛火力20%低下！敵部隊捕捉の
報告アリ！」

「慌てるな！所詮は捨てる陣地、被害の復旧は後だ！着実に叩き出せ
い！正面は一兵たりとも引き抜くな！」

「遵命！」

銅鑼が鳴り響き、下士官と兵が駆け回る。

「白兵戦準備イイイ！！」

リュウネブルク！奴が来るぞ！奴が来るぞ！
「?? 堡！ 呂来!! 呂来!!」

やがて、装甲擲弾兵達が雪崩れ込んでくる。だが機先を制すかのよ
うに塹壕から槍を構えた大夏の兵達が飛び出し、迎え撃つ。

「ええい！死ねえ！墨家兵法！長槍桂林陣!!」

白兵戦を避ける為の長槍による3方向からの刺突、戦術的卓抜を示
すかのようであった。

「焦るな！穂先を受け流せ！」

リュウネブルク子飼いの師団は冷静であった。そして冷静に対応
できるということは——精鋭と呼ぶに足る練度を持った白兵戦部隊
である、ということである。

堅守を誇りとする正墨旗軍の兵法を白兵戦の技術を“信頼”した
戦術で強引に突破してゆく。

「うわあああ！無茶苦茶だ！」

若い兵が悲鳴を上げる。無理もない、数で上回り半包围で連携した
槍の刺突。それをただ戦斧と体裁きでかいくぐり、襲い掛かってくる
のだから。

堅牢な槍衾をこじ開ける装甲擲弾兵を連弩から放たれた矢が貫く。
「白兵戦の専門でないものは連弩の周りを固めろ！動けるものは全員

出撃せよ！

我等の本陣を敵に落とされるは、恥辱の限りよ！

「小癩なあー！」

装甲擲弾兵は空気式擲弾発射機を放つ。連弩が一つ沈黙するが代償に彼も胸を貫かれ、倒れ伏す。

「突破しろ！連携して前へ進め！」

「通すな！！通すな！！」

双方の理想からかけ離れ——なおかつ想定された悪い状況、混戦状態へと陥った。そしてゼツフル粒子下での火力は大夏側が優勢であった。

「ツー……こは」

リユーネブルク直卒の中尉は目を見張った。古風な大天幕はがらんと片づけられた後であった。

引き連れていた部隊は30人から十数人に目減りしている。それだけひどい戦であった。

そこには装甲服越しでもわかる小太りの男が一人。そしてその周りを固める数名の男たち。

来い、とでもいうかのように背もたれのない小さなベンチのような椅子に座ったまま手をちよいちよい、と動かした。

「なめやがつてー！」

打ちかかると同時に男の座る椅子は跳ね上がり、足を払った。

「グワっ！」

装甲服を纏っていても予想外の方向からの衝撃には弱い。戦斧は見当違いのところへ突き刺さる。

「嘖っ！」

腰掛けていた椅子を斧を構える腕に“被せた”

「ハイっ！ハイっ！嘖ッ！」

手首を“外された”不運な兵の戦斧は“ぬるり”と丸い男の掌中

に移り

「ガフツ!？」

そのまま奪った相手に「返却」された。

「ウオツ!？」

愛用の斧を腹から生やした戦友が倒れ伏すのを見て包囲していた者たちが怯む。

「ひるむなあー!」

打ちかかるが今度は戦斧の柄を椅子ががっちりと押さえ込み、肘関節を椅子の脚が絡める。

「ウオツ!？」

巨体が空中でグルリと回る、回りたくないのに関節と装甲の構造で自分もグルリと――

「憤覇ツ!!」

「~~~~ツ!!!」

天幕を突き破り精兵は吹き飛ばされた。低重力であることを活かした絶技である。

「クツ……クソツ! かかれ! かかれ!」

だが彼らは即座に薙ぎ倒された。

「旅団長閣下!……ここは我らにお任せを!!」

聖輪武装牧師隊が駆けつけたのだ。

旅団長が無言で指差す先へ彼らはかけてゆく。

この時点でエルビング男爵達の撤退により趨勢は決したのである。

しかしながらそれはあくまで本陣の防衛においての話である。

「閣下」

幕僚長がかけよる。

「状況は」

リユーネブルクは返り血を浴びながらも冷徹さを保っている。

「主力の撤退はほぼ完了しております。前衛陣地の設備は破壊しました、もうまもなく『夜』がきます。連中の塹壕で戦う真似はしたくありませんな、このままでは酷い消耗戦だ」

「重火力隊は？」

「前進し、築城も終えています。またキチジ・パスも敵部隊が後退し、動かせる重火力隊の設置を進めています」

リユーネブルクは満足そうにうなずく。

「よろしい、火力陣地まで下がる。各連隊長に達せ」

「再編を終えたら次は陥落——いや、次はありますか？」

「敵は馬鹿ではない、あそこで一戦勝利を得た上で捨てたのだ。ここももう捨てるだろうか」

「追撃なさりませんか？」

「この本陣に何を置き土産にするか——」

左様でしような、と幕僚長は頷いた。

自分の頭が冷えているか確かめたらしい、と分かるとリユーネブルクも片頬を釣り上げた。

「こんな星だ、頭は冷えているさ」

幕僚長は声をあげて笑った。彼は逆亡命者ではなく、オーデインの富豪の生れであり、リユーネブルクと異なり諧謔を好む楽天的な男であった。

「所詮は地方軍と思っておりますが」

だがそういつた時には先程までの笑いの残滓は消え去っている。

軍人としてはリユーネブルクが准将の任に就いて最初の一年は苦勞した運営を二年間安定的に補佐し続けた男である。

たかが七千にも満たない兵力でこれほど粘られるとは思ってもいなかったのだろう。

「地方軍だとも三十年以上激戦区の、な」

幕僚長は溜息をついた。イゼルローン要塞による安定から三十年、貴族将校の大量死と偉大なるオトフリート“節制帝”改革からも三十年。

領地持ち貴族は中枢官衙から半端者は追い出され、領地軍は予備役

として安寧を貪るようになり、直轄領軍は貴族に抑え込まれていた直轄領の名士や商人層が入り込み権力争いへ至っている。

「苦労しますな」

「ああ苦労するとも、誰かの住まう土地に攻め込むと言うことは常に苦労が伴うものだ」

そしてこの様子では金髪の孺子もそうだ、あ奴も地上戦の現実を思い知らされるだろう。

【著名な戦闘】ヴァンフリート4||2防衛戦(9)〜セレンゲティ氷原大機動戦(上)〜

フォルベック少将はヴァンフリート4||2基地に着任したのは会戦のほんの数日前であった、彼は自身の率いる部隊の掌握を急いでいた。

基地司令官セレブレツゼ中将は兵站分野の専門家であり前線指揮においてはキャリアは皆無に等しく、であるからには自他ともに本作戦の実質的な司令官は己であると認識していたからである。

「敵の集積地は強大です、さらには一万を超える艦隊であります」
フレンチ参謀長は重々しい口調で述べる。

「制宙権は敵方にありますが、これを利用する気配はありません。現時点では敵も大規模な艦隊行動を行えば4||2への我が軍艦隊が殺到すると予想していると思われれます」

居並ぶ指揮官ら、フォルベックの指令を直接受ける人員はほぼ佐官ばかりである。その為に少将たるフォルベックが呼ばれたのだ。

構成邦軍を算入しても正面兵力の総計四万程度、一個師団長としての経験があるフォルベックの格であれば十分に相手の面子も保てる。

フォルベックのこの戦役における自分たちの位置づけは至ってシンプルだった。

「要は星間機動戦力の問題なのだ、地上軍の意味は治安や奪った後の支配の維持が本質でありこのような戦役では付け足しに過ぎんよ」

口外御法度だぞ、といたずらっぽく嘯きながら、同盟軍“幕僚たち”を見回す。

「つまり、4||2はこの戦役の中ではただの端役程度に過ぎないのだ、我々の役目はできる限り多くの帝国艦隊を釘付けにすること。つまりは主戦線から現在対極にいる帝国軍兵力を引き離し、自由惑星同盟の勝利に寄与することが本戦の目的であるよ」

フォルベックはあっさりとその戦の軍事的無価値さを率直に評価した。この放言に近い発言をしたことは構成邦軍がないこと、そし

てこの発言をもつてしてもフォルベックは麾下の常備地上軍將兵らが高い士気とを持っており、それを自身があてにできることを承知していたからだ。むしろ明確に規定することで戦略意図の確認を行わなければならないと信じてすらいた。

「つまりこういうことですが、この基地には既に疑似餌以上の価値はない、と？」

防空司令官のウエンライト准将は悲しげに溜息を吐いた。彼はこの基地においてはセレブレツゼと並ぶ一番の古参である——本来の役目は宇宙からの侵入を防ぐ戦闘であり、地上戦は専門外であるが空軍の取りまとめのために准将へと昇格させられた。

「そして我々は艦隊の連中の目を引くためにダラダラと戦って戦場から引き離さないといけないって事ですか」

指揮官らの間に沈黙の帳が下りる。後方要員を除けば現状こちらは4万半ば程度。敵は10万、ましてや“その気”になれば機動爆撃でこちらを一気に叩き潰せる。

報告が上がっていた通り練度の問題があるにしても些細な問題に過ぎないのだ。

「……地下のトンネル網はヴァンフリートが手を付けているがあくまで最悪の予備だ、4万も籠れぬ。だが——」

装甲騎兵連隊長アポーストル大佐が鼻を鳴らす。

「なんだなんだ、お前さんら前線で血い流した構成邦軍どもに“お客様の坊っちゃん達”と笑われたいんかあ？」

「あんな田舎モンどもにお坊ちやま扱いされてたまるかよ」

宇宙軍陸戦隊第31強襲連隊長のゴームレー大佐は鼻を鳴らす。陸戦隊と地上軍はこと地上戦においては双方張り合う節がある。

陸戦隊はイゼルローン攻略に際して拠点制圧などの要であり、地上軍は国土防衛や帝国軍との長期的な殴り合いにおいて常に主力であつた。

最前線において統合軍を編成することも珍しくない昨今において

は良くも悪くも交流が活発化しているが、顕著な違いが構成邦軍に対する態度である。地上軍からすれば彼らは予備役軍でもあり、必然的に交戦星域の邦軍は仕事仲間であるが、構成邦軍に対しても陸戦隊は『我等こそ最前衛』という矜持を譲る気は毛頭ない。

独立大隊の長らも同意するようにざわつく。

「んむむ……」

独立野戦重火力第67連隊のゴデイン大佐は唸りながら頭を掻く。彼はサンフォード議長と【縦深】議員団の交渉の結果増派された部隊の指揮官であり、この基地に対する思い入れは薄い。

それだけに現状の危うさを強く感じていた。フォルベック少将がいなければ統一された指揮系統は宇宙軍艦隊兵站の専門家であるセブレツゼ中將に集約されることになる。これは純粹に教育と経験の問題から全く無理がある話であった。

さらに懸念材料がある。ローゴデインがそつと視線を向ける先にいるのはヴァーンシャツフエ、宇宙軍陸戦隊総司令部直轄、独立武装偵察戦闘団群の一角薔薇騎士連隊ローゼンリッターの指揮官である。

彼の先代指揮官は離反し、今我々に対し大量殺人の能率化の為に持てる能力を全て注ぎ込もうとしているのだ。であれば彼は？彼の部下たちは？

誰も口にはしない、意識もむけないようにしている。だがそれはうすぼんやりと他の指揮官達とヴェーンシャツフエの間を覆っているのであった。

「だからこそ、私は君たちを直卒する」

フォルベック少将は“アルレスハイム王冠共和国軍”と“ティアマト民国軍”の将校団に向けて行った。

本来であれば大夏のように構成邦軍を統括し指揮を執るはずだったマシエル准将は肩をすくめている。

「我々は大夏より信用できませんか」

ヴァンフリート軍人、つまりこの土地の主権国軍人として内心穏やかでないのはフォルベックも理解している。

「違う」

フォルベックは敢えてくだらん、というように鼻を鳴らす。

「御婦人に妬かれるのならともかくむさ苦しい軍人同士で鞘当てをしても嬉しくないぞ」

そりやそうでしょうがな、とマシエルは装甲服で覆われた肩をコツコツと叩く。

「タバル方面に出なかつた理由は単純だ、こちらでは運動戦を仕掛ける」

タバルは激戦の最中である。だがクレーベル中佐が送った情報は既に総司令部にも届いていた。

「運動戦？」

「敵は貴族所領の軍を使っている、それも臨時の陸戦隊を編成してな。奴らはこのアルーシャ渓谷を通る前にセレゲンティ大氷原を通るのだ。極地から極地へ移動する中だな」

「それはそれは」

だからティアマト軍——義勇農騎兵ヨーマンを連れてきたのか、とマシエルは呟いた。

彼はけして愚者ではない。愚物の将校は——人民元帥と側近、そして労兵評議会幹部らの判断によるものだが——ヴァンフリートにおいて大黒柱を食い荒らす白アリとして体よく追いやられてしまう。ましてや准将まで昇りイゼルローン攻略作戦に使う基地の警衛を任せられヴァンフリート軍の精兵の証——突撃工兵の名を冠した師団を指揮しているのだ、同盟軍人としても十年近く籍を置き、相応の教育と最前線勤務を経験しているエリートである。

「はあん、手抜きをなさりたいと」

アルレスハイムのヨギヘス大佐はニタリと笑った。ヴァルシャワ労兵レーテ結成記念独立連隊ポスポリテ・ルシエニエ——【コルネリアス帝の大親征】の折にシユラフタ政府が崩壊し、その残骸を率いて抵抗運動を続けた二大勢力——ジェルジンスキー率いるアルレスハ

イム義勇労農軍の末裔であり、一種の“建国神話”を担う部隊だ。

のちに黄金の自由の結成メンバーとなつたリープクネヒト女子爵率いるアルレスハイム防衛評議会国内軍とは別に活動した。

「要するに戦術とは弱いものをいかにいじめるかだ」

義勇農騎兵連隊戦闘団“ウルク・ハイ”を指揮するアルフメド・グラスゴー大佐も同調する。

「つまり戦上手と言う奴は——その気になればいくらでも卑しくなれる人間ということだ」

将校達は笑いさざめく。

ああその通りさ、とフォルベックもニタリ、と人の悪性が籠つた笑みで返す。

「直轄領——正規軍の陸戦隊や陸戦専科部隊と当たる気はない、真面目に戦争をするためには畢竟、如何に手を抜くかが問われるものだ」
帝国軍との直接戦闘を避け、それに代わり段列や仮施設——通信中継設備やら二手に分かれた軍の為の物資を融通するための補給基地やら——へのゲリラ攻撃に従事するよう部下に命じた。

フォルベックは装甲服に貼り付いた霜を拭う間もなくスパルタニアンに飛び乗り、次の目的地へと向かう。彼は自由惑星同盟レギュラーアームィ常備地上軍の少将であつた。

数km後方から重火力隊が装甲車両を狙い高出力レーザーを発する。

幾つかの装甲車両が爆ぜ、兵達が消し飛ぶ。

警戒についていた兵達の背後から慌てて車両から白兵隊も降りる。

そして二輪部隊が遮蔽を利用しながら段列に襲いかかる。

「いいぞ！突っ込めえ！」

火炮の支援を受けながら小銃を放ち、二輪車で掻きまわしながら歩兵達の注意を引き——第二陣はさらに強大な砲を担いでいた。

上空ではワルキューレとスパルタニアン——さらに低重量専用機

が激戦を繰り広げている。

「ポスポリテ・ルシエニエの意味は大衆蜂起！俺達が味わってきた屈辱とタツプリとしゃぶりやがれクソ野郎ども!!」

輜重車両にハンドキャノンを叩き込む。

「ハンドキャノンをぶち込んでやったな!!撤退!てったああい!」

「逃がすなあ!撃て!何をしている!撃て!」

押っ取り刀で駆け付けた護衛部隊を尻目に彼らは尻に帆をかけて逃げ出した。

逃げ遅れた者たちは倒れるがそれを拾うこともなく彼らは逃げてゆく。

すべての目的は宇宙の主戦場からこの艦隊の兵力を引き離すことだった。彼はおよそ6,000名の兵士をかき集めた。そのほとんどは構成邦軍だったが、全員がよく鍛えられ、統制がとれていた。

その頃、司令部用のエネルギーフィールドに覆われた司令車両の中でラインハルトもまた激戦(?)を繰り広げていた。

「何故だ!何故ワルキューレを出さない!航空戦は膠着している。

ワルキューレをさらに出せば押し込めるであろう!」

同盟軍の妨害もあり乱れがちな映像の先にいる男はこの星の外気よりもなお冷ややかであった。

『弁えろ、ラインハルト准将。俺は卿の指揮下ではない。いや、卿より先任であり艦隊全体の単座戦闘艇の運用は私の管轄だ。』

卿のように目先の武勲とやらの為に上官に怒鳴り散らす程、近視眼でもない。

私は宇宙に上がることも考えねばならないのでな』

相手は艦隊の単座戦闘艇監——ワルキューレの管理と参謀としての役割も兼務する。同じ准将であってもラインハルトより先任であり役割もより重いのだ。

「……ッッ」

『とにかく、これ以上のワルキューレの地上戦参加は認められん……艦隊の制宙能力に傷がつくからな』

「何が艦隊の制宙能力か!!この艦隊は著しく訓練が不足しておりどのみちマトモな戦闘ができないと判断されたのだ!戦力を出し惜しみしたところで戦闘が長期化すれば叛徒共の艦隊がおしかけてくるだろう!卿が叛徒の艦隊を蹴散らすとでも言うのか!」

『なんだと……?』

単座戦闘艇監は眉を跳ね上げるがすぐに侮蔑するように笑みを浮かべた。

『ふん、たかだか200隻の指揮も投げ出した孺子がくだらぬ陸戦遊びに貴重な戦力を投じろというか。もう結構だ、副将風情が直接私に要請を出す時点で横車を押していることを自覚するがいい』

吐き捨てるようにいうと乱れた映像はそのまま途切れた。

リューネブルクを通す、あるいは艦隊司令部の伝手を辿る、それができない立場であった事が後を引いていた。ラインハルトはグリーンメルスハウゼン艦隊という配置に焦っていた。

それだけに目立つ手柄を得るにはこの副将としての立場を使うしかない、と思い詰めている節があったのだ。

「航空優勢が確保できん!これでは情報が遮断されたままだ!叛徒の軍主力はどこにいるのか!?フランダン伯が相対した偵察騎兵隊はどこにいる!リューネブルクの戦場にいるのか、それともバーラトとやらにいるのか!」

「副司令官閣下、また輸送部隊が襲われたぞ。航空優勢が確保できぬのであれば地上を使うしかないが、このままではさらに護衛を張り付けるしかなくなる」

焦りを見せるラインハルトに対してフランダン伯爵大佐は冷静であった。指揮能力の問題というよりも単純な立場の違いによる余裕の差であるが。

「厄介な小蠅が飛び回っているようすな」

フランダンの幕僚が眉をひそめた。

「小蠅ではなく蜂といふべきだ、そして蜂の群にさされれば勇猛な巨

兵であれど死ぬ」

「フランダン閣下の言に理があるかと」

キルヒアイスが丁重に促すとラインハルトは無言でうなずき、考え込む。

「その通りだ——蜂は『煩わしい』で済むうちに駆除せねばならぬ、練度が高い部隊であれば叩けば状況が動く可能性もある」

ラインハルトの目から焦燥の色が消え、悟性の光が閃いた。

あわただしく車両が司令部車両群に向かってくる。警備の兵が武器を構え、誰何するのがキルヒアイスの目に映った。

「ていと……副司令官閣下、伝令です！」

ラインハルトの優に倍の年齢であろう大尉が敬礼をする。

「閣下、先の報告にあつた叛徒の集積地についてです。占領が完了しました。敵との交戦もほぼ皆無であります」

どうだ、と胸を張っている。

「物資の確保はどうか？敵の投降は見られるか？」

「は……集積地は全て無事であります。敵は我が軍の威容を恐れ、早期に撤退、降伏してくる部隊もおりません」

ラインハルトは頬を紅潮させて立ち上がった。

「警戒態勢を解くな！奴等は戻ってくるぞ」

鞭打つような声に伝令将校の顔が赤らみ、唇が引き結ばれる。

「ラインハルト様、鹵獲品については——」

キルヒアイスの脳細胞は猛スピードで結論を弾き出した。

「私の申し上げたように一時司令部預かりで論功行賞に従い再配分するということでもよろしいかったですでしょうか」

フランダンが目を見開く。

「あ……それについては副司令官閣下と私で相談して決める、で良かったはずだが」

ラインハルトはどうでもよい、というように二人をアイスブルーの目で睥睨する。

「……そうだったな、ああそうだった」

「貴君の部隊はアノート男爵の部隊だったな。男爵は大帝陛下の海賊討伐で活躍した家系だ、必ずや勝利するだろう！」

「はっ！無論であります」

フランダンが快活に笑みを浮かべる。

「うむ！大尉の言やよし！であれば諸君が手に入れた物資など報酬のごく一部になるであろう！」

我々は前衛梯団の行軍状況を確認しよう、叛徒を見つけ次第早急に撃破できるよう態勢を整えようではないか！

伝令将校が立ち去るとフランダンはキルヒアイスに鋭い視線を向ける。

「卿は士気を崩壊させる気かね？鹵獲品は彼らの生命線だぞ！」

「我々の攻勢作戦の前提は叛徒の部隊が準備を整えず、敵部隊をたやすく数ですり潰せる前提で。正面から準備を整えた敵とやり合うのであれば我々は……」

キルヒアイスは言葉を切り、ラインハルトに視線を向けるがラインハルトは構わない、というように軽く手を振った。

「我々は——攻撃の機を逸していたのです。決定的な優位は我らにありません。犠牲と危険に相応する戦果の達成を求めるのであれば、先の鹵獲品に目を奪われず、部隊を集結させ慎重な偵察と後方の安全の確保に集中するべきかと」

「うな、というかのようにフランダン伯は眉間を押さえる。

「それを周知徹底してみろ、我らは自身の財産を投じているのだぞ？その意味を——」

ワルキューレから飛び降りた別の将校が司令部の天幕に駆け込む。

「伝令！緊急であります！リユーネブルク隊、敵部隊に対して総攻撃を開始するとの由！」

フランダンが目を見張る。

「総攻撃だ?!？」

フランダンが伝令将校と言葉を交わしているのを尻目にラインハ

ルトはキルヒアイスへ囁いた。

「リユーンブルクの方も激戦か……キルヒアイス、お前の言う通りだ。俺は判断を誤ったかもしれないな」

とんでもない泥沼に足を取られてるのかもしれない、とラインハルトは自嘲するように笑った。

「ご安心ください……少なくとも直轄艦隊陸戦隊一個旅団はあなたのものです、私もそうです」

「ああ……俺は10万の兵の片手で指揮できることになっている！しかし、その実、1万にも満たぬ兵で残りの有象無象の面倒を見るしかない！忌わしい有様だ！リユーンブルクの輩もこうなのか……？」

ラインハルトの豪華な金髪もアイスブルーの瞳が問いかける問いも意に介さず、ヴァンフリート4||2はただ極寒の純白が彼らを包み込んでいた。

【著名な戦闘】ヴァンフリート4Ⅱ2防衛戦（10）
セレンゲテイ氷原大機動戦（下）

氷原中に点在する丘陵地帯——実際は軌道爆撃やら撃沈されてこの星に墜落した軍艦やらの副産物だが——その裏に潜むはアルレスハイム王冠共和国がヴァルシャワ労兵レーテ結成記念連隊の指揮官であるオットー・ヨギヘス大佐殿に他ならない。

「食いついている、食いついている、マヒワ集積所をくれてやった甲斐があるというものよ、後続が慌ててやってくるまでに撃破するぞ」

ヨギヘス大佐は非常に上機嫌そうに振る舞っている。

「ポスポリテ・ルシェニエ」展開しました！」

幕僚の報告にも快活に応じる。・

「大変結構！」

幕僚は背筋を伸ばし、端末を操作しながら説明を開始した。

「敵は鹵獲品の略奪と分配に夢中になっておりますが……むろん、奇襲に成功したとて無抵抗で済む筈はありません。」

……とはいえ敵の戦術は重火力の支援を受け、数を頼りにした歩兵の突撃しかできません」

「複数の捕虜からとれた情報によると連中の艦隊の半数は弱小諸侯の寄せ集めのようです。」

「ブラウンシュヴァイクのような」等族「クラスでもない限り貴族領艦隊陸戦隊の練度はそれこそ人民防衛運動の民兵よりも低い。これは領主の能力云々ではなく制度的・経済的限界によるものです」

「そもそも艦隊に配置された宇宙軍の兵士を応急で陸戦要員にしているのだ。そこまで器用な兵士を育て上げるには膨大な予算の訓練期間が必要である。」

「対する私たちは連隊戦闘団として編成された部隊です。諸兵科連携こそが我々の精華であります。敵を重火力により制圧し歩兵を随伴した装甲部隊により敵陣を突破！」

爾後は敵後衛部隊、及び敵残存兵の掃討！戦場の黄金律を見せてや

りましょう！」

「・・・問題は第二陣です。こちらは我々より有力な部隊であり、戦闘を想定して迫ってくることを想定するべきでしょう。敵の飽和攻撃を阻止する為の牽制を主眼とし、各部隊は正面敵部隊と適切な距離を保ち戦線を維持するべきです」

ヨギヘスは笑みを消して幕僚の意見に頷く、

「数の不利を覆すために必要な航空支援が手薄であるが、文句を言っても仕方がない。我が軍は寡兵なのだからな。そこをどうにかいなして生き残る事が将校の仕事よ。」

初戦で兵の士気は上がるだろうが、油断する莫迦がいたら俺が直々に鍛えなおしてくれるわ」

「俺は15で帝国の兵卒をやらされ、アルレスハイムへ逃れ、労働運動を学んだ。」

ああ俺から見れば、帝国貴族共には謙虚さも勤勉さも足りん。父祖の栄光に胡坐をかいて、学ぶべき物を学ばないなら没落は当然だ」

連隊幕僚は肩をすくめ、上官の言葉の続きを待つ。

「そもそも貴族制とは遙か彼方に克服されたものだ。社会体制を維持する必要性の為の技能の独占を基盤とした『乗り越えるべき』制度に過ぎぬ。人類はそれを技術開発で、社会制度で、教育で克服してきた」

「ああ伝統による連帯と名誉の象徴であればまだ良い。だがアレは違う、存在自体が人類の恥辱だ。実力主義の対極であり、人類普遍の摂理に対する倒錯趣味者の集団であり人類唯一の統治機構を名乗る禁治産者にすぎん。死ぬには良い日だぞ、帝国貴族ども」

奇妙に背を曲げ歯を食いしほり『思いがけぬ甘露』に浮き足立っている侵略者を見る連隊長は常日頃以上に下士官めいた、獰猛かつ粗野な獣臭の匂いを醸し出していた。一般的にイメージされるアルレスハイム将校の姿……とりわけ伝統的にシユラフタの多い宇宙軍のそれと真逆である。

「365日、24時間、ああ、ああ、いつだって！お前らが死ぬには良

「い日だ」

「て、敵襲！敵襲ウウウウウ!!!」

「バカな！なぜこの距離まで気づかない！哨兵は何をしておったか！」

オツツル・フォン・デーオツチン男爵は頭を抱え叫ぶ。

彼自身も前線指揮については予備役訓練課程しか受けていない主計将校であった。

「えー……目をつけてない倉庫に入り込んでいたのが半数、分け前の為に喧嘩していたのが半数」

副官は頭を搔く。彼はこの集積所の報告を握りつぶそうとしたのだが、手柄を欲した主君は前進を命じたのだ。

だが非難するには領主の立場というものも理解できてしまうのであった。

——この戦場に出張るためにいくらつき込んだのやら、あちらこちらに付け届けをしてようやく将官の壁を越えられるというのに、主計将官の座が手に入れば領地運営にも相応の利益を得られる。なのに畜生。哨兵を管理する下士官ですらこうなってしまうとは！

我が主君の嘆きは領地の現実に立脚した厳然とした事実の前に打倒されてしまうのだ。

「なぜ……まで！」

それなりに上手くやりくりをしているだけに物資の不足はないだろう、と自信を持っていたオツツルであったが兵は略奪にばかり目をとられ、将校下士官連中もそれを止めようとはしない、寧ろそれを推奨している節すら見受けられた。

「だってウチの領、基本的に麦と雑貨の交換だけで現金を得る機会なんて実質世襲の役人になるか、領軍に入るかくらいしかないじゃないですか。税だって穀物をこちらの相場で買いたたいて直轄領で換金してますから、そもそも領内で現金なんて日用雑貨や酒場くらいでし

かつかわないですし、それだってその場で穀物とのレートで決まってしまうから」

「そうなんだ」

この領主は基本的に領地に顔を出さない。オーデインで書類仕事をしているだけである。いやまあ何もなければ余計な事もせず、妙な浪費もしないのでそれでいいのだが。

「そうなんですよー、でも金さえ貯まれば下士官になれて閣下の荘園裁判所から膳本を買い取れるじゃないですか」

「……買えたねえ」

「買えるんですよえ、そうなればほら、閣下の土地ですが排他的利用権が認められますし、そうなれば他の農奴に土地をまた貸してレートのいい作物を育ててピンハネすれば永続的に現金収入が入りますんで。」

だからこういう略奪で欲しいのってマルクに換える商品なんですよええ。人事担当将校や部隊指揮官、閣下の代わりの土地権利を牛耳ってる荘園裁判所の判事らへの付け届けも必要ですしい」

「私が人事局に賄賂撒いた感じかあ」

「そもそもシヨツパイ旧式駆逐艦の駆逐隊ですけど我が領で貴重な宇宙軍の要員に採用された時点である程度、最低限の教養がありますからねえ……オーデインで部屋を買って又貸しとかすればまあほら、子供も市民階級に上がれますから……上に上がれば下級役人くらいは世襲で狙えますし」

「あー……専科学校上がりの方校とかがウチの家臣団にたまに入ってくるのってそういうアレかあ」

うんうん、と頷いた後に首をかしげて男爵は尋ねる。

「つまり、みんな賄賂の為に現金が必要だから略奪をしなくちゃいけなくて……賄賂が欲しい連中はそれを見逃しちゃうから……軍紀が崩壊してるって……コト!？」

「はい」

「増援は……」後2時間はかかりますねえ」

「詰んだ?」「詰みましたねえ」

オツツル男爵は肩を落とす。

「……そっかー」

高出力レーザーが彼らの横を通り過ぎた。

「いやでもこうはならんやろ」

「なつとるんですなあ」

「……そっかー」

スパルタニアンが急降下するのを見て、オツツルは溜息を吐いた。

——畜生、戦争つてやつはいつも採算が合わないものだ。

・

・

・

「デイーオツチン領駆逐戦隊陸戦隊、壊滅!!男爵閣下、壮烈な戦死を遂げました!!」

「あつ、そう」

ラインハルトの君主の如き泰然とした返事をキルヒアイスは受け流す。別に無気力とか知ってたとかそういうあれではない。ないったらない。

「おおよそ3, 000から4, 000か?こちらの3割にも満たぬ」

フランダン伯も顎を撫でる。彼は部隊の急行を提案したいいだしっぺもあり部隊を引き連れて同行していた。

「であれば強襲をかけてデイーオツチン領の残存部隊の救援を急ぎましょう、このままでは敵は集積所を奪還し防衛態勢を整えてしまます——」

「いえ、叛徒は莫迦ではないでしょう。伏兵がいるとみるべきです」

「ああ、伯の言う通りだと考える。まずは威力偵察を仕掛け、敵の伏兵を引き出すとしよう。予備隊をいつでも動かせるようにしつつ仕掛けるぞ。

フランダン伯の旅団は最後まで取っておきたい、こちらの指示があるまでは防戦以外は控えるのだ」

「……了解した」

フランダーの返答はわずかに遅れていた。だがラインハルトはそれに斟酌することはなく、眼前の敵を打ち倒す方策について目を輝かせて思考に没頭していた。

戦車と装甲車両の連隊戦闘団を率いるのはグラスゴー大佐である。

「見よ、あの基地を埋め尽くしているのは敵だ。」

聞け、この雪と氷の地を震わせているのは敵の足音だ」

戦闘が起きている先を見据え彼は言葉を紡ぐ。

「恐れる者もいよう、震える者もいよう、私はそれを批判しない。恐れ、震えながらも逃げ出す者が居ない事を私は誇りに思う。諸君らは正しい、この戦いは我々が勝利するからだ。」

何故なら奴らの兵士は農奴であり、諸君らは自由農民ヨーマンであるからだ。

操典の理解、自立した判断、指揮系統の明確化。我々は一人一人が自立した人間であり、そして軍務を理解し恐怖を堪え、軍務に服している」

「敵は銀河の支配者の軍を称している。それら全ては虚飾でありそれを引き剥がした先にあるのは鎖で繋ぎ止められた奴隷とそれを打ち据える奴隷主の群れにすぎない！」

諸君らは間も無く虚偽の壁を渾身の一撃で打ち砕こう！

弁解の余地無く！木端微塵に踏み潰せ！

このヴァンフリートの複雑怪奇なる影さえ奴らの偽りを欠片も残すべからず！」

グラスゴーが右手を挙げると軍樂が通信波として発せられる。

「進め！諸君らはティアマト民国の戦闘部隊ウルクハイド！」

そしてグラスゴーは手を振り下ろす。ティアマト民国がサジタリウス準州時代からの伝統を誇る義勇農騎兵が突撃を開始した。

だがそれもまたラインハルトの構想の範囲であった。

「ラインハルト様、予想された通りに敵が側面に」

不敵な笑みを浮かべラインハルトは頷いた。

「やはり伏撃か、叛徒も芸のない事だ。我が艦隊陸戦隊の第二連隊に伝達する。レールガンで擾乱砲撃を加えよ、第一大隊は重火力大隊を守りつつ側面攻撃を、第二、第三大隊は突出しすぎず距離を保ちながら相手の頭を抑えるのだ、正面から叩き合うな」

構想の通りラインハルトの指揮部隊は動き出した。

たまらないのはグラスゴー達である。

『やられた！敵にもデキる奴がいるようだな』

『回り込めないか？』

『無茶言うな！背を向けるには敵が多すぎる！クソツ！後続を旋回させて抑え込むぞ！』

ミューゼル准将の指揮により予備隊が突撃する。『ウルク・ハイ』戦闘団の頭を抑え、側面に張り付く。逆に大打撃を受けかねない状況に追い込まれた同盟軍は、果敢な機動戦はこの時点で終わりを迎えることになる——と思われた。

ティアマトよりも更に奥地にたどり着いたのはエル・ファシルとムサンダムの派遣部隊で編成されたターイー戦闘団である。

「……予備隊が動いたか！間に合ったな」

そしてそこにはフォルベック少将も居る。

「予備隊を動員した総攻撃により、側面が手薄となっています。やるなら今しかありません」

「素晴らしい。アルレスハイムとティアマトの猛攻を前に焦燥が勝つたと見える」

フォルベックが胸を反らすがターイーは苦笑するに留めた。故郷

を誇る分には諧謔の範囲だ。

「こちらの見せ札のヴァンフリート軍も行動を開始した、後は諸君らの奮闘に期待しよう」

「まっ流石は、縦深最前衛」と言っておくか、だが我らも捨てたものではないぞ」

フォルベックはニヤリと笑った。

「捨てたものではない？とんでもないムサンダム山岳騎兵の恐ろしさを見せていただくでしょう」

「……本隊は危機にあります」

随伴機械化歩兵隊の指揮を押し付けられた（彼の主力である自走対空砲隊は奇襲に不向きであると機械化歩兵後方に拘置されていた）ニユースロット中佐が眉を顰める。

「本隊の側で止められればそれで良し。仮に止められなかったとしても、ワシらが重火力隊を掻きまわせば基地の防衛が楽になり、敵の勢いも削がれようぞ、中佐。

今は目の前の事に全力を尽くすべきだ」

ニユースロットは口元を緩め、敬礼を捧げた。

「では、全力を尽くしましょう。戦友の為に」

「戦友の為に」

ターイーも若き中佐に綺麗な答礼を返す。

「駱駝騎兵……フランダン伯が遭遇した部隊！」

「側面に突如現れました!!」

焦燥を隠さない伝令を見てキルヒアイスは眉を顰めた。丘陵地帯であることが仇となった。

ちまこまとハンドキャノンやら高出力ビーム砲やらを使用し軽装甲部隊を狙い撃ちにして浸透しつつある。

帝国軍はその社会的構造から兵下士官の自律性が低い、後方への浸透は同盟軍も当然恐れるがその恐怖の質も量も帝国は異なるのだ。

更にそこに悪い知らせが続く。

「ラインハルト様！フランダン伯閣下の装甲旅団が動いています！」
「なんだと!?!」

なんと言っても陸戦専門部隊を率いている彼にはラインハルトも信を置き始めていた。

「莫迦な！何故だ!」

ラインハルトはこの時の疑問の答えを得ることはなかった。少なくともヴァンフリートの雲一つなくとも揺らぎつづける陽光を浴びている間は。

「来たなターイー！私が卿の相手をしてくれる!!」

フランダン伯は追撃の為に1個連隊に更に1個大隊を抽出し増強、二手に分けターイーの戦闘団に独断で“迎撃”を開始、ラインハルトの作戦計画では2個連隊6個大隊で編成された1個旅団を予備としていたはずであったが、彼が使えるのは2個大隊にまで低下してしまっ

た。
フランダン伯はラインハルトの考えたように愚かではない。“伯爵領軍指揮官”として戦場全体を見据えていた。

「リューネブルクにラインハルト！奴らは諸侯に何一つ功績を分け与える気はない！奴の指揮の通りに陣地を確保した二個連隊相手に私の装甲旅団を突っ込ませられるなど御免だ!」

ラインハルトは皇帝の愛妾の弟であり帝国騎士ではあるが立場としては零落した都市富裕層に近い。

フランダン伯をラインハルトは『部隊指揮統括』と見做していたがフランダン伯からすれば『中央のボンボンの横暴に対する諸侯の防波堤』と自身の立場を解釈していた。

つまるところそのすれ違いである。略奪品の扱いに指揮系統の隔離。

「連隊長は二個大隊、旅団長たる私が二個大隊を直卒する！各中隊は

連携し前進せよ！

壊乱した陸戦隊共は無視し叛徒を叩き潰せ！

敵を発見し次第、通信と共に発煙信号を打ち上げろ！叛徒を叩き潰せ！」

単純かつ効果的な作戦である、絶対数でいえば3,000をわずかに超えた程度。

敵が浸透を続けるのであれば、であったが。

「戦車が来るぞ！あの時の伯爵殿だあ！」

「よおおおし！逃げるぞ！信号弾を打ち上げろ！」

ターイー達は即座に踵を返し、駱駝の尻尾を丸めて逃げ出したのである。

逃げるかターイー！とフランダン伯が叫んだかどうかは知らぬがターイーが

「逃げるさバーカー！バーカー！誰がやる気満々の精鋭装甲旅団相手に正面からやりあうかい！」

とゲタゲタ笑っていたのは間違いないようだ。

置き土産にゼツフル粒子封入弾とチャフやら煙幕やらをばら撒きながらターイー戦闘団は尻に帆をかけて逃げ出す、これすらも事前の計画通りであった。

ターイーのハラスメント作戦の混乱を受けたのはラインハルトが計画した集積所方面の作戦であった。

ラインハルトの構想通りであれば臨時編成の陸戦隊の数の優位を活かし、敵の予備戦力を枯渇させ、薄まった戦線を装甲旅団が予備隊として集中投入し突破するはずであった。

旅団の戦力が3分の1になるのは想定外の範囲外である。

だが逆に言えば戦力の枯渇は常に続くはずであったが――

「ターイー老、いやはや・アレが味方で良かったと思うべきか。

予備を引きはがしたぞ！重装甲隊！突撃せよ！」

「ティアマトの連中にかっさらわれるな！正面から殴りつけてやれ！」

ウルク・ハイは二個中隊を捻出し、ポスポリテ・ルシエニエと連携した突撃を敢行、一個大隊を潰乱せしめる事に成功した。

これにより戦線の整理に成功した彼らはフォルベツクの統率宜しきを得た持久戦へと行こうしつづつあった。

マヒワ集積所の戦いでは、同盟軍は900名が死傷し、帝国軍はデイーオツチン領隊を含め2,800名程が死傷、あるいは行方不明となり、同盟軍が手に入れた俘虜は1,300人を超えた。

ヴァンフリートの一個師団が行軍を開始した知らせを受けたラインハルトは一時的な後退を決意せざるを得なかった——というよりも後続が集積地確保の報を聞きつけ無理な行軍を開始したことでケレブランド航宙騎兵隊の襲撃を受け、著しい混乱が生じた所為でもある。

それを見越してフランダン伯を彼の補佐につけたのだ、という指摘も正論ではあるが——ラインハルトにとり信頼できる練度の部隊が著しく欠如していたことから判断の正誤を問うのは困難であろう。それだけにフランダンや諸侯領軍をこれまで指揮してきた直轄領部隊、すなわち帝国正規軍と同列の有能無能の物差しのみで判断してしまったのである。

とにもかくにも、ラインハルトらは半日かけて後衛の再掌握を行うことを余儀なくされた。

しかしながらセレゲンティ方面隊も消耗著しく、ヴァンフリート師団は陣地を放棄し、隘路の要所を破壊しながら4||2基地へと後退を余儀なくされた……ターイー戦闘団を除いては。

ようやく自部隊に戻ってきたニュースロットは人心地つく間もなくターイーの招待を受け、ムサンダム軍用馬運車を見学している。

「驚きました」

出された珈琲を片手にスイートロールを齧りながらニューズロットはゆつくりと駱駝達を眺めている。

「あん？」

ここにいるのは運転手とターイーとニューズロットのみである。

「温暖な土地ならともかくこの雪と氷の星に駱駝を連れて来て、

しかも容赦なく難所を乗り越えて見せる——そもそもマトモな動物であれば装甲服を着ないと活動が難しい星の筈ですが」

「それ用だからな、コイツは」

地球時代には存在しないサイズの長毛駱駝は装置を取り外した今も至って平気そうにタロット・オーガナイゼーション畜産部門謹製の専用駱駝用レーションをモシヨモシヨと食らっている。駱駝用レーションってなんだろう、とは考えない事にした。

「良いもの食べている」

軽く額を撫でると「なんだアンタ」というかのようにジロリ、と睨みつけ、シナモンロールの匂いを嗅ぐ。

ニューズロットのスイートロールもタロットが『再建』したティアマト・ブランドのものだ。

味は非常に良いしなにより無料である、タダより高いものはないというが“タダという事実”に対し対価を支払うのは我が義父と“フライングボール・ママ”の二大政党の皆様の背広組の労働であり我々軍人は無関係である、やったぜ。統帥権は首相が持つてる？知らん。「我がムサンダムの起源は元々、銀河連邦の鄙びた自警団だからな。入植したムサンダムという星自体、テラフォーミングも不完全。こちらが適応するしかないのだよ」

だから山岳騎兵なんてものが現役なのだよ、と笑い、ターイーがよせよせ、と首を撫でると駱駝は鼻を鳴らして飼い葉桶に再び顔を突っ込んだ。

「さて、本題だ」

ターイーの目に鋭い眼光が宿った。

「ようやくですか」

ニユースロットは不敵な笑みを浮かべる。

「この星域全域は恒星ヴァンフリートの影響を受けている、特に恒星嵐が起きたらガス惑星が連鎖的に反応しあらゆる航路が情報を遮断される……これは無論知っていよう」

「その嵐が降り注ぐ前の兆候をヴァンフリート人は観測し続けてきた、そのデータを我々は共有している……嵐は間も無く起きる！」

ニユースロットの唇が吊り上がり、チラリと犬歯が覗く。

「そこに乗じて仕掛けるとう？」

「うむ、ルートはヴァンフリート軍の助言をもとに策定した。仕掛ける価値は十分あるだろう。——もつとも、あらゆる通信機器が麻痺している中で然るべき時に、然るべき位置へたどり着き、攻勢をかける統制を持続出来ればの話だが」

本土を占領された経験を持ち、奪還作戦にも従軍した年若い中佐へターイーは儲け話を紹介するフェザーン商人の如く微笑みかけた。

「乗るか、エル・ファシルの」

ニユースロットは呆れたように溜息をついた。

「お言葉ですが」 マルムーク「ターイー殿、僕らを誰だと思っているのですか？」

「我々は」 剣虎「大隊だ、エル・ファシルの守護者だ。我が本土を蹂躪し、此度は友邦の地を犯す不逞の輩には断然攻撃あるのみ」

ターイーは頬を緩めた。

「良からう、それでは行くぞ、来るべき嵐に近い場へ——そして我々は襲い掛かるのだ」

炭素クリスタルシヤムシールを抜き、掲げる。

「嵐と共に！」

【著名な戦闘】ヴァンフリート4Ⅱ2防衛戦（11） 基地主戦陣地攻防（上）

さて、ヴァンフリート4Ⅱ2において同盟常備陸軍レギュラーアーミーと構成邦軍連合ナショナルガイズ軍と帝国軍の熾烈な攻防戦が繰り広げられている最中、パランティア連合国の情報機関HURNの特務通報艦は相も変わらずデブリ帯に潜み、4Ⅱ2を観測している。

「統括、第5艦隊より連絡です」

ファンゴルンは音声通信機をとる。

「……はいはい、ファンゴルンです。ええはい、はい、はい。わっわかりました。そちらはそのように。ええ、はいはい、ではお待ちしておりますううう」

なぜか通信機越しにペコペコお辞儀をするファンゴルンを周囲はちよつとヒいた目でみている。悲しいね。

「やれやれ、現場の人はせっかちで困りますねえ」

「第5艦隊はなんと？」

「1万隻もの獲物が基地の戦いを固唾をのんで眺めているんです、それはもう殺到ですよ」

総司令部は本土……小惑星コロニー群の防衛で手一杯のようすがとファンゴルンは肩をすくめて見せる。

「まあ遊撃任務の範疇ではありませんが」

「同盟軍主力の状況はまとまっていますか？」

副官が端末を操作し、立体航路図にデータが表示された。

「総司令部が現在掌握している主力部隊はビクター・アップルトン提督の第8艦隊とノルマン・ボロディン提督の第12艦隊です」

「アップルトン……アップルトン……あのパルメレントの？」

はい、と連絡官が端末をいじると新たなデータが反映された。

「例の『ドレッドノート・プラン』で財務委員会を卒倒させたパルメレント、弁務官総会で乱闘を引き起こした挙句にアイアース型の改装でおちつきましたな。」

例の『クリシユナ』に乗っておりますよ。

まあそれはともかく艦隊主力は予定の通り内線作戦に徹しております。戦術的にはやや優位と言ったところで膠着しているようです。ふむん、とファンゴルンは顎をさする。

「陸戦隊……装甲擲弾兵……勇み足の貴族領軍……どうにもチグハグで中途半端だ……」

「『等族』ですらないようですね」

『等族』、即ち高度な自治権を認められ複数の星系を支配する大貴族——ではない、ルドルフ体制下で分割し、弱体化されたはずの諸侯経済を一門の所領を事実上統合することで克服し、時には軍需関係の工廠すら所有する自由惑星構成邦を凌ぐ一大軍閥の領袖である。その筆頭はブラウンシユヴァイク公爵と数年前までの財務尚書カストロプ公爵である。

こちら、とファンゴルンは苦笑する。

「等族は公式の言葉ではないですよ、アルレスハイムに叱られてしまいます」

アルレスハイムでは『そもそも等族という言葉は帝国議会の存在ありきであり進歩主義的に過ぎる』と匿名の政治史学者が批判したことで知られている。

「君、あの艦隊の着陸後の映像データを」

「補給基地……それも艦隊用の……ふむ？」

「我々が監視しているこの艦隊は戦略予備というと聞こえがいいがその実態は予備役——厄介な諸侯をまとめて放り込んだといったところでしょうが……そもそもの目的を考えると——」

ファンゴルンは愚かではなかったが文官のケースオファイサーであり戦術学は専門外である。ゆえにミュツケンベルガー元帥の策に嵌

りかけていた。

ミユツケンベルガー元帥を元帥たらしめたのは威風堂々たる風貌や戦術能力のみならず、その政治的調整能力と巧みにブラフを使用する“叛徒との駆け引き”である。

功績目当ての貴族——非主流派であれど適度に厄介な貴族をあしらいつつ、目くらましに活用する。

「412基地の方はいよいよ本線陣地ですか……」

「緒戦は優位にすすめています……」

「マズいなあ、奴さんが痺れを切らして艦隊を上げたらどうするんですか」

その通りである、しかしながらそれを行えない状況であるのがグリンメルスハウゼン艦隊司令部であった。

通信の断絶、先任准将である単座戦闘艇監に暴言を吐いた陸戦隊副司令官、予想以上に優勢な敵の陸戦戦力、先任准将である単座戦闘艇監に暴言を吐いた陸戦隊副司令官、補給拠点の建設計画に対して訪れない補給艦。

そういった諸々が退嬰的な【戦力保全】を第一とするようになってしまった。

「観測班から報告！ 敵艦隊の光学観測を出します」

「……………ふむん」

．
．
．
ヴァンフリート412基地外周部、中将と少将、そして佐官たちが兵の警護を受けながら望遠で装甲服のヘルメットに画像を映している。

……………いやそれならば司令室でいいのではないか？ と思っっている

者もいるが前線の将兵と共に見るといふことに意義があるのだと
フォルベック少将は考え、セレブレツゼは“そういうものか”と受け
入れた。

中將の階級章を付けた男は12時の方向を見る。

「包囲されている」

3時の方向を見る。

「包囲されている」

6時の方向を見る。

「包囲されている」

……最後に9時の方向を見て、シンクレシア・セレブレツゼ中將は
溜息をはいた。

「……囲まれている。一面に敵陣、敵陣、敵陣。吹雪の如き兵共の鳴き
声、白い雪原に浮かぶ車両と旗印。人間は大勢になると見分けが付か
ず、さながら一つの生命体のようだ。

なるほど、社会契約論者による絶対主義者は国家をリヴァイアサン
と呼んだ。国民社会主義者は国家は一つの有機体であるといった。

当時の国軍を凌ぐ規模に相対した今、私は改めてその論を体感して
いる」

「アイアース総旗艦の装甲と書類の束は恐怖より私を遠ざける偉大なもの
だ。あちらでは数十倍の敵と相対しようとする恐怖を感ずることはな
かった！」

「兵馬の飯の量はわかる、艦隊が推進剤をどれだけ食らうかもわかる。
だが兵馬の運用はよく知らん」

セレブレツゼは腹痛を堪えるような口調で言った。

フォルベック少将は黙って肩をすくめる。“わからん”と言って
くれるだけでもマシな上官だと理解しているからだ。

「帝国軍は100年前の大親征でも見られた、実に、実に伝統的な陣で
我々に気炎を吐いています。大時代的ではありませんが、伝統とは実用
性の証明であり優位の時の定石ほど恐ろしい物はありません。」

敵本軍は我が軍本陣地から氷河を挟んで北側に本陣を置き包囲網
を指揮しています。我々の整備した主要な連絡道路は帝国軍に封鎖

されているため、タバル方面隊やターイー戦闘団との相互連携が困難な状況にあります」

「つまり……しばらくの間、我々は寡兵で攻勢を食い止めることになりません」

「12時の方向は陸戦隊の司令官リューネブルク直轄の装甲擲弾兵師団、歩兵を主体としつつ重火力隊を追従させ、必要を見ればゼツフル粒子を散布し白兵戦で切り込む。彼らは非常に堅実な戦い方をします。」

彼らこそが実質上の最高戦力、それに対する我々の奮戦こそ、戦の勝敗を大きく左右する事になるでしょう。」

まあ、何にせよ。この戦いで最も“近代的”な地獄を見るのは、間違いく彼らとそれに相對する部隊となるのは確実です」

「そして3時の方向には後背に劣悪な装備と錬度の貴族艦隊陸戦隊ですね。重火力隊を前方に出しています」

「想定される戦術は、重火力隊が我が軍の陣地へ擾乱砲撃行い、乱れた陣地に弱兵の群れが飛び込んで食らい付く。後は雑兵による飽和攻撃です。」

おそらく彼らは混乱を助長させる為のデコイとなるでしょう」

「これだけならさほど問題にはならんのかな」

他が厄介なのだ。とセレブレツゼは髭を撫でる。

「6時の方向には副将らしき部隊が……捕虜の尋問によるとどうやら帝国の寵姫の弟が率いている直轄領常備宇宙軍から臨時陸戦隊を編成したようです。練度はそこそこですが士気は低い、装備も重装甲車両が欠如しているのですが……」

言わんでもわかるわ、とセレブレツゼが空を見てうなる。そこには見慣れた巡航艦が浮かんでいる。

まだ染みのようだがセレブレツゼの慣れ親しんだ艦隊戦では数万隻のうちの数隻であるが、今は途方もない脅威である。

「最大の問題は、敵は対地改修を済ませたらしい巡航船を3隻も持ち

込んでいることです。あの巡航艦隊は今や基地を艦砲射撃で破壊できる距離に侵入しつつあります。

——アレをどうにかせねばならない。スパルタニアンの戦術が限定されてしまう、制空権を奪われた場合、練度云々の問題ではなく鉄量の絶対的な敗北により基地が陥落します」

「基地や常備軍の対空システムで処理できぬかね？　小規模な軌道爆撃であれば撃退できるはずだが」

「連中はそれを見込んだのか低高度で地上軍に随行しております」

「いくら帝国艦とはいえ限度が……いやここは低重力だったな」

銀河帝国軍は元来反乱鎮圧を旨としており、同盟宇宙軍と異なり大気圏突入機能にキャパシティを割いている。

「ええ、無論迎撃しますが対軌道爆撃を想定したシステムですので限度があります。スパルタニアンなどの航空兵力はワルクューレにも対応せねばなりません。航空戦術を防空司令部が練り直しておりますが楽はできません」

セレブレツゼは唇を舐め、唾を呑み込んだ。

「……待て、それでは巡航艦の火力で制圧されるのではないかと？　巡航艦対策は……」

「エル・ファシルに任せるべきです彼らは切り札を持っています」

「エル・ファシルの大隊はターイー戦闘団として迂回している最中では？」

「その通り、正面は既存の対空システムと単座戦闘艇で敵を誘引します。閣下」

「崩れる基地と運命を共にする程、我々は軍事ロマン主義者ではありません。ご安心ください。一時的な火力の優越は決定要素ではありません！　絶対多数の敵を打倒する為に最も有効で、かつ我々が彼らを上回っている点とは何か。それは機動戦術に不可欠な“部隊の質”です。同盟常備地上軍、ヴァンフリート、ティアマト、アルレスハイム、エル・ファシル、大夏天民国、アスターテ……いずれも実戦経験豊富であり、出兵を甘く見て悲鳴をあげる貧乏貴族どもを圧倒する質があります。

敵は大軍、力押しで押し切ろうと攻め立てるでしょう。ならばその力押しを受け止め続け、敵戦力を吸引すれば合流した構成邦軍による多方面攻撃により重火力を叩き、敵の士気を崩壊させる。これで我々は勝利できます」

「……その間にロボス閣下の救援が来ることを祈るしかないのか」

苦虫を噛み潰した顔をする事務屋にフォルベックはわざとらしく敬礼をした。

「はっ！ それでは基地司令閣下、我が軍は何にお祈りなさりますか？」

「……それぞれの信ずるものに、この国は自由の国だ……このヴァンフリート4112も」

フォルベックはニヤリと笑った。

「承知しました、閣下。Freiheit, Gleichheit, Brüderlichkeit!」

セレブレツゼはこの男、外連味が過ぎるのではないか、と鼻にしわを寄せ、いやそれこそが野戦指揮官というものかもしれないな、と思いついた。

なぜなら彼も数秒だけ野戦指揮官を演じる必要があった。

「へいし……」

喉が渴いた、水を飲み、咳払いをする。

「兵士諸君！ 思い出して欲しい！ かつて「大親征」が起きた時！

このヴァンフリートは孤立しながらも交戦星域における民主主義の砦となった！ そして最後まで守り抜いた！ 敵元帥は討ち取られたことを！ この星系に身を寄せた交戦星域人民とラウル提督ら宇宙艦隊の勝利に終わった事を！」

「そう！ この地で始まった戦いは先人達の驚嘆すべき勇気と忍耐によつて勝利に終わったのだ！」

だがこ、この戦いは耐えるだけのものとは違う！ 我々が守り抜くものは侵略者の集う砦を打ち倒す勇者達の足がかりである！ わ、我々がここを守り抜けば、その勝利と勇気が報われる日である！ 息を吸い込む。セレブレツゼは基地司令官としての務めを果たさ

ねばならない。

「我らの父祖の如くこの日を偉大な日としよう！ ヴァンフリート人民と共に自由惑星同盟は再び勝利の旗を掲げるのだ！」

勝利と共に故郷へ凱旋しよう！ —— 勇気を奮え！ 自由惑星同盟万歳！！」

「司令官閣下……」

基地の兵士たちの顔は見えない。だがそれでもリユーネブルクには敵方の情動は「見てきた」ようにわかる。

「闘争心や敵愾心に火をつけられたな。叛徒共め、将兵の士気が高まっているのが手に取る様に分かる。……士気、か、ああ全く面倒な事だ。なあ君、我らの兵が何を望むかわかるか？」

リユーネブルクは頬を吊り上げる。

「『いかなる宣伝も大衆に好まれるものでなければならず、その知的水準は宣伝の対象となる大衆のうちの最低レベルの人々が理解できるように調整されねばならない。獲得すべき大衆の数が多くなるにつれ、宣伝の知的程度はますます低く抑えねばならない』……そして私は幾万の農奴上りの前にいる」

幕僚長は眉をひそめ、首を左右に振る。彼は良くも悪くも都市中産層出身であり、知的な軍将校であった。

「アレがある限り総崩れはないでしょう」

「……ああその通り、連中もそう思っているさ」

リユーネブルクは基地を顎でしゃくり、皮肉に笑うと回線を開く。

「忠勇なる帝国兵……金が欲しいか!？」

「土地が欲しいか!?! 建物を買い上げたいか!?!」

兵達は黙りこくる。だがその沈黙の意味をリユーネブルクは知っている。

「兵たちよ！ 目の前にあるのは宝の山だ！」

「邪魔するのは叛徒だ！ 構わず殺せ！」

「武勲を得ろ！ 財をわけてやろう！」

「前へ進め！ 斧を振るえ！ 敵を殺せ!!」

「皇帝陛下に武勲を示せ！ さすればお前たちは身を立てることができろ!!」

「皇帝陛下の名の下に叛徒をぶっ殺せッ!! 基地を我々のものに!! 力を示せ！ 富を勝ち取るのだ！」

「……………」

兵の一人が武器を構える。そこには殺意がこもっていた。

「ウオオオオオ!!!」

「オオオオオオオオオオ!!!」

咆哮は連鎖する、雪原の吸い取る許容量を、熱も、音も超えたのだ。ヴァンフリート4||2はいよいよよもって凄惨な戦の幕開けに相応しい熱気を持ち始めた。

・

・

そして派手な包囲陣の後方からひそやかに機動する者たちもいる。フランダン伯の装甲旅団である。

「偵察兵が戻りました。敵守備隊はおりません」

「やはりか。よし、ここを抜ければ敵の基地主戦陣地を射程に入れるまで防衛線が無いぞ」

「地雷原で道が塞がれています」

「ふん。叛徒どもめ、所詮は寡兵だ。急ごしらえの小細工だな。この回廊を抜けるまであと少しだ。地雷原の撤去を急いでくれ」

「閣下、ですが隘路で戦列が伸びきっています。今襲われたらひとたまりもありません。排除が終わるまで本陣を後方へ動かすべきです」

「地雷原を設置したのなら重火力を中心とした陣地がある筈だ、それがないのは……何故か」答えはあれだよ、と巡航隊をフランダン是指す。

「対空火力を揃えない限り退くしかない。我々がここを通ると確信し、防衛陣地線を空にでもしなければ、奴らには今、こんな場所にまで兵力を割く余裕は無いのだ。孺子は良い仕事をした——が奴らの引き立て役になっては諸侯のとりまとめができません。そうなったらフランダンが”あの”コーブルク侯レオポルト2世の風下に立ったままだぞ！ わかっているのか!!!」

いやまあお気持ちは痛いほどわかりますが、と幕僚長はなだめる。

ルドルフ大帝が好んだ”自然由来”の薬を得るために劣等人種の農奴をかき集めてノルマに達しなければ腕を切り落とす帝国の”健康的奢侈品”の闇を担い、かの『”最も偉大なる悪き財務尚書”カストロプ公』”古典的貴族筆頭”リッテンハイム侯爵』も黙って首を振り、”大官”リヒテンラーデ國務尚書の胃潰瘍の源泉の一つとして知られる”真の漢”……そりゃ嫌である。

「しかし哨戒ドローンや通信妨害すらありません。あまりにも静かすぎます。兵力の配置を放棄しても情報を得ないはずがありません。これは罠では？」

「なに、叛徒の姑息な企みなど罠もろとも粉碎してくれるわ。このわけのわからん叛徒の堅城を陥とすまであと一歩なのだ。不確定要素を優先させて目の前の勝利を見逃せと？ そうはならん！ ここで勝って恩寵の車両工場を領内に作ってもらおうのだ!!!」

幕僚長が熱くなった目頭を押さえるのと同時に、ズドン！ と彼らが話す数百メートル後ろで装甲車が爆炎を上げた。

「伏撃だとお!? まっ……待て！ アレはなんだ！」

「……しかし無茶をするものだ」

その数分前、エル・ファシル地上軍の切り札。独立搜索装甲第十一大隊を率いるニューズロットⅡビョークルンド中佐はため息をついた。

「エル・ファシル地上軍本土決戦用対空車両『剣牙虎』。火薬式130mm高射砲2連装、標準引力における有効高度は35,000m。決意と恨みと意地で包んで総動員だ、はっ！ 130mmなんてヴァーハやヴァンフリートでさえ拠点防衛システムとしてしか使っていないんじゃないか？ ——こんな兵器を作ったエル・ファシル軍の開発部門を恨むんだね」

派遣参謀にして戦友のバドウ少佐は肩をすくめて笑った。

「まさか使う時が来るとは——奴らに食らわせてやる機会があるのは幸福かもしれないがね。死ななければ」

皮肉を無視して派遣参謀は端末を見る。画像が乱れてとても見れただものではない——満足げにうなずき、行動を促す。

「嵐が来ました、ニューズロット大隊長殿」

「ああ頃合いだね、こちらでも始めよう、剣牙虎を前へ！」

断熱材やらあれこれを被せられた偽装をはぎ取り、ヴァンフリート工兵が巡らせたトンネルを突き破る。

そこはちよつとした氷の丘の上、巡航艦隊を捉えるには十分に距離を詰めた危険な場所。

「隊長車両停止」

だが無線も乱れ切った“今だけ”は関係がないのだ。

「停止、各車両停止確認、所定の指示に従い直接照準」

そしてそれは——何もかもが無論電子戦においても敗北した時に“原始的”な方法で敵に一矢報いることを想定した奇形兎、剣牙虎が想定した状況であった。

「直接照準！ たっぷり喰らえ！」

「教本通りにかましてやれ！」

5秒間に一発、20を超える門数の砲が火を噴き、3隻の全長576mの艦へ襲い掛かる。

特に悲惨なのが旗艦であるシュヴァルツアドラーであった。当然

のように集中砲火を受ける。

「オフエンブルク姿勢制御困難!! ホーホコツプフ居住区画爆破炎上!!」

「マインゴット! 撤退だわが艦は……」

「機関破損! 畜生! 推進剤タンクがやられた!」

「側砲手は何をしとるか! 早く撃て!」

「推進剤流出が止まりません!! 助けてくれ!」

「ワルキューレ格納庫から火災発生! 誘爆します!」

「シュヴァルツアドラーが! シュヴァルツアドラーが沈む!」

「戦隊旗艦シュヴァルツアドラー、沈没Untergang!! シュヴァルツアドラー、沈没Untergang!!」

ヴァンフリート4||2基地攻防戦の終盤を告げるのはこの報告であった、とも言われている。

「部隊の把握を急げ!」

「……! 無線が機能しません! 恒星嵐です!!」

フランダン伯の舞台も混乱しきっていた。良くも悪くも彼らはイゼルローン回廊の中で戦ってきたのである。だがそれでも旅団本部は実戦経験者で固められていた。

「落ちつけ、全隊白兵戦用意をとれ!! 後退用意とワルキューレ隊への連絡を!」

「閣下! 閣下! あれを!!」

「……巡航艦隊が沈む!」

素早くフランダンは耳を澄ませ、周囲を見回す。彼は貴族であるのと同時に将校としての経験も積んでいた。つまるところ兵下士官の統制というものの面倒さを知っていたのだ。

——やられた！ このままだと士気崩壊が起きかねんぞ！

「かくなる上は包囲を突破する他あるまい。統制の及ぶ限りに集合をかける!! 白兵戦用意!! 私に続け、血路を切り——」

フランダンは見誤っていた。彼らは侵略者であり——ここは【敵国】であることを。そこで“足を止めてしまった”失態の重さを。

その数分前のことである。

「エル・ファシルの、いい仕事をするじゃあないか!!」

「あちらも元気がよろしいですな」

指し示すほうではエル・ファシルの防衛線を構築していた部隊がいきなり突撃を仕掛けて敵と並行追撃を仕掛けている。

「騎乗隊、前へ!!」

「……おい、貴様ら! 山岳最強は誰だ!

同盟常備陸軍のお行儀の良い山岳師団か?

正墨旗の砦守か? アスカリ達の子兵旅団か?」

ターイーは罵倒するように吠える。

「ハミデイイエだ! ハミデイイエだ!! 俺達だ!」

兵たちはそれを同様の口調で返す。

「大変結構! そしてここは何処だ!! 雪山だ!! ここでの最強は誰だ!?!」

「我々ハミデイイエだ! 我々ハミデイイエだ!!!」

「大変結構!!! それでは踏み潰すぞ!!! 駱駝騎兵イ! 前へ!」

「喇叭を鳴らせ!!!」

「ムサンダム・アクバル!!!」

400騎の駱駝騎兵と800名の強襲歩兵で編成された突撃部隊は、刃を抜き放ち集中砲火により指揮統制が崩壊しつつある帝国軍装甲重火力旅団へ突撃を開始した。

ターイーという男はひどく性格が悪い博徒であった。彼は突撃の

際に敵兵が巡航隊を背後に見えるように自己演出を怠らなかつた。そしてこの博打は大当たりであった。帝国将兵は沈む巡航艦を背景に駱駝騎兵が突撃してくる姿を見ることになる。

パニックは拡大し、燃え広がり、狂奔した。

その中で比較的統制を保っている小規模中隊ほどの集まりにターイー達は殺到する。

歩兵の一部が擲弾を放ち数人を嘔き飛ばすが兵達は怯まず白兵戦と射撃で食い止めようとする。だがターイーが先頭に立った最精鋭の突撃はついに届いた。

どう、とフランダン は倒れ伏す。幕僚と従兵達も“義務を果たした”と射撃で食い止めようとする。だがターイーが先頭に立った最精鋭の突撃はついに届いた。

「グツ……ハハハッ！ 共和主義者め！ オリオンに居ればさぞ厚遇されたろうに愚か者め！」

ターイーの駱駝が唾を吐き、空中で凍り付くのと同時にフランダンの首から鮮血が噴出した。

「クソツタレの封建領主め、ウチの国に産まれてれば俺の苦勞を押し付けられたろうに！」

ターイー戦闘団は装甲旅団の迂回と巡航隊の排除に成功した。彼らはヴァンフリート民主共和国英雄の勲章を授与されることが確定した。その生死を問わず。

【著名な戦闘】ヴァンフリート4Ⅱ2防衛戦（12）
基地主戦陣地攻防（中）

エル・ファシル軍の奇襲は基地攻防戦のターニングポイントとなった。

もちろん単純な戦力の問題もあるがそれ以上に帝国軍の士気を大きく落とすことになった。なにしろ彼らの頭上にある重火力連隊級の火力投射能力を持つ巡航艦が叩き落とされたのだから。そして同時に弱小貴族領主達の精神を揺さぶる知らせも揃っている。

「フランダン閣下、戦死！フランダン閣下、戦死イ！」

「支援についた対地攻撃用巡航隊、壊滅！お味方総崩れ！総崩れ！」

矢継ぎ早に訪れた混乱しきった報が届くより早く。その知らせを“目視”した高級指揮官の一人がエルヴィング大佐である。

「おいおいおい……あの兄ちゃん死んじまったのかよ！クソツ！常識人孺子担当の貴族だったのによお!!」

エルヴィングは舌打ちをしながら強烈に頭を回転させていた。彼はやり手の宇宙軍陸戦隊の指揮官であり、“船一隻と数十本の戦斧”で御家を建て直した名領主であった

「なるほど、なるほどお……」

不安そうに“領主様”を見る副官を無視してエルヴィングはごきり、と肩を回し――

「ばっ……か馬鹿しい、もう付き合ってらんねえな」

どさり、と仮設寝台に寝っ転がる。

「閣下、ですが背任は――」

「背任じゃねえ。通信システムの不具合が数十分続いただけだ。損切りだよ、損切り。これ以上はリユーネブルクには付き合えねえ。奴に全責任をおっ被せて俺は金髪の孺子の側にまわる……グリーンメルスハウゼン閣下はそちらに着くだろうーしな。」

しばらくは莫迦をすり潰す、俺の領地周辺のやつは念入りにな。んで、潮目が変わるのを待つ。消耗戦だが勝つのは俺たちだ。そこは変

わらねえよ……宇宙の方は知らんがな」

そつちが負けりやそれはそれで美味しいがな、とエルヴィングはニタリと笑う。

「戦場は糞溜めだが今回は肥料にもならねえ病気持ちどもの糞がひりだされてやがる。それがわかかって突つ込むしかねえリユーネブルク卿と金髪の坊ちゃんにお任せするさ。俺たちの目的の優先順位を変えるだけだ。あのどでかい基地の物資を第三に周辺領土の利権獲得と中央とのパイプ強化を第一、第二とする。だからそうさな、予定通りにあの間抜け共をぶつけてだな——」と伝令将校に何かを囁いた。

のそり、のそり、と突撃発起線に向け壕の中を貴族領兵たちが動き回る。

「来たな！ヴァンフリートのホスト達に見せてやれ、宇宙軍陸戦隊の仕事というやつをな」

それを受け止めるのは同盟軍宇宙軍陸戦隊第31強襲連隊である。

「焦るな！敵を引き寄せて重火力隊と連携しろ！再起動させた通信システムの点検を密にせよ……数が多すぎるな」

連隊長、ゴームレー大佐は舌打ちをする。塹壕にこもることは人類の戦闘における普遍性の一つ、今更である。

だがこの戦闘の価値について彼はいささか懐疑的であった。

「ええだからこそ、です。ここまで状況が推移して今更軌道爆撃の選択をとらないことから我々の戦闘に価値があることがわかります」幕僚が宥めるが、ゴームレーは顎を撫でるだけであった。

「HURNの報告によれば大規模補給基地を作ったようですが敵軍は利用する様子がない。一万を超える艦隊を拘束しているが俺達には荷が勝ち過ぎる兵力を拘束しているよ。ミュツケンベルガー元帥らの本隊がいつ訪れてもおかしくはない」

「ですが状況は我々も同じだ。同盟艦隊が来るのが先か帝国が来るの

が先かといえど同盟が先でしょう。イゼルローン攻略作戦の兵站計画の肝ですよ」

「……露見してもここに基地があるという事実で敵は惑う、か」

「それにどうであれ構成邦軍は血を流しています。彼らを見捨てるわけには……」

「その通りだクソツたれ！だがそれではアイツらを人質扱いしているようじゃないか！」

畜生、政治というものは、と毒づいていると、伝令が駆け込んできた。

「ヴァンフリート第4突撃工兵師団”スンジヤタ”浸透強襲を開始しました!!」

「やりやがった！畜生！あいつらやりやがった！」

ゴームレー大佐が潜望鏡を覗き込み、胴間声で叫ぶと、幕僚たちはほっと肩をなでおろした。

なぜなら彼がこの後どうするかを理解してたからだ。ゴームレー大佐は頭は良いが故に余計なことを考えさせない為に幕僚たちが気分を整えさせることに労力を費やすタイプの指揮官であった。

万事心得た本部衛兵たちが連隊長の周囲に集まる。

「ヴァンフリートに先を越されるな！俺たちは誰だ！」

「同盟軍陸戦隊だ!!」

幕僚も兵下士官も声を張り上げる。

「臆病者にケツを見せる仕事は誰の仕事だ!!」

ゴームレーは顔を真っ赤にして声を張り上げる。

「陸戦隊だ！陸戦隊だ！」

「大変結構！ならわかるな！構成邦軍のケツを見るのは俺達の恥だ!!
ヴァンフリートだろうと先を越させれるれんじゃねえ！予備隊を出せ！ぶっ飛ばすぞ！」

そもそも同盟軍陸戦隊それもゴームレー率いる部隊を防衛に投入、さらに同盟常備地上軍と肩を並べたのが間違이었다といえどそれに尽きる。

少なくとも彼らは地上軍……まして予備役軍である構成邦軍に後

れを取るのには男子一生の恥だと本気で信じていた。とりわけ陸戦隊生え抜き将校のゴームレーという男はそういう性質の男であった。

基地司令部はそれを追認した。

「司令官、陸戦隊がヴァンフリートが浸透強襲を開始した6時方向に對して4時方向に突撃を開始しています」

「陸戦隊は元気がいいな」とフォルベックは肩をすくめる。

「……貴族軍が展開した重火力は不足しています。いささか不可解ですが」

「成功しているのであればどうしようもない、それにだな」

たたくときに将兵の心を叩いておくのは常に有効な手管さ。とフォルベックは笑った。

そして主戦陣地は混戦へと纏れ込んだ——帝国貴族（※弱小非主流派）の望まぬ形で。

「叛徒共は常識をわきまえておらぬのか！なぜ敵の数は上回っているのに陣地から出てくるのだ!!」

「陣地を突破するのだ！ええい重火力隊を出せ！」

「味方を誤射します！」「だが対空火力を破碎せねば我々がすりつぶされるぞ！」

なら〃数に勝る〃利を活かせばよいのだが封建制で中央官界から外れた零細貴族はそうもゆかぬのだ。ましてや負けがこめば——なにしろ

「他の奴らなど知らぬ！分け前が足りぬのだぞ！」そして負けたら、などと言う言葉もちらつけば、なおさら被害を避けるのが彼らの本能。ああ悲しきかな零細貴族。この軍勢は全て「彼らもち」なのだ。何しろ採算が取れぬからこそ星の支配者として割り振られたのが彼らの父祖なのだから……

その混乱を観戦するのはラインハルト率いる帝国宇宙軍臨時陸戦隊である。

「巡航隊にフランダン伯……さて、俺が処方できる特効薬はもうないぞ」

ラインハルトは冗談めかしているが内心に張り詰めたものがあることを忠実な友人は理解している。

「ラインハルト様、これは」

「ああ不運ではない。敵に見られている。確実に。あまりにも対応が早すぎる。戦術能力ではなく環境を事前に整えて『知る方法』を整えていたとしか思えない」

ラインハルトは天を指す。

「もつと早く気がつくべきだった。航空戦力も倍はいるのに俺たちは制空権を確保できていない。連中が見えないところも見えているからだ」

「油断ではない、俺は劣悪で不十分なぬるま湯を知らずに受け入れてしまっていた。退嬰、無気力、惰性。知らぬうちに飼いならされ、すべきことをせずにこの氷塊に腰掛けてしまった」

リューネブルクは陸戦屋、であるならば自分が気が付くべきだったのではないか、とラインハルトは舌打ちをした。だが参謀の編成も不十分な中でラインハルトを糾弾するのは酷であるともいえる。

パランティア連合国は交戦星域最大の経済、人口を誇る構成邦、避難支援に帰還支援。時には友邦の奪還作戦のために同盟宇宙軍、地上軍と協力することもある。オスマン少将が率いる統合作戦本部の作戦部局はなおさらである。

HUORNは(自由惑星同盟軍ではなく)パランティア統合幕僚本部直属であり情報収集が専門の宇宙保安機関である。

つまるところ官僚機構、マニュアル構築の経験則の違いであった。「足元がおぼつかぬうちに拙速を尊ぶばかりに奇策に頼った俺が悪かった。ここは正攻法で焦らず攻め立てるしかあるまいよ」

「重火力で締め上げますか」

「ああだが叛徒も相当に準備を整えている。だがここまで来たらすごすこと引き下がることもできまい。築城を強化せよ、後はリューネブルクのお手並み拝見といこうではないか」

今度は少しばかり肩の力を抜いた様子で先ほどまで憎々しげに見つめていた氷と雪で彩られた山岳の一角を眺めた。

当然ながら巡航艦を叩き落とす火力が存在すると喧伝した剣牙虎は目立つ、ましてや彼らは基地を餌にして巡航艦の横っ腹に牙を突き立てるために突出していた。

であれば彼らの大戦果に対する報復は熾烈なものとなる。ニュースロット達の足元では血みどろの熱戦が繰り広げられている。

「だめだシエイシス！危険すぎる」

少尉の階級章を付けた若者が伏せたまま叫ぶ。

「あの帝国の連中、莫迦だが無能じゃない！ワルキューレが集まってきたのがったぞ！ありゃヴァンフリートの突撃工兵といえど突破なんぞ無理だ!!」

だがシエイシスと呼ばれた20代前半の女はクスリと笑うだけだ。

「あら？貴方達、『アーサー・リンチ』になるつもりなの？たかが倍の農奴あがりの水兵が突撃してくる程度で。それにね、貴方。私は中隊指揮権を継承してますわよ？」と首を傾げる。ライフルから放たれた熱線が装甲服から1メートルも離れておらぬ氷塊を水蒸気に変えても眉ひとつ動かさない。

「ねえ貴方達、人が住まずともヴァンフリートは本土を私たちの為に血に染めていることをわすれていませんか？」

それなのに？私達はここでお仕事すんだから騎兵隊が来るまで待てをしろと？

基地主攻正面にいる同盟軍共アライアンスに本土失陥した奴らは頼りにならないと笑われたいのですの？」

銃撃すら遠く聞こえる一拍の沈黙、そして中隊の将兵は苦い物を呑み下し、地団駄を踏むように立ち上がる。

「……っ!!クソッ！クソッ！卑怯だぞお前!!連中に笑われてたまるかよー!」

シエイシスは心底愉しそうに笑った。

「通信担当はまだ生きてますの？大隊長へ連絡をいそぎなさい」

「どうする気だ……ですか？」

「単純ですわ。ここで足を止めたら死ぬ。後方連絡線の本拠地が目的地。であれば当然、運動戦をしかけますわ。シドニー・シトレ」艦隊司令長官「閣下の真似でもして差し上げましょう」

彼女の部下達は悲鳴を上げてそれに応えた。シドニー・シトレ「艦隊司令長官」の伝説。即ちイゼルローン要塞への並行追撃である。

その真価は隘路かつ防衛設備が充実したイゼルローン回廊で大軍を適切に運用し、3倍以上の艦隊の火力を適切に発揮させ（これが困難なのだ）そして並行追撃で敵を駆逐する。

参謀を統率し、配下の提督たちに意図を適切に下達した。大軍を現地で統率する将帥としてのシドニー・シトレの総決算の如き芸術的戦術であった。

つまりは――

「楽勝ですわね？数に頼む弱兵を蹴散らし、彼らを混淆し敵陣に突っ込む。行き先はイゼルローンの厚化粧ではなく友軍の基地への突撃です。あぁなんと楽な任務なのでしょう！」

彼女の指揮下に入ってしまった将兵は泣き叫びながら車両をかき集め始めた。

「並行追撃をここで試みるとは！エル・ファシルの構成邦軍は流石よく練られていますな」

と言いながら派遣参謀のバドウ少佐は目をそらす。彼は軍官僚制度で揉まれても兵を慮る人の心をまだ持っていた。それはそうと足を止めたら全滅しかねないことも理性的に理解しているのだが。

「機械化歩兵第二中隊はアキノ大尉だったな、随分と元気が良い」

「アキノ大尉は戦死しました。第一小隊長のシエイシス中尉が代わって指揮をとっています」

エル・ファシル構成邦軍の大隊長と幕僚は派遣参謀から目をそらす。いやあ君たちの部下ではないのかい、とバドウ少佐は思ったが口にしらない。なにしろ足を止めたら全滅することは自分たちも理解し

ているのだから。

兵に死ねと命ずるのは仕事であるが気分がいい物ではない、罪悪感という奢侈品を将校はたまには嗜まなければならぬ。

「そうか、大隊主力。先鋒の支援を密にせよ。派遣参謀すまないが――」

ニユースロット中佐がちら、と視線を向けるとバドウ少佐は笑ってうなずいた。

「ああわかつているムサンダムやヴァンフリートとの合流に関する調整は私が担当しよう。突破したら一杯奢っていたきたいですな」

「なあ派遣参謀、これは僕の私事だが」

ニユースロット中佐はにたりと笑った。

「エル・ファシル特製のミードを基地で冷やしているんだ、これを他人に譲るには勤労精神を見せてくれる友人でなければならぬ」

バドウ少佐はにこり、と笑った。

「ほおう、そいつは帰らないといけませんな」

そして剣牙虎は今度は地へと牙を剥き、先鋒を担う勇士達を支援すべく駆け出した。

「陣地に着弾！またもゼツフル粒子散布弾です！」

「防空システム20%沈黙！防空司令部のウエンライト准将より散布装置排除の要請！」

「敵装甲擲弾兵突撃開始！俘虜からの情報によればリユースブルク准将の隊です！」

貴族の寄せ集めをぶつけた理由は消耗を誘うためではない。正真正銘の大軍の敗走という餌を見せつけるためだった。

「チィ！嫌なところを突いてくる！薔薇の騎士連隊に迎撃を命じろ！」

「よろしいの……」

参謀は疑問を呈そうとするが防衛指揮官は鋭い視線でそれを制す

る。

「なら君に臨編部隊の編成権でも与えようか？ 私としては実戦経験豊富な白兵戦部隊の方が良いのだがね」

「フォルベックの視線に耐えかねた若い参謀は背筋を伸ばし指揮所から飛び出す。」

「はっ！ 伝令に向かいます！」

「うむ、そのまま戦況を見てくるように」

「フォルベックは参謀を見送ると溜息をついて戦況図を眺める。」

そして薔薇の騎士連隊は最前線に投入されることになった。そして主力が敵と接敵を開始した時に、それは動き出した。

「よおおし、出番だぞ teme ちら！」

「ちい！ アレは……エルヴィングか！」

シエーンコップは舌打ちをした。主力はすでにリユーネブルクの白兵戦部隊と接触し引き戻すのは困難。だが自身の直属大隊では戦力はともかく兵力では数倍の差がある

「第二大隊はここで連中を止めるぞ！ まさか奴の名前で小便漏らすやつはいるか？」

そしてシエーンコップは一個大隊を率い、倍以上の“ヴァイキング”を受け止める役を担うこととなった。

「だが薔薇の騎士連隊と言えどそれは楽な仕事ではなかった。」

「……………くそっ！」

数が多い上にエルヴィング男爵領の将校下士官共は『多対一』に通じている。

戦技であれば兵卒たちは勝っている。戦術であっても本来ならリユーネブルクとシエーンコップが仕込んだ将兵は新兵とは比べ物にならない。だが数の優位を徹底的に活用する老獪な立ち回りは徐々に薔薇の騎士達を真綿で締め付けるように戦力を削いでゆく。

「畜生、コイツらとことんクソみたいな戦い方を——」

孤立した年若い少尉は戦斧を構えようとし、ヘルメットの中で“溺れた”

ゴボリ、と喉から鮮血を噴き出す。

「そうほめるなよ、照れるじゃねえか」

「——っうお!？」

エルヴィングが飛び跳ねるのとほぼ同時に背後から戦斧が襲い掛かる。

「ほおう、海賊稼業をやってるだけあってコソコソ動き回るのだけは得意とみた。だがもう逃げ——」

投げつけられた部下の遺体をシェーンコップは柄で受け止め、優しくいなす。

「られんぞー!」

そしてぐるりと回し、迫るエルヴィングの戦斧を受け止めた。

「逃げ回るぜえ? なあ若いの。俺は逃げるのが大好きなんだ、借金からも、おつかねえ強敵からも——それでも俺は”接舷男爵”なんだ」

エルヴィングの足が動き重心を崩そうとするが、シェーンコップは素早く後退し、戦斧を構える。もはや軽口は叩かない。

「戦斧一つで家を建て直してもなお我が家名は落ちることはない……なぜだと思っうね」

「接舷男爵”エルヴィングは脱力し、ゆるかに戦斧と片手盾を構える。」

「武勲こそが我が名誉、敗者から奪うことこそが誇りある富。これこそが我が家が『大帝的貴族』たる所以、俺は勝てる敵を必ず狩る。つまりお前をだ」

バーラトより、オーディンより、はるかに薄い、この鄙びた星の空気が凝縮し、粘度があるかのように戦士の体にまとわりつく、時間が鈍化する。

「古代ノルマン戦斧術は魔技。全身を刻み殺してやる。若いのに、戦場の殺し合いってやつを教えてやろう」

眼光がぶつかり合う、その一瞬先に双方の刃が切り結び、ヴァンプリート4Ⅱ2基地攻防戦の最終局面を告げた。

【著名な戦闘】ヴァンフリート4Ⅱ2防衛戦（13）
基地主戦陣地攻防（下）

基地司令部で防空システムの運用を担当しているフィッツシモンズ中尉は悲鳴を上げた。

「このままだと防空システムを展開している陣地にもゼツフル粒子濃度が浸透しています！危険域に達します」

防空司令のウエンライト准将は頷くとフォルベック防衛司令官に向き直る。

「ヴァンフリートの突撃工兵を呼び戻すか？」

「バカな！ターイー戦闘団と連携して敵を分断せねば諸侯軍まで勢いづくぞ！アポーストル連隊長の装甲騎兵連隊から予備隊を引き抜くしかない！」

手が足りない、まさしく同盟的な状況であるが。とフォルベックは頭のどこかで諧謔を弄びながら手札を数え直す。いよいよ年貢の納め時か、あるいはうまく死神と奴隸商人の棍棒を逃れられるか。

畜生、何が転進保証人だ！どうして俺はこんな状況ばかり送り込まれるんだ！前世で何をしたのだろうか。

「ウエンライト准将、誠にすまないが対空兵器の転用をしたいが」

「制空権が心配ですが」

「このままでは使えなくなる。ならば延命のためにも景気よくばらまくべきだ」

「……やむをえませんな」

「対空監視を密にしてくれ、深入りせずここを護ってくれているパランティアの航空騎兵隊には苦勞をかけることになる」

基地司令部の面々は重苦しい顔で戦況を眺めていた。

一方で主戦場はさらなる混戦が起こり、諸侯軍は既に基地への攻撃

という大方針すら自軍の損耗との天秤にかけ始めていた。

「戦鼓を鳴らせ！墨来々!!我らの戦鼓のうねりを絶やすな！」

「アスターテ海兵隊！総員着剣！大夏を支援しますよ！」

再編を終えた構成邦軍が到着し、包囲外からの攻撃を開始したのだ。

その最中、ゼツフル粒子が濃厚な前衛陣地、交通壕の要路では薔薇騎士連隊と装甲擲弾兵が激しく切り結んでいる。

その中でも一際流麗に戦斧を振るうものがいた。

「騒がしくなってきたな？え？ヴァーンシャツフェよ」

「衰えた……いや、老いたな。貴様は連隊長の器ではなかったからなあ」

皺も深くなつたが腕も脚も萎えたな！と先代連隊長の振るう戦斧がヴァーンシャツフェを襲う。

「衰えたのは貴方だよ、ヘルマン」

だが初老の連隊長はそれを最低限の動きで鈍く弾き、打ち込むのは言葉の戦斧。

「なんだと？」

一瞬、戸惑った隙を突き、かつての上官に戦斧を打ち込む。

「貴方は逃げたんだよ、責任から。私は奔放にふるまう人の世話をするのならよかった。ただ下の立場から若さに甘える者の世話をするのならよかった。同じ連隊の仲間ならな」

堅牢であつたかつての上官はたじろいだ。

畜生、アンタのせいだ、今までのような放言や気ままさが許されるものではなくなった。それを理解できず、使いつぶされるような真似をしてきた連中を統率できないのは俺の責だろうか、

ヴァーンシャツフェは無意識に唸りながら斧を突き出す。

「今のアンタは最低だ。奴らの奔放さを楽しんでいた『俺たちの連隊長』はどこにもいない。素人を率いて将官らしいこともできず。最前線で捨て去ったものに絡み、正しさを確かめようとする。貴方がかわ

いそうだよ、ヘルマン」

そして連隊長の斧は先代の装甲服に包まれた腕に跳ね上げられた。

「あぐっ……」

腹を裂かれる。噴き出た血が凍っていく。生命が冷えてゆく。

「かわいそうだな、我が親愛なる副連隊長。お前には先が見えていない」

嘲るようにリューネブルクは戦斧を振り上げた。その目に怒りはなく、ただかつての部下の生命の如く何かか酷く冷え切っていた。

「だからお前たちは俺に捨てられたんだ。ここで終わりだ。無意味に死ぬ、ここで——」

答えることはなくヴァーンシャツフェはぼんやりと空を眺めた。

混戦であるがヴァンフリート突撃工兵隊は浸透戦術を継続していた。その先鋒の一つを率いるのはアイデイド中隊長率いる機甲中隊だ。

「弾幕を張れ！」

「アイデイド中隊長！3時方向に敵を発見しました！」

「ためえらくたばりやがれ！この土地は人民とモハメド・カイレ人民元帥のものだ！」

ポン、と間の抜けた音がし擲弾が放たれた。だが着弾すれば重火力陣地が爆ぜ……その数倍の応射がかえってくる。

「ハハハハ!!進め進め！」

「中隊長オ！火力支援が来ないですよ！もう下がりましたよ！」

「黙れ！ムサンダムとエル・ファシルと握手するまで後方を気にするな」

「足を止めるな！弾幕を張れ！敵を迂回するぞ！固い部分は師団主力に投げちまえ！」

「主力!?後続部隊もここまできたらおいそれと重火力は使えませ

……」

その瞬間、装甲擲弾兵達は合金弾に弾き飛ばされた。

「は?」

「あの音……空気砲か!? パルメレントの玩具か!」

パルメレント・“コモンウエルス”……と同盟政界や報道では呼称されるが実際はアルレスハイム王冠共和国以上に“皮をかぶらない”立憲君主国である。そして同時に非常に“実践こそが進歩への第一歩”という理念を持っているらしく様々な試作兵器を提案し、常に兵器不足に苦しむ交戦域に時折、“支援”を行うのだ。

彼らの無線に高笑い響いた。

「フハハハハ!! パルメレントから供与された”ゼツフル粒子散布下専用巡航戦車『モラン大佐』”だ! わざわざ俺たちが何のために基地防衛についたと思うね”

材質はともかく、昔懐かしい戦車が姿を現した。

「ゼツフル粒子濃度など関係ないわ! 蹴散らしてくれる!!」

スポスポスポ! と音を立て圧縮空気によつて加速した弾丸が空気式機関銃からばら撒かれ、擲弾兵達は追い立てられる。

物のついでであったがまさかここまで上手くいくものか? と眺めていると、氷雪でできた丘を下ろうとする姿を見てアイデイドは黙って首を振り、連隊への支援を要請した。

「だめです、履帯も全然噛んでません」

「ナンデ!？」

「めっちゃ融けてます、氷がめっちゃ融けてます」

シユウシユウと排熱されたものが低気圧の氷雪を溶かしてゆく。

「そら液体空気を炸薬にして使ってるなら、排熱がエグイことになりますよ」

パルメレントから送り込まれた技官が画面越しに肩をすくめるのと同時に戦車は高速で敵に突撃を始めた……あるいは滑り落ち始めた。

「あ” あああああああ!!!」

「敵戦車部隊! 突撃してきます! 速い! まるで滑走してるかのようだ

！」

「退避！退避イイイ！！」

「何やってんだあいつら……」

「まあアレも復帰すれば支援火力としては有効です。我々は彼らが囲まれないように進みましよう」

「このままでは基地防御陣地がゼツフルに満ちるぞ！ターイー達を連れ戻せ！向こうさんの騎兵の方を頼ることになりそうだ」

そしてアイデイドは天を仰いだ。

「いや、あれは……あれは！」

・

「畜生！あのシユラフタめ好き勝手言いやがって！」

エオメル・ロヒアリム大佐は舌打ちをした。

『ロヒアリム大佐、地上の戦線整理が進めば防空支援を再開します！』
「いつまで対空支援なしで耐えろっていうんだ！畜生！スパルタニアン乗りを何だと思ってるやがる！」

そもそも俺達は通商破壊用の貴族小艦隊やら交戦星域の航路護衛やらがメインで低重力とはいえ大気圏戦闘は専門外なんだぞ！と毒づくが志願したのは自分であった。

ワルキューレの編隊に対しパランティアのスパルタニアン乗り達も編隊を組んで互いに牽制しあう。

「畜生！妹が出世するより先に俺を少将閣下にする気か!!」

ワルキューレは深入りを避けているがそれでも数を頼みに動き回っている。

「フィッツシモンズ中尉！何かいいニュースはないのか！」

『ええと……地上部隊が後退を開始しています！ワルキューレはその支援の為に陣地周辺を動き回っており、深入りする様子はありません！』

「クソっ！それはいいニュースなのか!?ワルキューレを揃えて叩き潰す気じゃあるまいな！」

『知りません！とにかく対空システムを……大気圏外に反応有！』

「畜生！どつちだ！」

帝国か、友軍が、文字通り【天の助け】はどちらものか。それはこれまでの戦いの意味すら反転するものだ。

その答えはフィッツシモンズ中尉ではなく【天の助け】から降り注ぐミサイルが答えを出した。

エオメルの眼前でワルキューレは慌てて旋回し、逃げ出そうとする。運の悪い者達は爆散して命を散らす。

フィッツシモンズ中尉はオペレーターとしてはあるまじき喜びの声を上げた。

『……敵単座戦闘艇に攻撃！後続母艦が大気圏に侵入！』

『識別信号 青・青・青！ 友軍です！続けて文書通信！』

『ワレ第五艦隊、遅レテスマヌ』

拡大された光学映像越しに映るのは大気圏外から十隻程の航空母艦、弱点の『どてつぱら』から次々とスパルタニアンが飛び立ってゆく。それだけで基地防空部隊の数倍の数の戦力となる。

そして最後に航空戦隊旗艦『ダーサ・アルバレス』より飛び立つ100機のスパルタニアンが帝国軍に襲い掛かった。

基地防衛陣地の帝国軍の後退は迅速であった。自由惑星同盟宇宙軍陸戦隊出身のリューネブルクも私掠艦隊指揮官であるエルビング男爵も、こと『敗ける』ことには手馴れていたのだ。

「ハアーツ！ハアーツ！」

エルヴィング達が退き、シェーンコップは装甲服の酸素濃度を疲労回復モードに切り替える。

エルヴィング男爵……古代ノルド戦斧術、油断のならぬ強敵であった。肩の装甲が挟られている。あの時あえて踏み込む咄嗟の状況判断がなければ肩を切り裂かれていただろう。

「ひとまず俺たちの出番は終わりか」

通信妨害も軽減されたのか、徐々に回復しつつある。

……劇的なシーンであった。護衛役のスパルタニアンに守られた対艦攻撃装備のスパルタニアンが高出力レーザーで文字通り『敵陣を切り裂いて』いく。

とはいえどうせ長くは続かない光景だ。敵艦隊は大量のワルキューレを繰り出すに決まっている。だが4||2の戦いは終わったのだ。それは『ヴァンフリート星域会戦』の主役。星間艦隊戦へとグリーンメルスハウゼン艦隊が“狩りだされた”ことになるのだから。

ワルキューレは艦隊が宇宙へと出るために運用されることになる。軍事的に見るとこの乱入よりも900隻の艦隊が機雷を撒き、グリーンメルスハウゼン艦隊をこの惑星に封じ込めようとし始めたことの方が決定的であったが。勝利したことは間違いない。

「俺たちの陸戦隊は後退した部隊の収容に専念する。増援の単座戦闘艇部隊との連携を密にせよ、どの道、宇宙に上がるためには護衛役が必要だ」

「ラインハルト様、ただ退くだけでは——」

親友の言葉をラインハルトは手を軽く振って遮った。

「キルヒアイス、俺たちの本命は艦隊戦だ。その出番は必ず来る。俺たちの直卒兵力の損耗はさける。それでいい」

ラインハルト・フォン・ミューゼルは深呼吸をすると親友に怜悯な悟性を宿した目を向け語った。

「ここで何が起ころうと俺の敗北ではない。ここで俺が敗北しているのは、俺が俺の主でない事だけだ。自分で状況を決定づけられる艦隊戦こそが俺の本懐だ、それが分かっただけでも良しとしよう。俺が今敗北しているのは姉上があそこにいる限りは、多かれ少なかれ続く敗北の延長であろう」

だが、ラインハルト准将の言葉は負け惜しみというよりも純軍事的に見れば正論であった。基地を破壊するのであれば軌道爆撃でよく、占領するにはこの星系はあまりに不向きである。本来の常備軍の艦隊であれば威力偵察を仕掛けた後はせいぜい軌道爆撃と陸戦隊と交渉をブレンドしたもので降伏を狙うか撃滅するかかの二択であっただ

ろう……会戦の最中であるからには艦隊戦に注意の大半が払われていた上で。

皇帝の友誼厚き半隠居があてがわれた予備役部隊に経費削減を売り込んでおこぼれを狙った辺境非主流派領主貴族達が交ぜ込まれた、グリーンメルスハウゼン艦隊であるがゆえに起きた陸戦。すなわち艦隊の消耗を嫌がり、練度が低く、それでも手柄を求めた“採算”を求め軍隊であった。

“縦深”の同盟弁務官や軍参謀部が想定した攻撃はイゼルローン要塞攻略の鍵となる4||2基地の占領と情報の奪取という野心的奇襲、彼らが行ったのは真逆の場当たりの攻撃だった。

ラインハルト・フォン・ミーゼルはこの全てが食い違った戦場を見届け「ここはいるべき場所ではない」と結論した。それは幾つかの面において正解であった。

敵の意図はどうであれ自由惑星同盟軍常備地上軍レギュラーズアーミーにとってはまぎれもなく大勝利である。

勝利した者たちは常に連帯のために勝利を誇り吠え立てる。共通の敵に対する勝利を。

「天帝よ照覧あれ！天道は大夏に在り！」

「アスターテ万歳！ティアマト万歳！！我らの帰還にまた一步！」

「革命万歳！！ヴァンフリート万歳！！くたばれドルフ！！」

「くたばれ貴族ども！」

「くたばれ帝国人！」

「くたばれ追い剥ぎども！くたばれ奴隷狩り共！！」

基地の中で喝采を上げる彼らは兵の一人にまで暖かなシチューと豪勢な焼き立てパンが用意されている。

セブレレッゼは司令官の席に崩れ落ちるように座り込んだ。

「構成邦の紳士諸君は何を騒いでいるんだ。勝鬨にも品格がある。彼

らは貴族という社会階級を恐れているのか？それとも生まれ落ちた土地の違いで憎悪を向けているのか？不健全な思考を生む」

「閣下は反戦派ですか？」

「私は自由党支持者のバーラト育ちだ……そういわれることも時にはあるが、自由党は根本はハイネセン主義、統制に反対しようと圧政にはなお反対する。何事も相対的なものだな」

「帝国軍……貴族どもが主ですが、連中は自領の為に奴隷狩りと私掠を、ダゴンの接触”以来絶えず今日まで続けて来ました。交戦領域の者達にとって帝国軍とは、自分らとは全く別種の、恐怖の象徴であり言葉の通じぬ怪物なのです」

「なるほど、ここは国の境なのだ。今更ながらそれを理解したよ。何にせよ、我々は自由惑星同盟の国民軍である限りは——」

セレブレツゼは天を仰ぐ。この混沌とした星系でいま数百万人単位の戦闘が起きている。いずれにせよ、それでもここは自由惑星同盟なのだ。

セレブレツゼはそこで疲労し切った頭を動かした。彼はこの基地の司令官であるからにはなさねばならないことがある。

「ああ君、参戦した構成邦旗と同盟軍旗のデータはあるかね。ああある？それはよかった。ならば——」

半日後、主力と共にこの宙域に到着したアレクサンドル・ビュコツク中將はヴァンフリート4112を見て声をあげて笑った。交戦領域諸邦の旗が自由惑星同盟旗を囲むように投影されていたのだ。

「これは困った、”堅物”セレブレツゼにあのような事をされたら何としても守り抜かねばならんな？」

——あそこは自由惑星同盟の国土なのだから。

シンクレシア・セレブレツゼ中將は前線基地司令官としての役割を戦闘ではなく戦後にこそ果たしたのであった。

【著名な戦闘】ヴァンフリート4Ⅱ2防衛戦（14）
アスターテ星域会戦への道く

794年 3月く4月19日 ヴァンフリート会戦

自由惑星同盟軍：戦術・作戦的勝利

グリーンメルスハウゼン艦隊の包囲により敵主力を挟撃に成功。

なお艦隊包囲網は200隻の小規模分艦隊のかく乱と帝国軍主力の
後退により失敗。

被害1500隻 死傷者16万5千人に対して戦果推定2500
隻死傷者28万6千人

会戦の名をとっているが実態は小惑星帯を利用した防衛隊形をと
り、双方とも決戦を挑むことはなかった。

自由惑星同盟首都星バーラトの中心、ハイネセンポリスの軍大学病
院でローゼンリッターの長は代替わりを迎えようとしていた。

「御加減いかがですか連隊長殿」

「貴様が連隊長だろう」

「発令は来週ですよ」

シエーンコップが見るかつての『俗物と堅物のハイブリッド、す
なわちクソツたれ』ヴァーンシャツフェ連隊長は左手と右足を失って
いた。リユーネブルクに敗れた代償だ。

「薔薇騎士連隊はリユーネブルクのもの。俺は管理をし、そのままお
前が受け継いだ、そう連隊では記憶されるのだろうか」

『リユーネブルクの連隊』を継承するのであれば、ですがどうでしょ
うかね。自分は連隊を担うにあたり、あなたが前任であった意味を、
今少し精緻に評価しようと思うのです」

「そうか、ああそうか。で、どんな評価だね」

「父が残した借金に追われて余裕のない長男と言ったところではし
うか。ええだからといって次男坊以下が恨み言をこねくり回すのも
致し方ないかと」

「手厳しいな」

笑い声が響いた。シェーンコップは気がつく。この男と一緒に笑ったのは、あの男が逃げ出す前であったか。

「次は、イゼルローンか」

「連隊長交代で再編と訓練の期間を勝ち取りました。そうなるでしょう」

随分死なせたからな、とヴァーンシャツフェは目を伏せる。シェーンコップは肯定も否定もしない。彼の戦術に対して異論を抱くことはあつた。だがどうであれこの先達は連隊指揮官として責務を果たしたのだ。自分とは異なつた視点と考えに基づいているが——それを理解しようと思つた時には初老の大佐は手足を失っていた。

「初舞台でイゼルローンは不安ですか」

いつもの反骨を少しだけ抑えて尋ねる。初老の大佐は頭を振つた。

「前線でお前に不安を抱いたことはない、だが独立部隊の長となることは意味が違う。だがな——」

後任が静かに姿勢を正すのを見てヴァーンシャツフェは言葉を継いだ。

「お前の気質には合わないだろうが私の持論として、嫌な上官相手に握手をしないことは、強さではなく、弱さを誤魔化しているだけだ。機知と反骨で飾ろうとな」

「.....」

「いやな思いをしても、何もかもを護れるものではないがね。万人に愛されることは誰にもできず。愛されるからといって死を命ずる悪夢から抜け出せるわけではない。暴力を管制する稼業とはそういうものだ。内輪にこもり、幻想で周囲を惑わすのはある意味この連隊の存在意義でもあろう。だからこそ、それゆえに抗う必要がある。そうでないと組織に纏わりつく幻想によって人が腐る。老兵の言葉だが、覚えておいてくれ」

シェーンコップは敬意を込めて老け込んだ上官に頷いた。

「お疲れ様でした。オットー・フランク・フォン・ヴァーンシャツフェ大佐。連隊長の任を引き継ぎます」

「ワルター・フォン・シエーンコップ大佐。君とローゼンリッターに武運と名誉があらんことを」

薔薇騎士連隊連隊長の引継ぎは円満に終了した。

後輩が立ち去った病室にノックが響く。

「どうぞ」

現れたのはどこか少女めいた金髪の女性であった。彼女の名をヴァーンシャツフェはよく知っていた。豊満な銀髪の女性軍人が側についている。

「やあフォン・ヴァーンシャツフェ准将閣下、お加減はいかがですか」

「クラカウ女公」ブリジット閣下……！」

畜生、バーラトのなんだかの公社で研究職員をやってるんじゃないのか、なんで俺の病室なんぞを訪ねるんだ。

「ああよしてくださいな、今日は非公式だし、公式な場で重傷の英雄相手に礼を強制するのはなおさら問題になります」

礼節の裏に含まれるものを嗅ぎ分けているのか否か、ブリジット女公は鷹揚に応じている。

ヴァーンシャツフェが知る限り自分はまだ大佐だ。そして軍の前線に立つことはもはやない。であれば――

「あなたは同盟軍に対する権限はないはずですが」

探るような口調にブリジットは薄く微笑した。

「私には何の権限もないよ。アルレスハイムの統領にして王冠の守護者、マリアンヌ姉上のメツセンジャーさ。より正確に言えばその“最も高潔なる枢密顧問官”達の助言と承認を経たお言葉だ」

「……！」

ヴァーンシャツフェは警戒するように『帝族』を見る。

「ヴァーンシャツフェ大佐にはアルレスハイム軍功二等勲章を贈呈される。それと同時に君をアルレスハイム軍に招聘したい。招聘後に

は、ヴァーンシヤツフエ「准将閣下」を歓迎し、全アルレスハイム労兵レーテからもアルレスハイム人民英雄の称号が贈呈されるそうだとうらやましいな、なあヤヨイクン」

ブリジット女公がクスリと笑い、護衛らしい女性将校に目を向けると年若い中尉は気まずそうに眼をそらした。

「…ええと、はい」

中尉が目を泳がせると女公は美しく微笑み…

「ひいん！」

中尉は尻を押さえて跳ねた。

「中尉、中尉、祝福の場で言葉を詰まらせてはいけないよ。君にはあとで礼法をしつかりと叩き込んであげよう」

さて、と女公は古びた大佐に向き直る。

「2年間は幕僚研究に勤しんでもらうよ。ああ君が同盟軍士官学校の“院”課程も修了していることは知っているがね」

要するに慣れるということなのだとわかった。だがそれでもこれだけは言わねばならない。このイゼルローン攻略作戦の準備段階ですら何人の地上軍将兵が

「なぜ私のですか」

「君がローゼンリッターとして忠誠に殉じたからだ。生き残って武勲を立てたのだ。楽に死ぬると思うな。祖国の齒車となるがいい。姉さんからの言葉をそのまま伝えよう。『貴方にも私にも国民の自由を守るには共同体たる国家の主権を守る義務があるの。憲政の範囲内でね、そして貴方は奇特にも献身的に振る舞ってしまったじゃない、簡単に逃げられると思わないことねー』だそうだ」

困ったことに君も私もそうした義務を持つ立場なのだよ、と帝冠の守護者を姉に持つ女は笑った。

794年 10月～12月10日 第6次イゼルローン攻略作戦

自由惑星同盟軍：戦術的辛勝、作戦的・戦略的失敗

初動でヴァンフリート星系より出動した第8艦隊を陽動に第7・第9艦隊の回廊突入により

初動で前衛艦隊9千隻の包囲に成功するも3000隻程の艦隊により開圉される

ホーランド少将の追撃により前衛艦隊に痛打を与えるも決め手に欠き、下院選の投票前日まで包囲を続け、撤退する。

被害2000隻 死傷者22万人、戦果3000隻、死傷者推定36万人

同年12月20日バーラト・アテナイ・ホテル

サジタリウス商工会議所、公共発注に関する意見交換会 懇親会

ジョアン・レベロは華美なホールを中央付近に好敵手にして同輩が若い女性と歓談している姿を認めた。

「やあジョアン」

ヨブ・トリユーニヒトはいつもの魅力的な笑みをレベロへと向けた。

「やあヨブ」

レベロも笑みを浮かべて国防委員長とにこやかに会話をしていた女性をみる。

「こちらのお嬢さんは？」

「エオウイン博士だ。パランティア産労研究所の元研究員で我ら国民共和党の尊敬すべき黨員だよ。今度の選挙で同盟弁務官の当選したばかりだ」

「ほほう、お若いのに大したものですね」

「はじめまして、レベロ財務委員長閣下。パランティア同盟弁務官の最新参ですがよろしくお願いします」

自由党党首としてではなく財務委員長とエオウインは呼びかけた。それにも意味がある。そういう場である。

「博士、貴方から見て今回のイゼルローン攻略作戦をどう見ます？」

レベロはにこやかさを崩さず、問いかける。

「ひとまず上手くいったといつてよいのではないのでしょうか？遠征能

力に傷をつけるのが最善でしたが損害を抑えて政権不信を抑えることもできました」

エオウインは、そうでしょう?というかのように笑顔で首を傾げた。レベロもトリユーニヒトも笑顔で頷き返す。双方ともに「最高評議会評議員」の立場であればそう返すしかない。

「一息つけたよ、基地を保持できたおかげで損害を避けられた。基地は露見したが防衛した甲斐があったのだろうか?」

「私も専門外だが制服組が言うには“足がかりが多数あれば敵も迷う”とのことだ」

トリユーニヒトとレベロが意見を同じくしている光景を周辺で歓談してた政財界の人間や記者達が面白そうに眺めている。

「なるほど、それでシトレが新進気鋭の後方幕僚を送り込んで成果を出したわけだ。パランティアではどう受け止められているかね?」

レベロは探るような眼でエオウインを見る。シドニー・シトレはレベロが率いる自由党の色が濃い。トリユーニヒトが人気を高め、エル・ファシルでは国民共和党トリユーニヒト派の首相が政権を主導している。であれば自由党の党首として交戦星域で制服組トップの受け止められ方が気になるのは当然である。

エオウインはにこりと微笑んだ。

「パランティアは常に交戦星域の平穏を願っております。それは国家的常識の範疇であり政治・経済・民生のすべての要素において普遍であります」

「あの要塞さえ落ちれば、略奪者という汚水を流し込む蛇口を閉められます。ですから我々は——」エオウインは微笑を浮かべ、グラスを掲げた。

「明るる年こそ勝利を、そう願うのです」

同盟最高位を占める議会政治家達は新人議員と共にグラスを掲げ、唱和しつつ視線をかわした。

——彼女は同盟政界を生き抜けるだろうな。

795年 2月2日〜14日 第3次ティアマト星域会戦

自由惑星同盟軍：戦術的敗北、作戦的・戦略的勝利

被害5900隻（約8割が第11艦隊に集中） 死傷者64万9千人、戦果4千隻、死傷者推定48万人

第一梯団に第5・第9・第11艦隊を動員。第二梯団に第4・6艦隊を動員。

総司令部、第二梯団の指揮のため後方に位置

ホーランド中將が否決された構想（浸透戦術）連携ミスにより浸透戦術を行ったホーランド中將が戦死

側面機動が行う第2梯団の到着により、撤退する。

795年8月28日～9月17日 第4次ティアマト星域会戦

自由惑星同盟軍：戦術的引き分け、戦略的勝利

被害6900隻 死傷者75万9千人、戦果 推定艦艇7000隻、84万人

第2・第10・第12艦隊を主力。第7艦隊を戦略予備として動員。前回の戦術的失態から同盟軍は土地勘のある構成邦宇宙軍を偵察部隊として動員。第2艦隊は惑星レグニツアにて帝国艦隊と遭遇戦になるもミサイルによる誘爆を相互に狙ったことで惑星嵐により戦場が混乱し先頭が本格化する前に互いに離脱。

会戦においてはグリーンヒル総参謀長下幕僚チームの提案で第7艦隊が帝国軍の後方連絡線を遮断すべく大迂回を行ったことで帝国軍が後退、ローエングラム伯の後衛戦闘により戦果拡張に至らず、同盟市民からは機動戦力撃滅の失敗を批判された。

796年2月4日～2月12日アスターテ星域会戦

同盟軍：戦術・戦略的大敗

被害1万5400隻（被害の8割が第4・第6艦隊に集中） 死傷者約200万人、戦果4千隻、死傷者推定36万人

自由惑星同盟軍、第一梯団に第2・第4・第6艦隊総計約4万隻を動員。同盟軍はこの数の利を活用した包囲殲滅を企図したが、第4艦隊は行軍隊形をとっていたところ、逆に数の利を生かした2方面攻撃により司令部を突かれ潰走。第6艦隊は側背を突かれ同じく艦隊旗艦狙いの突撃により潰走、第2艦隊の持久戦と駐留艦隊を糾合した総司令部が救援に駆けつけ、帝国軍艦隊は撤退した。

宇宙歴796年3月20日 同盟弁務官総会 安全保障委員会
第34委員会室

「あく、本日はアスターテにおける大規模戦闘、失礼、大規模戦闘の結果を踏まえた安全保障体制、および国防行政に関する調査を議題とし、質疑を行います。質疑のある方は順次御発言願います」

アイランズ委員長は唇を舐め、その男の名前を呼んだ。

「……アレクシン・リヴォフ君」

怒りに燃える老弁務官がのそり、と立ち上がった。

自由惑星同盟の最も長い3カ月

第17話 796年5月の最高評議会安全保障小委員会緊急会合

宇宙歴796年5月16日12:55(ハイネセン標準時間)オパールビル(最高議長官邸)

その日、議長官邸でもあるオパールビルは大騒動となっていた。

「最高評議会安全保障小委員会を招集しろ!」

「シドニー・シトレ元帥到着まであと2分!」

「関係評議員のシチュエーション・ルームへの受け入れ準備!」

「統合作戦本部の事態対処委員メンバーとの高機密ホットラインの確立を急げ!!」

最高評議会書記局職員たちが動き回る中、武骨ながら高級感が漂う車両が停まった。

「シドニー・シトレ本部長到着!!」

分厚い身体を軍服で覆った黒人の偉丈夫が車から降り立った。その胸板は常よりも厚く、制服についた略綬が誇らしげに煌めいてるように見えた。何しろイゼルローン要塞を陥落させたのだからそう見せたいだろうし、人々はそう見るのである。

・
・
・
パヴェル・カントロヴィチ議長補佐官(国家安全保障担当)が咳払いをする。

「最高評議会国家安全保障小委員会の緊急会合を行います。これはイゼルローン要塞攻略成功の速報を受けた者であり、イゼルローン要塞攻略後の国防方針、安全保障環境変化の波及について重要事項の整理と策定の方針について討議するものです」

「それではまず議長よりご挨拶を」

「えー、国家安全保障小委員会を開催したいと思います。この度は非

常に喜ばしい報告からはじめられること、各評議員の皆さまのご尽力によるものであります。それでは、お手元の議事次第に沿って進行してまいりたいと、思います。まず最初にイゼルローン要塞攻略後の状況について、軍令部門のシドニー・シトレ本部長より、説明をお願いいたします」

微笑を浮かべ、シドニー・シトレ元帥はゆったりとした身振りで大画面にデータを表示させた。

「それではご報告をさせていただきます。お手元の資料1をご覧ください」

評議員たちの端末に資料データが表示された。

「イゼルローン要塞の施設に大きな損害はありません、主要機能は保全されており、技術部の調査次第ですがシステム等の更新によりわが軍が使用可能となるまでおよそ2カ月程度との見込みです。調査終了後に正式に報告いたします」

しばらく、拠点としてのイゼルローン要塞の優秀性について説明が続く。そしてシトレはゆっくりとサンフォードから順番に最高評議員らを眺め、最後にトリユーニヒトを見ると余裕のある笑みを浮かべた。

「……長期的な軍事プランについては詳細な現有戦力評価につきましてでは本部長人事の確定の決定と新体制人事案可決後に立案を開始します」

「国防委員会より補足します。イゼルローン要塞内の工廠につきましては同じく2カ月程度で調整を行えば簡単に同盟軍の規格に適合可能と見られています」

「財政委員会より報告現在のプライマリーバランスは極めて深刻な状態です。特にイゼルローン要塞建設後から流通の一極化による税収減、軍事的な消耗の増大は……」

「……国防委員会より報告します。財政上の負担に対する対応が必要である点については疑いはありませんが、国防産業は国家需要に基づいており過度の縮小による技術の喪失の可能性が……」

「人的資源委員長よりいくつかご報告をさせていただきます。」

お手元の資料3をご覧ください。動員の問題は星間航行を担う技能労働者の欠如にあります。我らは星間国家であり、その定義を保証するのは星間流通です。然るにそれこそが自由惑星同盟の社会の基幹人材であるのと同時に同盟軍の最も激しい損害を被る兵科であります。バーラトの課題について参考となるのはアスターテです。彼らは必然的に宇宙軍への動員が数多くあります、それ故に彼らの少子高齢化の加速が進んでおります」

「人的資源委員会の勧告に対して補足します。駐留艦隊など特殊な環境に依存した経済となつている構成邦は少なくありません。またイゼルローン要塞に過剰に依存したロジスティクスへの変更のリスクを評価する必要があります。また、大半の戦死者は全て侵略への防戦によるものであり、イゼルローン要塞の確保だけでも、この問題の解決に寄与する点も強調させていただきます」

トリューニヒトが即座に対応する。

こうして参集された最高評議員の発言に対してトリューニヒトが反論を行うという光景が繰り広げられた。それほどの軍需が拡大しているということである。また一方で第2・4・6・11艦隊など傷ついた星間戦力の再建が必要なものも事実だ（もつとも2・4・6は13艦隊に実質統合再編されたのだが軍官僚は常に“長期的に回復するべきもの”を留保することに余念はないものだ）

国家安全保障小委員会の終了後、直近の対応について最高議長は軍令の長と軍政の長を呼び、執務室で会談を行った。

「君たちは一転、嫌われ者の立場になるわけだ」

とサンフォードは珍しく少しばかり皮肉を込めて二人を見る。

「喜ばばいいのか、迷っているのかね」

トリューニヒトはそれに肩をすくめて答える。

「軍の功績は功績です。然るべき予算措置についてはいずれの行政委員会も財務と戦わねばなりません。そしてこれからは上院と下院も

味方につけるには説得力のある政策が必要になります、だがそれは民主主義でありましょう」

「適切な戦力整備と軍の方針を示すことに全力を尽くします」

「いずれにせよ国防委員会がどこかの段階で主導する必要がある吗す」

トリユーニヒトとシトレは鋭く視線を交わす。

サンフォードは溜息を吐く。いずれにせよ外圧が緩めば内の綻びが顕著になるのは変わらない。

「ひとまずシトレ本部長の再選については功績をもって本人が望むのであれば、議長としても後押しをする。次の政権がどうであれ君は制服軍人の最高位であり続けるだろう」

「感謝いたします我らが議長」

人事案の提出時期などについて言葉を交わすとシトレは意気揚々と政治家たちを残し、2年間座る椅子のもとへ戻っていった。

「君もあと4年、国防委員長の座が欲しいのかな？ かけがえのないパートナーは2年は椅子を守るつもりらしいが」

老議長の声の中に潜む諧謔を読み取ったのか、トリユーニヒトは笑った。

「党員たちの望み次第ですな、それは」

「それは実に民主的でよろしいことだ」

国民共和党の党員は10億人近くいる——構成邦政の党員が兼務しているものが9割であるが。なるほど民主的といえらばそうなのかもしれない。

「ええその通りですな。それに加えて……」

「情報交通委員長の問題もある。カナマル君はもう無理だ」

ルンビーニ星域における事故は重要な宇宙港周辺に液体金属をぶちまける最悪の事故となってしまった。何が最悪化というかと死傷者もそうだが港湾が麻痺したことが一番まずい、特に安全管理の書類と実態の食い違いを本来確認するはずだった検査の省略に対し、委員長の介入があったことは既にサンフォードは把握している。

率直に言ってカナマル情報交通委員長の生命を失わせたのはル

ンビーニ”の同盟弁務官の一人がウォルター・アイランズであり国防委員長の座を数年後に目指すトリユーニヒトの側近として下院への転向をすでに決めていたことだ。

連立政党のみならずトリユーニヒトが重鎮であるNRP中央派のメンツを叩き潰す形で腐敗があらわになった以上、カナマルの政治生命は終わったも同然だ。

「人選は党内に任せますか？」

「どのみち大して長くはない。見栄えのいい若手を抜擢したほうが良いだろう。それについては全国委員会にも相談している」

サンフォードの議長の任期は半年程度、既に予備選挙が間もなく始まる。

「状況次第では半年で大きな仕事の基礎をやらされますね。自由党はともかく労農党は欲しがるかもしれません」

「レベロやホアンもそうだが、それ以上に上院の動向が気にかかる」

トリユーニヒトもわずかに緊張した顔でうなずいた。

「すべての選択肢が私の前にある。おそらくこの30年で私以外の誰がこれほど自由な選択肢を得たのだろうか。そしてその選択を楽しむ猶予は刻一刻と減っていく」

サンフォードはため息をついた。

「いずれにせよ、総裁閣下、とにもかくにもおめでとうございます」

トリユーニヒトは議長ではなく総裁とサンフォードを呼んだ。

年若い国防委員長が見るサンフォードの背中少し丸まっていた。

だがそれは嵐をしのぎ議長の座に（連立のための妥協の産物とはいえ）手をかけた姿だ。

「祝う前に選挙だよ、君。選挙、選挙だ。この四半世紀、誰も思いもよらなかつた選択肢を与えられた選挙だ。同盟はひどく揺らぎ、誰も彼もが揺れ動く舞台の上で踊り狂うだろう。だが今日は勝利を喜ぼうではないか……我々が躍るのはまだ先だ」

サンフォードは常の通り「何もしない」をするつもりのようなのだ。この連立が危うくなった時、この国家元首は常にそう振る舞ってきた。

「シトレ元帥閣下の踊りが達者であることを祈りましょう。今は制服軍人が躍る時間です」

トリューニヒトは声に出さずつぶやいた。

——どう転ぶか見ものだ。

第18話その名に誇りはあれど安らぎはなく

金帰火来ともなかなかいかないが、同盟弁務官も議員たるもの可能な限り母星……【地元】に戻らなくてはならず。また同様にハイネンセンポリスにて活動しなければならぬ。アスターテの政府用旅客船に再集合した弁務官達も同様に戻った後のハイネンセンポリス……同盟議会における活動について相談するはずであった。

ロムスキーとリッツ、二人の老医学者達は例によつて朝早くに茶を飲み交わし、いつもと違い緊張と希望、そして混乱が入り混じった顔で相談していた。

「イゼルローン要塞が陥落した……誤報ではないのか？」

ロムスキーが端末をいじるとニュースサイトが次々と表示される。

秘書の一人が首を横に振った。

「申し訳ございません、国防委員会への確認ができない状況です。向こうも回線が込み合っているようでした。チャットボットに回されてしまいます」

秘書のいら立ちに仕方ないさ、とロムスキーは手を振った。

「トリユーニヒトもつかまりませんからな。向こうも大変なことになっっているでしょう」

リッツはどうしたのですかなあ、と敢えてのんきそうに茶に口をつけた。

「それはそうだろうな。ホアン・ルイもそくさといなくなつた」

「ロムスキー先生の目をかいくぐつて？」

目とは何だね、とロムスキーは鼻を鳴らした。

「内務長官とミーティングがあるといつて内務省の車に乗って、そのまま宇宙港に消えたよ。どこぞで人的資源委員会の船に乗り換えたのだろうさ」

「エル・ファシルの内務長官とは距離を取っていると思いましたが」

「選挙前に不仲を清算するついでだろうね。まったくどちらも抜け目のないことだ」

「不仲といえばご子息とはいかがです？」

「フランチエシクかね？アレがまだ若手のころに院長を退いた私を恨むのもわかる……」

臨床の場に立つ息子を思う老政治家をリッツは微笑んで眺めていた。その時、扉が開き黒人の中年軍人が入室した。

「おはよう、ロムスキー代表」

「イロンシ、聞いたか？」

イロンシはいいや、と首を振る。

「事後の動向を見ると可能性は高いが、信じられないよ。エオウイン女史を待つべきだろうさ。パランティアの情報部門は統合作戦本部と提携している。HORNあたりから報告が入っているんじゃないか？」と医師と退役中將が言葉を交わしているとドアが乱暴に開いた。

「遂に！遂にかっ!!」

普段の豪傑かつ宿将然とした態度をかなぐり捨て吼えたのはリヴォフである。目に危険な光を宿し、体軀を震わせ、咆哮する。

諫めるはずのアリシアも同様だ。この二人はさもおりなん、と代表世話人であるサウリュス・ロムスキーは肩をすくめた。

「我々は為すべきことをせねばならない。第一なる約定、本土への帰還こそが私の！アスターテ連邦の夢だ!!」

「わかってる。我々としてそうだ」

そして興奮した二人の後ろから弁務官就任一年目にして会派事務局長となったエオウイン・イシリアンがいる。

「おはようございます。情報確認に手間取りました、申し訳ありません」

【交戦星域】の盟主、強国たる構成邦パランティア連合国を代表する3人の弁務官のうちの一人であり、現パランティア執政肝煎りの俊英である。

「エオウイン君、間違いないのだね？」

静かにロムスキー代表が問う。リヴォフはどさりと医師に座ると腕を組んで目をつむり、何かを考えこんでいる。

「間違いありません。イゼルローン要塞はヤン・ウエンリー少將の支

配下にあります。私の情報筋から確証を取りました」

いつもの内心をつかませぬ微笑は薄まり、彼女もまた張り詰めている。

「諸君、会派代表世話役として一言」

ロムスキーが面々を見回す。

「今、まさに我々は政治の分岐点に立っている。それも期せずして政権選択を行う選挙の直前だ。あと半年で同盟政府は次代の議長を迎えることになる」

「我々は迅速に、新たな指針を定め、予算を制定しなければならない。諸君、私たちは何者であろうか？ 私達は党派を超えた【交戦星域】市民達の代表者である。イゼルローン要塞が陥落し、もつとも大きな変化を迎えるのは私達が代表する人々である！」

「皆も自覚しているだろう。私たちは時に自由惑星同盟のマイノリティとなる。だからこそ、これからの数カ月間、【民主主義の縦深】は団結して新たな情勢に対応しなければならない。諸君、さあ——仕事を始めよう！」

「さてー！」

リッツ教授が手を叩き、「縦深」執行部の者たちは背筋を伸ばす。

「ハイネセンポリスで我々はまず何をやるかだな」

口火を切ったのはヴァンフリートの弁務官、イロンシだ。

「まずは軍部の動向だ。特にトリューニヒト国防委員長とシトレ統合作戦本部長、ロボス艦隊司令長官を押さえないとまずいぞ」

そしてイロンシは机をたたく。

「議長のところに行く前にシトレとロボスの首根っこをつかむ必要がある！」

それに反論するのはティアマト民国を代表するアリシアだ。

「軍部も重要だが最優先ではない、問題は連立を組む評議員たちだ！議長選の真つ最中だぞ。上院どころか下院の動きも読めなくなる！」

アリシア弁護士が頭を抱える

「情報を収集するしかないか。国政政党たちの議長予備選挙の候補たちが何を言い出すか……」

エオウインも声を荒げることはなくとも普段と異なる早口で持論を述べる。

「世論の動きも見張らなければなりません。サンフォード議長らが迅速に指針を示さねば、総選挙の結果が我々の望むものにはならないでしょう。同盟全体が痛んでいます。バーラト首都圏は悲鳴を上げています。中間星域はなおさらに、そして交戦星域に至っては重症です。そしてそれらを繋ぐ星間流通星間流通を担う技術者と技能労働者は宇宙軍で集中的に消耗している。同盟社会の第一の病巣はここです」

するとこれまで目を閉じて黙りこくっていたリヴオフがじろりとエオウインに視線を向けた。

「エオウイン君。何を言いたい」

「与党が主導権を失った場合、困窮している層の世論が割れるということです。反戦市民連合と人民防衛同盟が耳目を引いてしまうでしょう」

あの二つの政党は自由ですから、とエオウインは吐き捨てた。

リヴオフは再び目を閉じ、頷いた。目を開くと、本土を失った国を背負う老人がついに立ち上がった。

「アスターテのためであれば……うむ、決めた。法案を提出する。皆に協力していただきたい」

「リヴオフ老。与党に話を通してないと聞いていますが」

リッツは目を細めた。この時期に緊急に法案を作って出すと？エオウインの分析は正しい。そこで与党に先んじて状況をかき乱すだど？何を引き起こすのかわからないわけがないだろうに！

「4カ年計画……いや8カ年でもいい！軍を拘束できる規模の支出による包括的な内政計画を法制化させる。当然アスターテとティアマトの復興もそこに組み込む!!」

イロンシがギョツと目を見開いた。

「待て……ああいや待ってください、リヴオフ老！だがそれでは強硬派が反発します。バーラト首都圏の弁務官や軍部も敵に回りますよ!？」

ロムスキーはゆったりとした口調で旧友をなだめようとする

「すまんがな。アレークシン。イロンシの言う通りだ。あと数か月で全国統一予備選の投票、そして年末には弁務官の3分の1の改選に下院と議長の総選挙だ。『今』その規模で船を揺らしても船から落とされるのは我々だぞ」

エオウインの古風な丸眼鏡がきらめいた。

「それについてですが、私に案があります。レダ級の試験運用は既に中盤。トリグラフ・プランの試験運用艦となるトリグラフも来年には完成するはずです。そこを抱きこむことで軍部を味方につけることはできるはずです」

「……それで予算はどうなる?」

「予算は真水の量も重要ですがそれ以上に使い道です。会戦の損耗を大幅に削減できるのであれば、予算を民需に移しても機能はすると判断します。軍需から民需に予算枠を移せば国債の利率も低い物に借り換えができます」

「軍需産業も経済ということですよ。【復興法に軍の再建プランを入れて悪い道理はない】はまず、違いますか? 退役中将閣下?」

エオウインが微笑を浮かべるとリヴォフは呵呵と笑い始めた。

「悪女め! 実に素晴らしい、ああそれでいこう! 妥協の余地はいくらでも残すべきだ」

「宇宙軍の復興プランの大まかな例示はリヴォフ世話役を中心としたWGを立てましょう。造船と船乗りの伝手はアスターテが1番です……パランティアを除けば」

エオウインがにこりと笑って付け加えたひと言にリヴォフも諧謔を含めてもう一度笑った。

「悪女め!」

「冗談ですとも、さてさて産業・労働分野のプランニングはリッツ先生と私が」

リッツもうなずく。安全衛生管理についてはリッツは専門家だ。

「ティアマト・アスターテの帰還に関する法的な手続きの部門は私がWGリーダーを務めます」

「法案制定委員会の枠組みを作るのは良いが、どこの下院議員に声をかける」

議員立法は基本的に弁務官と代議士……上下院の連名で提出することになる。

そもそも法案の作成が大事業であり議員の華である、そして自由惑星同盟の上院議員は同盟弁務官であり（選挙により選出されるが）構成邦から3名ずつ選出される「Commissioner」である。つまりところ同盟国政政の“党员”ではあっても党議員ではないのだ。です。西暦2000年代で例えれば、国連大使を官吏ではなく選挙によって任命しているようなものだ。党派以上に構成邦政府に帰属する。

一方で下院は各選挙区に密着し、選挙によって選ばれた8000を超える代議員達である。彼らは400名程度の常任委員会とその下にある「小委員会」にて活動し、与野党問わず「党政策部会」にマスメディアの中継が入ることは極めて多い。（近年は党自らも配信し、解説を付けることもある）

故に議員立法に名を連ねる事は下院議員の個人名が広がる華の中の華であり、次の行政委員部の席への王手となる事もある。

「NRP（国民共和党）とLASP（労農連帯党）は必須だ」

「LP（自由党）にはどうします」

「戦時国債から利率の低い国債に借り換えをする点を強調すればいい。労働教育や流通の再建に回す分にはそのまま経済の回復、税収にもつながる」

「SAU（主権自治連合）は？」

「パチエノ代表幹事にあたるでしょう。賛同の筋で行くのならSAUを固めた方がいい。統制の緩和は彼らの悲願だ」

「NRP、特にトリユーニヒトの動きがわかりません。シトレ元帥の本部長続投が決定したとなると軍部の動きも読めません」

「シトレ本部長はLP閥——いや、だからか」

「軍内の主導権争いが予想されます。ドーソン次長（統合作戦本部事務総長兼務）がイゼルローン攻略作戦に協力したとはいえ、その後の

協力関係も不明です」

「いずれにせよ。カーティス副議長閣下に接触してからだな」

上院の黒幕の名が上があると皆が首肯する。

「カーティスが領けばサンフォードも無下にできんだろう」

「中道派を引き付けるプランニングにしなければなりませんね」

「上院を通すならどのみちそうなる。妥協は必要だよ」

「ルンビーニの追求と並行するとなると面倒だな。政府を叩きすぎるのもよろしくない」

「であればこの問題はどう始末をつけます？」

「ルンビーニの追及も大切だ、同盟政府の公共事業の安全管理の甘さを追求し、地方への人の移動を促進させよう。イゼルローンの陥落は良い契機だ。技術者と技能労働者の不足をアピールしよう」

弁務官たちが秘書にあれこれと指示を出し始める。既にハイネンセンポリスにつくまでのしばしの休息などは消えてなくなっていた。

「リッツ君、君には苦勞を掛けるな」

「なに、エオウィン女史がルンビーニの調査担当に名乗りを上げてくれた分、政府とのやり取りに集中できます。ですがサンフォード政権との距離感を誤れば大失態だ。ひどくやりがいのある仕事ですな」

「ああ何しろ【交戦星域】の名が外れるかもしれない。なあ君、【交戦星域】の名を私たちは常に利用してきた。対帝国の最前線に住まい、常に血を流した構成邦として我々は誇りを持ってきた。だが誇りはあっても、そこに安らぎはなかった。【交戦星域】と名乗らなくなる日が来たんだ」

——我々にとってこれ以上に重要なことなどない。

第19話最高評議員たちと茶を飲み交わす

宇宙歴796年5月17日12:45 (ハイネセン標準時間) ハイネセンポリス シュワルツ記念同盟弁務官会館255室

「君それは話が大きすぎるのではないかね？中期戦災復興計画に軍の整備計画だって？君達は政権の動きを縛るつもりかね？これから最高議長選なの？」

リヴォフとロムスキーは國務委員長を訪問するためシュワルツ記念同盟弁務官会館を訪れていた。ここは同盟議会議事堂と地下でつながっており、構成邦代弁者達の情報収集の場である。余談ではあるがシュワルツ同盟弁務官は構成邦自治権の守護者として知られており、「コルネリアス大親征」時の集権化改革に反対し、その半数を時限立法へと妥協を強いつつ、侵攻を受けた各構成邦の避難支援や亡命政府樹立へ奔走したことで知られている。

カーティスは自身に割り振られた執務室で悠然と紅茶を口に含んでいる。執務室といっても実際は間借りした事務所といった方が正確だ。議員用のオフィスにミーティングルーム、秘書と事務員の執務室が設けられちよつとした役所の部署のようになっている。(そもそも同盟弁務官は出身構成邦から出向した官僚が付くことが多く、実質的な構成邦の首都事務所のような役割も担うこともある)

「故にこそ、政権とその下院与党と連携をしたいと申し上げている」
老ロムスキーは笑みを浮かべたまま踏み込むがカーティスはひらりとかわす。

「我らが最高議長次第だな」

常の風見鶏の如き態度のままである。まさしく同盟弁務官のステレオタイプともいえる姿だが、國務委員長まで上り詰めた老人であることを忘れてはならない。

「あの方の支持基盤は賛成するのでは」

サンフォード最高議長はシロン星系出身だ。あの国は農業、特に商品作物の開発に強い伝統的な保守王国だ。トリューニヒトとも違う構成邦の権限を重視する保守的な連邦主義者だ。

「大きな話が外から持ち込まれた場合、大衆は明確な手土産がないと固まらないものだ。君たちは外様だよ」

我ら田舎モンってのはそういうものだろう？とカーティスはくすくす笑う。ここにはバート首都圏の出身者は一人もいない。

「あなたの話でもあるんじゃないかね？カーティス國務委員長閣下は中間星域のドンであらせられるからな」

リヴォフの追求に対し政権のナンバー2は笑みを浮かべたまま手を挙げる。

「さていかにも、いかにも、私も同盟上院議員・同盟弁務官だよ？同輩諸君」

アンタはその首席でしょうが、とりヴォフは唸る。國務委員長は最高評議会副議長であり、同盟弁務官総会議長……要するに上院議長を兼務する。

ロムスキーはリヴォフを無視して弁務官総会議長をじっと見つめる。

「では同盟弁務官同士らしく、取引といきましょう。何がお望みですか」

「駐留軍は削減ではなくあくまで人数の縮小、それと並列した宇宙港の再整備、へ変更していただこう」

「中間星域にもですか？」

「もちろんだ。言っておくが流通の活性化でリスクが増大するのはむしろ中間星域だよ、海賊の主流は帝国軍や貴族の私兵だが、【古き良き時代】はそれだけではなかった。そこはわかってほしい」

カーティスの言いたいことはわかる。暗に退役軍人の裏社会への流入を暗示しているのだ。だがしかし……

「理解はしますがいささか足踏みをし過ぎではありませんか」

減税や補助金で不景気は賄えるでしょう？とロムスキーが問いかけるがカーティスは首を横に振った。

「安心の提供が問題だよ。私が求めるのはリスクではなくリスクへの恐れへの対策だ。それに過剰な人口変動とて社会俯瞰に不況を引き起こすだろうか？」

「ふうむ……」

さてどうしたものか、とロムスキーが考えこもうとすると、リヴォフはにたりと笑った。

「ならそうだな、第2艦隊を復活させましようや」

「おいおい、私はそんなことは望んでいないがねえ？」とカーティスは冬至祭のプレゼント箱を前にした子供のような眼でリヴォフを見る。

「第2艦隊の位置づけをですね、予備役と新兵の訓練部隊として正規艦隊の即応予備扱いにしましょう。そして首都周辺に展開させ、訓練させる。常に人員の出入りが進み、予備役を確保できる。その代わりに第1艦隊の治安維持任務を拡大させる」

ほう？とカーティスは眉を動かした。一種の詐術だ。軍の定員を減らすがこれまでの駐留艦隊の一部を正規艦隊に合算させるということである。

「強硬派をなだめることもできる。それに将校のポストもある程度維持できましよう」

リヴォフの提案をカーティスは率直に肯定的な態度を示す。

「悪くはない。シトレに話を通しておこう。トリューニヒトとは君たち自身が話すべきだろうね」

「軍は傷ついている、落とすどころ探しながら俺が何とかするさ」

艦隊兵站の専門家、リヴォフ退役少将がにたりと笑った。

「よろしい、我らがチェアマンはまだ検討中だろう世論の潮目がどう動くかだろうな」

一瞬、会話が途切れた。ロムスキー代表は茶を口に含み、エル・ファシル共和国に残した息子たちのことを思い浮かべる。彼らは無論、歓迎するだろう。だがバーラトの者たちは？

互いが互いのことを理解しきれない、常識すら異なる。とりわけイゼルローン要塞が作られてからの四半世紀でそうなってしまった。

「主要政党の予備選挙はいかがです？」

最高議長の候補を同盟市民達を選ぶ下準備、国政政党たる下院の主要党内選挙戦だ。直接選挙の最高議長選挙と下院選挙は基本的な結果が連動する。

「大混乱だよ、どこも出馬の際の製作が根底からひっくり返った。どこも最終日まで届け出を出さないだろうさ」

まあそれはそうだ。何しろ最大の政治的問題はイゼルローン要塞による圧力だ。最大の侵攻拠点であり、帝国の国内問題を同盟に押し売りする同盟市民のほぼすべてが憎悪する最悪の政治業者の拠点である。否——”あつた”。

「そりや偉いことすな、であれば2カ月で決着をつけるか?」

「うん、大変だ。だから君も身の振り方を考えることだね。だから言ったのだ——これは話が大きすぎる。とりわけこの時期には」

じろりと鋭い目を向ける大政治家に対し、医師は宥めるように微笑みかけた。

「だが悪くはない、そうでしょう? 国务委員長閣下」

だが最高評議会副議長は微笑み返すだけだった。

「当たればな。当たるかどうかは様子見させてもらう」

「しかしまあ、話が大きすぎるのではないかね?」

カーティス国务委員長との面会から20分後のことである。フェリシア記念構成邦自治会館のバーラト・ホール応接室でジョン・レベロは眼前に座る「民主主義の縦深」トップ2名を見る。手渡されたクリアファイルには「戦災復興に向けた法案作成について」と書かれた数枚のポンチ絵が収まっている。

「わざわざ君達が私に会いにくるとなれば当然だが」

ちなみにフェリシア議員は労農連帯党結党に立ち会い党の拡大を支えたテルヌーゼン首相を8年間、同盟下院議員を6年3期務めた大物政治家である。

代表たるロムスキーは慇懃に一礼した。

「レベロ 党首”ご覧いただいた素案はいかがでしょうか」

「あくまで素案で詳細はこれから詰める。だが大目標と方向性は変わらないよ」

リヴオフは腕組みをしたままレベロに説明した。

「自由党が求めるものからは程遠いな」

「そうかもしれないませんが、であれば求めるものが通ると?」

ジョアン・レベロは すました顔で香り高い珈琲を口に運ぶ。

「党が立案したたたき台から妥協していく。それで議会を通るものを作るのさ」

リヴオフは不満を露わにレベロを睨む。

「それでは結果は変わらない。与党3党と組むのであれば。いいや、野党と組むのであれば連立が崩壊する!まさか選挙後にやるとでもいうのか?半年も我々を放置すると!」

レベロは微笑みを浮かべ、肩をすくめる。

「政治に必要なのは二つ、求められる過程で求められたものに近い結果を出すことだよ」

「で?結果は程遠いというが軍拡……いいや、即時再建を求められるよりはマシではないかね?我々の案が否決されるのであればトリューニヒト派の中でも強硬な連中が人民防衛運動と手を組んで案を出すに決まっている!」

「……」

レベロは天井を見上げ、机を指で叩く。

「戦時国債を低金利の国債に借り換えられる、流通が回復すれば景気も回復する。必要であれば譲歩は可能だろう」

自由党党首はゆっくりと視線を交戦星域の利益代表者達へ戻す。

「だがそれをやるのなら停戦をするべきだ、と唱えるものがあまりに多い。いいか?退役軍人の雇用問題などよほど急激な軍縮をしない限りは存在しないのだよ」

自由惑星社会経済にダメージを与えている最大の理由は特に戦死者の大半が星間流通を担う技能労働者・技術者だからだ。

軍縮はそれを吸収する。それはそうだろう、国が支援すればどうとでもなる。

「だからこそ、自由党の支持者が望むのは死者を減らし、景気を回復させ、自由な気風を取り戻すことだ」

「自由党は健全かつ自由な経済を重視しておられますからな」

リヴオフが言外に込めた皮肉にもレベロは揺るがなかつた。

「否定はしないがそれだけではないよ、戦時社会は異常な状態だ、それが長く続きすぎた」

「それはとてもよく存じています。財務委員長閣下のご指摘をいただくまでもなく」

リヴオフの圧を受け流し、レベロは人差し指を上に向ける。その眼に真剣な光が宿っていた。

「それでもいうさ、当然交戦星域の所為ではないさ。だがな、君達は強いや者が残って耐えている、だが弱い者たちは耐えられない。せめて少しは楽にしてくれ、そうした声をいけ好かないブルジョアリベラル政党が拾うこともある」

リヴオフは背もたれに身を預けながら追究を続ける。

「だからといって停戦？あの皇帝の気まぐれで国内で数億人が死ぬまでは許容する国が？あの国に外交交渉など存在すると思うか？」

コーヒーマーカーが完成を知らせる音を鳴らした。

レベロは笑みを浮かべて頭を振った。そして立ち上がると戸棚へ足を運ぶ。

「外交交渉は存在しないが実利に適った抑制ならありうる、今の皇帝は立法行為を一度も行っていない。官僚貴族はブルジョアジーに蝕まれている。そして地方では領邦貴族が台頭している。そしてなにより、後継者が定まっていない。皇帝は今いくつだね」

何か瓶を取り出すとそこから酒精の香りがツン、と漂う。だが縦深の2人は“高度に政治的な期待を込めて”それを無視した。

「恒久的な和平ではないと？」

レベロは手際よく、“不明な液体”を珈琲が入ったポットに垂らし、さらに生クリームを取り出すと3つのカップに猛烈な勢いで注ぎ込んだ。

「ああそうだ。情報部門に予算を回せばアプローチの手段も増えるだろう？」

リヴオフは天を仰いだ。甘いものは得意ではない。

「アンタ、平和を求めているのではなかったのか？」

レベロはウインナーコーヒーらしきものを手渡す。ケルトの魂を感じる人もいるかもしれないが。

「これも平和だよ、うまくやれば旧式兵器を穀物や貴金属、エネルギー資源に変えることだってできる」

リヴォフは半眼でレベロをジロリと睨む。

「イゼルローン要塞は維持するのだろうか？」

「言っただろう？必要であれば譲歩をする。帝国より先に上院の議席が優先だがね」

「財務委員長閣下、貴方はクソ野郎であらせられる」

「光栄だね、軍の将官までなった男にそういわれるのであれば」

レベロは涼しい顔で珈琲を実に美味しそうに飲んだ

「それにねえ、君達は一つ勘違いをしているよ」

「我々の支持者が望むのは死者を減らし、景気を回復させ、健全な財政の下で安定した経済を取り戻すことだ。それが続くのであればむしろ帝国なんぞ地獄の窯の中を駆けまわり、弱り続けることを望んでいるのだよ。連中が平和の中で微睡むなぞ恐怖でしかない」

レベロはいささか風味づけが強すぎたかな？と笑いながらコーヒーを飲みほした。

ロムスキーはいつの間にか止めていた息を吐き出す。ほんのりと酒精の香りがした。

「それで？自由党はこの法案をどう扱うつもりでしょうか」

「私はもう答えを言ったよ」

レベロはそう涼しい顔で返答した。

リヴォフは当惑したようにロムスキー代表を見る。ロムスキーは顎を撫でながら答えた。

「政治に必要なのは二つ、求められる過程で求められたものに近い結果を出すことだ」、ですか。つまり起案に自由党議員の名前を入れると？」

自由党党首にして最高評議会評議員たる財務委員長はニコリと笑った。

「参ったね、それでは無力な私はそれを止める手立てはない！ そうなったら党内で私は反対し、妥協し、支持を党に求めるべく宥めて回るしかないじゃないか」

車内でリヴォフは疲れ切った様子で背を伸ばす。

「レベロ、レベロ、アイツがあそこまで政治家だとはね！ 政局に疎いと評判だったし、実際にそう見えていたが」

——つまるところ“私は嫌な顔をして君らに妥協を強いてから賛成するからヨロシク！”とっているわけだ。あのリベラルは！

リヴォフは軍将校と構成邦政治家としてキャリアを歩んできた。レベロは首都圏から金融マンとしてサジタリウス腕全体の資金の流れを見てきた男である。良くも悪くも見てきたものが違い過ぎるということだろう。

「支持者の手前、惚けることもあるということもあるだろうさ。〃なんでも知悉してると振る舞う〃ことは身動きが取れなくなる。それに——」

「それに、なんだね」

リヴォフ以上にロムスキーは先ほどの言葉を深く考えているようであった。

「今回は体よく連中が苦手な交戦域対策を押し付けられたとも言えるよ。自由党の名を入れるという事は向こうにも相応に譲歩する必要がある」

リヴォフも思考を巡らせる。

「自由党を無下にはできん。与党3派が割れた場合はこちらにもダメージがある。組む相手を考えなければならぬ。カーティスもサンプォードもおそらく我々がどういった流れを作るのかを注視している」

「アレクシン、こうなると野党だが主権者自治連合(SAU)からの支持を何としても確保せねばならないと思う。パチエノ代表幹事と

の話し合いが今後を左右するだろうさ。マスメディアへの発表は彼らと与党が握手して起案者を確定させてからだ」

S A Uは旧国民共和党系や同盟政党に加盟してない構成邦政党らが連合して生まれた地方分権派政党だ。同盟政府の権限増大や増税などに対する主要政党への不満から第四極と呼ばれるまで支持を集めている。その性質上、上院の同盟弁務官達との関係性も深い。

「だな。S A Uはカーティスとも繋がりがあある。いや、我らが最高議長閣下をはじめとする国民共和党(N R P)の地方党人派もそうだ。与党の三党連立は予備選を控えて党内も連立も統制が弱まっているが逆に言えば野党とも手を組みやすい……」

その場合の議長選への影響については考えなかった。手足を縛る法案を出す以上は流れに身を任せるしかない。

「問題は両極翼だな。人民防衛運動は……」

“全ての権限を最高評議会へ!” “国家の総力を挙げて専制主義の打倒を!” “極右の寄り合い所帯だった人民防衛運動はこの25年で急速に支持を広めている。イゼルローン要塞がもたらした閉塞感の一側面だろう。

「絶対に出兵を求める。それで支持を伸ばせるからな。存続の危機だよ、彼らは」

イゼルローン要塞で固定化された不満と社会不安を糧にしてきた組織だ。報復主義は蜜のように甘い。夢想するだけなら、であるが。「退役軍人組を実利で切り崩す……いや宥める側に回ったとしても望外とするべきか」

ロムスキーは悲観的に首を振る。「あそここの結束力をなめんことだ、主義者の集まりだぞ。それで食ってる連中も含めてな」

エル・ファシル議会の同盟懷疑派を思い出しているのだろうか、とリヴオフは思いいたる。アレはアーサー・リンチの置き土産ともいえる同盟への不信感が両翼で爆発したものだ。

「反戦市民連合も無理だろう? あそこは都市貧困層とデマゴーグが基盤だ。辺境への出費など認めんたらうさ」

あそこはあそこで第一の被害者は首都圏を中心とした都市部貧困者だと定義している。交戦星域の復興はゼネコンやらの利益だと吹聴して妨害に回るだろう。そして同盟全土一律の福祉強化を求める。自分たちのライフスタイルのみを考えた内容のものであるが。

「同感だね。労農と共同で推薦を出している無所属は動くかもしれない。ならば対話せず、ともいくまい」

「どちらの党とも最低限の話はしないとならん。クソツ！よりよつて総選挙前になんてことをしてくれただ！」

与える影響が異常に大きい、そしてソロバンを弾く時間が誰にもない。誰もが大胆な行動を強要されている！

「軍港部でも破壊するか駐留艦隊に痛打を与えるつもりだったのだろうがねえ」

この作戦は統合作戦本部主導の作戦であった。本来は要港部の破壊工作と駐留艦隊撃滅を企図したともわいているが謎に包まれている。ただ一つ言えることはヤン・ウエンリーは最初から要塞司令部占領も本命でなくとも視野に入れていたということだ。

「……やるべきことは沢山ある。法案の立案者、特に下院の党派の選択、軍部の支持の取り付け……これをやらないとトリユーニヒトが激怒する。労農党も退役軍人や兵士に支持層がいる。俺もその代弁者の一人だ。シトレの考えも聞かねばならん。全く面倒ばかりだ」

——そして両翼はこれを餌に中道派を批判し、選挙で票を集めるのだらう。畜生、次の政権のかじ取り次第ではえらいことになるに決まっている。

リヴォフはひどく疲れを感じ、座席に身を沈めた。老医師は旧友の肩を優しく叩く。

「その通り、これはひどく大きな仕事だ、だがやる価値はある……交戦星域の悲願のために」

ことここに至り彼らは進むしかなかった。

第20話 将校たちは踊り始める

統合作戦本部、それは軍令の最高機関であり、いま最も議員達が危惧と期待を持って眺めている官僚機構だ。

官僚、そう、官僚である。自由惑星同盟にとり、最も巨大かつ影響力を持つ官僚集団とは将校であり、軍隊だ。

「つまり我々のやろうとしていることは軍への利益還元も含まれているということですよ」

アロシア同盟弁務官はそれを最もよく知悉している一人だ。彼女は女性問題・労働問題を専門とする弁護士であり、女性の軍属・兵・下士官・将校らと交流し、軍の法務担当らと幾度も時に連携し時に戦ってきた。

「軍の再建には設備および、装備の更新、将校のキャリア形成の多様化に向けた教育の充実と過剰な成果主義からの脱却、やらねばならないことはいくらでもあります」

「それで、御二方はどうしたお考えなのですか」

統合作戦本部長の高級副官を務めるキャゼルヌ少将はどこか小馬鹿にしたような眼つきでアロシア弁務官に慇懃に話を促した。

「もちろん艦隊の更新を行います。また軍需の安定的な発注は産業いく維持のために必要です……一方で特に星間流通などインフラを担う人的資源の枯渇につきましては」

イロンシが即座に端末を操作すると今度は軍の編制表が展開される。

「第2艦隊を即応予備集団として予備役と新兵訓練専用艦隊とし首都圏外縁部へ配置し、訓練と治安維持の補佐を任務とします。第4・第6艦隊の再建は次の4カ年計画に回しつつ兵士の教育と民間部門への供給のため、徴兵制度を維持しつつ半年ほど希望者への再就職のあっせんを行います」

「特に重要なのが人材育成です。我々にとって最も重要なのは星間交通を支える技術者と技能労働者が大量に戦死したこと。であるからには優秀な教育者が必要です。星間流通支援組織の機能強化を行い

ます。これまでの各種支援組織へ公的資本を注入し、機能を強化します」

「上に同盟政府・構成邦関係組織を中心に運営評議会を設置し、総合的な支援制度を構築させるのです。こちらにも教育機関には退役将校・下士官の斡旋も当然……」

若手幕僚は反発心を隠しきれぬ視線を向ける。年嵩の将官は重々しく口を開いた。

「なるほど、であれば幾つか質問をしたいのですが」

アリシアはほう、と息を吐いた。政治家にとり要求が来ないこと程恐ろしいことはない。

「ええもちろんです。なんでもお尋ねください」

汝、求めよ。さらば妥協せん、彼女は政治の手管というものを知悉していた。……しかしながら【縦深】の活動はよろしくなかった。実によくなかった。

その日、アリシアとイロンシがレクを終えた数時間後のことである。同盟軍の官僚機構が一時的に分裂し、争いを始めた。その理由は一重に統合作戦本部長シドニー・シトレ元帥が【縦深】の提出法案に刺激を受けたからである。

「再任が決まったのであれば上院に主導権を握られるのはよろしくありません。急ぎ足元を固めるべきだ」

そう囁いたのはシトレの内心に軍事的ロマンシチズムと政治的野心が複雑な化学反応を示したのか。あるいは側近の軍官僚が唆したのか——あるいはその両方か。

いずれにせよまずかったのは最終的に残っていた複数の案から一番過激な物を選択し、最高議長宛てに送付したことだ。

シドニー・シトレ本部長の次の任期における高級軍人事案の主要なものは以下の通りである。

▼同盟軍国防会議議長（名誉職）L・ロボス元帥

▼統合作戦本部長 S・シトレ元帥

▼統合作戦本部次長兼事務総長 D・グリーンヒル大将

▼宇宙艦隊司令長官 A・ビュコック中将（大将へ推薦）

- ▼統合作戦本部次長兼宇宙艦隊総参謀長 L・クブルスリー中將
- ▼統合作戦本部次長兼地上軍幕僚総監 中將級を強く要請
- ▼統合作戦本部事務次長兼管理本部長 A・キャゼルヌ中將
- ……………(以下省略)……………

ロボス元帥を同盟軍国防会議議長と「最高議長の求めに応じて、国防委員会・統合作戦本部の所掌事務において重要事項を調整するに当たり開催される」と名目上は国防委員長と統合作戦本部長の間を受け持つ名誉職においやり、グリーンヒル大將を統合作戦本部次長と本内局を統括する事務総長に横滑りさせつつ自身の腹心を事務次長兼管理本部に推薦し内局の実権は自身の閥とする……。實質的に艦隊総司令部の現体制を一掃し退役が近いビュコックを「ビュコック総司令官・クブルスリー総参謀長」体制を推薦する人事案である。

これにはロボス元帥ら艦隊派だけでなく地上軍も激怒した。統合作戦本部次長は地上軍・宇宙軍・そして統合作戦本部事務総長の三役が兼任するもの、そこに事務総長にグリーンヒル大將(前艦隊総参謀長)が据えられ『地上軍幕僚総監は中将が望ましい』と【要請】されたのだ、当然である。ドーソン大將は統合情報部や憲兵隊司令官など地上軍と宇宙軍の双方に携わる軍歴を歩んできたのだからなおさらである。

ちなみにドーソン大將は国防委員会監察本部へ推薦されている。いずれにせよ、宇宙軍——内のシトレ閥で軍令系統、宇宙軍の枢要を確保しようとしたことは間違いなかった。

796年6月中旬 居酒屋「ダンシング・オブ・フラワー」バーラト宇宙港店

生ビールジョッキと枝豆を片手に下士官二人が話し込んでいた。

「聞いたか？」

2人は第1艦隊の分艦隊司令部付の下士官であった。片や主計科であり片や戦艦の航法科のものであった。

「ああビュコックの爺さんに昇進と宇宙艦隊司令長官ポストの打診だつて？」

「それにウチのボスが総参謀長らしいぜ？」

「あの人は穏健な保守本流だろう？どのみち順当だからいいが……」

それでも不穏なものを感じ取っているのだろう、二人は黙ってビールを飲み、枝豆を貪り、サシミの盛り合わせを注文した。

「ビュコック爺さんが宇宙艦隊司令長官だつて？あの人は言っちゃなんだがもう年だろ？2年持つのかよ」

「つてことは次期司令長官にボスか？」

まあ妥当ではあるが、と航法屋が呟いた。

「いいや、それがイゼルローン要塞に2個艦隊を中心にした方面軍司令部を設置するそうだ」

「艦隊司令官より上か……中将が任じられても実質的には大将に準じた扱いになるのか？」

「副司令長官の噂はまだ聞いてねえ。空席のままならボスとそっちの司令官を競わせるつもりだろう」

「はっ！そしてそれを採点するのは校長先生か！」

彼らが思い浮かべるのはウランフ提督やボロディン提督ではなかった。その男は若く、総司令部参謀時代から兵や下士官からの評判は決してよくなかった。

彼らは無意識にであるが、戦火が遠のいたことへの期待の副産物、緊張の途切れを享受していた。彼らが悪いのではない。29年もの間、延々と続いた「本土決戦」がなくなったことにはそれほどの意味がある。

そして【縦深】は彼らの復興（そして一部構成邦の帰還）のために包括的な法案の提出という観測気球があげられた。

「ロボスの親父はカンカンらしいぜ。なんでも総司令部の幕僚たちの議員周りだけじゃねえ。あっちこっちの艦隊司令部や駐留艦隊の幕僚が構成邦の党幹部やら地方財界の有力者やらに【ご説明】に伺っていらっしやるようだ」

さらに何が悪かったかと言えば、選挙だけでなく統合作戦本部長の任期が訪れたことだ。軍内では将校のみならず一部下士官兵たちに

も767年以来……【29年ぶり】に選挙の 이슈ーが自分たちの戦果ではなく、その後になるという自体を理解する政治意識を持つていた。だがその光景を明瞭にするだけの【経験】を持つものはあまりに少なかった——当然である、当時を知るのは最年長のビュコック中将は兵隊上がりであり、ほかは30代に入ったばかりか20代、730年代マフィアの若すぎる台頭が招いた停滞もあり【上が詰まっていた】のである……軍中枢にいた者は一握り未満であり、そうした人間はそそくさと構成邦中枢や政界へ繰り出してしまふものだ。

「おつかないな、俺たちみたいない現場屋にや雲の上の話だけどなあ」
軍の政争は気のゆるみと先行き不透明感で拡大が始まり、意図せずして政府の両手を縛ろうとする同盟弁務官達の活動はその燃料となりつつあった。

「どうする？軍を続けるか？オリオン腕に殴りこむか海賊を追いまわすかの二択だぜ？その上、給料が下がるかもしれないねえ」

「どうすつかなあ、俺たちで組んで運送会社でも起業しないか？」

経理屋の曹長は頬をかきながら言った。彼らは第一艦隊分艦隊司令部付であった。即ち最前線からは遠く、流通経済を肌身で感じ、政治の臭いには鼻が利く者達である。そして下士官とは将校たちの無茶に【上に政策あれば下に対策あり】という慣習を受け継いでいる。宇宙軍第一艦隊の下士官ともなれば【船を揺さぶる者たち】に敏感であった。

「そうか、ならさ」

「交戦星域……だったところへ行くか？ビジネスチャンスだろうぜ？」

「そうさな。前はあそこが交戦星域だったが」

そして彼らは酒と肴を追加で注文し、いくらかの相談を経てジョッキを同時に持ち上げる。

「新たな船出に乾杯」

第21話元帥閣下たちの政争指導

宇宙暦796年6月上旬

統合作戦本部で行われた会議でだされた【シトレ人事案】は激しい動揺を呼んだ。既に地上軍、艦隊総司令部では「新人事案」を議会に出す前に闇に葬るべく、公然とした勉強会から密談・立ち話・そして無数のメモが飛び交っている。

そこから距離をとっているのはヨブ・トリューニヒト国防委員長の一派だけである。

「よろしいのですか？ 国防委員長閣下」

ドーソン次長、統合作戦本部の事務方の自他ともに認めるトップはヨブ・トリューニヒト国防委員長に呼び出されて心配そうに10も年下の政治家を観察していた。

それにしても、彼が憲兵時代から関係を深めていた情報部の活動が第7次イゼルローン攻略戦の魔術を下支えたのであるが、それを自覚しているのだろうか？と彼の周囲の人間は内心首をかしげている。それほどに気が小さかった。

「よろしいともドーソン次長。君は職務に励んでくれればいい。率直に言う」と

トリューニヒトはトントンとデスクの天板を叩く。

「ここで決定的に軍が割れるのは困るのだよ、軍の首脳部というコツプの中で荒れ狂う分には構わないがね。だから私は当面は国防委員事務局と信頼のおける軍人たちに静謐を望む」

職務を円滑に回すことが第一だよ、と付け加える姿もどこか洒脱さを醸し出していた。

「袖口が濡れることもありませんよう」

ドーソンは忠誠心から警告を発する。

「構わないとも、今は最高議長閣下と同盟市民諸君に敬虔なドブ攫いの姿をお見せする時期だからね」

トリューニヒトは。気は進まないがそれも政治業で利益を得るためには必要だからね、と苦笑を浮かべた。

自由惑星同盟の政治に明確な支配者はおらず、累卵の連立によってかろうじてサンフォード政権は成り立っている。

帝国に抵抗するために力強く行政権を行使するはずのオパールビルの内部では、無数の利益団体を代表する派閥によって議論が行われている。

ヨブ・トリューニヒトは浮動票が基盤ではあるが、同盟地上軍や構成邦軍、そして軍官僚を支持基盤につけている。シトレがロボスに勝ちそうになればすかさず仲裁に入る必要がある。

「それにしても、あのシトレがよくあそこまで騒ぎを引き起こしたものだ」

本来であればこれほど騒ぎになることはないはずである。なにしろ総選挙前に駆け込みで行われる軍高級幹部の人事とはいえ、シドニー・シトレが軍令の長を継続することに異議を唱える人間はごく少数だ。なにしろ30年近く自由惑星同盟全体を重病人としてきた略奪と殺戮の“難攻不落の蛇口”であるイゼルローン要塞を奪還し“難攻不落のダム”を構築する機会を創ったのである。新たな最高議長とよほど折り合いが悪くなければ変更となることはない。

だがシドニー・シトレの提示した案は同盟地上軍の最高位を実質的に中将に抑え込むことで地上軍を中心とした軍縮を示唆したのである。

さらに穿てば構成邦軍は地上軍が主流である（例外は植民船団国家のアスターテ連邦と交戦星域の盟主を自認するパランティア連合国だけである）構成邦軍へも軍縮の圧力が高まると予想する者も少なくない。シトレ元帥の後ろ盾は自由党であればなおさらである。

「彼の周りは、所詮は学生運動かぶれでしかない。あくまで“社会的エリート”の作法”の範囲で反権威主義を振り回すだけ、良くも悪くも若干ひねるが中道の範囲内になると思っていたが、君はどう思う？ ドーソン次長」

軍政のトップに振られたドーソンはものすごく嫌な顔をした。そりゃそうだ。

「そうですね……才能のある学者が変人となるのではなく、変人だ

から才能があると思いきんだような、痛々しい秀才が交じるぐらいだと思つていましたが」

憎悪を向ける姿は鏡のごとし
「嫌悪も関心の一種なんだねえ」

特定自称革命家の将校を思い出したのか、心なしか早口で罵倒する最高軍令機関次席を眺めながらトリューニヒトは頬を流れる汗を拭いた。

「……ゴホン、次席副官に抱えているのが組織工学で修士号だったかをとった英才がいるはずです」

「政治ブレーンの人選か、彼が政界に臨むつもりであればその器量が確かめられるのだろうか」

トリューニヒトはドーソンに退出してよろしい、と合図をするとぼんやりと天井を眺めた。

——いずれにせよ、悲壮にドブをかぶって見せねばならない。

委員長室でのやり取りとほぼ同時刻の頃である。

シドニー・シトレ元帥は軍きつてのリベラル派で個人主義・共同体主義双方のハイネセン主義者の中でも常に卓抜した戦術家として名声を博した軍人であった。彼が元帥杖を手にしたのは当然の成り行きだ。それだけではなく、反戦派の穏健層を引き込み、中道派に引き付けることができる唯一の将校だとみられているのならば、尚更に。

一方で主流派軍人や中道派議員たちから勝ち取ったカリスマは宇宙艦隊司令長官時代の功績によるものであり、本部長としての失態、ロボス元帥との対立から衰えつつあるとみられている。

ラザール・ロボス元帥は宇宙艦隊司令長官としてよりも艦隊司令官、副司令長官時代を高く評価されている。特にアルレスハイム会戦における戦闘指揮はいくつかの幸運（帝国軍迂回部隊が哨戒網への伏撃に失敗したなど）もあるが大勝利を収めている。亡命者の血筋を引いていることは、時にハンデともなるが政治カラーを明瞭にする。ラザール・ロボスは、それを活用してきたのは間違いない。だが、第3

次テイアマト会戦とアスターテ会戦における失態で指導力に疑問を呈されている。さらに軍内でも情報部がシトレ元帥と組んで大戦果を挙げたことで窮地に立たされっているとみられている。

「つまり私は圧倒的な優位にあるわけだ、ヤン生徒のお陰でね」

シトレ元帥は重々しく椅子の背もたれを軋ませる。

次席高級副官は機敏に本部長の思いを汲んで見せた。

「その通りです。多少の反発は理解を得ることができます。地上軍はモノの数には入りません」

「縁故主義と軍国主義がはびこる同盟を救わねばならない。イゼルローン要塞の奪還、30年目を迎える前に本部長直轄の作戦で成功した。今こそ、この時しかない。不要な地上軍を削減し、トリューニヒトの政治屋軍人共やラザールを担ぐ過激派を商船企業に叩き込んでやる！」

「せいぜい情報交通委員会が苦勞するといい、とシトレはほくそ笑んだ。

「ええ、議会の保守派と人気取りしか頭がない連中の党派主義をねじ伏せ、国軍の統制を護る時です」

そして第7次イゼルローン攻略作戦を除けば最良の要塞攻略作戦の指導者として名を馳せるシトレ元帥は、往年の如く大規模な攻勢計画を、銃後においても作戦指導を開始した。

「まず自由党と労農連帯党を固めるとしよう。後は議長を領かせればよろしい。問題は同盟弁務官だ。上院は厄介ではないかね」

政治部門の参謀をつとめるアレックス・キャゼル又次席副官は頭を振って見せた。

「だからこそ、です。下院を固めれば選挙区が重複する国政政党を通して話ができます。下地はいずれにせよ下院の国政政党である以上、そこで党派を固めれば弁務官に話をする下地ができます」

「政治においては常に悲観的に行動するべきですが今は慎重なればこそ大胆に進めましょう」

信頼のおける幕僚の言葉にうなずき、シトレは通信端末を手にとった。

——やあジョアン、君のところの幹事長に連絡を取りたいのだけれどね。

その数日後、ガラティエ共和国にて政権与党の党幹部と議会の防衛委員会委員、そしてガラティエ軍統合参謀本部の幹部が集まっている中、ガラティエ駐留艦隊幕僚長のビューフォート大佐は内心、胃をさすりながらにこやかに対応をしている。

この場の最上級者ユリウス・マリネツティ国防大臣は面白そうに30半ばの年若い大佐を眺めている。彼もまた似たような軍歴を経て准将まで登ってから政界に転身したやり手である。

「つまり今回の君のレクチャーの要点は、シトレ元帥の案は軍の総意ではないということかね？」

「はい、その通りです。軍の方針の変革・および改革は自由惑星同盟の存続にとつては必要であることに疑いはありませんが、地上軍の軍縮や構成邦軍の『自律的な財源の確保』、そしてなにより駐留艦隊の『段階的な縮小による宇宙港の民生転換化』は過剰であると我々は考えております」

じろり、とセルカン・ヴァロル参謀総長がにらみつける。彼はガラティエ軍人の主流派中の主流、『歩兵畑』の男である。

「我々とは？」

シトレ元帥のぶち上げた人事案に最も激怒した一人はこの男であらう。

「……ガラティエ駐留艦隊司令部の独自研究と提言です」

情報参謀と兵站参謀が夜なべしてさらに近隣の駐留艦隊の幕僚陣（副官すらも動員された）たちとすり合わせを行い……とにもかくにもひどい目にあわされたものだ。コイツは経済学の復習じゃないか、バーラトのオフィスに戻って退役前の箔付けにしてくれないと割に合わん、とぼやく者もいたほどだ。

「君」

ヴァロル参謀総長が顔をしかめる一方でマリネツテイ国防大臣は顎を引き、視線を鋭くする。

「独自と申し上げていますが、艦隊総司令部より、周辺構成邦の状況を調査したうえで研究を行うように要請を受けたものです。あくまで要請ですが、同盟の各方面における各駐留艦隊に対し発出させられております」

軍政と軍令のトップの双方がわずかに好意を見せた。よろしい、
“表向き”の意味を理解し、姿勢を示した。であれば本命だ。

「なるほど、それで君達の考えは？」

ビューフオートは息を吸って、吐く。畜生、総司令部からエリートがくればいいものを。いやいや、俺達も外から見ればエリーートの範囲か。そうであつても“この分野”ではなからうに――

笑みを張り付けたまま、ビューフオートは自身の人生を護るために口を開いた。

――それでは簡単にですがご説明を。

第22話ロボス元帥は機動を試みる

自由惑星同盟の最高軍令機関は政治的内紛があつても業務を止めてはならない。彼らの上位者は議員達であり、遺憾な事ながらこの内紛はシトレ派・ロボス派・そして地上軍（地上軍と後方勤務員を基盤とするトリューニヒト派は静観に徹している）と軍というコップの中で起きているものである以上、血を流さぬように終わらせねばならない。

故にD・グリーンヒル艦隊総司令部総参謀長は、彼と対話をせねばならなかった。

「ギュルセル地上軍総監殿」

声をかけられた疲れた温和そうな顔つきの初老の男性が振り返る。彼の職責の正式名称は地上軍幕僚総監、地上軍統括管理や防衛計画の策定が任務である。

地上軍といっても陸海空軍を総括する（とはいえ海軍の影は薄く、空軍は宇宙軍の単座戦闘艇のように航続距離が非常に長い物が多く、地上軍航空隊兼防空軍といった方が正しいだろう）もので要するに惑星内の軍とつてもいい。

「これはこれは、グリーンヒル総参謀長殿、どうも最近は互いに部内の騒々しさに振り回されておりますな」

どちらも統合作戦本部の次長を兼任している。本来的には2人は同格である——実態は異なれども。実際のところ、自由惑星同盟の首席は統合作戦本部長であることは疑いの余地はない。だがナンバー2は宇宙艦隊司令長官であり、ナンバー3・4は艦隊総参謀長と統合作戦本部事務総長が争い、地上軍を束ねる幕僚総監はナンバー5から動くことはない。

ならば無力、弱体かというところ当然そのようなわけもない。地上軍は、侵攻時には星系拠点の防衛や要所となる施設と住民を保護する。そのため駐留も居住区である。宇宙軍が宇宙軍は宇宙港から宇宙港へ星系間を行き来する「同盟軍の顔」なら、地上軍は「同盟軍の舌」である。

特に構成邦軍への影響力が高く、国防委員会防衛部は珍しく地上軍の将校が宇宙軍を上回る数が配置されている。(輸送艦を除く星系間機動戦力を持つ構成邦軍はそれこそ交戦星域の最有力構成邦のパランティア連合国などごく少数にとどまる)。

「地上軍総監部の御懸念は承知しております」

グリーンヒルの丁重な言葉を受け、ギユルセルの顔に苦いものが走った。

「軍の成り立ちからして地上軍はいつだって日陰者だよ、君。憲兵隊が一番の花型だよ」(始まりは数千隻程度とはいえ)宇宙軍こそが同盟軍であり、産声を上げたばかりの同盟政府にとって唯一の法執行力だった。実際は海賊や企業傭兵の討伐と構成邦間の紛争や植民競争の調停のための抜かずの宝刀であり対外戦争はダゴン星域会戦まではなかたとしても、だ。

「宇宙軍の兵站は地上軍の活躍があればこそです。構成邦にとってはより地上軍の貢献は見知っているでしょう」

ギユルセルは苦笑いを浮かべるだけだった。グリーンヒルが気を使っているのも本心から褒め称えていることも分かる。

だが地上軍からすると苦いものが混じった脱力感がある。いやまあ、頭ではわかっている。宇宙軍が無ければ星間移動はない。同盟地上軍はイゼルローン要塞攻略の拠点確保や要塞への資源供給網への攻撃が主であった。

攻略や防衛に投ずる星間機動戦力の兵站を守る事こそがこの30年近く固定化した戦略状況における、地上軍の主たる役割であった。

それでも合意を形成する必要がある。いずれにせよ船がなければ地上軍が同盟全土に展開することすらできない。宇宙軍こそが同盟軍を同盟軍たらしめるのは現実である。ギユルセルは溜息をついた。

「いいですか、地上軍」も「軍縮は不可避であることは理解しています。ですが物事には程度というものがある。軍内の発言権を恣意的に変更し、人事権を猟官化するために軍制改革を急進化させるのは問題でしょう。ニーズがあるのは星間流通を担う人材であるだろうに」
「ご指摘の通りです。故に此度の案は宇宙軍の総意ではないと御理解

「いただきます」

ギユルセルは微笑んでグリーンヒルに握手を返す。

「総参謀長、我々はともに軍人です。であるからには共通する点も多い」

グリーンヒルは内心ほつと一息ついた。だがギユルセルは地上軍総監であり軍官僚であり政治プレイヤーとして相応しいと地上軍から選ばれた男である。

「——例えば信頼について、です。我々は常に厳しい実践を積み重ね、それでもなお共に戦うモノを常に好むものです。違いますか？」

グリーンヒルは一瞬、硬直した後、腕を振った。

——ええもちろんです、ギユルセル総監

亡命者系同盟市民の総本山、アルレスハイム王冠共和国が首都ヴァルシャワの迎賓館の一室。そこにラザール・ロボス元帥は腰を沈めていた。艦隊司令長官、軍のナンバー2である彼が交戦域に帝国軍と争うためでなく訪問するのは実に数年ぶりである。

彼がここにいるのは、オリオン腕亡命市民政互助協会によるイゼルローン要塞陥落を祝う祝賀会に参加するためだ。帝冠の守護者：：アルレスハイム統領、マリアンヌ・フォン・ゴールデンバウムが参加する。

ロボスの政治工作は、まず至上目的としてシトレが他派閥を一掃しようとしている人事案を粉砕することだ！そしてトリューニヒトと妥協し逆にこちらが次の人事案の主導権を握るためには『玉』を手に入れる必要がある。

亡命者に対して欠片も権限を持たず……そのくせ計り知れない影響力を持つ彼女を！当然ながらこれには危険が伴う。道理から外れ、政局をもつて下克上を試みていると思われた場合は——軍歴を汚し、行き場を失うことになるだろう。

ロボスは不機嫌そうに唸り声をあげる。古株の副官ならば「シトレ

の馬鹿者め！まさかあそこまで『辣腕』と振る舞うことに惹かれるとは!!」と怒声を必死にかみ砕いて飲み下そうとする姿を読み取れたかもしれない。

これは大博打だ。勝てばいいが負ければ――

ロボスの思索をノックの音が遮った。

セキュリティを解除すると、司令長官に同行するやや疲労の色が濃い青年准将が緊張した面持ちで入室した。

「司令長官閣下、アルレスハイム 統領 閣下です」

ロボスは目を伏せた。こんな目的での面会はまっぴらであった。下手を打てば亡命者からの支持を失ってしまう。畜生、本部長から先のキャリアを考えるなら同盟弁務官か代議士を一期務めて適当な天降り4年ほどは悠々自適に過ごせるはずなのに。あの阿呆は何を考えて――

「ああ、その陛下とお呼びしたほうが……?」

司令長官の沈黙を誤解したフォーク准将は神経質そうに軍礼服の埃を払いながら訪ねた。

「統領閣下でいい。私がどう呼ぶかは気にするな。これでもこの星のゆで卵を貪ってこの体を育てた時期も長くてな」

声をあげて笑うがフォークは頬を攣らせただけだった。

「はっ」

相も変わらずやや青ざめた顔のまま准将はロボスの後ろに控えた。

実際のところこの青年を便利使いしすぎたかもしれない、とロボスは少しばかり反省している。彼の父はバートラト工科大学出身で技術官僚として結構な地位にあり、政界へのパイプも太い。シトレに対抗するため、中央への影響力が強い彼には、大いに働いてもらっている。

「お久しぶりです、元帥。最後にお会いしたのは第4次ティアマト会戦の祝勝会以来でしたか」

「マリアンヌ……閣下。わざわざお招きいただきありがとうございます」

「フッフ、時間の貴重さを最も知っているのは作戦を考える軍人でしょう?特に勤勉な軍人であればなおさら」

ですから手早く“本題”をほのめかしに来たの、司令長官殿。

マリアンヌは悪戯っぽく唇を釣り上げた。

「貴方の率いる同盟宇宙軍の偉業に対しお祝い申し上げます。貴官は長きに渡り侵略の業火から自由惑星同盟の市民達を守ってきました。お父上のように。アルレスハイム星域会戦をアルレスハイムは忘れていません。この交戦星域を守ってきた事実を、ね」

「我々はなすべきことが沢山あります。優れた将帥は適切な選択肢を選ぶと信じています」

ラザール・ロボス元帥は乾いた唇を舐めた。眼前のインテリゲチャの言葉の意味を推し測る。

「同盟軍は常に市民の安全を保障するためにあります、陛下」

帝冠の守護者は一瞬だけ、知的好奇心に満ちた光を瞳に走らせた。

「期待しています、元帥」

「私もこのパーティーのゆで卵には期待していますとも」

ゆで卵はアルレスハイムのソウルフードだ。亡命者の実質的な収容所から革命と戦災復興を経験した歴史——貴族社会・侵略者へのレジスタンス・革命・そして廃墟からの再起、その全ての象徴である。

「あら、元帥がいらつしやると聞いてシャシリクの料理人も張り切っていたわよ」

笑い声を交わし、主賓たちはホールへと向かう。

「……同盟市民の団結、アルレスハイムと同盟構成邦間の緊密な連携はこれからより重要になるだろう。私たちは、亡命者のみなさまのこれまでの貢献に感謝するとともに、引き続き団結して国難を乗り越えるための団結を求める。そしてなによりも、皆と共にこの節目を迎えたことを喜ばしく思う」

マリアンヌはゆったりと亡命者たちを眺める。頭を下げることはない。ハイネセンポリスの同盟議会であれば頭を下げることもあるだろう。構成邦の元首同士であれば相手が下げれば下げる。だが、この亡命者政治連盟において彼女が——否。マリアンヌ・フォン・“ゴールデンバウム”が頭を下げることはけしてない

敬礼する者、万歳を唱える者、拍手をするもの、思い思いのやり方

であるが、彼らは賛意を示していた。

マリアンヌは司会に頷くとゆつくりと壇上を降りる。ロボス元帥は彼女に敬礼を捧げ、そして司会の声を待つ。

「それではーラザール・ロボス元帥に来賓を代表してご挨拶を！ようこそいらつしやいました」

ラザール・ロボスは壇上に立った。彼は直系の亡命者系ではない。彼の母は亡命者であった。彼はこの地で育ち、何より武勲が彼をここに受け入れさせた。

「皆さん、おめでとうございます。私はただ一介の武弁として同盟軍という組織が皆さまの安全保障の実現に大きな成果をあげたことを誇りに思います」

無難なあいさつだ、と皆が思った。だがそうはいかない。“ラザール親爺”は機動戦術を愛する。常に子飼いの部下を信任し、幕僚と中堅指揮官に委任をし、そして想定外のところから攻めたてることで彼は元帥まで登り詰めてきた。

「自由惑星同盟も、同盟宇宙軍も長きに渡る侵攻により傷ついています。それでも、今も精強に皆さんを守るために存在します」

観衆たちはざわつき始めた。この元帥は何か意図をもって艦隊が傷ついていることを認めたのだ。

「人材の不足、特に下士官、兵士の確保、そして民生への負担について多くの方が不安を抱えていることは存じております」

アルレスハイムだけでない、パランティア、エル・ファシルの地方財界人、構成邦議員たち、それにエルゴンから来た同盟政府出先機関の役人たちすらもこちらを見ている

「あえて申し上げます。私どもはそれを否定しません。我々は国内状況の変化と国民の身命・財産の防衛の在り方を検討します。軍は健全な社会に属する健康な市民がいてこそ成立するのです！」

「艦隊総司令部は常に帝国の情報を収集し、そしてその上で議会・政府へ助言を行い、その判断に従うでしょう。それこそが自由惑星同盟の軍隊に通底する理念であります」

何かを断定したわけではない。道理を再確認しただけだ。しかし、

【艦隊司令長官を務める元帥が道理を確認する】ことを何かを仄めかしている」と判断しない者がいたら、それは政治的な感覚が著しく欠けていると言わざるを得ないだろう。

「それでは、半年ほど早いですがこの言葉で乾杯させていただきますい」
蜂蜜酒が注がれたグラスを掲げる。

「今年の勝利に！来年も勝利を！」

来賓たちも杯を掲げ、その数秒後に拍手が響いた。

——歓談が始まると楽団は『燃え盛るユグドラシルのタンゴ』を奏で始めた。

第23話 シドニー元帥は大攻勢をかける

シドニー・シトレの用兵の妙は大規模兵力の集中運用である。

ラザール・ロボス元帥が巧みな機動戦術で不意を突くことを得意とするのであれば、シドニー・シトレは兵力を揃え、決戦の場を誘導し、大攻勢を仕掛ける。

状況を整え、巧みに大兵力を自在に動かし、火力集中と突破、そして文壇により、敵を各個撃破することが本領であった。

ゆえにシドニー・シトレは参謀が提供する選択肢においても自身の得意とする選択肢を選んでいく。

すなわち【味方戦力の徹底した動員】により【敵を手際よく一掃する】である。

シドニー・シトレが統合作戦本部長までの【階段】を登ってきた【馬力】をもたらした1つが、この自身の資源を動員する能力によるものである。

「君達の党には受け入れやすい物だと理解しているが」

「本当にそう思っているのかね？」

レベロは興味深そうにシトレを観察する。彼が政界に足を踏み入れることは公然の秘密だ。

「もちろん急進的であることは理解するが必要なことだ。つまり――」

レベロはある部屋の前で立ち止まった。

「その先は彼女たち――党執行部にも説明してくれ」
「もちろんさ」

レベロが入室したのは、上品で居心地の良い小さな応接室だ。先に部屋でくつろいでいた者たちが立ち上がって迎える。

全国党務を統括するマサ・チューサン全国委員長、自由党顧問の上院で第二院内会派「通商政策研究会」の代表世話役・ホラティウス・ハンフリー同盟弁務官、党としての政策立案を担うマーティン・キヤスター、ジャクソン政務調査会長……自由党の役員達、いわゆる執行部だ。

「こんにちは、本部長閣下。てつきり2期目が内定したらもう顔を出さないかと思いましたがよ」

口火を切るジャクソンの目は冷ややかだ。彼は自由党左派（通称民権派）を束ねる立場であり、自由党きつての国防通兼対帝国強硬派として知られている。彼は自由党の弱点であるイゼルローン航路の中間星域と交戦星域の票を動かす力を持つ男である。

「まあ落ち着きなさい、ジャクソン君。君が取り組んできた分野なのはわかるがね」

ハンフリーは穏やかに窘める。民生的は共に財政ハト派に位置するがジャクソンは鼻を鳴らして背もたれに身を預けるにとどまる。

「顧問はそれでいいのでしょうかね」

フェザーン航路の構成邦が多く所属する「通商政策研究会」からすれば同盟地上軍削減による軍縮は得だろう。何しろ経済は安定し、国内の購買力が増すのなら言うことはない。いわゆるリベラルホークのジャクソンと国防政策において「同じ色でもグラデーシヨンの対極」に位置する。

「党としての方針は有権者の支持の拡大につながるかどうかには左右されません。個別の政策にのみ焦点を当てた議論は、その後にしませう」

チューサン全国委員長は老齢の女性でありながら周囲を睥睨するだけで左派の2人を黙らせた。彼女はレベロ率いるいわゆる正統派に近い。一方で女性の自由や子どもの権利に対する闘士としても著名である。

「それでは、今回の人事の意図と今後の方針についてご説明をお願いします、本部長」

その足でシトレは人的資源委員会の総合庁舎に足を踏み入れる。

「人的資源委員長にご相談を」

労農連帯党の中央執行委員長、ホワン・ルイが出迎える。身長差が

あってもシトレは丁重に彼と握手を交わした。

「大攻勢を軍内で行っていると聞いているがね」

「ええ、軍部内の改革を行うつもりです。そうした点からすると私達は協力できるはずですよ」

「改革の内容は？」

「星系内の交戦が大幅に減少したことに対応し、同盟地上軍を縮減します。もちろん宇宙軍もスリム化を行います。地上軍300万人、宇宙軍は陸戦隊15万人、宇宙軍45万人の軍縮を予定しています。構成邦軍も同盟の支援を減らしつつ目標として全構成邦で計40万人の削減を目標とする予定です」

「合計400万人か……」

宇宙軍は正規艦隊だけでも1100万人を超える規模である。地方駐留艦隊まで含めれば2000万を超えるだろう。だが宇宙軍こちらは陸戦隊を合わせても60万人(約3%減)に留まっている。同盟地上軍は非常にコンパクトで3000万人程度である。こちらは1割近く軍縮が行われる。

人的資源委員長は普段の穏やかな表情から動かない。

「来年度以降は宇宙軍の戦死者が減る見込みです。軍縮、というよりも訓練後速やかに開放できる予備兵が増加します」

「死人を減らすのは最重要だね」

「軍からの退役に際して、人的資源委員会・国防委員会・情報交通委員会で合同小委員会をつくり、適切な退役後の就労支援を行うべきだと考えています。職業訓練部門に宇宙軍から将校と下士官を教官として派遣することも、検討しております」

「……私は何とも言えないねえ」

「委員長」

「構成邦も今回の件には、あちらこちらで【大いに期待が高まっている】そうだ。事業としては地域社会開発委員会や情報交通委員会の職掌であるが……労働力の不足については人的資源委員会としても【期待】しているところだね」

「一般的に申し上げて、職掌の外たる民政について容喙するのは軍人

の本分ではありません。ですが国家の生産・運輸などにおける健全な状態を保つのは、国家安全保障の一環であり……こと戦災に携わるものに関して最高議長の指導を受けて参画するのは軍政軍令の密な連携があつてこそでは」

「さあね、だけど本部長の改革については興味を抱いているよ。自由党からの声にも」

ホアン・ルイは新しいフォルダを手を取った。会談は終わりということだろう。

シトレは満足していた。つまりは自由党が賛成すればよろしいということだ。あとはどこを固めるか、国民共和党？いや、リスクが高い。地域主義者たちは地上軍が中央政府への影響力の窓口として軍縮には断固反対だ。トリューニヒトに至っては地上軍を削減するこの案に断固反対だろう。腐敗の根源になるというのに、いやだからこそか。改革を骨抜きにされてはならない。

であれば、そう、彼らを揺さぶるために『強固な包囲網』を形成するべきだ。それも伏兵となるような……予想外の支持を。

シトレは副官から囁かれた内容に頷き、専用車に乗り込む。

「アビー・ホフマン記念下院議員会館に」

28ある下院議員会館の一つに向かう。彼女が一つの布石になるはずだ。

「こんにちは、ジェシカ代議士」

ジェシカ・エドワーズ・反戦市民連合では最も新しい議員であるが社会運動のアクティビストとしては若手でも高い発信力が武器である。

反戦市民連合は大きく分けて平和構築の為に制度的な大改革を求める設計主義派と大衆運動を軸とする情動的な運動派に分かれている。彼女は運動派のホープといえるだろう。

「お久しぶりです。シトレ元帥閣下。最後のお会いしたのはラップ」

大佐“の卒業式以来でしょうか”

年若い女性であり、音楽的な声を発する彼女は魅力的だ。だからこそ危険である。

「……左様ですな」

軍人に寄り添うかのように振舞う姿はまやかしてはない。

だが、反戦市民連合とは【距離の防壁理論】を臆面もなく唱える左派ポピュリスト政党。国民政党ではなく『バーラト首都圏』の政党ではない、だがそこに人口が集中していることが問題だ。そして、彼女の役目は「まあまあ、そのようなつもりではないのです」と軍部や中間星域、交戦星域の人間に対して微笑みかけることである。

「なぜ新人議員の事務所に、制服軍人の首席たる御方が、わざわざいらつしやったのでしょうか」

「制服軍人が議員のところに向うのは、いつだって政策・戦略構想のレクチャーのためです」

シトレの人事案とその後の構想について説明を受けたジェシカは微笑を浮かべ、返答する。

「非常に興味深いですね」

「それは重畳、なにかご意見があれば、是非とも」

ジェシカはそうですねえ、と珈琲を口に含むと表情を崩さずに爆弾を放り込んだ。

「イゼルローン要塞を利用した講和の研究など、いかがですか？」

「議員……？イゼルローン要塞を差し出すと？」

「それも検討していただきたい、それだけです」

「……それは、私の人事案を承認する代替案ですか？」

ジェシカはクスクスと、そんな影響力が新人の私にあるわけないではありませんか、と答えた。

「いいえ。軍部で【検討】していただければありがたいだけです。あくまで単語を使うだけであろうとも。講和を模索する影響、帝国の行動予測、それらを研究することは、そちらにとっても悪い話ではないと思いますか？」

「……」

シトレは腕を組み、天井を見上げた。

成程、現在のところ対帝国の交渉は国務委員会が管轄する駐フェザーン高等弁務官か、軍部しかない。

行政的な権限拡大は戦争のコントロールにも重要かもしれない。最終的には文民政治家が判断するにしてもこの段階で軍部の影響を拡大することは必要か―？

キャゼルヌ次席副官はこちらの視線には肩をすくめるだけだ。

これは危険なステップだ。だが上手く踊り切れば、自由惑星同盟、否、人類史におけるレガシーを創り出すことができる。

「ジェシカ代議士」

——統合作戦本部は当然あらゆる可能性を検討するのが本懐です。

その2日後のことである。シトレ本部長はオパールビルの会合に呼び出されていた。

「……結論から言うと、人事案は国防委員会と艦隊総司令部、陸軍幕僚総監部の教義の上で素案をまとめるとする」

ロイヤル・サンフォード議長はゆっくりと、だが静かな怒りをうかがわせる口調で自身の統帥権を補佐する統合作戦本部長へ結論を述べた。

「では私の人事案は……」

「提出を見合わせていただきたい」

パヴェル・カントロヴィチは眼鏡を拭きながら溜息を吐く。

「地上軍の問題で中間星域の大半も反対。上院で承認を得るのは不可能、いや、下院すら危うい」

マクドノー首席補佐官がぴしやり、と言った

「これは貴方が招いたことだ」

そして立体テレビジョンのリモコンを操作すると、動画が流れ出した。

確か、これは毎週報道されている1001インタビュー規格の番組

だ。

ジェシカ・エドワーズがレポーターの対面で微笑んでいた。

『ジェシカ議員、それではいよいよ平和への転換期が訪れると?』

レポーターは珍しく緊張の色を見せながら質問した。

『はい、シトレ本部長に今後の方針の説明をいただいた際に、質問しました。帝国との交渉のためにイゼルローン要塞を活用できるか、と』
『本部長は何と?』

『今後の改革の中で新たな方針として検討すると、確かに約束していただきました』

一瞬、沈黙が下りた。

『それは……非常に革新的ですね』

『もちろん要塞を引き渡すことを前提にはしません。ですがシトレ本部長が、イゼルローン回廊の中立化などのオプションを研究するのであれば、私は反戦市民連合に対し、今後の軍改革への参画を——』

ジェシカのセリフが終わる前に、電源が切られた。

「元帥の軍歴とこれまでの貢献を疑うものではない、だが軍内の意思統一の障害、国民への誤解を招く発言に対しては——」

サンフォードの声を聴きながら、シトレの意識は内面に潜っていく。そして、冷ややかな声が自身の底から聞こえた。

——攻勢は頓挫した、夢から覚めるんだな、元帥閣下